

# 博士論文

日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約  
—事象投射理論・形式が持つ機能領域の観点から—

名古屋大学大学院人文学研究科

人文学専攻

山田祐也

2022年12月

日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約  
—事象投射理論・形式が持つ機能領域の観点から—

山田祐也

## 目次

1.	序論 .....	1
1.1.	はじめに .....	1
1.2.	研究背景 .....	1
1.3.	研究目的 .....	6
1.4.	本研究の構成.....	7
2.	先行研究と問題点.....	8
2.1.	「継続」vs.「瞬間」と「動き」vs.「変化」 .....	8
2.2.	段階複合動詞と「ている」機能.....	10
2.3.	森山 (1988) の時定項分析.....	14
2.4.	中村 (2001) の分析.....	21
2.5.	事象投射理論.....	27
2.5.1.	事象投射構造.....	29
2.5.2.	相変換関数と相強制（解釈規則）の関わり .....	32
2.5.3.	拡大事象投射構造.....	37
2.5.4.	複数事象の事象投射構造.....	40
2.5.5.	両義的限界性と事象投射構造.....	48
2.5.6.	2.5節のまとめ.....	55
2.6.	事象投射理論と通言語的議論.....	56
2.7.	「た」と「パーフェクト」の関わり .....	59
2.8.	2章のまとめ.....	63
3.	稼働期間修飾句と適用プロセス.....	65
3.1.	岩本 (2008) による期間修飾句に関する議論 .....	65
3.1.1.	相強制（解釈規則）に関する制約の再検討と精緻化.....	65
3.1.2.	稼働期間修飾句と問題点.....	72
3.2.	期間修飾句の二つの概念構造と適用プロセス.....	73
3.3.	岩本 (2008) の議論と本研究の提案.....	77
3.3.1.	「維持」を表す動詞と期間修飾句の関わり .....	77
3.3.2.	「設立する」と期間修飾句の関わり .....	84
3.3.3.	両義的限界性と期間修飾句の関わり .....	90
3.4.	3章のまとめ.....	93
4.	事象投射理論による段階複合動詞の分析.....	95
4.1.	複合動詞の分類.....	95
4.1.1.	「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」 .....	95

4.1.2.	影山 (1993) の下位分類.....	98
4.1.3.	岸本 (2009, 2013) の下位分類.....	106
4.1.4.	4.1 節のまとめ.....	111
4.2.	段階複合動詞の事象投射構造.....	114
4.2.1.	「V-終わる」「V-終わる」.....	114
4.2.2.	「V-始める」.....	124
4.2.3.	「V-続ける」.....	130
4.3.	4 章のまとめ.....	138
5.	日・中語の設置動詞と「維持」.....	140
5.1.	設置動詞と存現文.....	140
5.2.	中国語設置動詞と「維持」の事象概念構造.....	146
5.2.1.	禁止命令表現及び属性叙述の観点.....	147
5.2.2.	「維持の続行」について.....	149
5.2.3.	「維持の中止」について.....	153
5.2.4.	「語彙的維持」と「語用論的維持」.....	156
5.3.	「維持」を表す形式と形式が持つ機能領域.....	160
5.3.1.	アスペクト形式と比較類型論の観点.....	160
5.3.2.	隣接関係と“把”構文.....	163
5.4.	5 章のまとめ.....	165
6.	日本語のアスペクトと認識論との関わり: 「た (なかった) 」を対象に.....	167
6.1.	従来の議論.....	167
6.1.1.	「た」と「ている」に見られる制約の違い.....	167
6.1.2.	「た (なかった) 」の「動的叙述性」と問題点.....	169
6.2.	本研究の議論.....	173
6.2.1.	提案.....	173
6.2.2.	本研究の提案に残る課題点.....	179
6.3.	6 章のまとめ.....	180
7.	結論.....	182
7.1.	本研究のまとめ.....	182
7.2.	今後の展望.....	183
	謝辞.....	185
	グロス部分の略語一覧.....	186
	参照文献.....	187
	用例出典.....	194

## 表の目次

表 2.1	基本となる時定項 .....	15
表 2.2	複合的な時定項 .....	16
表 2.3	副詞の時定項 .....	17
表 2.4	動作・作用の動詞の語彙的アスペクト .....	22
表 2.5	補助動詞類の関数 .....	23
表 2.6	期間・期限の副詞句の関数 .....	24
表 2.7	本研究と関わる主要な相変換関数と素性 .....	28
表 2.8	事象タイプと素性の組み合わせ .....	32
表 2.9	複数事象の種類 .....	41
表 3.1	(=表 2.8) 事象タイプと素性の組み合わせ .....	87
表 4.1	影山 (1993) による統語的複合動詞の下位分類特徴まとめ .....	98
表 4.2	4.1 節での議論まとめ .....	112
表 5.1	日本語と韓国語の対照 .....	162

## 図の目次

図 2.1	The tripartite parallel architecture .....	28
図 4.1	非対格型の基底構造 .....	100
図 4.2	VP 補文型の基底構造 .....	101
図 4.3	V' 補文型の基底構造 .....	102
図 5.1	「維持」を表す設置・開閉動詞の事象概念構造 .....	142
図 5.2	「結果（持続）」を表す着衣動詞の事象概念構造 .....	142
図 5.3	中国語の設置動詞の事象概念構造 .....	144
図 5.4	(=図 5.1) 「維持」を表す設置・開閉動詞の事象概念構造 .....	158
図 6.1	「形式」と「認識内 / 外の情報」の対応 .....	178

## 1. 序論

詳細な先行研究の確認は次章（2章）で行うが、本章では本研究に関わる先行研究の背景を概観し、本研究の研究目的を提示する。

### 1.1. はじめに

アスペクトに関する研究は、古くから盛んに行われており、膨大な量の研究成果が蓄積されてきている。日本語と中国語のアスペクトに関わる研究を俯瞰しようとするだけでも、多様な観点から研究がされていることがわかり、アスペクト形式に見られる機能的側面に関する記述的な研究（金田一 1950; 奥田 1978a, b; 工藤 1995; 呂 2003; 刘他 2001 など）をはじめ、類型論・文法化（Horie 1997; Shirai 1998; Sadanobu and Malchukov 2011 など）、母語獲得（Shirai 1993; Li and Bowerman 1998 など）、言語習得（Shirai and Kurono 1998; 許 1997; 吴 2005; 張 2001 など）などの観点から研究がされている。また、近年では日本語と中国語のアスペクト形式を、近接する文法範疇であるエビデンシャルティ（実存相）の観点から再検討しようとする議論もされている（定延・マルチュコフ 2006; 定延 2006; 木村 2006; 岩本 2015, 2019 など）。本研究は、日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約（特徴）を例に挙げながら、従来の議論・観点では十分な説明を行うことができない制約に対して、「事象投射理論」（岩本 2008, 2010, 2011, 2015, 2021 など）、「比較類型論」（comparative typology）（Hawkins 1986; 堀江 2001; 堀江・プラシャント 2009; 堀江他 2021 など）、「認識内/外の情報（epistemicity）」（Shinzato 1991）の分析枠組み及び観点を援用して議論を行う。

### 1.2. 研究背景

これまで、日本語のアスペクト形式である「ている」を対象とした研究は数多くなされてきた。「ている」機能においては、動作や現象が継続していることを表す「進行中（動作継続）」と、動作・出来事によって引き起こされた結果が継続していることを表す「結果状態（結果継続）」が基本的機能であると工藤（1982a, b, 1995）、庵他（2001）などで主張されている。また、「ている」には、基本的機能以外にも「パーフェクト」「反復」「維持状態」「単なる状態」などの派生的機能があることも知られている（工藤 1982a, b, 1995; 寺村 1984; 森山 1988; 町田 1989; 白井 2004; 岩本 2008 など）。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 「ている」機能の名称に対して、研究によって僅かな違いが見られる。本研究では「ている」機能に対して、以下の名称を使用することとし、括弧内には、従来の研究で用いられている名称の例を示す。また、複数事象においては、2.5.4 節で確認する浜之上（1997）、岩本（2008）に合わせて、(1.iv) のように三類に下位分類する。

- (1.i) 進行中（動作継続，進行など）
- (1.ii) 結果状態（結果継続，状態パーフェクト，結果残存，結果持続など）
- (1.iii) パーフェクト（動作パーフェクト，完了，経験，経歴，回顧，現在有効な過去の運動の実現など）
- (1.iv) 複数事象: 「多行為」「配分」「反復」

従来の「ている」機能を対象とした研究では、基本的機能とされる下の (1.1a) 「進行中」と (1.1b) 「結果状態」の成立状況に関する議論が多くなされてきた。<sup>2</sup> 「進行中」と「結果状態」を対象とした研究では、大きく分けて「継続」vs. 「瞬間」(金田一 1950; 町田 1989; 池谷 2003 など) と「動き」vs. 「変化」(奥田 1978a, b; 工藤 1982a, b, 1995; Ogihara 1998 など) という観点から議論が行われてきた。

- (1.1) a. 健が走っている。 (白井 2004: 72 (筆者下線) )  
b. あそこに本が落ちている。 (ibid: 72 (筆者下線) )

「継続」vs. 「瞬間」という観点から、上の (1.1a, b) の成立を議論する研究は、動詞 (句) のアスペクト的性質が「ている」機能の成立に影響を与えることを指摘し、「ている」を「継続動詞」に付加した場合は (1.1a) 「進行中」、 「瞬間動詞」に付加した場合は (1.1b) 「結果状態」が成立すると主張している。一方、「動き」vs. 「変化」という観点から、(1.1a, b) の成立を議論する研究は、「ている」と結びつく動詞が主語の「動き」を表すのか、「変化」を表すのかという観点から「ている」機能の成立を議論している。具体的には、主語の「動き」を表す動詞に「ている」を付加した場合は (1.1a) 「進行中」、主語の「変化」を表す動詞に「ている」を付加した場合は (1.1b) 「結果状態」が一般的に成立すると主張している。

しかし、「三次的アスペクト形式」(寺村 1984) や「段階動詞」(須田 2010) などと呼ばれる複合動詞 (「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」「V-終わる」(本研究では「段階複合動詞」と呼ぶ)) と「ている」機能の関わりを見ると、従来の「継続」vs. 「瞬間」、「動き」vs. 「変化」という観点だけでは十分な説明が行えない用例が存在する。例えば、下の (1.2a) 「食べ終わる (V-終わる)」では、「ている」の「進行中」が成立しない。このことから、池谷 (2003) は、複合動詞の「V-終わる」は「瞬間動詞」であると主張している。一方、(1.2b) 「食べ終わる (V-終わる)」においては、「ている」が「進行中」を成立させることを指摘し、「V-終わる」は「継続動詞」だと主張している。池谷 (2003) の主張は、「ている」機能だけを考える場合においては、妥当なようにも見えるが、「V-終わる」「V-終わる」は、(1.3) のように、限界点に到達するまでの過程の長さ (稼働期間 (森山 1988)) を期間修飾句が表せることから、「V-終わる」「V-終わる」のどちらも過程 (稼働期間) を含意しており、「継続動詞」に分類しても問題無いと考えられる。さらに、(1.2) では、

---

<sup>2</sup> 本研究で取り上げる例文に関して、句読点は「,」「。」で統一し、引用元で句点が無いものについては、筆者が句点を加筆する。なお、議論で参照する例文においては、出典が明示してあるもの以外は筆者 (出身地: 愛知県) による作例であるが、日本語の例文に対する容認度の判断については、他一名の日本語母語話者 (出身地: 山形県) の意見も参考にした (中国語の例文については、5 章でインフォーマントの情報を明示する)。本研究では例文に「\*」「??」「#」を付加する場合があるが、それぞれ「\* = 非文」「?? = 不自然」「# = 文脈によっては特定の解釈が可能になる」を表すものとする。

「V-終わる」「V-終える」が、どちらも他動詞として用いられており、主語の「動き」を表していると考えられる。すなわち、(1.2a)では、「継続」+「ている」=「進行中」、  
「(主語の)動き」+「ている」=「進行中」という従来議論されてきたいずれの規則も成り立たない。このことから「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」といういずれの観点においても、(1.2a)で「V-終わる」が「ている」の「進行中」を成立させない要因を説明するのが困難だと考えられる。

- (1.2) a. \*花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (池谷 2003: 46)  
b. 花子はデザートを食べ終えているところだ。 (ibid: 47)
- (1.3) a. 花子は三十分 {かけて / かかって / で} デザートを食べ終わった。  
b. 花子は三十分 {かけて / かかって / で} デザートを食べ終えた。

(筆者作例)

従来、森山 (1988)、中村 (2001) が、段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて、独自の分析枠組みを提案して理論的な議論を行っている。しかし、2.3 節（森山 (1988)）、2.4 節（中村 (2001)）で確認するが、それぞれの研究で提案されている分析枠組みでは、段階複合動詞の特徴、「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）機能のいずれを基準にするかによって、議論の結果が異なってくるなどの問題点が見られる。一方、「事象投射理論」(岩本 2008 など)では、動詞（句）と「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりを議論する際に重要になる「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」以外の観点も指摘し、森山 (1988)、中村 (2001)とは異なる分析枠組み（説明理論）を提案している。2.5 節で理論的背景を確認するが、事象投射理論の分析枠組みを援用することによって、従来の観点・分析枠組みでは十分な説明を行えない「V-終わる」「V-終える」に見られる特徴の違いを含めた、段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて、分析枠組み内で一定のまとまりのある説明・議論を行うことができると考えられる。本研究は、森山 (1988)、中村 (2001) が提案する分析枠組みの重要性及び、今後の発展可能性を認めつつも、管見の限り、現在提案されている分析枠組みの中で、最も統一的に「ている」に関わるアスペクト現象を議論できると考えられる事象投射理論 (岩本 2008 など)の枠組みを援用して、4章で考察を行う。

しかし、現行の事象投射理論 (岩本 2008 など)の枠組みにおいても明らかにされていない点がある。岩本 (2008)は、「～間」のような非限界的事象の（過程）期間を表す「単純期間成分」(森山 1988)（本研究では「単純期間修飾句」と呼ぶ）の概念構造に限界化関数 (COMP (Composed of)) が含まれていることを想定している。一方で、「～間かけて」「～間かかって」「～間で」のような限界的事象の（稼働）期間を表す「稼働期間成分」(森山 1988)（本研究では「稼働期間修飾句」と呼ぶ）の概念構造（関数）とその適用プロセス



は明らかにされていない。また、現行で提案されている関数の適用制約についても、一部再検討と精緻化の必要が考えられる点がある。そこで、本研究では、4章の議論に先立って、3章において、現行の事象投射理論における、関数の適用制約に関する一部議論の再検討と精緻化を行う。そして、「稼働期間修飾句」の概念構造（関数）を提案し、限界的事象の稼働期間を表すために、その関数がどのように適用されるのかを論じる。<sup>3</sup>

次に、事象投射理論（岩本 2008 など）を援用しながら通言語的議論を行っている研究に林（2012）、岩本（2015）がある（2.6 節で確認）。日本語では設置動詞（e.g. 置く、貼る）に「ている」を付加した場合、下の（1.4）のような「維持（維持状態）」が表される。<sup>4</sup> 「維持」とは「動作主が主体的に結果の保存を行っている局面」であり、客体の変化結果の「維持」は他動詞構文によって表される（森山 1988; 岩本 2008, 2015; 須田 2010）。

- (1.4) a. 署長は例によって上着をぬいで、ぬらしたタオルを机のうえにおいていた。  
(「石川達三・洒落た関係」須田 2010: 31)
- b. 李さんは自分の部屋の壁に地図をたくさん貼っている。  
(木村 2006: 55 (筆者下線) )

一方、中国語の設置動詞（e.g. 放（置く）、貼（貼る））に「ている」と類似した特徴を持つ「着」を付加して客体変化後の局面を表す際、一般的に動作主が具現されない自動詞的構文（1.5）が成立し、「維持（維持状態）」ではなく「結果状態」が表されると指摘されている（木村 2006; 丸尾 2007; 林 2012; 岩本 2015）。林（2012）、岩本（2015）は、「着」の付加によって、他動詞構文ではなく自動詞的構文（1.5）が成立する要因を、「語彙化パターンの違い」によると指摘している。すなわち、設置動詞においては、日本語（e.g. 「置く」「貼る」）と中国語（e.g. 「放」「貼」）の間で異なる概念構造を形成しており、中国語の設置動詞は、「維持」を表す概念構造を有していないと主張している。

- (1.5) a. 门口 放 着 (一把) 雨伞。  
玄関 置く ASP 一-CL 傘  
「玄関に傘が置いてある。」 (林 2012: 61 (筆者字体・グロス変更) )
- b. 墙上 贴 着 一张 地图。  
壁上 貼る ASP 一-CL 地图  
「壁に地図が 1 枚貼ってある。」 (木村 2006: 54 (筆者グロス) )

<sup>3</sup> 本研究が議論の対象とする「～間かけて」「～間かかって」などの稼働期間修飾句は、従属節としての分析可能性もある。しかし、本研究では、森山（1988）、町田（1989）などに倣い、単純期間修飾句と同様の扱いができるものと想定し議論を進める。

<sup>4</sup> 「維持状態」とは「維持」という局面が「ている」によって状態化された機能である（森山 1988）。

しかし、(1.5)のような文は、中国語学の研究(刘他 2001 など)では、「存現文(存現句)」と呼ばれており、存現文は、下の(1.6)のように、設置動詞以外でも他動詞の作成動詞(e.g. 刻(彫る)、写(書く))に「着」を付加して表すことができる。そして、他動詞によって表される存現文では、動作主が削除されて、場所が主語((1.6)では「石头上」)、客体が目的語((1.6)では「一个字」として具現される特徴がある(陈 1957; 刘他 2001; 于 2018)。

- (1.6) 石头上刻着一个字。  
石 上 彫る ASP 一-CL 文字  
「石の上には文字が1つ彫ってある。」 (于 2018: 125)

他動詞によって表される存現文の特徴を踏まえると、中国語の設置動詞が「維持」の概念構造(他動詞型の概念構造)を有していても、存現文の特徴(「着」の適用)により、「維持」の動作主が削除され、具現されなくなる可能性がある。そこで、本研究では、5章において、林(2012)、岩本(2015)が「語彙化パターンの違い」を主張する際の論拠としている存現文(1.5)とは異なる観点から、中国語設置動詞における「維持」の概念構造の有無を検証する。そして、中国語設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにした上で、「着」が客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文(存現文)が成立し「結果状態」が表される要因に対して、文法形式の担う機能領域の広狭が言語間(e.g. 英語 vs. 独語)で異なるという比較類型論(Hawkins 1986; 堀江 2001 など)の観点を援用して議論を行う。

最後に、上でも述べたように、下の(1.7a)「パーフェクト」は「ている」の派生的機能として指摘されている。さらに、派生的機能である「パーフェクト」の特徴の一つとして、(1.7b)「た」との交替可能性が工藤(1995)などで指摘されている。しかし、発話時以前に起こった出来事を表す「ている」と「た」の両形式間には、出来事の捉え方によってそれぞれの形式の使用可能性に違いが見られることが Inoue(1978)、井上(2001, 2011)などで指摘されている。井上(2001)は、出来事が実現した経過(少なくともその一端)を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約を主張している。すなわち、下の(1.8)では、発話者が間接的情報源(「葉書」)から出来事を捉え、出来事が実現した経過を具体的に把握していないことから「た」の使用が不自然になる。

- (1.7) a. 太郎はもう朝ごはんを食べている。  
b. 太郎はもう朝ごはんを食べた。  
(筆者作例)
- (1.8) 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています(?? 会いました)。



- c. 中国語設置動詞の概念構造について、存現文とは異なる観点から検証を行い、日本語と中国語の設置動詞が同様に「維持」を表す概念構造を有することを明らかにする。(5章)
- d. 研究目的 c で明らかにする、中国語設置動詞の概念構造を元に、「ている」と「着」の間に見られる制約の違いについて、比較類型論の観点を援用して考察を行う。(5章)
- e. 「パーフェクト」を表すとされてきた「た」に見られる制約、「た」に否定形式の「ていない」が対応する要因について、「形式」と「認識内 / 外の情報」の関わりの観点から考察を行う。(6章)

#### 1.4. 本研究の構成

本研究の構成は以下の通りである。2章では、本章で簡潔に言及した先行研究の議論を確認し、問題点を明示する。3章では、事象投射理論による枠組み（議論）の一部再検討と精緻化を行った上で、稼働期間修飾句の概念構造（関数）を提案しその適用プロセスを論じる（研究目的 (1.11a)）。4章では、段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて事象投射理論の枠組みで議論を行う（研究目的 (1.11b)）。5章では、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにする（研究目的 (1.11c)）。また、「ている」と「着」に見られる制約の違いに関して、比較類型論の観点を援用して議論を行う（研究目的 (1.11d)）。6章では、「動的叙述性」とは異なる「形式」と「認識内 / 外の情報」の関わりの観点から、「た（なかった）」に見られる特徴（制約）を議論する（研究目的 (1.11e)）。7章は結論である。

## 2. 先行研究と問題点

本章では、1章で簡潔に言及した先行研究を確認し、問題点を示す。2.1節では、従来の「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」の観点から「ている」機能の成立を考察している議論を確認する。2.2節では、段階複合動詞に関する記述的研究を確認する。2.3節では森山(1988)による「時定項分析」、2.4節では中村(2001)による研究を確認する。2.5節では、本研究が3章～5章の議論において理論的枠組みとして援用する「事象投射理論」(岩本2008など)の分析枠組みについて確認する。2.6節では、事象投射理論を通言語的議論に拡大させた林(2012)、岩本(2015)の研究を確認する。2.7節では、「た(なかつた)」に見られる特徴(制約)に対して、「動的叙述性」という観点から議論を行っている研究(井上2001, 2011など)について確認する。2.8節は本章のまとめである。

### 2.1. 「継続」vs.「瞬間」と「動き」vs.「変化」

これまで、日本語のアスペクト形式である「ている」を対象とした研究は数多くなされてきた。従来の「ている」を対象とした研究では、主に「継続」vs.「瞬間」と「動き」vs.「変化」という観点から議論が進められてきた。

金田一(1950)は、「アスペクトの観点から見た国語動詞の分類」という動詞の分類を提案している。金田一(1950)の提案は、下の(2.1)のようにまとめられる。

- (2.1) a. 第一種の動詞(状態動詞)(e.g. ある, (理解)出来る, 分る)  
特徴: 状態を表す。  
「ている」を付加することができない。
- b. 第二種の動詞(継続動詞)(e.g. 読む, 歩く, (雨などが)降る)  
特徴: 動作・作用を表し, その動作・作用はある時間内続いて行われる。  
「ている」を付加した場合, 動作が進行中であることを表す。
- c. 第三種の動詞(瞬間動詞)(e.g. 死ぬ, (電燈が)消える, きまる)  
特徴: 動作・作用を表すが, その動作・作用は瞬間に終わってしまう。  
「ている」を付加した場合, 動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。
- d. 第四種の動詞(e.g. 聳える, すぐれる, 高い鼻をする)  
特徴: ある状態を帯びることを表す。  
常に「ている」を付加して状態を表す。
- (2.2) あの人の本の読み方の早いのには驚いた, 今読み初めたと思ったらもう読ん  
でいる。(金田一 1950: 11)

金田一(1950)は、「ている」が、(2.1b)「継続動詞」に付加された場合に「進行中」が成立し、(2.1c)「瞬間動詞」に付加された場合には「結果状態」が成立することを指摘し

ている。一方で、金田一 (1950) は、一般的に「継続動詞」として分類される「読む」が (2.2) のように「読み終わる」という意味で解釈される場合においては、「瞬間動詞」として用いられていると主張している。<sup>5</sup>

奥田 (1978a, b), 工藤 (1982a, b, 1995), Ogihara (1998) は、金田一 (1950) とは異なる立場を取り、「ている」と結びつく動詞が主語の「動き」を表すのか、「変化」を表すのかという観点から「ている」機能の成立を議論している。具体的には、主語の「動き」を表す動詞に「ている」を付加した場合は「進行中」、主語の「変化」を表す動詞に「ている」を付加した場合は「結果状態」が一般的に成立すると主張している。奥田 (1978a, b), 工藤 (1982a, b, 1995), Ogihara (1998) による「動き」vs. 「変化」という観点から「ている」機能の成立を議論するアプローチは、金田一 (1950) でも一部指摘されているヴォイスの変化に伴う「ている」機能の変化を説明できる点で説得力があると考えられる。例えば、下の (2.3a) では「こわす」という他動詞が能動態で使用されており、「ている」の「進行中」が成立する。一方、(2.3b) のように「こわす」が受身化された場合は、「結果状態」が成立する。また、他動詞の「こわす」に対応する自動詞「こわれる」が「ている」と結びついた場合は、(2.3c) 「結果状態」が成立する (工藤 1995)。

- |          |              |        |
|----------|--------------|--------|
| (2.3) a. | 太郎が机をこわしている。 | [進行中]  |
| b.       | 机がこわされている。   | [結果状態] |
| c.       | 机がこわれている。    | [結果状態] |
- (工藤 1995: 55 (括弧は筆者) )

金田一 (1950) の観点から (2.3) を説明する場合、(2.3a) は「ている」が「進行中」を成立させるため、「継続動詞」に分類されることになる。一方、(2.3b, c) は「結果状態」を成立させることから、「瞬間動詞」に分類されることになる。しかし、奥田 (1978a, b), 工藤 (1995) が指摘するように、同一動詞 (2.3a, b) の時間的性質 (「継続」vs. 「瞬間」) が受身化されることによって、「継続」から「瞬間」へ変化する要因を説明するのは困難だと考えられる。一方、奥田 (1978a, b), 工藤 (1982a, b, 1995), Ogihara (1998) の「動き」vs. 「変化」という観点から (2.3) を説明する場合、(2.3a) では主語が「動き」を表しているため「ている」の「進行中」が成立し、(2.3b, c) では、主語が「変化」を表しているため「結果状態」が成立するという一貫した説明を行うことができる。なお、金田一 (1950), 奥田 (1978a, b) は「ている」の「進行中」「結果状態」を対象に議論しているが、工藤 (1995) は、「結果継続 (状態パーフェクト)」と「動作パーフェクト (経験・記録・回想)」

---

<sup>5</sup> (2.2) のページ番号は、金田一 (1950) が再録されている、「日本語動詞のAspect」(1976) のものである。(2.2) の「ている」は具体的に眼前に存在する結果の状態を表しているわけではないので、経験、回顧などと呼ばれる「パーフェクト」(cf. 脚注 1) を成立させているが、金田一 (1950) では「パーフェクト」は議論されていない。

(以下「パーフェクト」は「動作パーフェクト」を指す)の連続性を指摘した上で、「パーフェクト」は動詞が主語の「動き」「変化」どちらを表す場合でも成立することを指摘している。

しかし、以上で確認した「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」のいずれの観点からも「ている」機能の成立を十分に説明できない用例がある。例えば、下の(2.4)「設立する」のような動詞に「ている」を付加した際、「進行中」は成立せず、「パーフェクト」が成立する。しかし、岩本(2008)が指摘するように、「設立する」は(2.4b)のように設立完了に至る過程の長さ(稼働期間)を期間修飾句が表すことができ、過程を含意していると考えられる。さらに、「設立する」は他動詞であり、動作主(主語)の一種の「動き」を表す。すなわち、(2.4a)で「ている」の「進行中」解釈が困難な理由は、「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」という観点だけでは十分な説明ができないと考えられる((2.4)に対する岩本(2008)の分析は2.5.3節で確認する)。

- (2.4) a. \*太郎が会社を設立している最中に電話が鳴った。 (筆者作例)  
b. 一か月かけて設立している。 (岩本 2008: 211)

(2.4)と類似した現象は、段階複合動詞と「ている」機能の関わりを考察する際にも見られる。次節では、「段階複合動詞」に関する記述的研究を確認しながら、「V-終わる」「V-終える」と「ている」機能の関わりにおいても、「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」という観点だけでは十分な説明ができないことを指摘する。

## 2.2. 段階複合動詞と「ている」機能

段階複合動詞(「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」「V-終える」)の諸特徴を議論している研究に姫野(1982a, b, c), 森山(1988), 金水(2000), 池谷(2003)などがある。

まず、「V-始める」は、自動詞・他動詞の区別なく過程を含意する継続動詞と結合し、開始の意味を表すと姫野(1982a)が指摘している。また、過程を含意しない瞬間動詞と結合した場合は、同一主体もしくは異なる主体による繰り返しの開始を表すと指摘している。金水(2000)は「V-始める」を運動の開始局面を取り出す形式とし、開始限界を過ぎた時点で「V-始めた」が使用可能になることを指摘している。また、「ている」を付加した「V-始めている」は、開始限界以後の動作の初期段階にあることを指すと主張している。金水(2000)は、動作の初期段階にあることを指す「ている」機能が具体的にどのような機能なのかは述べていないが、下の(2.5)での「ている」機能は「進行中」であると考えられる(池谷 2003) (2.3 節, 2.4 節でも、「V-始める」が過程を含意することを表す論拠を示す)。

- (2.5) a. 花子はデザートを食べ始めているところだ。 (池谷 2003: 46)

- b. 険しいその絶壁の下をすれすれに通過したが、そこでは、ちょうどカラスの群れが夜の眠りから目を覚まし、カモメは餌を探し始めている最中だった。  
(『蝦夷地の中の日本』(筆者下線))

次に、「V-続ける」は、自動詞・他動詞の区別なく継続動詞と結合し、続行の意味を表すと姫野 (1982b) が指摘している。また、瞬間動詞と結合した場合は、同一主体もしくは異なる主体による繰り返しの動作・作用を表すと指摘している。金水 (2000) は、「V-続ける」は運動の過程を取り出し、過程の連続性、持続性を強調すると主張している。また、「V-続ける」においても「V-始める」と同様、下の (2.6) のように「ている」を付加して「進行中」を成立させることができる (池谷 2003)。

- (2.6) a. 花子はデザートを食べ続けているところだ。(池谷 2003: 46)  
b. 私は再び霧のなかの道を、神々しいような薄光りに包まれながら、いくら歩いてもちっとも自分の体が進まないようなもどかしさを感じながら、あてもなく歩き続けていた。(『美しい村』(筆者下線))

さらに、「V-続ける」は、「V-始める」「V-終わる」などと異なり、動きの結果の保存が主体的に行われている局面である「維持」も表すことができると森山 (1988) が指摘している。下の (2.7) では、「主体変化維持の続行」が表されており、(2.8), (2.9b) では、「客体変化維持の続行」が表されている。また、(2.9) のように、動詞が「使役変化動作 (過程)」と「客体変化維持」の局面を同時に含意する場合、文脈によって同一の形式 («V-続ける (貼り続ける)») で (2.9a) 「使役変化動作の続行」と (2.9b) 「客体変化維持の続行」が表されるようになる (森山 1988)。

- (2.7) 座り続ける。(森山 1988: 142 (筆者下線))  
(2.8) 安井はお正月に知人からもらったこの新鮮な鯛を、別の角度から鮮やかな色彩で描いています。その後、再びこの鯛を描き始めた安井は、5月までアトリエに置き続けました。はじめ赤々としていた鯛は、腐敗してすっかり「干物」になっていたといえます。(『上原美術館』(筆者下線))  
(2.9) a. 警備員が太郎を制止したが、太郎はポスターを壁に貼り続けた。  
b. 皆が太郎に早く剥がせと言ったが、太郎はポスターを壁に貼り続けた。  
(筆者作例)

最後に、「V-終わる」「V-終わる」は、継続動詞と結合し、終了の意味を表す。また、「V-終わる」においては、意志動詞とのみ結合し、「V-終わる」に比べて人の意志性が強調されると姫野 (1982c) が指摘している («V-終わる」が本当に意志動詞としか結合し得



ないのかという点は、4章の議論の中で再度論じる)。また、金水(2000)は、「V-終わる」「V-終わる」は、運動の終了局面を取り出す形式とし、両者の時間的性質はほとんど変わらないと主張している。さらに、両者は過程を含意しないことを主張している。しかし、実際には1.2節(1.3)でも言及したように、「V-終わる」「V-終わる」は、下の(2.10)のように、限界点に到達するまでの過程の長さ(稼働期間(森山1988))を期間修飾句が表すことができ、「V-終わる」「V-終わる」のいずれも「過程」を含意していると考えられる。さらに、池谷(2003)が指摘するように、(2.11b)、(2.12b)では「V-終わる」が「進行中」を成立させていると考えられる。池谷(2003)の用例以外にも(2.13)のような実際の用例も検索される。

(2.10) (=1.3)

- a. 花子は三十分 {かけて / かかって / で} デザートを食べ終わった。
- b. 花子は三十分 {かけて / かかって / で} デザートを食べ終えた。

(筆者作例)

(2.11) (=1.2)

- a. \*花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (池谷2003: 46)
- b. 花子はデザートを食べ終えているところだ。 (ibid: 47)

- (2.12) a. \*壁画の最後の部分を塗り終わっている時、雨が降ってきた。 (ibid: 46)
- b. 壁画の最後の部分を塗り終えている時、雨が降ってきた。 (ibid: 47)

- (2.13) a. ある日サンクトペテルブルグで、『Oiseau de feu』の最後のページを書き終えている時 [・・・]、私のイマジネーションの中に盛大な異教の儀式が現れた。 (『西洋音楽の歴史』(筆者下線))
- b. さて、この記事を書き終えている途中、なんと現地の専門家からコメントが届いた! (『The Asahi Shimbun GLOBE+』(筆者下線))

なお、池谷(2003)は、(2.11a)、(2.12a)で「ている」の「進行中」が成立しないのは、「V-終わる」が「瞬間動詞」であるからだとして主張している。しかし、すでに指摘したように、(2.10)では、「V-終わる」「V-終わる」に付加した期間修飾句が限界点に到達するまでの過程の長さ(稼働期間)を同様に表すことから、池谷(2003)の「V-終わる」=「瞬間動詞」という説明には疑問が残る。また、(2.11a)、(2.12a)の「V-終わる」はいずれも他動詞用法で用いられており、主語の「動き」を表していると考えられる。すなわち、「動き」vs.「変化」という観点(奥田(1978a, b)など)においても、(2.11a)、(2.12a)で、「V-終わる」に付加された「ている」が「進行中」を成立させない要因を説明できない。

さらに、本来「ている」が「進行中」を成立させない瞬間動詞もしくは主体変化動詞であっても、「ゆっくり」のような「動き様態の副詞」(仁田2002(本研究では「様態副詞」と呼ぶ))と共にすることによって、下の(2.14)のように「ている」が「進行中」を表す

よくなることが知られている(工藤 1982a, b, 1995; 森山 1988; 岩本 2008 など)。しかし、(2.15) では、様態副詞が共起しているにもかかわらず、(2.14) のような「進行中」の解釈は困難であると考えられ、「ゆっくり V-終わっている」は可能だとすれば「パーフェクト」の解釈のみ成立する。なお、(2.16) から「V-終わる」自体は様態副詞と共起できることがわかる。このような点においても、「ている」を「V-終わる」に付加した際に、「進行中」が成立しない要因を従来の観点で説明するのは困難であると考えられる。<sup>6</sup>

(2.14) 木がゆっくり倒れている。 (岩本 2008: 248 (筆者下線))

(2.15) a. \*?残りの料理をゆっくり食べ終わっている最中に、電話が鳴った。

b. \*?煙草をゆっくり吸い終わっている時に、雨が降ってきた。

(筆者作例)

(2.16) a. 外では電車到着のアナウンスが聞こえてますが、一本遅らせてゆっくり食べ終わりました。 (『食べログ「ロコミ」』(筆者下線))

b. ところがそんなにせきこんで竿を出したって、すぐ釣れることなんかまずありません。結果においては煙草の一本ぐらいゆっくり吸い終わったって同じことなんです、(後略) (『行雲流水記(随想編)』(筆者下線))

c. (前略)、すぐ目の前を阿部巡査が、自転車で走って通った。それをやりすごし、茶をゆっくり飲み終わってから、五十嵐は駐在所へ行った。

(『針の島』(筆者下線))

また、従来の研究では指摘されていないが、「V-終わる」「V-終える」の間には下の(2.17) のような状況での使用において、細かな制約の違いがあると考えられる。(2.17) に見られる制約の差異は、「V-終わる」「V-終える」が事象構造レベル(岩本 2008 など)で異なる構造を成している可能性を示唆していると考えられる。本研究では、(2.17) に見られる制約の差異と「ている」機能の関わりについて、4章で議論する。

(2.17) 「太郎がデータをクラウドにアップロードするために PC で一連の操作を行った。アップロードに時間がかかっており、いったん席を外した後戻ってきて、アップロードの状況を確認した場面」

花子：データ {上げ終わった / ??上げ終えた} ?

太郎：うん、{上げ終わった / ??上げ終えた}。 (筆者作例)

<sup>6</sup>(2.14) のような状況について、「動き」vs.「変化」の立場を取る工藤(1982a, b)は、「ゆっくり」などの修飾語(副詞)が「動き」の側面を引き出すため「進行中」が成立するようになる」と説明している。また、「進行中」の成立に「過程」の有無が重要だという立場を取る森山(1988)は、「ゆっくり」のような副詞が「過程」を強調して取り出した場合は、「進行中」が成立するようになる」と主張している。

以上、本節では、主語の「動き」を表し「過程」も含意していると考えられる「V-終わる」に「ている」を付加した場合に「進行中」機能が成立しない理由において、従来の「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」という観点だけでは十分な説明ができないことを指摘した。2.1 節と本節で確認してきた研究以外に、段階複合動詞と「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて独自の分析枠組みを提案して理論的な議論を行っている重要な研究に森山 (1988)、中村 (2001) がある。次節 2.3 節では、森山 (1988) の研究を確認し、2.4 節では中村 (2001) の研究を確認する。

### 2.3. 森山 (1988) の時定項分析

金田一 (1950)、奥田 (1978a, b) などの研究は、動詞の特性と「ている」機能の関わりを中心に議論しているが、「ている」機能の成立における副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の役割も考察し、段階複合動詞に関しても考察している研究に、森山 (1988) による「時定項分析」がある。森山 (1988) は、動詞が表す局面を期間成分（期間修飾句）との共起状況によって下の (2.18a, b) 「一時点的な局面」と (2.18c~f) 「持続的的局面」に分類している。(2.18a, b) のような期間修飾句が共起し得ないものは「一時点的な局面」であるとされ、期間修飾句が共起可能な「持続的的局面」においては、(2.18c) 「過程」、(2.18d) 「結果持続」、(2.18e, f) 「維持」という局面に下位分類されている。「過程」は動きが運動として展開している局面、「結果持続」は持続的な動きの結果を表す局面、「維持」は動きの結果の保存が主体的に行われている局面だと森山 (1988) は定義している。なお、森山 (1988) は、期間成分（期間修飾句）を「単純期間成分」(e.g. ~間) 本研究では「単純期間修飾句」と呼ぶ」と「稼働期間成分」(e.g. ~間かけて、~間かかって、~間で) 本研究では「稼働期間修飾句」と呼ぶ）に下位分類している。「単純期間修飾句」は、「(非限界的) 過程」「結果持続」「維持」の全体量（単純期間）を表し、「稼働期間修飾句」は、限界点を持つ事象において、限界点に至るまでの「(限界的) 過程」の全体量（稼働期間）を表すとされる。<sup>7</sup>

- |           |            |                |
|-----------|------------|----------------|
| (2.18) a. | *一時間死ぬ。    | (森山 1988: 155) |
| b.        | *一時間命中する。  | (筆者作例)         |
| c.        | 人が三時間歩く。   | (森山 1988: 141) |
| d.        | 三時間時計が止まる。 | (ibid: 141)    |
| e.        | 人が三時間座る。   | (ibid: 142)    |
| f.        | 三時間旗を揚げた。  | (ibid: 162)    |

<sup>7</sup> 森山 (1988) では、「~間かかって など」を「稼働期間成分」を表す副詞として例示しているが、「~間かけて、~間で」も基本的に同様の機能を持つことから、本研究では、これらも「稼働期間成分」（本研究の「稼働期間修飾句」）に該当すると考える。

森山 (1988) は、上述の「過程」「結果持続」「維持」「一時点的な局面」を「時定項」という独自の分析枠組みに置き換え、副詞の時定項も定義した上で「ている」機能、「段階複合動詞」を議論している。以下では、森山 (1988) の「時定項分析」について確認していく。

表 2.1 基本となる時定項

(森山 1988: 153~158)

動詞が表す局面のタイプ	時定項	例
① 過程	ab	扱う, 争う, 歩く, 言う, 祈る, 伺う, (試験を) 受ける, 歌う, 運転する, 追う, 教える, 躍る, かぐ, 考える, 聞く, (歌を) 繰り返す, 蹴る, こする, 叫ぶ, 騒ぐ, 叱る, しゃべる, 調べる, 吸う, 捨てる, (スキーを) 滑る, 攻める, (火を) たく, 尋ねる, 戦う, たたく, 頼む, 試す, 勤める, 手伝う, 飛ぶ, 泣く, 眠る, 述べる, 走る, 働く, 話す, (そりを) 引く, (ピアノを) 弾く, (らっぱを) 吹く, (すずを) 振る, (陣地を) 守る, (近所を) 回る, 勉強する, (映画を) 見る, 養う, 読む, 笑う
② 結果持続 (主体変化)	se	諦める, 合わさる, 遅れる, 覚える (覚えようとする動作をも含まない場合), (役を) 降りる, (病気に) かかる, 乾く, 転ぶ, (花が) 咲く, 締まる, 就任する, (気持ちを) 捨てる, 倒れる, 溶ける, 届く, 間違う, 忘れる, (一つのことが) わかる
③ 結果持続 (客体変化)	oe	移管する, 出す, 無くす
④ 維持 (主体変化)	sd	お辞儀をする, 浮かぶ, 座る, 接触する, 立つ, 黙る, (目を) 閉じる, 灯る, 並ぶ, 握る, はさむ, 向ける, 向く, もたれる, (荷物 / 興味を) 持つ, 休む
⑤ 維持 (客体変化)	od	預ける, 貸す, 借りる, 禁ずる, 許す
⑥ 一時点的 (無変化)	z	見掛ける, 目撃する, ひらめく, 一瞥する, 驚く, 命中する, あきれる, 飲み込む, (ぼかんといい音が) 聞こえる
⑦ 一時点的 (主体変化)	s	飽きる, (野菜が) いたむ, うせる, 生まれる, 枯れる, 消える, 結婚する, (完全に) 壊れる, 焦げる, 死ぬ, (大学に) 滑る, 成立する, (行事が) 流れる, (柿が) なる, (橋が) できる, (道が) つく, 滅びさる, 離婚する, 割れる
⑧ 一時点的 (客体変化)	o	枯らす, (うっかり) 焦がす, 設立する, 無くす, 消す, 設ける

上の表 2.1 の ①~⑧ は、森山 (1988) が提案する「時定項分析」で用いられる基本的な時定項である。①~⑤ のように、期間修飾句と共起し得る「過程」「結果持続」「維持」はアルファベット 2 文字 (二つの項) で表されている。「s」は「主体変化」, 「o」は「客体

変化」を表す時定項となり、変化の結果が「持続」するものなのか、「維持」されるものなのかは、“e”（結果持続），“d”（維持）の付加によって表されている。一方、「一時的な局面」においては、⑥～⑧のようにアルファベット 1 文字（一つの項）で表される。森山 (1988) は、表 2.1 の時定項と「ている」機能の関わりにおいて、①「過程」を表す動詞に「ている」を付加した場合には、「進行中」が成立することを指摘している。また、「ている」が②、③「結果持続」を表す動詞に付加した場合は「結果の持続状態」（本研究の「結果状態」）、④、⑤「維持」を表す動詞に付加した場合は「維持状態」が成立すると指摘している。そして、⑥～⑧「一時的な局面」を表す動詞に「ている」を付加した場合は、「パーフェクト」が成立することを主張している。<sup>8</sup>

森山 (1988) は、さらに表 2.1 で提示した時定項を組み合わせて、動詞が表す複合的な局面を議論している。下の表 2.2 に複合的な時定項の例を一部提示する。

表 2.2 複合的な時定項 (森山 1988: 161～163 (一部のタイプを抜粋))

動詞が表す複合的局面のタイプ	時定項	例
⑨ 過程→維持 (主体変化)	absd	(服を) 着る, (眼鏡を) かける, (靴を) 履く, (帽子を) かぶる
⑩ 過程→維持 (客体変化)	abod	(窓を) 開ける, (旗を) 揚げる, (雑誌を) 置く, (服を) 着せる, (蓋を) 閉じる, (荷物などを) のける・積む
⑪ 進展的結果持続変化	asbe	(温度が) 上がる, 集まる, 降りる, (スピードが) 加わる, (勉強が) 進む, 溜まる, 散る, 疲れる, 遠ざかる, 慣れる, 開く, 登る, (心が) 晴れる, 太る, 痩せる, 汚れる
⑫ 進展的永続変化 (主体変化)	asb	夜が明ける, (野菜が) いたむ, 消える, 腐る, (芝生が) 枯れる, 育つ, (時が) 近づく, (桜の花が) 散る, (草が) 伸びる

表 2.2 ⑨, ⑩ のような動詞に「ている」を付加した場合, 下の (2.19) のように同一の形式で「進行中」か「維持状態」の二義性が生じるようになる(「パーフェクト」解釈を除く)。<sup>9</sup> このような二義性が生じる理由は, ⑨, ⑩ には, 「進行中」を成立させる“ab” (過程) と「維持状態」を成立させる“sd / od” (「主体変化 / 客体変化」維持) の時定項が同時に含まれているからである。すなわち, “ab” vs. “sd / od” で, どちらかの時定項が「ている」と結びつくことによって, 同一形式でありながら二義性が生じることになる。

<sup>8</sup> 厳密には, 森山 (1988) は「死ぬ」のような永続的な一時的変化を表す動詞に「ている」を付加した場合, 「変化の結果」と「経歴 (パーフェクト)」の意味とで中和的だと指摘している。

<sup>9</sup> 着衣動詞においては, 森山 (1988) が主張する「維持」ではなく, 「結果持続」が表されているという岩本 (2015) の主張もある。岩本 (2015) による主張は 5 章において確認する。

- (2.19) a. 花子が服を着ている。 [進行中 / (主体変化) 維持状態]  
 b. 太郎が窓を開けている。 [進行中 / (客体変化) 維持状態]  
 (筆者作例)

また、表 2.2 ⑪, ⑫ に分類される動詞に「ている」を付加した場合、⑪, ⑫ は、主体の変化を表す動詞であることから、「動き」vs.「変化」の観点から「ている」機能の成立を議論する場合「結果状態」が成立すると考えられる。森山 (1988: 164) も、表 2.2 ⑪, ⑫ のような主体の変化を表す動詞で、「過程」を取り出す副詞の共起が無い場合は、「ている」が結果 (森山 (1988) の分析枠組みでは ⑪ は “se”, ⑫ は “s” の時定項) と結びつくことを指摘している。しかし、下の (2.20) のように、(進展的)「過程」を表す副詞 (e.g. ぐんぐん) と共起することによって、「進行中」を成立させるようになる。このようなことから、森山 (1988) は、「進行中」などの成立を考える際、「動き」vs.「変化」という観点は副次的なものであり、動詞句に「過程」が含意され、その「過程」局面が取り上げられるかが重要であると主張している。<sup>10</sup>

- (2.20) 機内温度がぐんぐん上がっています。 (森山 1988: 149)

森山 (1988) は、結果局面を期間修飾句との共起状況によって下位分類 (「結果持続 (可逆的結果)」「一時点的 (非可逆的結果)」) し、結果局面の下位分類が「ている」と共起した場合の機能を区別している点で特徴的である。しかし、(2.20)「進行中」の成立において、「ている」が動詞句に内在する「過程」を表す時定項 “ab” と結びつき得るかが重要であるとしている点で、金田一 (1950) に近い立場を取っていると考えられる。森山 (1988) は、(2.20) のような解釈が成立するようになる要因を議論するために、表 2.1, 2.2 で確認してきた時定項を副詞にも提案して考察を行っている。下の表 2.3 に森山 (1988) による副詞の時定項の例を一部提示する。

表 2.3 副詞の時定項 (森山 1988: 163~165 (一部のタイプを抜粋) )

副詞の時定項	時定項	例
⑬ 過程修飾副詞	ab 副詞	がさがさ, ばたばた, すいすい, せっせと, ぶつぶつ, がらがら, ゆっくり, 手早く, 足早に
⑭ 進展的過程修飾副詞	acb 副詞	段々, すこしずつ, 徐々に, どんどん, ぐんぐん, しだいに
	z 副詞	【単に一時点化するだけの副詞】 さっと, ぽんと, がたっと, ぽたりと / 瞬間, 一瞬, あっというまに

<sup>10</sup> 森山 (1988) の「取り上げる」という用語は「時定項の抽出」という意味だと考え議論を進める。

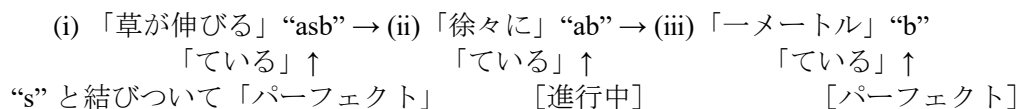
⑮ 一時点的な副詞	<b>b</b> 副詞:「過程」の終わりの点を取り出す <b>d</b> 副詞:「維持」の終わりの点を取り出す <b>e</b> 副詞:「持続」の終わりの点を取り出す	<b>【量（時間的な量、内容の量など）の規定をする副詞】</b>  五キロ（歩いた。）など、 単純期間修飾句（単純期間成分）： ～間 など、 稼働期間修飾句（稼働期間成分）： ～間かかって など
-----------	---	---

上の表 2.3 で挙げた副詞の時定項と表 2.2 ⑫「進展的永続変化“asb”」及び「ている」の関わりに対して、森山 (1988) は、下の (2.21) のような例を挙げて説明を行っている。森山 (1988) は、時定項の演算は「動詞句レベルの意味→副詞→形式」の順に行われると主張している。(2.21a) では、“asb”の時定項を持つ動詞（(草が) 伸びる (cf. 表 2.2 ⑫)）に、表 2.3 ⑭の acb 副詞（徐々に）が付加されることによって、主体変化動詞であっても「過程」“ab”が取り上げられる（抽出される）。そして、抽出された「過程」“ab”が「ている」と結びつくことによって「進行中」の機能が成立するようになる。一方、(2.21b) では、「一メートルほど」という「過程」の全体量を規定する表 2.3 ⑮の b 副詞が共起していることから、「過程」“ab”から終わりの点“b”が抽出され一時点化している。そして、抽出された「一時点」を表す時定項“b”が「ている」と結びつくことによって「パーフェクト」が成立することになる (森山 1988)。<sup>11</sup>

- (2.21) a. 草が徐々に伸びている。 (森山 1988: 172)  
b. 草が一メートルほど徐々に伸びている。 (ibid: 172)

森山 (1988) による「時定項分析」は、動詞の特徴だけでなく、「ている」機能の成立における副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の役割を詳細に考察している点で極めて重要であると考えられる。また、多くの研究によってそれまで議論されてこなかった「維持」を具体的に定義した点では、後の金 (2006)、岩本 (2008, 2015)、林 (2012) などの重要な研究に大きな影響を与えていると考えられる。しかし、森山 (1988) の議論にも疑問が見られ

<sup>11</sup> 森山 (1988: 169～170) は「ている」機能について、「過程」があっても、主体変化でない場合にも、特に動きの全体量が決められるなどの過程が取り上げられない条件（一時点副詞の共起など）があれば、進行中の意味にならない。その場合は結果の状態の意味になる。」と一部で論じているが、森山 (1988) による他の議論を踏まえると、一時点副詞が共起した場合は、「ている」の「パーフェクト（経歴）」が成立すると論じるべきだと考えられる。(2.21) の議論は次のように図式化できる。



る。まず、森山 (1988) は段階複合動詞の「V-続ける」は、「過程」“ab”と「維持」“cd”の時定項を抽出する形式だと主張している。<sup>12</sup> 上で確認したように、森山 (1988) は、時定項の演算は「動詞句レベルの意味→副詞→形式（「V-続ける」“ab / cd”）」の順に行われると提案している。しかし、そのような演算プロセスを想定した場合、下の (2.22a) が成立する理由を説明できない。

- (2.22) a. 太郎は1時間走り続けた。  
 b. (i) 「走る」“ab” → (ii) 「1時間」“b” → (iii) 「V-続ける」“?ab”  
 c. (i) 「走る」“ab” → (ii) 「V-続ける」“ab” → (iii) 「1時間」“b”

森山 (1988) の演算プロセスに従うと、(2.22b) のように、「V-続ける」の演算以前に、(ii) で b 副詞（単純期間修飾句）によって、一時点化されることになる。すなわち、すでに一時点化された“b”から「V-続ける」がどのように“ab”を抽出するのかわかり不明である。仮に、(2.22a) を説明するために、(2.22c) のように「動詞句レベルの意味→形式（「V-続ける」）→副詞」という演算プロセスを想定してみる。しかし、そのような演算プロセスを想定した場合、形式「ている」の扱いが不明になるだけでなく、(2.21) や下で確認していく (2.23)~(2.27) などの議論との間で理論的に一貫した考察ができなくなる。

(2.22) に関連して、森山 (1988) は「V-終わる」は過程“ab”から終結“b”を抽出する形式だと提案している。森山 (1988) の主張に従うと、下の (2.23) で「ている」が「進行中」を成立させない要因は、「V-終わる」（形式）が終結“b”を抽出し、その一時点を表す時定項“b”が「ている」と結びつくことによって「パーフェクト」が成立するからだと説明できるかもしれない。

(2.23) (=2.11a, 2.12a)

- a. \*花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (池谷 2003: 46)  
 b. \*壁画の最後の部分を塗り終わっている時、雨が降ってきた。 (ibid: 46)

(2.24) (=2.16)

- a. 外では電車到着のアナウンスが聞こえてますが、一本遅らせてゆっくり食べ終わりました。 (『食べログ「ロコミ」』(筆者下線))  
 b. ところがそんなにせきこんで竿を出したって、すぐ釣れることなんかまずありません。結果においては煙草の一本ぐらいゆっくり吸い終わったって同じことなんです、(後略) (『行雲流水記(随想編)』(筆者下線))  
 c. (前略)、すぐ目の前を阿部巡査が、自転車で走って通った。それをやりす

<sup>12</sup> 「V-続ける」が抽出するとされる“cd”の“c”は主体“s”，客体“o”の違いを問題としないことを表す。すなわち，“cd”は「維持」であれば「主体変化維持」「客体変化維持」のいずれでもよいことを表す。



ごし、茶をゆっくり飲み終わってから、五十嵐は駐在所へ行った。

(『針の島』(筆者下線))

しかし、上の (2.24) で「V-終わる」と共起している「過程」を表す副詞(ゆっくり)の意味的な修飾関係を考えると、(2.24a)「「食べ終わる」動作をゆっくりする」、(2.24b)「「煙草を吸い終わる」動作をゆっくりする」、(2.24c)「「茶を飲み終わる」動作をゆっくりする」のように、「ゆっくり」が「V-終わる」自体を修飾していると考えられる。このことから、森山(1988)が主張するように、「動詞句レベルの意味→副詞→形式(「V-終わる」「b」)」という時定項の演算プロセスを想定するのが妥当かは疑問である。(2.24)の副詞の修飾関係を考えると、「動詞句レベルの意味→形式(V-終わる)→副詞(ゆっくり)」という演算プロセスを想定する方が自然だと考えられ、(2.22c)においても、そのような演算プロセスの可能性を指摘した。しかし、「動詞句レベルの意味→形式(V-終わる「b」)→副詞(ゆっくり)“?ab”」というプロセスを想定した場合、「ゆっくり」の演算前に、「V-終わる」によって一時点化“b”されていることから、「ゆっくり」によって抽出される“ab”の出处は不明になる。

また、1.2節(1.3)、2.2節(2.10)で指摘したように、「V-終わる」は「～間かけて、～間かかって、～間で」というb副詞(稼働期間修飾句)が共起可能である。しかし、終結“b”を抽出するという「V-終わる」とb副詞の共起を考えた場合、いずれかを先に適用した時点で、すでに一時点化“b”されていることになる。すなわち、両形式を「過程」「ab」から終結“b”を抽出する形式と想定する以上、「V-終わる」かb副詞のいずれかが先に適用された時点で、どちらかの演算(適用)ができなくなると考えられる。

さらに、「V-始める」においても、「過程」の始まり“a”を抽出する形式だと森山(1988)は主張している。しかし、「V-始める」をそのような形式とした場合、下の(2.25)のような「ている」の「進行中」解釈を説明できない。また、「V-始める」は(2.26)のように付帯状況を表す「ながら」と結びつくことができるが、付帯状況を表す「ながら」は時間的な幅(過程)を含意する動詞とのみ結びつくことが庵他(2000, 2001)で指摘されている。すなわち、森山(1988)が指摘するように、「V-始める」を一時点的化“a”する形式とした場合、(2.25)、(2.26)が適格な文として成立する要因を説明できない。

(2.25) (=2.5)

- a. 花子はデザートを食べ始めているところだ。(池谷 2003: 46)
- b. 険しいその絶壁の下をすれすれに通過したが、そこでは、ちょうどカラスの群れが夜の眠りから目を覚まし、カモメは餌を探し始めている最中だった。  
(『蝦夷地の中の日本』(筆者下線))

(2.26) 俺は神経痛なんだ。青森まで歩けるかよ。熱気に蒸れ返ったボックスを出ると再び歩き始めながら彼は呟いた。(『短い旅』(筆者下線))

最後に、表 2.1 ⑧ では、主体の動作・客体の変化を表す「設立する」などの動詞は一時的な時定項を持つ動詞“o”として分類されている。これは、下の (2.27a) のように「ている」が「進行中」を成立させないことによって判断（分類）されたと考えられる。しかし、2.1 節 (2.4) でも確認したように、「設立する」は、(2.27b, b') のように「過程」の全体量（稼働期間）を規定する b 副詞（稼働期間修飾句）を共起させることができる（岩本 2008）。すなわち、「設立する」の時定項には、「過程」(ab) が含まれていることになり（cf. (2.27c)）、(2.27a) で「ている」が「進行中」を成立させない要因は、「過程」“ab”の有無という観点では説明ができなくなる。

- (2.27) a. \*太郎が会社を設立している最中に電話が鳴った。 (筆者作例)  
 b. 一か月かけて設立している。 (岩本 2008: 211)  
 b'. 一か月かかって設立した。 (筆者作例)  
 c. (i) 「設立する」“abo?” → (ii) 「一か月{かけて / かかって}」“b”

以上、(2.22)～(2.27) から、森山 (1988) の「時定項分析」では、①「設立する」のような動詞を分析する際、「ている」機能、「期間修飾句」のいずれを基準にするかによって、同一動詞に想定する時定項が異なってしまう。関連して、② 段階複合動詞の特徴、「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）機能のいずれを基準にするかによって、時定項の演算方法や、想定する時定項が異なってしまう問題点が見られる。さらに、③ 時定項分析の枠組みだけでは、事象構造レベルでの考察の必要性が示唆される 2.2 節 (2.17) のような用例を議論できない。すなわち、現行で提案されている「時定項分析」では、本研究の研究目的 (1. 11b) である段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりに対する議論を十分に行うことができないと考えられる。次節では、森山 (1988) と同様、「ている」機能、「副詞（期間修飾句）」「段階複合動詞」の関わりについて議論している中村 (2001) の研究を確認する。

#### 2.4. 中村 (2001) の分析

中村 (2001) は、(i) 述語構成要素（動詞、形容詞、名詞）の語彙的アスペクト（アスペクト素性の集合）と (ii) のアスペクト素性を入力とし、述語のアスペクトを指定する (iii) 関数（副詞（句）・補助動詞類（「ている」、段階複合動詞を含む））を提案し、独自の分析を行っている。中村 (2001) は、“inc-p (inchoative point: 始動点)”, “ter-p (terminative point: 終了点)”, “pre-dur (preparatory duration: 準備期間)”, “pro-dur (process duration: 過程期間)”, “res-dur (resultative duration: 結果期間)” を基本的なアスペクト素性としている。そして、その素性の有無 (±) によって、(i) 述語構成要素（動詞、形容詞、名詞）の分類を行っている。

以下の表 2.4 には中村 (2001: 30) による動詞分類の例を提示する。<sup>13</sup>

表 2.4 動作・作用の動詞の語彙的アスペクト

(中村 2001: 30)

動詞タイプ	アスペクト素性	例
継続-結果期間動詞	{+inc-p, +pro-dur, +ter-p, +res-dur}	着る, かぶる, 身につける, 積む, 背負う, 覚える, 暗記する, 停車する, 駐車する, 散る, 並ぶ, 咲く, 増える, 減る, 沈む, 落ちる, 登る, 降りる, 上がる, 下がる, あく, 閉まる, 隠れる, 転がる, 蒸発する, 壊れる, やせる, 太る, ふくらむ, 脱ぐ
継続-非結果期間動詞	{+inc-p, +pro-dur, ±ter-p, -res-dur}	読む, 書く, 聞く, 話す, 食べる, 泣く, 歌う, 入れる, 待つ, 殺す, 壊す, 溶かす, 焼く, 働く, 遊ぶ, 動く, 暴れる, 飛ぶ, 歩く, 走る, 泳ぐ, 逃げる, もがく, 見る, 流れる, うずく, ときめく, 揺れる, (雨が) 降る, 吹く, 吹雪く, 晴れる
瞬間-結果期間動詞	{+inc-p, -pro-dur, +res-dur}	寝る, 死ぬ, 結婚する, 離婚する, 黙る, 忘れる, 出る, 分かる, 間違う, 借りる, 貸す, 諦める, 光る, 消える, 点く, 休む, やめる, 失う, 止まる, 持つ, 起きる, (目が) 覚める, やむ, 付く, 焦げる, 預ける, 就職する, 入院する, 憎む, 住む
瞬間-非結果期間動詞	{+inc-p, -pro-dur, -res-dur}	一瞥する, 知り合う, 見かける, 飛び出す, くしゃみする, ジャンプする, 遭遇する, 出会う, 生まれる, ひらめく, 見つかる, 見つける, 終わ

<sup>13</sup> 中村 (2001) では, 「形容詞」「名詞+だ」「状態動詞」のアスペクトも提案しているが, 本研究の目的から, ここでは取り上げない。

		る, 終わる, 始まる, 着く, 始める, 決まる, 出発する, 現れる, 届く, 勃発する, 起こる, 入学する, 卒業する
--	--	---

次に, 中村 (2001) は, (ii) 補助動詞類 (「ている」, 段階複合動詞を含む) を (i) 述語構成要素のAspect素性 (cf. 表 2.4) を入力とし, 述語のAspectを指定する関数として提案している。下の表 2.5 に, 中村 (2001: 32) が提案する「ている」と段階複合動詞の関数を示す。<sup>14</sup>

表 2.5 補助動詞類の関数 (中村 2001: 32)

補助動詞タイプ	Aspect	関数の内容
V-始める	始動相	{+inc-p, +pro-dur, ...} → {+inc-p}
V-終わる	終了相	{+inc-p, +pro-dur, ...} → {+ter-p}
V-続ける ている	過程相	{+pro-dur, ...} → {+pro-dur}
	結果相	{+res-dur, ...} → {+res-dur}

表 2.5 の「関数の内容」は, 矢印左側で指定されたAspect素性を持つ述語構成要素のAspectを矢印右側で指定することを表しており, 変換後の出力では, Aspect素性が一つになっていることがわかる。表 2.4 の述語構成要素と表 2.5 の補助動詞類が結合した場合のAspect素性の演算例として, 下の (2.28) を参照されたい。(2.28a) は「歩き続けている」の演算例である。先ず (2.28a) 「ステップ 1」では, 「歩く」のAspect素性が「続ける」の関数と結合することによって「過程相」“+pro-dur” が指定されている。次に, 「ステップ 2」において, 「続ける」によって指定された“+pro-dur”素性を入力とする「ている」の関数が結合することによって, 再度“+pro-dur”から“+pro-dur”への出力が行われる。一方, (2.28b) で「死に始める」が容認されない理由は, 「死ぬ」(瞬間-結果期間動詞 (cf. 表 2.4)) のAspect素性には, 関数としての「V-始める」の入力に必要な“+pro-dur”の素性がないことによると説明される。

(2.28) a. 歩き続けている (継続-非結果期間動詞+ツヅケル+テイル)

歩く: {+inc-p, +pro-dur, ±ter-p, -res-dur}

続ける: {+pro-dur, ...} → {+pro-dur} (ステップ 1)

歩き続ける: {+pro-dur}

ている: {+pro-dur, ...} → {+pro-dur} (ステップ 2)

歩き続けている: {+pro-dur}

<sup>14</sup> 中村 (2001) は, 「V-出す」(始動相) と「てしまう」(終了相) もそれぞれがAspectを指定する関数として扱っているが, 本研究の目的から, これらの形式は取り上げない。

(中村 2001: 34 (括弧内のステップ表記は筆者) )

b. \*死に始める (瞬間-結果期間動詞+ハジメル)

死ぬ: {+inc-p, -pro-dur, +res-dur}

始める: {+inc-p, +pro-dur, ...} → {+inc-p}

\*死に始める

(ibid: 35)

以上では、中村 (2001) が提案している、(i) 述語構成要素のアスペクト素性と (ii) 補助動詞類 (「ている」, 段階複合動詞を含む) の定式化について確認した。中村 (2001) は、述語のアスペクトを指定する関数 (ii) として、表 2.5 の補助動詞類以外に、期間修飾句の関数を想定している。中村 (2001: 39) は、本研究の「単純期間修飾句」(e.g. ~間) を「期間の副詞句」, 「稼働期間修飾句」(e.g. ~間で) を「期限の副詞句」と呼び、それぞれの関数を表 2.6 のように提案している。<sup>15</sup> 表 2.6 の関数によって出力される“T”とは、“pre-dur (preparatory duration: 準備期間)”, “pro-dur (process duration: 過程期間)”, “res-dur (resultative duration: 結果期間)”の長さを表す。

表 2.6 期間・期限の副詞句の関数

(中村 2001: 39)

副詞句タイプ		アスペクト	関数の内容
期間	過程期間	過程相	{+pro-dur, ...} → {+pro-dur, T=pro-dur}
	結果期間	結果相	{+res-dur, ...} → {+res-dur, T=res-dur}
期限	始動期限	始動相	{+inc-p, ...} → {+inc-p, T=prep-dur}
	終了期限	終了相	{+ter-p, ...} → {+ter-p, T=pro-dur}

表 2.4 の述語構成要素と表 2.6 の期間修飾句が結合した場合のアスペクト素性の演算例として、下の (2.29) を参照されたい。(2.29a) では、「めがねをかける」のアスペクト素性が「3 時間」の関数の結合することによって「結果期間 (めがねをかけた結果)」(+res-dur, 3 時間=res-dur) が指定されている。一方、関数としては過程期間も表し得る「3 分間」のような期間修飾句が、「めがねをかける過程期間 (めがねをかけるまでの過程)」を表し得ないのは、「めがねをかける」のアスペクト素性には、過程期間を指定する関数の入力に必要な“+pro-dur”の素性が含まれていないからだと説明される (cf. (2.29b))。

(2.29) a. (結果期間の句+瞬間-結果期間動詞)

めがねをかける: {+inc-p, -pro-dur, +res-dur}

3 時間: {+res-dur, ...} → {+res-dur, 3 時間=res-dur}

<sup>15</sup> 中村 (2001) では、「~間で」のように「名詞+デ格」という形式を持つものを「期限の副詞句」として扱っている。しかし、「~間かけて、~間かかって」も基本的に同様の機能を持つことから、本研究では、これらも「期限の副詞句」(本研究の「稼働期間修飾句」)に該当するものとして考える。

3 時間, めがねをかける: {+res-dur, 3 時間=res-dur} (中村 2001: 40)

b. (過程期間の句+瞬間-結果期間動詞)

めがねをかける: {+inc-p, -pro-dur, +res-dur}

3 分間: {+pro-dur, ...} → {+pro-dur, 3 分間=pro-dur}

\*3 分間, めがねをかける (過程) (ibid: 40)

以上の中村 (2001) の議論は, 段階複合動詞と「ている」機能, 期間修飾句までを含めて定式化を行っている点で重要な示唆を与えてくれる。しかし, 中村 (2001) の定式化にもいくつかの疑問が見られる。

まず, 中村 (2001) は, 「過程相」(進行中) を指定する「ている」関数の入力に過程期間のアスペクト素性 “+pro-dur” を想定している点で, 金田一 (1950) や森山 (1988) に近い立場を取っていると考えられる。しかし, 「進行中 (過程相)」の成立を過程期間のアスペクト素性の有無という観点のみで議論した場合, 森山 (1988) と同様, 岩本 (2008) が例に挙げている下の (2.30) を説明できない。

(2.30) a. \*太郎が会社を設立している最中に電話が鳴った。 (筆者作例)

b. 一か月かけて設立している。 (岩本 2008: 211)

b'. 一か月で会社を設立した。 (筆者作例)

(2.30a) では, 「ている」が「進行中 (過程相)」を表さないことから, 中村 (2001) の枠組みに従うと「設立する」のアスペクト素性には少なくとも瞬間素性 “{+inc-p, -pro-dur, ...}” が含まれていると考えられる。しかし, (2.30b, b') において, 期限の副詞句が修飾するのは動作開始に至る準備期間 (始動期限) ({+inc-p, ...} → {+inc-p, T=prep-dur}) ではなく, 設立完了に至る稼働期間 (終了期限) ({+ter-p, ...} → {+ter-p, T=pro-dur}) である。すなわち, 「ている」機能の成立状況から, 「設立する」には, 過程期間のアスペクト素性が含まれていないと予想される中で, 期限の副詞句の関数によって, 過程の期間 (T=pro-dur (終了期限)) が出力されるようになるメカニズムを中村 (2001) の枠組みでは十分に説明ができない。

関連して, 中村 (2001) は, 補助動詞類の関数は, 述語構成要素のアスペクト素性の集合から, 一つのアスペクト素性を指定するものと提案している。しかし, そのような素性の出力を想定した場合, 2.2 節 (2.5) や下の (2.31a) のように「V-始める」に「ている」を付加した際「進行中 (過程相)」が成立する理由を説明できない (「V-始める」は {+inc-p} を指定する関数として提案されている (cf. 表 2.5))。補助動詞類の関数を一つのアスペクト素性を指定するものと想定する限りこのような仮定はできないが, 仮に (2.31a) で「ている」が「進行中 (過程相)」を表すことを説明するために, 「V-始める」の出力を (2.31b) 「ステップ 1」のように想定してみる。しかし, (2.31b) のような出力を想定した場

合, (2.32a) で期間修飾句が, 「食べ始める」の過程期間を修飾できない理由を説明できなくなる。「V-始める」の出力を (2.31b) 「ステップ 1」のように想定した場合, (2.32b) の演算も可能になると予想されるが, (2.32a) の表現は成立しないと考えられる。<sup>16</sup> また, 森山 (1988) と関連した問題点にもなるが, 「V-始める」の出力に「過程相」“+pro-dur”を想定しない場合, (2.33) のように「V-始める」が付帯状況を表す「ながら」と結びつく理由を説明できない。

(2.31) a. 花子はデザートを食べ始めているところだ。 (池谷 2003: 46)

b. 食べ始める (継続-非結果期間動詞+V-始める)

食べる: {+inc-p, +pro-dur, ±ter-p, -res-dur}

始める: {+inc-p, +pro-dur, ...} → {+inc-p, +pro-dur} (ステップ 1)

食べ始める: {+inc-p, +pro-dur}

ている: {+pro-dur, ...} → {+pro-dur} (ステップ 2)

食べ始めている: {+pro-dur}

(2.32) a. \*花子はデザートで 10 分間食べ始めた。

b. 食べ始める (継続-非結果期間動詞+V-始める)

食べる: {+inc-p, +pro-dur, ±ter-p, -res-dur}

始める: {+inc-p, +pro-dur, ...} → {+inc-p, +pro-dur} (ステップ 1)

食べ始める: {+inc-p, +pro-dur}

10 分間: {+pro-dur, ...} → {+pro-dur, 10 分間=pro-dur} (ステップ 2)

\*10 分間食べ始めた。: {+pro-dur, 10 分間=pro-dur}

(2.33) (=2.26)

俺は神経痛なんだ。青森まで歩けるかよ。熱気に蒸れ返ったボックスを出ると再び歩き始めながら彼は呟いた。 (『短い旅』(筆者下線))

さらに, 中村 (2001) は「V-終わる」を分析対象としていないが, 中村 (2001) の枠組みで「V-終わる」の分析を試みた場合にも (2.31), (2.32) に関連する問題が生じる。中村 (2001) の枠組みでは, 補助動詞類の関数は, 述語構成要素のアスペクト素性の集合から, 一つのアスペクト素性を指定するものと提案している。このことから, 2.2 節 (2.11b), (2.12b), (2.13) で確認した, 「V-終わる」に「ている」を付加した際の「進行中」機能の成立を説明する場合には, 「V-終わる」に「過程相」“+pro-dur”を指定する関数を想定しなければならなくなる。しかし, (2.10) などで確認したように, 「V-終わる」は稼働期間修

<sup>16</sup> 他の可能性として, 補助動詞類の関数は一つのアスペクト素性を指定するものという想定を保持して, (2.31a) の「進行中」を説明するために, 「V-始める」の出力に“+pro-dur”を想定することも考えられるかもしれない。しかし, その場合は「V-始める」「V-続ける」「ている」の特徴を区別できなくなるし, (2.32) も説明できない。

飾句（期限の副詞句）との共起も可能であることから、そのような共起状況を説明するためには、「V-終わる」に「終了点」“+ter-p”を指定する関数を想定する必要がある。すなわち、現行で提案されている中村 (2001) の枠組みで「V-終わる」を分析する場合、「ている」機能が「期間修飾句」のどちらを基準にするかによって、同一の補助動詞に対して、異なるアスペクト素性もしくは関数を想定する必要があることを示唆している。<sup>17</sup>

以上、現行の中村 (2001) の分析枠組みでは、① 2.3 節の森山 (1988) の分析と同様「設立する」のような動詞を分析する際、「ている」機能、「期間修飾句」のいずれを基準にするかによって、同一動詞に想定するアスペクト素性もしくは関数が異なってしまう。関連して、② 段階複合動詞の特徴、「ている」機能、「期間修飾句」のいずれを基準にするかによって、同一動詞（補助動詞類含む）に想定するアスペクト素性もしくは関数（関数の出力）が異なってしまう問題点が見られる。③ 中村 (2001) の分析枠組みでは、「徐々に、ゆっくり」のような様態副詞のアスペクト素性（もしくは関数）が提案されていないため、2.2 節 (2.14)～(2.16) のような「様態副詞」に関わる用例は分析できない。さらに、④ 中村 (2001) の枠組みだけでは、事象構造レベルでの考察の必要性が示唆される 2.2 節 (2.17) のような用例を議論できない。これらのことから、現行で提案されている中村 (2001) の分析枠組みでは、本研究の**研究目的 (1.11b)** である段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりに対する議論を十分に行うことができないと考えられる。次節では、管見の限り、現在提案されている分析枠組みの中で、最も統一的に**研究目的 (1.11b)** を議論できると考えられる「事象投射理論」（岩本 2008 など）の分析枠組みについて確認する。

## 2.5. 事象投射理論

Jackendoff (1997 など) は、言語能力の構造として、「音韻構造」(Phonological structures), 「統語構造」(Syntactic structures), 「概念構造」(Conceptual structures) の三部門を想定し、「三部門分立並行構成論」(The tripartite parallel architecture) (訳語は岩本 (2008) による) を提案している。さらに、三つの部門はお互いに対応規則 (correspondence rules) によって関係づけられている一方で、個々の部門においては独自の制約が存在することを主張している (cf. 図 2.1)。岩本 (2008 など) は、Jackendoff (1997 など) の「三部門分立並行構成論」の観点を援用しながら、事象アスペクトの決定に関する原理と原則は、統語構造ではなく、

---

<sup>17</sup> (現行の枠組みでは、実際は不可能であるが) 仮に「V-終わる」の出力に {+ter-p, +pro-dur} 素性が含まれていると仮定する。しかし、そのような出力を想定した場合、「\*花子はデザートを 10 分間食べ終えた。」が非文となる理由を説明できなくなる。中村 (2001) は、過程期間を表す期間句と終了期限を表す期限句のいずれも適用可能な「着る」(継続-結果期間動詞 {+inc-p, +pro-dur, +ter-p, +res-dur}) のような素性を持つ動詞の場合、語用論的規則によって期間句 vs. 期限句の適用が指定されると主張している。しかし、「\*花子はデザートを 10 分間食べ終えた。」においては、どのような語用論的規則が働いても、容認可能になるとは思えない。



概念構造において存在することを主張している。そして、アスペクト現象と概念構造に存在する原理・原則の関わりを議論するために、Jackendoff (1991, 1996, 1997 など) によって提案された「相変換 (アスペクト) 関数」や「素性」「次元投射」「構造保持束縛 (structure-preserving binding)」などを修正・発展させながら「事象投射理論」(岩本 2008, 2010, 2011, 2015, 2021 など) を提案している。

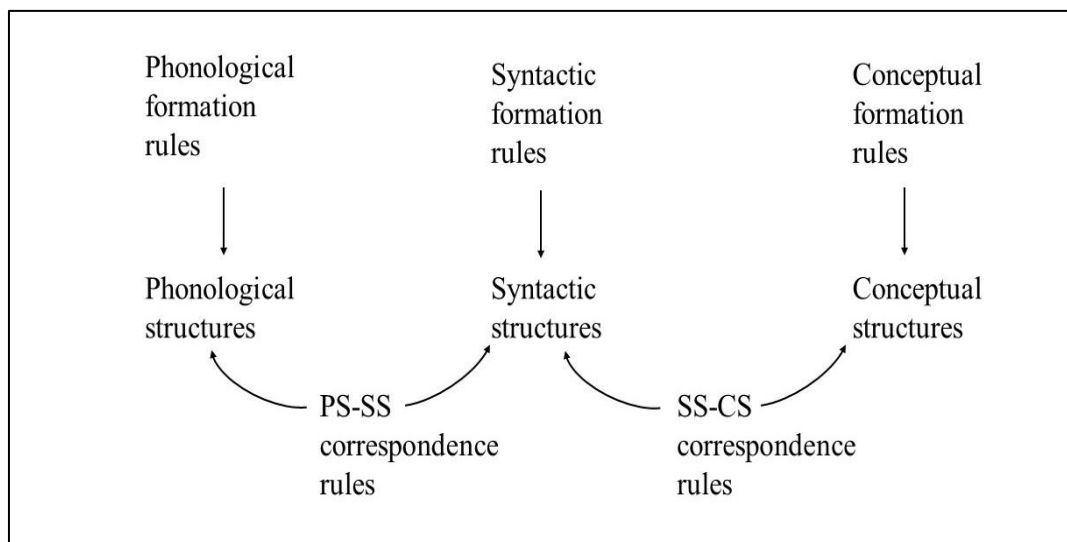


図 2.1 The tripartite parallel architecture

(Jackendoff 1997: 39)

下の表 2.7 には、事象投射理論で提案されている相変換関数と素性の中で、本研究の議論に関わる主要なものを提示する。表 2.7 における相変換関数の左右は、逆関数同士であることを表す。例えば、表 2.7 上から 1 行目の投射関数 (PR: Projection function) と断面化関数 (CRS: Cross-Section function) は逆関数を成す関係として提案されている (岩本 2008 など)。個々の関数の具体的な機能は、次節以降、素性との関わりを含めて確認していく。

表 2.7 本研究と関わる主要な相変換関数と素性

(岩本 2008: viii~x を元に作成)

相変換関数	投射関数 (PR: Projection function) 0~2d 実体を投射し、実体を定義する。本研究では、主に状態 (0d) を動態 (1d) に投射する関数として議論に関わる。	断面化関数 (CRS: Cross-Section function) 1~3d 実体から断面 (0d) を抽出する関数。本研究では、主に動態 (1d) を状態 (0d) 化する関数として議論に関わる。
	限界化関数 (COMP: Composed of) 非限界的なものから、その一部を取り出して限界化する関数。 ([-b]→[+b])	非限界化関数 (GR: Grinder) 限界的なものの境界を取り去り、非限界化する関数。 ([+b]→[-b])
	複数化関数 (PL: Plural) 単数のものを複数化する関数。複数	単数化関数 (ELT: Element of) 複数のものを単数化する関数。単

	化に伴い非限界化も行う。 ([+b, -i] → [-b, +i])	数化に伴い限界化も行う。 ([-b, +i] → [+b, -i])
素性	限界性素性 (±b: ±bounded) 物体や事象が限界点を持つかどうかを表す。	稠密 (連続) 性素性 (±den: ±dense) 実体が稠密的に投射しているかを区別する。
	bdby <sup>±</sup> : bounded by <sup>±</sup> 限界的な実体 (動態, 経路, 物体) が何によって限界づけられているのかを表す素性。bdby <sup>+</sup> は終局点, bdby <sup>-</sup> は始局点による限界づけを表す。	±i: ±internal structure 実体が複数の個体によって構成されているかを区別する素性。
	±dir: ±directional 事象や実体の方向性の有無を表す素性。	

### 2.5.1. 事象投射構造

事象投射理論 (岩本 2008 など) では, 動作主性を伴う事象は, 「動作主性 (働きかけ (AFF))」を表す下位事象と, 「動き」「変化」を表す下位事象による複合的な事象投射構造 (拡大事象投射構造) を成すと提案されているが, 拡大事象投射構造については, 2.5.3 節で確認する。本節では「動き」「変化」を表す事象投射構造について確認する。

先ず, 事象投射理論では, 「流れる」のような動詞によって表される「時間の経過と相対的に空間が 1 次元的, 連続的, 非限界的に伸長する事象」(岩本 2011: 133 (誤字筆者修正)) を「推進事象」と定義し, 下の (2.34) の事象投射構造が提案されている。<sup>18</sup> (2.34) では, 下から 2 段目 (「段」は個々の相変換関数 ( $\langle \rangle$ ) ・出力 ([ ]) のまとまりを指す, 以下「下から」省略) において「状態」(0 次元 [0d]) を「動態」(1 次元 [1d]) として捉えるために, 投射関数 (PR: Projection function) による変換が行われている。また, 時間項 ([Time]) と空間項 ([Space]) の並行 (相同) 的關係 (構造保持束縛 (Jackendoff 1996)) がギリシャ文字によって表されている ((2.34) では “ $\alpha$ ”)。 (2.34) の相変換関数 ( $\langle \rangle$ ) 右側に記されている [ $\uparrow$ ] は, 相変換関数の適用を表している。

(2.34) 推進の事象投射構造 (岩本 2008: 188, 2011: 133 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} BE([ThingX], [Space 0d]); \\ [Time 0d] \end{array} \right] \leftarrow 2 \text{ 段目}$$

<sup>18</sup> 岩本 (2008, 2010, 2011, 2015, 2021 など) では, 議論の目的に合わせて表記方法・表記する素性に僅かな変更が見られるが, 本研究では基本的に, 岩本 (2008) による表記方法・素性を採用する。

事象投射理論では、「動き」と「変化」を動態事象の主要な下位区分としている。そして、投射された動態が稠密（連続）性を持ったものであるかを稠密（連続）性素性  $[\pm\text{den}]$  (dense) で区別し、「動き」は  $[\text{+den}]$ 、「変化」は  $[\text{-den}]$  で表される。さらに、事象が限界点を持つかどうかは限界性素性  $[\pm\text{b}]$  (bounded) で表される。すなわち、(2.34) 「流れる」のような「推進」事象は「動き」を表し、付加詞などによって外的に限界づけがなされない限り連続的且つ非限界的な事象であることから、 $[\text{+den}, \text{-b}]$  素性を持つ。他にも、(2.34) で表記されている  $[\pm\text{dir}]$  素性 (directional) は、事象や実体が方向性を持つかを表す素性であり、「動態」「経路」は  $[\text{+dir}]$ 、「状態」「場所」は  $[\text{-dir}]$  となる。また、 $[\pm\text{i}]$  素性 (internal structure) は、実体が、複数の個体 ( $[\text{+i}]$ ) によって構成されているのか、単数の個体 ( $[\text{-i}]$ ) で構成されているのかを区別する素性であり、2.5.4 節で確認する複数事象の事象投射構造などを議論する際に必要となる (岩本 2008)。

(2.34) の「推進」事象とは対照的に、「変化（到達）」事象の事象投射構造は下の (2.35) のように提案されている。「死ぬ」のような非連続的な「変化（到達）」 ( $[\text{-den}]$ ) は内生的な限界点を持つことから、必ず限界的な素性 ( $[\text{+b}]$ ) を含み、PR による投射の段階 (cf. (2.35) 2 段目) で始局点もしくは終局点 ( $[\text{bdby}^\pm]$  (bounded by)) によって限界づけがなされる。(2.35) で表されている「死ぬ」のような変化の場合は、空間的位置変化を表すのではなく、特徴の出現を表すことから、空間項 ( $[\text{Space}]$ ) の代わりに、特徴項 ( $[\text{Prop}]$ ) が用いられる (cf. 1 段目)。また、(2.35) 2 段目に表記されている  $[\text{bdby}^+(\text{[DEAD]})]$  ( $[\text{t}_i]$ ) は、 $[\text{DEAD}]$  という特徴とその特徴が出現（成立）する時間  $[\text{t}_i]$  が終局点として事象（変化）を限界づけていることを表す（始局点によって限界づけられる場合は  $[\text{bdby}^-]$  と表記する）。さらに、(2.35) 「変化（到達）」 ( $[\text{-den}]$ ) の投射では、特徴項の 3 段目において、 $[\text{DEAD}]$  という特徴が出力され、時間項においても、 $[\text{0d}]$  から  $[\text{0d}]$  へ非連続的に投射される (岩本 2008 など)。

(2.35) 到達の事象投射構造 (岩本 2008: 188, 2011: 136 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[DEAD]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[t}_i\text{]}) \end{array} \right]^\alpha \left[ \begin{array}{c} \text{[DEAD]} \\ \text{[0d, t}_i\text{]} \end{array} \right] \leftarrow \begin{array}{l} \text{3 段目} \\ \text{2 段目} \\ \text{1 段目} \end{array}$$

$\left[ \begin{array}{c} \text{[0d, t}_i\text{]} \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{1 段目}$

$\left[ \begin{array}{c} \text{[Prop0d]} \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{1 段目}$

$\left[ \begin{array}{c} \text{[DEAD]} \\ \text{[0d, t}_i\text{]} \end{array} \right] \leftarrow \text{3 段目}$

(2.34) 「推進」と (2.35) のような非連続的「変化（到達）」の他に、本来的に「変化（到達）」を表す事象が、様態副詞 (e.g. ゆっくり) との共起や、「働きかけ」事象と拡大事象投射構造を成すことによって、限界的な素性 ( $[\text{+b}]$ ) を持った状態で、「動き」 ( $[\text{+den}]$ ) を表すようになることがある。岩本 (2021) は、そのような事象を「達成」と呼び、下の (2.36) では、「変化（到達）」事象と様態副詞 (e.g. ゆっくり) の共起による「達成」事象の成り立ちについて確認する（「働きかけ」事象との合成による「達成」事象の成り立ち

は、3章で触れる)。

(2.36) a. 「倒れる」の事象投射構造 (岩本 2008: 249 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{[HORIZONTAL]} \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[HORIZONTAL]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[t}_i\text{]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{[0d, t}_i\text{]} \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{2 段目}$$

[Sit BE([ThingX], [Space0d]);

b. 「ゆっくり」の事象投射構造 (ibid: 139, 249 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{[1d, +dir]} \\ \text{[+den, -b, -i]} \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, -b, -i} \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, -b, -i} \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, -b, -i} \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{[Time0d]} \end{array} \right]$$

[Sit BE([ThingX], [Space0d]);

c. 「ゆっくり倒れる」の事象投射構造 (ibid: 250 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{[1d, +dir]} \\ \text{[+den, +b, -i]} \\ \text{bdby}^+(\text{[HORIZONTAL]}) \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[HORIZONTAL]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[t}_i\text{]}) \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{+den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[t}_i\text{]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{3 段目}$$

[Sit BE([ThingX], [Space0d]);

「倒れる」という事象は、本来 (2.35) (e.g. 死ぬ) と同様、非連続的な「変化」([-den])である。このことから、上の (2.36a) では PR による投射の段階 (cf. (2.36a) 2 段目) で終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけ ([+b]) がなされている。しかし、稠密 (連続) 性素性 ([+den]) を持つ (2.36b) 副詞「ゆっくり」の事象投射構造と (2.36a) が単一化することで、(2.36c) では、「倒れる」(2.36a) で指定された限界的な素性と終局点の情報 ([+b, bdby<sup>+</sup>]) を持った状態で、連続的な「動き」([+den]) を表す「達成」の事象投射構造を成すようになっている (岩本 2008, 2021 (cf. (2.36c) 3 段目))。

本節の (2.34)~(2.36) では、「推進 (動き)」「変化 (到達)」「達成」の事象投射構造について確認した。「推進 (動き)」「変化 (到達)」「達成」は、下の表 2.8 に示すように、主に稠密 (連続) 性素性 ([±den]) と限界性素性 ([±b]) の組み合わせによって区別される (岩本 2008, 2021 など)。また、岩本 (2008, 2021) は、表 2.8 下から 1 行目のような非連続的且つ非限界的な素性 ([-den, -b]) を持つ事象は存在しないことを指摘している。

表 2.8 事象タイプと素性の組み合わせ

(岩本 2021: 192 を参考に作成)

事象タイプ	素性の組み合わせ
「推進 (動き)」	[+den, -b]
「変化 (到達)」	[-den, +b]
「達成」	[+den, +b]
※存在しない	[-den, -b]

### 2.5.2. 相変換関数と相強制 (解釈規則) の関わり

2.5.1 節では、「動き (推進)」「変化 (到達)」「達成」の事象投射構造を確認したが、本節では、先ず、2.5.1 節で確認した投射関数 (PR) の逆関数として提案されている断面化関数 (CRS: Cross-Section function) について確認する。PR は 2.5.1 節で確認したように、0 次元 (状態) を 1 次元 (動態) に変換する関数である。対照的に CRS は 1 次元 (動態) を 0 次元 (状態) に変換する関数として提案され、日本語では下の (2.37) のように、「ている」の概念構造に CRS が含まれていることが、事象投射理論で想定されている。

(2.37) 「ている」の概念構造 (岩本 2008: 186)

$$\left[ \begin{array}{c} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle \uparrow \\ [1d, +dir, -b] \\ \text{Time} \end{array} \right]$$

(2.37) から、「ている」に含有される CRS は、動態 ([1d]) で非限界的な素性 ([-b]) を持った「時間項」に適用され、非限界的で連続的な時間を 0 次元化することがわかる。さらに、時間項もしくは空間項 (特徴項) のいずれかに適用された相変換関数は、後の (2.40) のように特別な理由がない限り、時間項、空間項 (特徴項) に並行的に適用される (岩本 2008 など)。下の (2.38) では、4 段目で時間項に適用された CRS が空間項にも適用され、時間項と空間項が並行的に 0 次元化されている。(2.38) のように、時間項と空間項 (特徴項) に存在する素性 ([1d, +dir, -b]) が、並行的に 0 次元 (状態) 化されたものが、「ている」の「進行中」が成立する際の事象投射構造となる (岩本 2008 など)。

(2.38) 「流れている」の事象投射構造 (「進行中」解釈)

(岩本 2008: 189, 2011: 144 (表記一部変更))

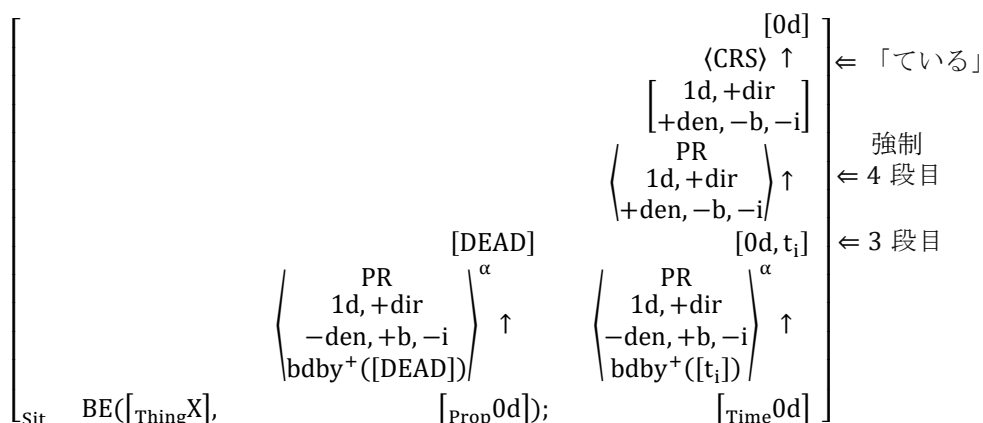
$$\left[ \begin{array}{c} [0d] \\ \text{「相変換関数並行適用」} \Rightarrow \langle \text{CRS} \rangle^\beta \uparrow \\ \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \text{PR} \\ \left\langle \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{Sit} \quad \text{BE}([\text{Thing}X], \quad [\text{Space}0d]); \quad \left[ \begin{array}{c} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^\beta \uparrow \\ \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \text{PR} \\ \left\langle \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ [\text{Time}0d] \end{array} \right] \leftarrow \begin{array}{l} \text{4 段目} \\ \text{「ている」} \end{array} \end{array} \right]$$

一方、「ている」は、2.5.1 節 (2.35) 「死ぬ」(到達) のような動詞と結びついて、「結果状態 (e.g. 死んでいる)」を成立させる。しかし、(2.35) では、PR による時間項の投射 (出力 (cf. 3 段目)) が  $[0d, t_i]$  となっており、0 次元を CRS によって 0 次元化することはできない。そこで、(2.35) に CRS を適用させるための手立てとして、岩本 (2008 など) は、下の Jackendoff (1997) による相強制の提案 (2.39) を採用している。

(2.39) F (X) という関数-項構造 (function-argument structure) において、X が F の項として不適である場合、「強制関数」G を導入し、F (G (X)) という構造を作り出せ。この場合、X は G の適切な項、G (X) は F の適切な項でなければならない。(岩本 2011: 140)

(2.39) の提案を適用した下の (2.40) では、F は「ている」(CRS) になり、X (時間項) は CRS が適用可能な素性 ( $[1d, +dir, -b]$ ) を含んでいなければならない。(2.40) の 3 段目では時間項の出力が  $[0d, t_i]$  となっており、「ている」(CRS) を適用することはできない (3 段目までは (2.35) と同様)。そこで、4 段目で PR を「強制関数」G として導入することによって、時間項に  $[1d, +dir, -b]$  素性を持った出力が投射され、時間項に CRS が適用できるようになる。ただし、(2.40) の特徴項である [DEAD] はそれ以上変化しない定項であることから、PR による投射ができず、CRS も特徴項には適用されない (岩本 2008 など)。(2.40) は、変化結果 (非連続投射後) の [DEAD] という特徴が存在している連続的時間を 0 次元 (状態) 化するという事象投射構造を成しており、「ている」の「結果状態」が成立する際の事象投射構造となる (岩本 2008 など)。

(2.40) 「死んでいる」の事象投射構造 (「結果状態」解釈)  
(岩本 2008: 189, 2011: 144 (表記一部変更))



さらに、2.2 節 (2.14) で確認したように、一般的に「ている」を付加した際に、(2.40) のような「結果状態」(e.g. 木が倒れている) を成立させる動詞であっても、「ゆっくり」

のような様態副詞と共起することによって「進行中」(e.g. 木がゆっくり倒れている)が成立するようになる。2.5.1 節の (2.36) では, (2.36a)「倒れる」と (2.36b)「ゆっくり」の事象投射構造が単一化することによって, (2.36c)「ゆっくり倒れる」という限界的な素性と終局点の情報を持った状態で, 連続的な「動き」を表す「達成」の事象投射構造を成すようになることを確認した。(2.36c)「ゆっくり倒れる」の事象投射構造に「ている」(CRS)を適用する場合, 3段目の出力に限界的な素性と終局点([+b, bdby<sup>+</sup>])の情報が存在する。「ている」(CRS)は, [1d, +dir, -b]という非限界的な素性を持った時間項に適用可能なことから, (2.36c)に「ている」(CRS)は直接適用できず, 強制 (2.39)が必要になる。

(2.41) 「ゆっくり倒れている」の事象投射構造 (「進行中」解釈)

(岩本 2008: 250 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{l} \text{「相変換関数並行適用」} \Rightarrow \langle \text{CRS} \rangle^{\gamma} \uparrow \\ \text{「強制の並行適用」} \Rightarrow \langle \text{GR} \rangle^{\beta} \uparrow \end{array} \right. \left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^{\gamma} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \langle \text{GR} \rangle^{\beta} \uparrow \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^{\gamma} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \langle \text{GR} \rangle^{\beta} \uparrow \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\text{HORIZONTAL}]) \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{l} \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right] \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} \left[ \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\text{HORIZONTAL}]) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \left[ \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right]^{\alpha} \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} \left[ \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\text{HORIZONTAL}]) \end{array} \right]^{\alpha} \\ \left[ \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([t_i]) \end{array} \right]^{\alpha} \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} \leftarrow 6 \text{ 段目「ている」} \\ \leftarrow 5 \text{ 段目} \\ \leftarrow 4 \text{ 段目 強制} \\ \leftarrow 3 \text{ 段目} \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{l} \text{[Sit BE}([\text{Thing}X], \\ \text{[Space}0d]); \\ \text{[Time}0d] \end{array} \right]
 \end{array}$$

強制 (2.39) を適用した上の (2.41) では, F は「ている」(CRS) になり, X (時間項) は CRS が適用可能な [1d, +dir, -b] 素性を含んでいなければならない。(2.41) の 3 段目では, [1d, +dir] 素性以外にも限界的な素性と終局点 ([+b, bdby<sup>+</sup>]) の情報が含まれているため, 「ている」(CRS) を直接適用することはできない (3 段目までは (2.36c) と同様)。そこで, 4 段目で非限界化関数 (GR: Grinder) を「強制関数」G として, 時間項と空間項に並行的に適用することによって, 限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) がなされる。その結果, 5 段目では, 時間項と空間項において, 限界的な素性と終局点の情報を含まない [1d, +dir, -b] 素性が出力されるようになる。そして, 6 段目で時間項に「ている」(CRS) が適用できるようになり, 時間項と空間項に存在する [1d, +dir, -b] 素性が, 並行的に 0 次元 (状態) 化されることで, 「ている」の「進行中」が成立することになる (岩本 2008, 2021 など)。

以上, (2.40), (2.41) では相変換関数の一つとして提案されている「ている」(CRS) の適用にあたって, 強制 (2.39) が働くことを確認した。しかし, 強制 (2.39) は, 無制限に適用できるものではないと岩本 (2008 など) は指摘している。2.3 節で一部確認したように,

数量詞や期間修飾句の付加が無い状態では「進行中」を成立させる動詞（句）であっても、下の (2.42) のように期間修飾句が付加された場合、「ている」の「パーフェクト」機能が成立するようになる（# は「進行中」解釈はできないことを示す）。<sup>19</sup> このような現象に対して、岩本 (2008) は、(2.43) の原則と「ている」(CRS) を適用する「パーフェクト」の事象投射構造 (2.45) の関係によって説明を行っている。

(2.42) #太郎は 10 分間走っている。 (筆者作例)

(2.43) 「解釈規則（強制）による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」  
解釈規則（強制）は、それが適用する事象投射構造の一部あるいは全部を取り消すことはできない。

(岩本 2008: 157 (括弧は岩本 (2011) に倣い筆者追加) )

下の (2.44) の 3 段目までが (2.42) で期間修飾句が付加される以前の「走る」の事象投射構造となる。(2.44) の「走る」は、動作主性を伴うことから 2.5.3 節で確認する拡大事象投射構造を成すが、本節では、議論の便宜上「動き」の事象投射構造のみを提示する。また、「走る」「歩く」のような動詞は、構文内で共起し得る項（計測経路）によって両義的限界性が生じる「経路動詞」(岩本 2008, 2010 など) として知られている。両義的限界性に関する岩本 (2008) の議論は 2.5.5 節で確認する。

事象投射理論において、限界化関数 (COMP: Composed of) は非限界的なものを限界化する ( $[-b] \rightarrow [+b]$ ) 関数とし、量や期間を表す語の概念構造に COMP が含まれていると提案されている。(2.44) の 4 段目では、「10 分間」(COMP (含有) ) が適用され、限界化が行われている。しかし、上で確認したように、「ている」(CRS) は  $[1d, +dir, -b]$  という非限界的な素性を持った時間項に適用される。このことから、(2.44) の「10 分間走る」の事象投射構造 (5 段目) には CRS を直接適用できない。そこで、6 段目で強制によって COMP の逆関数である非限界化関数 (GR) を導入し、限界性素性の再変更（非限界化 ( $[+b] \rightarrow [-b]$ )) をすることで CRS が適用できるようになる可能性が考えられる。しかし、そのような強制は、先に 4 段目で限界化を行った「10 分間」(COMP) の情報を無意味（空虚）化し、(2.43) の原則に違反する (岩本 2008)。岩本 (2008: 159) は、(2.44) の 4 段目と 6 段目のように、強制によって逆関数を連続適用する構造が作り出された場合、先に存在する情報の無意味（空虚）化が起り不適格な構造になると指摘している。

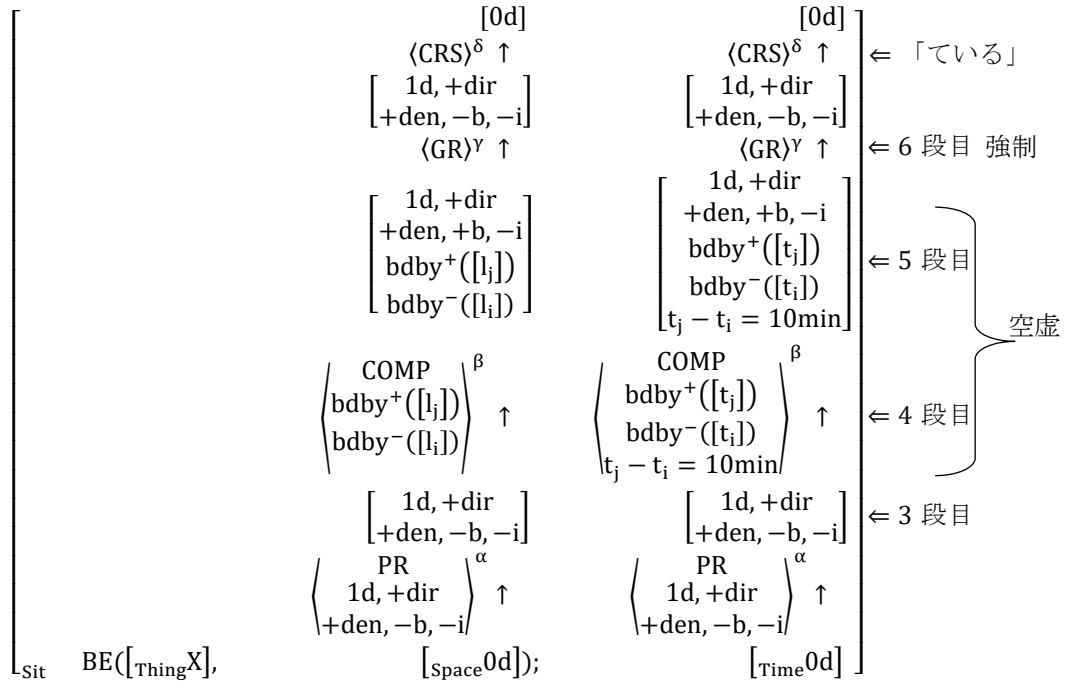
---

<sup>19</sup> (2.42) に類似した現象は、数量詞を付加した場合にも起こる (e.g. 太郎は 100 メートル走っている (町田 1989: 40))。ただし、「100m (トラック) を走る」と「100m 走る」は異なる概念構造を持つという点に注意が必要である。前者の「100m を」は、事象が始まる前からすでに独立して存在している「経路」であり「100m (トラック) を走っている最中だ」ように「進行中」の成立が可能である（項としての「経路」については 2.5.5 節で確認する）。一方、後者(数量詞 100m)は事象が展開する中で規定される数量であり、「進行中」は成立しなくなる (町田 1989; 岩本 2008 など)。



(2.44) 「#10 分間走っている」の事象投射構造（構造としては不適格）

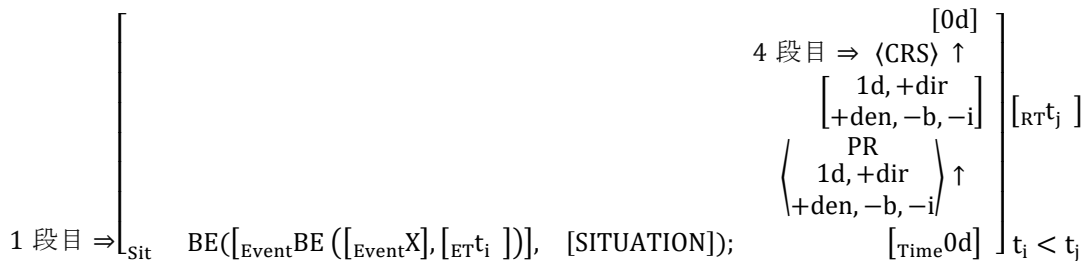
（岩本 2008: 219（表記一部変更））



事象投射理論では、(2.44) の 6 段目のような強制無しで「ている」(CRS) が適用可能な構造として、下の (2.45) の「パーフェクト」の事象投射構造を提案している。「パーフェクト」の事象投射構造では、完了した事象  $[_{\text{Event}}X]$  が設定時  $[_{\text{RT}}t_j]$  の状況 (Situation) に留まっている (効力として存在している) ことが表されている。そして、効力が存在する状況の連続的時間を「ている」(CRS) によって 0 次元化するという事象投射構造になっている。また、「 $t_i < t_j$ 」は、事象  $[_{\text{Event}}X]$  の発生時  $[_{\text{ET}}t_i]$  が設定時  $[_{\text{RT}}t_j]$  より先行していることを表している (岩本 2008)。

(2.45) 動作パーフェクトの事象投射構造

（岩本 2008: 215（表記一部変更））



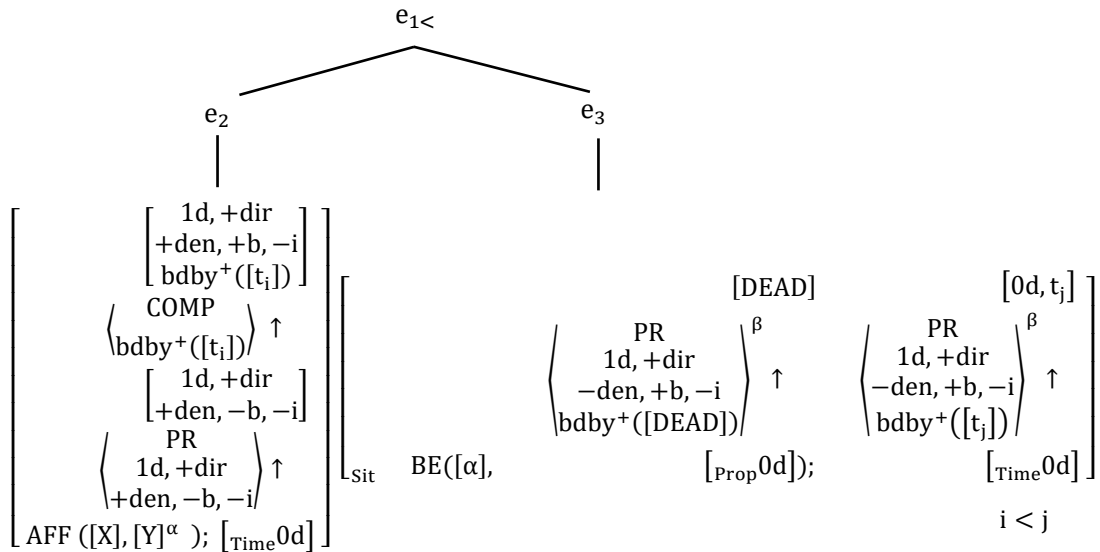
(2.44) の「10 分間走る」の事象投射構造 (5 段目まで) には、すでに確認したように (2.43) の原則によって「ている」(CRS) を適用できない。しかし、「10 分間走る」の事象投射構造を、完了した事象  $[_{\text{Event}}X]$  として (2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造 (1 段目) に組み込んだ場合には、「ている」(CRS) を適用することができる (cf. (2.45) 4 段目) (岩



を成していることが表されている。そして、(2.46) では「働きかけ」(e<sub>2</sub>)と「変化」(e<sub>3</sub>)の事象投射構造が同様の素性(出力)を有していることがわかる。

次に、岩本(2008)は「毒殺する」(e<sub>1</sub>)のように、動作主による「毒を盛る」という行為終了後に、毒を盛られた客体が「死ぬ」という、「働きかけ」(e<sub>2</sub>)と「変化」(e<sub>3</sub>)が同時に進行することのないタイプの事象を下の(2.47)「包括的順序部分関係」([e<sub>1</sub>e<sub>2</sub> < e<sub>3</sub>])に分類している。

(2.47) 包括的順序部分関係 (e.g. 毒殺する) (岩本 2008: 207 (表記一部変更))



「包括的順序部分関係」は、オンセット使役(丸田 1998 など)を表す動詞などが含意する拡大事象投射構造であることを岩本(2008)は指摘している。(2.47)のタイプでは、(2.46)の下位事象とは異なり、「働きかけ」(e<sub>2</sub>)と「変化」(e<sub>3</sub>)が同期的な構造を成していないことがわかる(e<sub>2</sub>は[+den], e<sub>3</sub>は[-den], e<sub>2</sub>, e<sub>3</sub>は個々に異なる終局点([bdby<sup>+</sup>])の情報によって限界づけがなされている)(岩本 2008)。

(2.46)に「ている」を付加した場合、「進行中」(e.g. 走っている最中だ)が成立するが、(2.47)の場合は「パーフェクト」(e.g. #毒殺している)が成立する。このような現象に対して、岩本(2008)は拡大事象投射構造への相変換関数適用に関する(2.48)の原則を提案して議論を行っている。

(2.48) 「相変換関数分配の原則」

二つの下位事象 e<sub>2</sub>, e<sub>3</sub> によって構成される e<sub>1</sub> に適用する相変換関数は、e<sub>2</sub>, e<sub>3</sub> に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。

(岩本 2008: 206)

(2.47) では、下位事象がそれぞれ異なる事象投射構造を成しているため、相変換関数（「ている」(CRS) など）を下位事象間に同期的（相同的）に適用できず (2.48) の原則に違反する。<sup>20</sup> しかし、(2.47) の事象全体 ( $e_1$ ) を完了した事象 [EventX] として、2.5.2 節で確認した (2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造に組み込んだ場合には、「ている」(CRS) を適用することができる (岩本 2008)。すなわち、(2.47) に「ている」を適用した際に「パーフェクト」の成立が指定される要因も、(2.48) の原則と「ている」(CRS) が適用可能な (2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造の関係によって説明される。

さらに、岩本 (2008) は、「設立する」などの動詞に「ている」を付加した場合に、「進行中」が成立しない現象に対しても、「#毒殺している」と同様の観点から説明を行っている。岩本 (2008: 210~211) は、「設立する」が表す事象は、「動作主の一定期間に及ぶ動作の後、ある団体が組織として存在するようになるという変化が一時点に成立する抽象的概念である」と主張している。すなわち、下の (2.49) 「設立する」の拡大事象投射構造は、(2.47) と同様、動作主の「働きかけ」( $e_2$ ) と「(団体が存在するようになる) 変化」( $e_3$ ) が同期的な構造を成していない「包括的順序部分関係」であると主張している。

(2.49) に「ている」の CRS を適用する場合、(2.47) と同様に下位事象がそれぞれ異なる事象投射構造を成しているため、CRS を下位事象間に同期的（相同的）に適用できず (2.48) の原則に違反する。そこで、CRS が適用可能となるのは、(2.49) の事象全体 ( $e_1$ ) を完了した事象 [EventX] として組み込んだ (2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造のみとなることから、「設立する」に「ている」を付加した場合、「パーフェクト」の成立が指定される。<sup>21</sup>

---

<sup>20</sup> 厳密には、(2.47) に「ている」(CRS) を適用する場合、先に強制が必要になる。具体的には、 $e_2$  では非限界化関数 (GR) を適用し限界性素性の変更（非限界化 ([+b]→[-b])）が必要である。一方で、 $e_3$  は「変化」事象であるが、「ている」(CRS) は最低限、時間項のみに適用できればよいことから、時間項への PR が適用される。すなわち、(2.47) においては、「ている」(CRS) 適用以前の強制として相変換関数を適用する段階で (2.48) の原則に違反することになり、「ている」(CRS) も当然適用できない。なお、3 章 (3.3.2 節) で論じるが、(2.47) のような「包括的順序部分関係」であっても、特定の語彙的特徴を持った相変換関数を適用する場合、下位事象間に同様の強制 (e.g. GR) を適用する必要性が生じる場合がある。その場合には、一連の強制によって下位事象間に同様の構造が作り出されることになる。

<sup>21</sup> その他に、本来的には「ている」が「進行中」(e.g. 太郎が服を破っている最中だ) を表す動詞であっても、主体性が喪失することによって、「パーフェクト」(e.g. うっかり服を破っている (森山 1988: 146)) のみが成立するようになる現象がある。岩本 (2008) は、このような現象においても、(2.48) の原則と「ている」(CRS) が適用可能な (2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造の関係によって説明している。主体性の喪失による制約は本研究とは直接関わらないことから、取り上げないことにする。当該の議論は岩本 (2008) 2 章 2.3.5 節、3 章 3.2.5 節などを参照されたい。



(筆者作例)

表 2.9 複数事象の類型

(岩本 2008: 232)

	単一期間	複数期間
単数項	多行為 (multiplicative)	反復 (iterative)
複数項	配分 (distributive)	N.A.

上の表 2.9 の「多行為」(multiplicative) は、「太郎がずっと瞬きした」のように、事態に関わる項 (太郎) が固定され、その行為が分割されない一つの期間に連続的に複数回行われるものであると岩本 (2008: 232) は定義している。「配分」(distributive) は、行為が分割されない一つの期間に複数回行われるという点では「多行為」と同様であるが、「太郎は次々に蟻を殺した」「子供たちは、次々に海に飛び込んだ」のように、複数回行われる行為に対応して、行為に関わる項の最低一つが変化していくという特徴を持つ (岩本 2008: 232)。すなわち、「太郎は次々に蟻を殺した」の場合は、同一の項「蟻 a」が何度も殺されるわけではなく、複数回行われる「殺す」という行為に対して、客体項の「蟻」が「蟻 a, 蟻 b, 蟻 c...」のように変化していく。同様に「子供たちは、次々に海に飛び込んだ」においても、同一の項「子供 a」が何度も飛び込んだわけではなく、動作主項が「子供 a, 子供 b, 子供 c...」のように「飛び込む」という行為ごとに変化している。「反復」(iterative) は、固定された項が、分割された複数の期間に同一の行為を行うものであり、「毎日、パンを食べる」「毎年海外に行く」のようなものがその例となる (岩本 2008: 232)。なお、岩本 (2008), 浜之上 (1997) によると複数項による複数期間にわたる反復は言語として表現されないという。

事象投射理論では、項に対する複数化関数 (PL: Plural) の適用によって、表 2.9 の複数事象を議論するアプローチが取られている。以下では、上記の 3 タイプの「複数事象」と複数化関数 (PL) の適用状況について確認する。まず、「電気が光っている」のように、「光る」に「ている」を付加した場合、「パーフェクト」か「複数事象」の解釈が指定される。岩本 (2008) は「電気が光る」の事象投射構造として下の (2.51) を提案している。(2.51) の 4 段目の COMP は、「光る」のような動詞が表す事象の連続的時間が、語用論的にほぼゼロに等しいと認識されることを表している (岩本 2008)。<sup>22</sup> また、(2.51) 5 段目 (左側) に表記されている [1d, +dir, +b, -i] は、事象項 (事象自体) が限界づけられていることを表している (岩本 2008)。

なお、岩本 (2008) の説明に従うと、限界性素性を最終出力に含む事象であれば、(2.51) 5 段目左側のように事象自体に対して [1d, +dir, +b, -i] を表記できるはずである。しかし、事象自体に対する限界性の表記は、複数事象の議論以外ではなされていない。本研究も、

<sup>22</sup> (2.51) と類似した事象投射構造を持つ動詞に「目撃する」「瞬きする」などがある。ただし、これらの事象は動作主性を持つことから、(2.51)1 段目の BE 関数ではなく AFF 関数で表記される。なお、AFF 関数で表記されても、「目撃する」「瞬きする」などは、事象的に「変化」を表さないので拡大事象投射構造は成さない (岩本 2008)。



れた場合、先に 4 段目で限界化を行った COMP の情報が無意味（空虚）化し、(2.43)「解釈規則（強制）による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に違反する不適格な構造になってしまう。すなわち、そのような強制無しで、「ている」(CRS)を適用できるのは、(2.51)の事象全体を完了した事象 [EventX] として組み込んだ (2.45)「パーフェクト」の事象投射構造となることから、(2.51)に「ている」(CRS)を付加した場合「パーフェクト」の解釈が指定されると説明できる。<sup>23</sup>

次に、(2.51)に「ている」(CRS)を適用した場合に複数事象の「多行為（多行為事象の状態化）」解釈 (e.g. 電気が（何度も）光っている) が成立する状況について確認する。

(2.52) 「電気が光っている」の事象投射構造（「多行為」解釈）

(岩本 2008: 236 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^\beta \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ -b, +i \end{array} \right] \\ \langle \text{PL} \rangle^\alpha \uparrow \quad \leftarrow \text{強制} \\ [1d, +dir, +b, -i] \end{array} \right] \quad \left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^\beta \uparrow \quad \leftarrow 8 \text{ 段目} \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ -b, +i \end{array} \right] \quad \leftarrow 7 \text{ 段目} \\ \langle \text{PL} \rangle^\alpha \uparrow \quad \leftarrow 6 \text{ 段目 強制} \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([t_j]) \\ \text{bdby}^-([t_i]) \\ t_j - t_i \approx 0 \end{array} \right] \\ \text{COMP} \\ \left\langle \begin{array}{l} \text{bdby}^+([t_j]) \\ \text{bdby}^-([t_i]) \\ t_j - t_i \approx 0 \end{array} \right\rangle \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \text{PR} \\ \left\langle \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle \uparrow \\ [Time0d] \end{array} \right]$$

sit BE  $\left( \begin{array}{l} +b, -i \\ \text{LIGHT} \end{array} \right), [\text{SpaceL}];$

「多行為」とは、事態に関わる項が固定され、その行為が分割されない一つの期間に連続的に複数回行われるものであると岩本 (2008: 232) は定義している。岩本 (2008) は、(2.51)の事象投射構造に「ている」(CRS)を適用した場合の「パーフェクト」解釈以外の選択肢として、上の (2.52) のような、強制としての複数化関数 (PL) の適用を提案してい

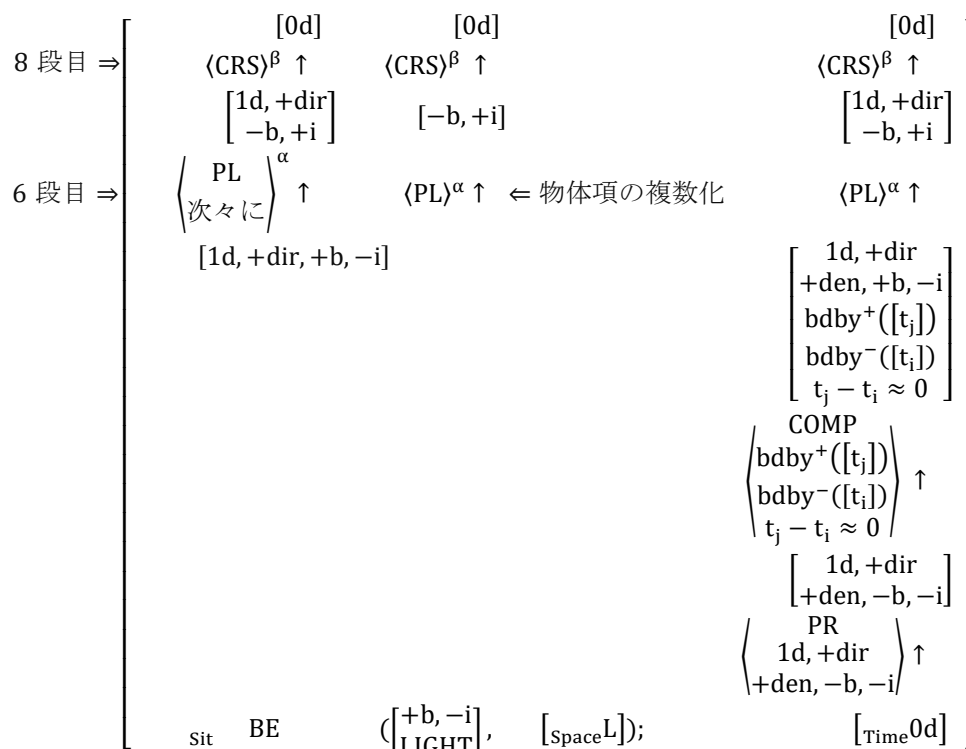
<sup>23</sup> 岩本 (2008: 236) は (2.51) に「ている」(CRS)を適用する場合、強制として非限界化関数 (GR) を適用することも論理的には不可能でないと主張している。しかし、そのような適用を認めた場合、なぜ 2.5.2 節 (2.44) のような状況では逆関数の連続適用による空虚化が起こり、(2.51) では空虚化が起こらないのかという矛盾が生じることになる。実際に岩本 (2008: 222) 自身も (2.51) と基本的に同様の構造を持つ「目撃する」などに「ている」(CRS)を適用した場合、「パーフェクト」が成立することを指摘している。このことから、(2.51)においても、強制による GR の適用は容認されるべきでないと考えられる。



る。岩本 (2008) は、表 2.9 で提示した複数事象に共通した概念特徴として、複数事象化される単一事象は、事象自体が限界づけられている必要があると指摘している。そして、PL は限界的な素性を入力とし、事象ないし個体を複数化すると同時に、非限界化を行う関数 ( $[+b, -i] \rightarrow [-b, +i]$ ) と提案されている。(2.52) では、6 段目で PL が強制として事象項と時間項に適用され、実体の構成を表す素性 ( $\pm i$ :  $\pm$ internal structure) が、単体から複数に変更 ( $[-i] \rightarrow [+i]$ ) されている。さらに、複数化に伴い、限界性素性も変更 (非限界化 ( $[+b] \rightarrow [-b]$ )) され、非限界化がなされた 7 段目には「ている」(CRS) を適用 (8 段目) できるようになる。その結果、複数化された事象を「ている」が状態化する「多行為 (多行為事象の状態化)」解釈が成立するようになる。なお、PL は、COMP の逆関数ではないため、CRS を適用するための強制として導入しても、強制による逆関数の連続適用とはならず、空虚な構造が生まれなため、(2.52) は適格な構造となる。

以上では、「電気が光る」に「ている」を適用した場合、「パーフェクト」と「多行為」解釈が指定されるメカニズムを確認したが、その他にも「次々に」のような副詞との共起によって「配分 (配分事象の状態化)」解釈も可能になる。

(2.53) 「電気が次々に光っている」の事象投射構造 (「配分」解釈)  
(岩本 2008: 237 (表記一部変更))



「配分」とは、行為が分割されない一つの期間に複数回行われるという点では「多行為」と同様であるが、複数回行われる行為に対応して、行為に関わる項の最低一つが変化していくという特徴を持つ (岩本 2008)。すなわち、「配分」解釈では、事象の数と項の数に対

応関係を持つことになり、事象投射構造は上の (2.53) のように提案されている。岩本 (2008: 237) は、6 段目で導入されている「次々に」のような副詞の概念構造に含まれる PL は、事象項と時間項への適用と同時に、義務的に他の一つの項 ((2.53) の場合 ([LIGHT], [SpaceL])) を構造保持束縛する語彙的な意味を持つと主張している。すなわち、(2.53) では、「次々に」(PL) によって、事象項と時間項において複数化がなされると同時に、光の発生源でもある“LIGHT” (電球) の項も複数化され、「配分」の事象投射構造が作り出されることになる (cf. 6 段目)。そして、(2.53) 8 段目で、時間項に適用された「ている」の CRS が事象項と物体項に並行的に適用されることによって、「ている」の「配分 (配分事象の状態化)」解釈が成立することになる。<sup>24</sup>

次に、「毒殺する」や「設立する」の拡大事象投射構造 (「包括的順序部分関係」) に「ている」(CRS) を適用した場合に、「パーフェクト」以外に、下の (2.54) のような「複数事象 (配分事象の状態化)」解釈を成立させることについて確認する。

(2.54) (=2.50)

- a. 太郎が、(次々に) 被害者を毒殺している。
- b. 太郎が、(次々に) 会社を設立している。

(筆者作例)

(2.54) のような解釈が成立する場合の拡大事象投射構造は、下の (2.55) のようになると考えられる。(2.55) は岩本 (2008: 239) が提案している「包括的順序部分関係」(風船を割っている) の「配分」解釈の議論を参考に作成したものである。(2.55) では、本来的に「変化」を表す  $e_3$  の時間項 3 段目において、 $[0d, t_j]$  の左に、 $[1d, +dir, +b, -i]$  素性が表記されている。岩本 (2008: 170) によると、変件事象が複数化される際には、1 次元的变化全体の時間構造が事象投射構造の中に表示され、 $[1d, +dir, +b, -i]$  素性を持つ事象項と構造保持束縛されるようになるという。そのため、 $e_3$  の時間項 3 段目では、他の事象投射構造とは若干異なる表記方法になっている。<sup>25</sup>

<sup>24</sup> 岩本 (2008) では、(2.53) のように、複数化される物体を表す項 ([LIGHT], [SpaceL]) の次元数が具体的に明示されていない。しかし、CRS 自体の機能としては、1~3d 実体 (動態、経路、物体) から断面 (0d) を抽出する関数とされているため (cf. 表 2.7)、仮に (2.53) の ([LIGHT], [SpaceL]) が 2d もしくは 3d の物体だとしても、CRS は物体項にも並行的に適用でき 0 次元化を行えるものここでは考えておく。下の (2.55) における「会社」の項 ([COMPANY], [Space0d]) に対する CRS の適用も同様である。

<sup>25</sup> 「設立する」「毒殺する」の場合、項となる「会社」や「被害者」は、一度事態が成立したら再度動作の影響を受けることはない。このことから、「設立する」「毒殺する」のような動詞に「ている」(CRS) を適用するために複数事象解釈を強制する場合、「次々に」のような、時間項と事象項以外にも他の一つの項を構造保持束縛する副詞 (PL) を適用するか、強制として PL を適用するにしても、そのような構造保持束縛 (時間項、事象項、他一つの項) が必須となり、複数事象では「配分」解釈のみが成立することになる (岩本



も、複数事象化することによって、相変換関数（「ている」(CRS)）を下位事象間に同期的に適用できるようになり、2.5.3節(2.48)「相変換関数分配の原則」に違反しなくなる。

以上では、「多行為」「配分」の事象投射構造について確認したが、最後に「反復（反復事象の状態化）」解釈について確認する。「反復」とは、固定された項が、分割された複数の期間に同一の行為を行うものである(岩本 2008: 232)。「反復」の事象投射構造は、下の(2.56)のように提案されている。なお、「走る」は、動作主性を伴うことから拡大事象投射構造（「包括的重複部分関係」( $[e_1 e_2 \circ_{\alpha} e_3]$ ))を成しているが(cf. 2.5.3節)，(2.56)では表記の便宜上、「動き」の事象投射構造のみを提示する。

(2.56) 「太郎は毎朝走っている」の事象投射構造（「反復」解釈）  
 (岩本 2008: 243 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^{\delta} \uparrow \\ [1d, +dir, -b, +i] \\ \left\langle \begin{array}{l} \text{PL} \\ \text{毎朝} \end{array} \right\rangle^y \uparrow \\ [1d, +dir, +b, -i] \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \end{array} \right] \\ \langle \text{COMP} \rangle^{\beta} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ \text{sit BE}([\text{TARO}], [\text{Space}0d]); \end{array} \right. \quad \left. \left[ \begin{array}{l} [0d] \\ \langle \text{CRS} \rangle^{\delta} \uparrow \\ [1d, +dir, -b, +i] \\ \langle \text{PL} \rangle^y \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \end{array} \right] \\ \langle \text{COMP} \rangle^{\beta} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{l} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{l} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ [\text{Time}0d] \end{array} \right. \begin{array}{l} \leftarrow 8 \text{ 段目} \\ \leftarrow 6 \text{ 段目} \\ \leftarrow 5 \text{ 段目} \\ \leftarrow 4 \text{ 段目 強制} \end{array} \right.$$

上でも確認したように、岩本(2008)は、複数事象化される単一事象は、事象自体が限界づけられている必要があると主張している。そして、PLは限界的な素性を入力とし、事象ないし個体を複数化すると同時に、非限界化を行う関数( $[+b, -i] \rightarrow [-b, +i]$ )と提案されている。このことから、「走る」のように非限界的な事象投射構造を持つ場合は、4段目で強制としての限界化関数(COMP)を適用し、事象の限界化( $[-b] \rightarrow [+b]$ )が必要となる(cf. 5段目)。そして、6段目において、「毎朝」という副詞に含有されるPLが適用され、事象項と時間項が複数化される。さらに、8段目の時間項に $[1d, +dir, -b]$ を入力とする「ている」(CRS)が適用され、事象項にもCRSが適用されることで、「太郎は毎朝走っている」(「反復(反復事象の状態化)」解釈)の事象投射構造が作り出される。

以上、本節では「多行為」「配分」「反復」という三つの複数事象が事象投射理論においてどのように議論されるのかを確認した。事象投射理論では、項に対する複数化関数(PL)の適用状況によって、複数事象を議論するアプローチが取られていることを確認した。次節では、事象投射理論の枠組みの最後の概観として、同一の動詞が両義的限界性を表す現象がどのように議論されるのかについて確認する。

### 2.5.5. 両義的限界性と事象投射構造

2.5.1 節では、事象が限界づけられているかどうかは、限界性素性 [±b] で表され、限界づけが終局点か始局点のいずれによるものなのかは、[bdby±] で表されることを確認した。また、2.5.2 節では、非限界的な事象であっても限界化関数 (COMP) の適用によって、外的に限界化がなされることを確認した。しかし、下の (2.57)~(2.60) のような用例では、同一の動詞が両義的限界性を表すことが知られている (Tenny 1994; Smollett 2005; 岩本 2008, 2010 など)。具体的には、(2.57)~(2.60) の例文 a (a') では、単純期間修飾句 (“for” 期間修飾句を含む) の付加が可能であり、「非限界解釈」が成立する。一方、(2.57)~(2.60) の例文 b では、稼働期間修飾句 (“in” 期間修飾句を含む) を付加することができ、「限界解釈」が成立する。本節では、(2.57)~(2.60) のような両義的限界性が事象投射理論でどのように議論されるのか確認する。<sup>26</sup>

- (2.57) a. Susan walked the Appalachian Trail for days. (Tenny 1994: 108)  
b. Susan walked the Appalachian Trail in sixty days. (ibid: 108)
- (2.58) a. 東海道を 1 か月歩いた。 (岩本 2008: 286 (筆者「た」形へ変更) )  
b. 東海道を 1 か月 {で / かかって / かけて} 歩いた。 (ibid: 286 (筆者加筆) )
- (2.59) a. Kathleen ate an apple for a couple of minutes while talking on the phone. (Smollett 2005: 50)  
a'. Kathleen ate an apple for a couple of minutes, and then she read her novel. (ibid: 50)  
b. Kathleen ate an apple in a couple of minutes. (ibid: 49)
- (2.60) a. 子供が牛丼を 5 分間食べたが、食べ終わらなかった。  
b. 子供が牛丼を 5 分間 {で / かかって / かけて} 食べた。  
(筆者作例)

岩本 (2008, 2010) は、両義的限界性を表す動詞を (2.57), (2.58) 「経路動詞」と (2.59), (2.60) 「消費動詞」に分類し、両動詞が表す事象の共通特徴として、項となる「計測経路」と「増分主題」が事象開始以前に独立して存在していることを指摘している。すなわち、(2.57), (2.58) の項 (計測経路) となる “Appalachian Trail”, 「東海道」は、「歩く (walk)」という事象が行われる経路として、事象とは独立して存在している。同様に (2.59), (2.60) の

---

<sup>26</sup> 岩本 (2008) は、二側面動詞 (奥田 1978a, b (e.g. 上がる, 伸びる) ) の両義的限界性を「自己基準変化」を表す事象投射構造とその「変化」を表す投射の回帰適用というプロセスを提案して議論している。しかし、二側面動詞においては、「変化」を表す事象投射構造への複数化関数 (PL) の適用などの観点からも分析できる可能性があり、二側面動詞独自の事象投射構造 (プロセス) を想定すべきかは、議論の余地があると考えられる。また、二側面動詞に関する議論は、本研究の研究目的とも大きく関わらないため、ここでは取り上げないことにする。当該の議論は、岩本 (2008) の 3 章 3.2.3 節と 4 章を参照されたい。

項（増分主題）となる“apple”，「牛丼」も「食べる (eat)」という事象とは独立して存在する対象物である。これらの特徴を踏まえて，岩本 (2008, 2010) は「経路動詞」「消費動詞」の事象投射構造と項である「計測経路」「増分主題」の概念構造をそれぞれ提案し，両者の単一化プロセスによって事象の限界性が指定されるという議論を行っている。

先ず，岩本 (2008, 2010) は，「計測経路」を項に取る「経路動詞」の事象投射構造を下の (2.61) のように提案している。(2.61) の経路動詞 (e.g. 歩く) は，動作主性を伴うことから 2.5.3 節 (2.46) で確認した拡大事象投射構造（「包括的重複部分関係」 $[e_1 e_2 \circ_{\alpha} e_3]$ ）を成しているが，本節では岩本 (2008, 2010) に倣い表記の便宜上，「動き」の事象投射構造のみを提示する。2.5.3 節の (2.46) でも確認したが，「歩く」「走る」などの経路動詞そのものは，非限界的な事象を表す。しかし，経路動詞においては，項を取ることによって，その限界性が両義的になる (岩本 2008, 2010)。岩本 (2008, 2010) は，(2.61) 1 段目の空間項 ([Space]) に A 指標 (A-marking (Jackendoff 1990 など)) を表記し，A 指標部分における項の単一化プロセスによって，両義的限界性を議論している。なお，(2.61) では，A 指標の右上にギリシャ文字“β”が表記されており，3 段目の空間項においても同様の“β”が表記されている。これは，A 指標部分に単一化される経路と，事象が行われる空間（経路）が一致することを示している (岩本 2008, 2010)。

(2.61) 「経路動詞」の事象投射構造 (岩本 2008: 287 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} [\beta, +dir] \Leftarrow 3 \text{ 段目} \quad \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left( \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right)^{\alpha} \uparrow \quad \left( \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right)^{\alpha} \uparrow \\ \text{sit BE}([ThingX], \left[ \begin{array}{c} \text{Space}[0d] \text{ OF } \left[ \begin{array}{c} 1d, +den \\ -b, -i \end{array} \right]_{\beta}^{\beta} \end{array} \right]); \Leftarrow 1 \text{ 段目} \quad [Time0d] \end{array} \right]$$

岩本 (2008, 2010) は，「計測経路」となる「東海道」などの概念構造を下の (2.62) のように提案しており，「東海道」という概念そのものは，限界的な素性 ([+b]) を持っていることがわかる。なお，岩本 (2008, 2010) では論じられていないが，東海道の限界性は，東海道の終点によって限界づけられると考えられることから，本研究では，限界づけを行う終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) の情報を加筆することにする（便宜上，以降では，bdby<sup>+</sup> ([LAST PART]) と表記する）。

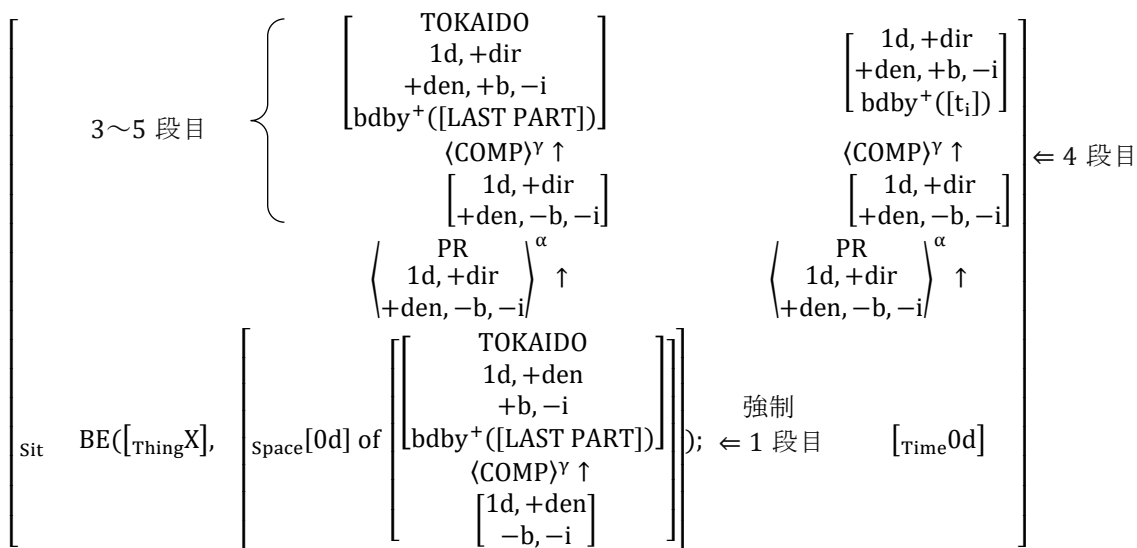
(2.62) 「計測経路」の事象投射構造 (東海道の場合) (岩本 2008: 289 (筆者一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} TOKAIDO \\ 1d \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([LAST PART OF TOKAIDO]) \end{array} \right]$$

岩本 (2008, 2010) は、元々、非限界的な事象投射構造を持つ (2.61) 経路動詞の空間項 (A 指標部分 ([-b])) に、限界的な素性 ([+b]) を持つ (2.62) 「東海道」を直接単一化することはできないと主張している。そこで、岩本 (2008) は、(2.61) の A 指標部分に (2.62) の概念構造を単一化する一つのプロセスとして、A 指標部分に強制としての限界化関数 (COMP) を適用して、A 指標部分の限界性素性の変更を行う下の (2.63) を提案している (プロセス I)。

(2.63) 「東海道を歩く」の事象投射構造 (限界解釈)

(岩本 2008: 290 (表記一部変更))



(2.63) では、元々の A 指標部分において (cf. (2.61) の 1 段目)、強制としての COMP が適用され、限界性素性の変更 (限界化 ([-b]→[+b])) が行われる。その結果、A 指標部分の限界化された素性 ([+b]) と (2.62) 「東海道」の持つ限界的な素性 ([+b]) が同一になるため、「経路動詞」の事象投射構造に「東海道」を単一化できるようになると岩本 (2008, 2010) は分析している。<sup>27</sup> また、A 指標部分に単一化される経路と、事象が行われる空間 (経路) が一致することを (2.61) A 指標右上の「β」が示していた。そのため、(2.63) の空間項 (3~5 段目) には、(2.63) 1 段目で限界化を行って「東海道」が単一化された項箇所 (元々の A 指標部分) と同様の構造が表記される。さらに、空間項と時間項は構造保持束縛されるため、(2.63) の時間項 (4 段目) においても COMP が適用され、限界化が行われる。<sup>28</sup> すなわち、(2.63) では、(2.62) 「東海道」の概念構造を単一化するにあたって、

<sup>27</sup> (2.63) の 1 段目では、A 指標の表記が無いが、A 指標は項の単一化と同時に削除されるためである (岩本 2008)。

<sup>28</sup> 岩本 (2008, 2010) による (2.63) に関連する議論では、時間項における COMP 適用後の出力に終局点の情報は明記されていないが、(2.62) における本研究による終局点情報の加筆に合わせて、(2.63) では、bdby<sup>+</sup>([LAST PART]) に対応する終局点の時間情報として





消費される対象物の項に A 指標がなされている (cf. 1 段目)。また, (2.65) の A 指標部分では, 実体が複数の個体によって構成されているかを区別する素性 ([±i]) の指定がなされていない。岩本 (2008) は, [±i] 素性は, 消費される対象物の項が単一化された際に導入されると提案している。

さらに, 岩本 (2008) は Kearns (2007), Kennedy and Levin (2008) などによるスケール構造の研究の観点を援用しながら, 「消費動詞」のようなタイプの事象投射構造では, 「属性」を表すスケールと, その属性が増分的に空間・物体に拡大するという「増分性」を表すスケールの二つのスケールが独立して存在していることを主張している。このことから, (2.65) では, 「属性スケール」として, 特徴項 ([Prop]) の 2 段目において, 「存在しなくなる」ことを表す [-IN EXISTENCE] を終局点とする「変化」([-den]) が投射されているが, 4 段目では, 「増分性スケール」として, 消費される対象物の項と時間項に非限界的([-b]) な「動き」([+den]) を表す投射がなされている。すなわち, (2.65) のような事象投射構造は, 「存在しなくなる」という特徴が, 消費される対象物 (項) に拡大するという事象を表しており, 事象自体は非限界的であると岩本 (2008, 2010) は提案している。また, (2.65) A 指標の右上には, ギリシャ文字 “γ” が表記されており, 5 段目においても同様の “γ” が表記されている。これは, A 指標部に単一化される対象物と, 消費される (「存在しなくなる」という「属性スケール」が拡大する) 対象物が同一であることを示している (岩本 2008, 2010)。

(2.65) 「消費動詞」の事象投射構造 (岩本 2008: 294 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c}
 \text{[γ]} \leftarrow 5 \text{ 段目} \\
 \left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 3d, +den \\ -b \end{array} \right)^\beta \uparrow \\
 \left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([-IN EXISTENCE]) \end{array} \right)^\alpha \uparrow \\
 \text{[Prop} 0d]; \\
 \left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b \\ \text{bdby}^+([t_i]) \end{array} \right)^\beta \uparrow \\
 \left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([t_i]) \end{array} \right)^\alpha \uparrow \\
 \text{[Time} 0d]
 \end{array} \right] \leftarrow \begin{array}{l} 4 \text{ 段目} \\ 2 \text{ 段目} \end{array}$$

$\left[ \text{Sit BE}([0d] \text{ OF } \left[ \begin{array}{c} 3d, +den \\ -b \end{array} \right]_A^\gamma), \leftarrow 1 \text{ 段目} \right]$

岩本 (2008, 2010) は, 「消費動詞」の項となる「増分主題」(e.g. リンゴ) の概念構造を下の (2.66) のように提案している。なお, (2.62) 「東海道」と同様, 岩本 (2008, 2010) では論じられていないが, (2.66) 「リンゴ」の限界性は, リンゴが無くなる終局点によって限界づけられると考えられることから, 本研究では, 限界づけを行う終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) の情報を加筆することにする。



は分析している。また、A 指標部分に単一化される対象物と、消費される（「存在しなくなる」という「属性スケール」が拡大する）対象物が同一であることを (2.65) A 指標右上の “γ” が示していた。そのため、(2.67) の対象物の項 (5~7 段目) には、(2.67) 1 段目で限界化を行って「リンゴ」が単一化された項箇所 (元々の A 指標部分) と同様の概念構造が表記される。さらに、対象物の項と時間項が構造保持束縛されるため、(2.67) の時間項 (6 段目) においても COMP が適用され、限界化が行われる (cf. 脚注 28)。すなわち、(2.67) では、(2.66) 「リンゴ」の概念構造を単一化するにあたって、「消費動詞」の事象投射構造における限界性素性を変更 (限界化) されるため、事象として「限界解釈」が成立することとなる。

一方、下の (2.68) 「プロセス II」では、A 指標部分 (cf. (2.65) の 1 段目) への (2.66) 「リンゴ」の単一化にあたって、非限界化関数 (GR) を「リンゴ」の概念構造に適用し、非限界化 ([+b]→[-b]) が行われている (cf. (2.68) の 1 段目)。その結果、A 指標部分の非限界的な素性 ([-b]) と、「リンゴ」の非限界化された素性 ([-b]) が同一になるため、「消費動詞」の事象投射構造に「リンゴ」を単一化できるようになると岩本 (2008, 2010) は分析している。そして、項である「リンゴ」を非限界化して、「消費動詞」の事象投射構造に単一化した場合、「消費動詞」が本来的に持つ非限界的な素性が保持されるため、事象として「非限界解釈」が成立することとなる。

(2.68) “eat an apple” の事象投射構造 (非限界解釈)

(岩本 2008: 296 (表記一部変更))



以上、本節では事象投射理論 (岩本 2008, 2010) において、「経路動詞」「消費動詞」が「計測経路」「増分主題」を項に取る際に生じる両義的限界性がどのように分析されるのかを確認した。本節では、「経路動詞」と「消費動詞」は動作主性を伴う事象を表すこと

から拡大事象投射構造を成すと指摘しつつも、岩本 (2008, 2010) に倣い表記の便宜上、「働きかけ」事象の表記は省略した。上でも一部述べたように、「経路動詞」と「消費動詞」自体は本来的に非限界的な事象投射構造を持つと提案されていることから、「非限界解釈」が成立する際の拡大事象投射構造は、「包括的重複部分関係」( $[e_1 e_2 \circ_{\alpha} e_3]$ )を成すと考えられる。一方で、(2.63), (2.67) のように、「限界解釈」が成立する場合においては、事象自体は「動き」を表しながらも、項 (e.g. 「東海道」「リンゴ」) の単一化によって事象全体が限界づけられることから、 $[+den, +b]$  素性が含まれる「達成」事象を表す構造になると考えられる。「達成」事象を表す拡大事象投射構造は、岩本 (2008) では「包括的終端同時重複部分関係」( $[e_1 e_2 \circ_{\downarrow} e_3]$ ) と呼ばれている。「包括的終端同時重複部分関係」の具体的な表記は、議論の便宜上 3 章 3.3.1 節で取り上げることにする。

#### 2.5.6. 2.5 節のまとめ

本節 (2.5 節) では、本研究が 3 章～5 章の議論において理論的枠組みとして援用する「事象投射理論」(岩本 2008 など) について確認した。特に 2.5.3 節では、「設立する」のような動詞に「ている」を付加した際、「パーフェクト」機能のみが成立する要因に対して、下位事象間が同期的な構造を成していない拡大事象投射構造 (「包括的順序部分関係」) に「ている」(CRS) を適用する場合、CRS を下位事象間に同様に適用できず、(2.48) 「相変換関数分配の原則」に違反する。そして、そのような状況においては、「ている」(CRS) の適用先として、(2.45) 「パーフェクト」の事象投射構造が選択されるという岩本 (2008) の分析を確認した。岩本 (2008) の観点は、2.1 節～2.4 節において、従来の観点・分析枠組みでは十分な議論を行うことができないと指摘した「設立する」と「ている」機能の関わりを説明できるだけでなく、段階複合動詞 (「V-終わる」「V-終わる」と「ている」) 機能の関わりを考察していく上でも極めて重要になると考えられる。また、事象投射理論では、様態副詞との共起による「達成」事象への移行現象や複数事象、両義的限界性などを議論するための枠組みも提案されており、アスペクトに関連する現象を幅広く分析・議論することが可能だと考えられる。

一方で、岩本 (2008) は「設立する」などの動詞は、「～間かけて」などの稼働期間修飾句を付加して、過程の長さ (稼働期間) を表すことができると主張している (cf. 2.1 節 (2.4), 2.3 節 (2.27), 2.4 節 (2.30) で引用)。しかし、現行の事象投射理論では、「稼働期間修飾句」の概念構造が明らかにされておらず、(2.49) 「設立する」などの (拡大) 事象投射構造にもどのように適用すべきか不明である。また、2.5.2 節で一部言及したように (2.43) 「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に関わる岩本 (2008) の議論にも一部再検討が必要な点がある。このことから、本研究では、4 章において段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞 (「様態副詞」「期間修飾句」) の関わりについて議論 (研究目的 (1.11b)) を行う前に、3 章において、(2.43) に関する岩本 (2008) の議論に見られる不明点を示し、当該議論の再検討と精緻化を行う。その上で、現行の事象投

射理論 (岩本 2008 など) の枠組みで明らかにされていない稼働期間修飾句 (e.g. 「～間かけて」「～間かかって」「～間で」) の概念構造 (関数) とその適用プロセスを提案する (研究目的 (1.11a))。次節では, 林 (2012), 岩本 (2015) が本節で概観した事象投射理論を援用して行っている通言語的議論について確認する。

## 2.6. 事象投射理論と通言語的議論

2.5 節では, 岩本 (2008 など) によって提案されている事象投射理論の枠組みを確認した。本節では, 林 (2012), 岩本 (2015) が行っている事象投射理論の枠組みを援用した通言語的研究を概観し, その議論に見られる問題点を指摘する。日本語では設置動詞 (e.g. 置く, 貼る) に「ている」を付加した場合, 下の (2.69) のような「維持 (維持状態)」が表される。「維持」とは「動作主が主体的に結果の保存を行っている局面」であり, 客体の変化結果の「維持」は他動詞構文によって表される (森山 1988; 岩本 2008, 2015; 須田 2010)。

(2.69) (=1.4)

- a. 署長は例によって上着をぬいで, ぬらしたタオルを机のうえにおいていた。  
(「石川達三・洒落た関係」須田 2010: 31)
- b. 李さんは自分の部屋の壁に地図をたくさん貼っている。  
(木村 2006: 55 (筆者下線) )

一方, 中国語の設置動詞 (e.g. 放 (置く), 貼 (貼る)) に「ている」と類似した特徴を持つ「着」を付加して客体変化後の局面を表す際, 一般的に動作主が具現されない自動詞的構文 (2.70) が成立し, 「維持」ではなく「結果状態」が表されると指摘されている (木村 2006; 丸尾 2007; 林 2012; 岩本 2015 など)。

(2.70) (=1.5)

- a. 门口 放 着 (一把) 雨伞。  
玄関 置く ASP 一-CL 傘  
「玄関に傘が置いてある。」 (林 2012: 61 (筆者字体・グロス変更) )
- b. 墙上 贴 着 一张 地图。  
壁上 貼る ASP 一-CL 地图  
「壁に地図が 1 枚貼ってある。」 (木村 2006: 54 (筆者グロス) )

林 (2012), 岩本 (2015) は, 「着」の付加によって, 他動詞構文ではなく自動詞的構文 (2.70) が成立する要因を, 「語彙化パターンの違い」によると指摘している。すなわち, 日本語と中国語の設置動詞においては, 日本語 (e.g. 「置く」「貼る」) と中国語 (e.g. 「放」「貼」) の間で異なる概念構造を形成しており, 中国語の設置動詞は, 「維持」を表す概念

構造を有していないと主張している。しかし、(2.70) のような文は、中国語学の研究 (刘他 2001 など) では、ある場所における人・事物の存在・消失を表す「存現文 (存現句)」と呼ばれており、存現文は、下の (2.71) のように、設置動詞以外でも他動詞の作成動詞 (e.g. 刻 (彫る), 写 (書く)) に「着」を付加して表すことができる。

(2.71) (=1.6)

石头上刻着一个字。

石上彫る ASP 一-CL 文字

「石の上には文字が1つ彫ってある。」

(于 2018: 125)

他動詞によって表される存現文では、動作主が削除されて、場所が主語 ((2.71) では「石头上」)、客体が目的語 ((2.71) では「一个字」) として具現される特徴がある (陈 1957; 刘他 2001; 于 2018)。存現文において、場所を表す語句が主語であると主張される論拠として、存現文は、下の (2.72a) のような主語における所有・存在を表す“有”構文と意味・形式的に平行的であり、置き換え可能である (刘他 2001; 于 2018)。さらに、“有”構文と存現文は (2.72b) のような複文を形成することができ、(2.72b) での場所語句 (炕上) は、“有”構文 (前節) と存現文 (後節) の主語であると考えられる (刘他 2001)。また、一般的な動詞述語文では、(2.73a) のように、動作が行われる場所を表す語は前置詞 (介詞) を伴うのに対し、存現文 (2.73b) の場所語句はそのような前置詞を伴わない。これらの特徴から、従来の研究 (陈 1957; 刘他 2001; 于 2018 など) では、存現文において場所語句は主語であることが主張されている。<sup>29</sup>

(2.72) a. 石头上有一个字。

石上ある 一-CL 字

「石の上には文字が1つある。」 (于 2018: 163 (筆者表記一部変更))

b. 炕上有一张桌子, 还铺着一领破席。

オンドル上ある 一-CL 机 そして 敷く ASP 一-CL 破れる むしろ

「オンドルの上には机が一つあり、またボロのむしろが一枚敷いてある。」

(刘他 2001: 727 (訳文は相原 (監訳) 1996・筆者グロス))

(2.73) a. 小明在桌子上写作业。

小明で机 上 書く 宿題

「小明が机で宿題をしている。」

---

<sup>29</sup> 他にも、陈 (1957) は場所語句と副詞の共起における制約などを元に、存現文での場所語句が主語であることを議論している。于 (2018) も「所有者関係節化」「再帰代名詞束縛」のテストを用いて、存現文の客体項 (目的語名詞) が倒置された主語でないことを議論している。

(ibid: 728 (訳文は相原 (監訳) 1996・筆者グロス) )

b. 桌子上 放 着 一 本 書。

机 上 置 ぐ ASP 一-CL 本

「机の上に本が一冊ある。」

(ibid: 728 (訳文は相原 (監訳) 1996・筆者グロス) )

さらに、于 (2018) は、存現文の項の具現化に対して、「語彙概念構造 (LCS) の書き換え」という観点から考察を行っている。于 (2018) の考察は極めて重要であるため、5章で改めて詳しく確認するが、于 (2018) による考察の概要を述べると、存現文では、語彙概念構造内に含まれる存在を表す LCS ([...[STATE y BE AT z]]) の場所項 (z) が、アスペクト助詞によって焦点化されることで、所有を表す LCS ([STATE z<sub>i</sub> BE WITH [STATE y BE AT z<sub>i</sub>]]) に書き換えられると指摘している。そして、場所項 (z) が客体項 (y) よりも高い位置に表されることで、場所が主語、客体が目的語として具現されるようになると考察している。<sup>30</sup> また、他動詞型の LCS では、場所が主語として具現されることで、本来的には主語として具現される動作主が削除されることを指摘している。

于 (2018) は、設置動詞が表し得る「維持」の概念構造を議論の対象としていないため、中国語設置動詞が「維持」の概念構造を有するのかは、更なる検証が必要である。しかし、于 (2018) の主張や、(2.70), (2.71) で確認した他動詞によって表される存現文に関する特徴を踏まえると、中国語の設置動詞が「維持」の概念構造（他動詞型の概念構造）を有していても、存現文の特徴（「着」の適用）により場所が主語、客体が目的語として具現されることで、「維持」の動作主が削除され具現されなくなる可能性がある。このことから、中国語の設置動詞における「維持」の概念構造の有無は、林 (2012), 岩本 (2015) が「語彙化パターンの違い」を主張する論拠として挙げている存現文 (2.70) とは異なる観点から検証する必要があると考えられる。

本研究では、5章において、中国語の設置動詞においても「(i) 「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii) 「維持」の続行が表される」「(iv) 「維持」の中止が表される」という論点を挙げ、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにする（研究目的 (1.11c)）。また、「着」を設置動詞に付加して、客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文（存現文）が成立し「結果状態」が表される要因に対して、文法形式の担う機能領域の広狭が言語間 (e.g. 英語 vs. 独語) で異なるという比較類型論 (Hawkins 1986; 堀江 2001 など)

---

<sup>30</sup> 于 (2018) が提案している LCS の書き換えは、英語の存在文 (30.i) から所有文 (30.ii) への変更の際に見られる LCS の書き換え (影山 1996) と並行的なものであることを于 (2018) が指摘している。

(30.i) A bird nest is in the tree.

(30.ii) The tree has a bird nest in it.

(影山 1996: 55)

の観点を援用して議論を行う（研究目的 (1.11d)）。次節では、先行研究に関する最後の概観として、「ている」形式以外で「パーフェクト」を表す形式として扱われてきた「た」に関する研究を概観し、残る問題点を指摘する。

## 2.7. 「た」と「パーフェクト」の関わり

1.2 節でも言及したように、下の (2.74a) 「パーフェクト」は「ている」が成立させる派生的機能として従来の研究 (工藤 1982a, b, 1995; 寺村 1984; 森山 1988; 町田 1989; 白井 2004; 岩本 2008 など) で指摘されている。また派生的機能である「パーフェクト」の特徴の一つとして、(2.74b) 「た」との交替可能性が工藤 (1995) などで指摘されてきた。

(2.74) (=1.7)

- a. 太郎はもう朝ごはんを食べている。
- b. 太郎はもう朝ごはんを食べた。

(筆者作例)

しかし、発話時以前に起こった出来事を表す「ている」と「た」の両形式間には、出来事の捉え方によってそれぞれの形式の使用可能性に違いが見られることが Inoue (1978), 井上 (2001, 2011) など指摘されている。井上 (2001) は、出来事が実現した経過 (少なくともその一端) を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約を主張している。このことから、下の (2.75a) では、発話者が間接的情報源 (「葉書」) から出来事を捉え、出来事が実現した経過を具体的に把握していないことから「た」の使用が不自然になる。一方、(2.75b) は、発話者が「種」が「人物 X」に会ったことを直接知っている場合や、「種」の行動について調査した捜査員が「種」の一連の行動を再現するような場面において容認されると井上 (2001) は主張している。すなわち、(2.75b) のように「た」が使われた場合は、「種が人物 X に会う」という出来事が実現した経過を話し手が把握しているというニュアンスになる (井上 2001)。【特徴 1】

(2.75) a. 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています (??会いました)。

(「人間の証明」) (井上 2001: 110)

b. 種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会いました。

(ibid: 111)

次に、下の (2.76) のように「(もう) た」に「パーフェクト」の否定形式である「ていない」が対応することから、「た」の「パーフェクト」機能が、工藤 (1995, 1996) などで指摘されてきた。



(2.76) (=1.9)

もう、中国に行きましたか?

いいえ、まだ行っていません。

(工藤 1995: 129)

しかし、井上 (2011) は、対応している否定形式から肯定形式の意味を逆算する議論は妥当ではないことを指摘している。そして、「た」はあくまで過去 (テンス) を表すものであるとし、「(もう) た」と「ていない」の対応は文脈による見かけ上のものだと主張している (井上 2001, 2011)。井上 (2001, 2011) は、「た」のパーフェクト性、「た」と「ていない」の対応は、当該の出来事がいつ実現してもおかしくない想定される区間 (実現想定区間) 内に発話時があると認識されている場合に生じる、現在との結びつきによる疑似的 (付随的) なものであると主張している。

(2.77) a. (朝の 8 時ごろ)

もう (すでに) 朝ごはん食べた?

いや、食べていない。 / ??いや、食べなかった。

b. (その日の夕方に)

今日、朝ごはん食べた? / ??もう (すでに) 朝ごはん食べた?

いや、食べていない。 / いや、食べなかった。

(井上 2001: 127 (筆者一部加筆) )

上の (2.77a) のように、朝の 8 時ごろに「朝ごはんを食べる」という出来事が実現することは自然である。一方、(2.77b) のように、夕方に「朝ごはんを食べる」という出来事は不自然である。すなわち、(2.77b) は、実現想定区間外であり、「もう」を使用することができなくなる (井上 2001)。さらに、「なかった」は発話時が実現想定区間の外に出なければ使用できないことから、(2.77a) は発話時が実現想定区間内にあり、出来事の実現想定と発話時を結びつけて捉えるために「ていない」の使用が必要となる。一方、(2.77b) のように発話時が実現想定区間の外にある場合は、「ていない」「なかった」の両形式の使用が可能となる。すなわち、「なかった」が実現想定区間内において使用できないという制約が、(2.76), (2.77a) のような「(もう) た」と「ていない」の対応関係を形成する要因になっていると井上 (2011) は指摘している。【特徴 II】

(2.77) の議論において、「なかった」が、なぜ実現想定区間内において使用できないのかという点が重要になるが、井上 (2011) は、上の【特徴 I】で挙げた出来事が実現した経過を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約と、【特徴 II】の「なかった」が実現想定区間内において使用できないという制約は関連していると主張している。井上 (2011) は、【特徴 I・II】は「た (なかった)」が持つ「出来事全体を

その前後を含む時間の流れの中に位置づけるという意味的性質（動的叙述性）」(井上 2011: 23) によるものだと指摘している。

井上 (2011) は「た」に見られる「動的叙述性」の根拠として、井上他 (2002) で論じられている韓国語の “*hayssta*” (「た」と多くの対応が見られる形式) との比較を挙げている。井上他 (2002), 井上 (2011) は、下の (2.78) のように、帰宅するまでの間になされた動作内容を問う場合は「た」が不自然だが、(2.79) のように「何かやった→服が泥だらけになった」という時間の流れにそった因果関係を問題にする場合には「た」が自然になると指摘している。一方、韓国語の “*hayssta*” にはそのような制約は見られず、(2.78), (2.79) どちらの状況においても使用できるという。さらに、(2.80) のように記録や痕跡はあるが実現の経過がイメージできない過去の出来事を表す場合においても、“*hayssta*” は使用できるが、「た」は使用できない (【特徴 I】と関連)。

(2.78) (夜遅く酔っぱらって帰ってきた夫に妻が)

a. こんな遅くまで、何 {#やったの / やってたの} ?

b. ile-n nuc-un sikan-kkaci, mwe {*hayss-eyo* / *ha-ko iss-ess-eyo*} ?

こんな 遅い 時間まで 何 やりました やってました

(井上他 2002: 135)

(2.79) (外に遊びにいていた子供が服を泥だらけにして帰ってきた)

あんた、何やったの?

(ibid 2002: 135)

(2.80) 甲: 乙さん、先月『対照言語学入門』という本を注文されましたよね。

乙: え? そんな本注文したっけ?

甲: (注文用ハガキを見せて) これ、乙さんの字ですよ。

乙: (ハガキを見せられたが、注文の経過を思い出せない)

本当だ。確かに先月注文してるねえ (#注文したねえ)。

*cwumwun-hayss-ney.*

注文 した 気づき

(注文した経過を思い出した)

あ、そういえば、何かそんなタイトルの本を注文したなあ。

*cwumwun-hayss-ess-ci.*

注文した (大過去) 気づき

(ibid 2002: 143)

上の (2.78)~(2.80) のような場面で見られる「た」の使用における制約は、「た」の出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づけるという意味的性質である「動的叙述性」によると井上他 (2002), 井上 (2011) は指摘している。そして、「た」の「動的叙述性」に関連して、「なかった」が実現想定区間内において使用できない要因 (【特徴 II】) も

「なかった」が、出来事が実現しなかった過程をその前後を含む時間の流れの中で位置づけ、発話時以前には出来事が実現されずに終わったことを表すためであると井上 (2011) は主張している。

「た」と「ている」の両形式間に見られる【特徴 I・II】に対する井上 (2001, 2011) の考察は示唆に富むものであるが、それらの特徴の違いを直ちに「た」と“*hayssta*”との対照によって見出された「動的叙述性」に起因させることには、問題が残ると考えられる。先ず、上で確認した (2.75) と同様に発話者が出来事の経過を把握していなくても、一定時間後に出来事を報告するような場面 (2.81) では「た」の使用が容認される。さらに、(2.81b) のように、「今わかっていることはこれだけですが、少なくとも・・・」という表現を追加しても、当該の場面を想定した場合、容認度に大きな変化は見られない。すなわち、出来事が実現した経過（少なくともその一端）を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約 (井上 2001) は、「た」の使用において絶対的な制約ではないと考えられる。

(2.81) (一定時間後に出来事を報告するような場面)

- a. 犯人はもうあの店を訪れました。
- b. 今わかっていることはこれだけですが、少なくとも犯人はもうあの店を訪れました。

(筆者作例)

次に、井上 (2001, 2011) は、「た」の否定形式である「なかった」は出来事が実現されずに終わったことが確定しなければ（実現想定区間を過ぎなければ）使えないことを指摘している。しかし、下の (2.82a) のように、発話時に出来事の実現可能性が残っている場合、すなわち、発話時が実現想定区間内に位置する場合においても「なかった」の使用が可能である。さらに、(2.82a) と同様に発話時が実現想定区間内に位置する (2.82b) においては、「なかった」の使用が (2.82a) に比べ不自然になるが、このような (2.82a) と (2.82b) の間に見られる容認度の差は「動的叙述性」という観点では説明が難しいと考えられる。

(2.82) (=1.10)

- a. A: あの店、明後日閉店らしいけど、(もう) 行った?  
B: いや、(結局) 行かなかった / 行っていない。
- b. A: あの店、来月閉店らしいけど、(もう) 行った?  
B: いや、?? (結局) 行かなかった / 行っていない。

(筆者作例)

以上のことから、本節で概観した研究の問題点として ①「パーフェクト」を表すとき

れてきた「た」の使用において、「出来事が実現した経過（少なくともその一端）を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できない」（井上 2001）という制約が主張されている。しかし、発話者が出来事の経過を把握していなくても、一定時間後に出来事を報告するような場面では「た」の使用が容認される。②「（もう）た」に「パーフェクト」の否定形式である「ていない」が対応する要因として、発話時が実現想定区間内にあると認識されている場合に「なかった」が使えないことが関係すると井上（2001, 2011）で主張されている。しかし、発話時が実現想定区間内に位置する場合においても「なかった」の使用は可能である。ただし、実現想定区間内における「なかった」の使用に関しては文脈による制約が見られる。以上の問題点に対して、本研究では 6 章において、井上（2011）が主張する「動的叙述性」とは異なる「形式」と「認識内 / 外の情報」（Shinzato 1991）の関わりの観点から、「た（なかった）」の特徴（制約）を議論する（研究目的（1.11e））。

## 2.8. 2 章のまとめ

本章では、2.1 節から 2.4 節において、「継続」vs.「瞬間」、「動き」vs.「変化」の観点、森山（1988）、中村（2001）の分析について確認し、従来の観点・分析枠組みでは、本研究の研究目的（1.11b）である段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりに対する議論を十分に行うことができないと指摘した。その後、2.5 節では、従来の観点とは異なる、事象投射構造（概念構造）と関数の適用制約によって「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりを議論するアプローチを取っている事象投射理論（岩本 2008 など）について確認した。そして、本研究への援用可能性と、現行で明らかにされていない点（稼働期間修飾句の概念構造と適用プロセス）を指摘した。2.6 節では、林（2012）、岩本（2015）による事象投射理論を援用した通言語的議論を確認した。そして、林（2012）、岩本（2015）による「存現文」を論拠とした「中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していない」という主張に対して、中国語の設置動詞における「維持」の概念構造の有無は、存現文（「着」との関わり）以外の観点から検証する必要があることを指摘した。最後に、2.7 節では、「パーフェクト」を表すとされてきた「た」に見られる制約、「た」に否定形式の「ていない」が対応する要因について、「た」と“*hayssta*”との対照によって見出された「動的叙述性」という観点から議論を行っている井上（2001, 2011）の研究を確認した。そして、「た（なかった）」に見られる諸制約を慎重に検討すると、「動的叙述性」という観点では十分な説明を行えないことを指摘した。

次章以降では、1 章 1.3 節（1.11）で提示した本研究の研究目的について議論を行っていく。3 章では、2.5.2 節（2.43）で確認した「解釈規則（強制）による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に関わる岩本（2008）の議論に見られる不明点を示し、当該議論の再検討と精緻化を行う。その上で、現行の事象投射理論（岩本 2008 など）の枠組みで明らかにさ

れていない稼働期間修飾句 (e.g. 「～間かけて」「～間かかって」「～間で」) の概念構造 (関数) とその適用プロセスを提案する (研究目的 (1.11a))。4 章では, 段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能, 副詞 (「様態副詞」「期間修飾句」) の関わりについて事象投射理論の枠組みで議論を行う (研究目的 (1.11b))。5 章では, 中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにする (研究目的 (1.11c))。さらに, 「ている」と「着」に見られる制約の違いに関して, 比較類型論の観点を援用して議論を行う (研究目的 (1.11d))。6 章では, 「動的叙述性」とは異なる「形式」と「認識内 / 外の情報」の関わりからの観点から, 「た (なかった)」に見られる特徴 (制約) を議論する (研究目的 (1.11e))。

### 3. 稼働期間修飾句と適用プロセス

本章では、研究目的 (1.11a) について議論を行う。本章では先ず、3.1 節において、2.5.2 節 (2.43) で確認した「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に関わる岩本 (2008) の議論に見られる不明点を示し、当該議論の再検討と精緻化を行う。その上で 3.2 節では、現行の事象投射理論 (岩本 2008 など) の枠組みで明らかにされていない稼働期間修飾句 (e.g. 「～間かけて」「～間かかって」「～間で」) の概念構造 (関数) とその適用プロセスを提案する。その後の 3.3 節では、本研究の提案が、アドホック的なものではなく、事象投射理論 (岩本 2008 など) による議論の一貫性という観点からも妥当なものであることを論じる。3.4 節は本章のまとめである。<sup>31</sup>

#### 3.1. 岩本 (2008) による期間修飾句に関する議論

##### 3.1.1. 相強制 (解釈規則) に関する制約の再検討と精緻化

岩本 (2008: 159~160) は、下の (3.1) において、「3 日間」のような非限界的事象の (過程) 期間を表す「単純期間修飾句」が「ゆっくり行く」という移動過程 (動作) を修飾せず、可能であるとすれば「3 日間京都でゆっくりした」という状態のみ修飾可能であることを指摘している。このような解釈は、(3.2) のように英語の “for” で表される期間修飾句の付加によっても起こることが Dölling (2014) や Pustejovsky (1995) などで指摘されており、(3.2a) では頂上での滞在 (状態)、(3.2b) では家での滞在 (状態) が表されている (# は当該動詞が一般的に成立させる解釈とは異なることを示す)。

(3.1) #太郎がゆっくり 3 日間京都に行った。 (岩本 2008: 159)

(3.2) a. #Rob ran to the summit for thirty minutes. (Dölling 2014: 208)

b. #John ran home for an hour. (Pustejovsky 1995: 74 (# は筆者による))

(3.1) に対する岩本 (2008) による具体的な議論に触れる前に、関連する議論として、2.5.1 節 (2.36) で一部触れた「移行」に関する岩本 (2008) の分析を確認する。「行く」という動詞に「ている」を付加した際、下の (3.3a) のように「結果状態」が成立するのに対し、「ゆっくり」という副詞と共起することによって (3.3b) 「進行中」が成立するようになる。これは、事象が (3.3a) 「変化」から (3.3b) 「達成」へ「移行」することによる現象である (岩本 2008)。 (3.3a, b) 間で異なる解釈が成立するようになるメカニズムは、(2.36) で確認した「達成」事象が成立するようになるものと基本的に同様である。

(3.3) a. 京都に行っている。 [結果状態] (岩本 2008: 138)

b. ゆっくり京都に行っている。 [進行中] (ibid: 138)

---

<sup>31</sup> 本章の内容は山田 (2022a) の議論に加筆・修正を加え発展させたものである。

(3.4) a. 「京都に行く」の事象投射構造 (岩本 2008: 139 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{[KYOTO]} \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{KYOTO}]) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Space0d]} \end{array} \right]; \left[ \begin{array}{c} \text{[0d, t}_i\text{]} \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{t}_i]) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{2 段目}$$

b. 「ゆっくり」の事象投射構造 (ibid: 139, 249 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Space0d]} \end{array} \right]; \left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right]$$

c. 「ゆっくり京都に行く」の事象投射構造 (ibid: 140 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{KYOTO}]) \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{KYOTO}]) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Space0d]} \end{array} \right]; \left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{t}_i]) \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([\text{t}_i]) \end{array} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[Time0d]} \end{array} \right] \leftarrow \text{3 段目}$$

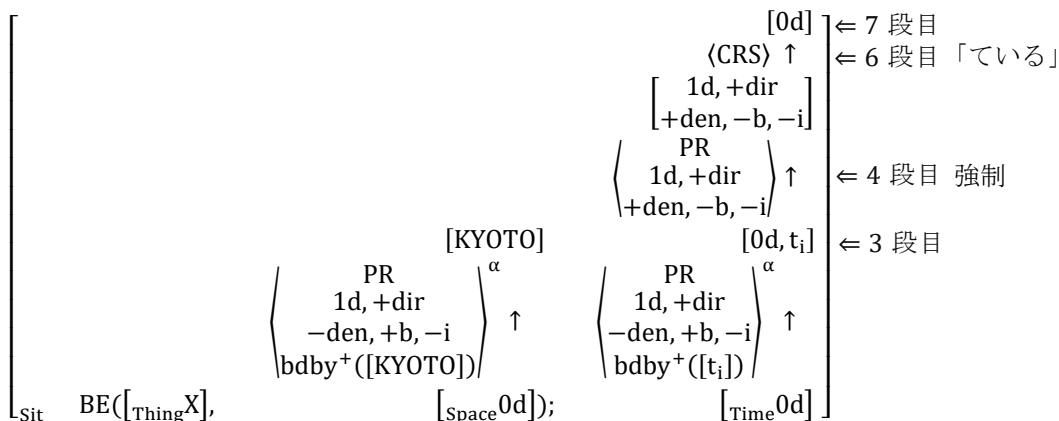
「京都に行く」という事象は、本来的には上の (3.4a) のように、2.5.1 節 (2.35), (2.36a) (e.g. 死ぬ) と同様、非連続的な「変化」([-den]) である。このことから、(3.4a) では PR による投射の段階 (cf. (3.4a) 2 段目) で終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけ ([+b]) がなされている。しかし、(3.4c) では、稠密 (連続) 性素性 ([+den]) を持つ (3.4b) 「ゆっくり」という副詞の事象投射構造と (3.4a) の単一化により、(3.4a) 「京都に行く」で指定された限界的な素性と終局点の情報 ([+b, bdby<sup>+</sup>]) を持った状態で、連続的な「動き」([+den]) を表す「達成」の事象投射構造を成すようになっている (岩本 2008 (cf. (3.4c) 3 段目))。なお、「行く」が本来的に「変化」を表すという主張の論拠として、「歩く」「走る」「泳ぐ」のような動詞は、着点を表す二格との共起に強い制約がある (e.g. ?\*太郎は京都に歩いた) のに対し、「行く」にはそのような制約が無いことが挙げられる (影山 1997; 岩本 2008)。

32

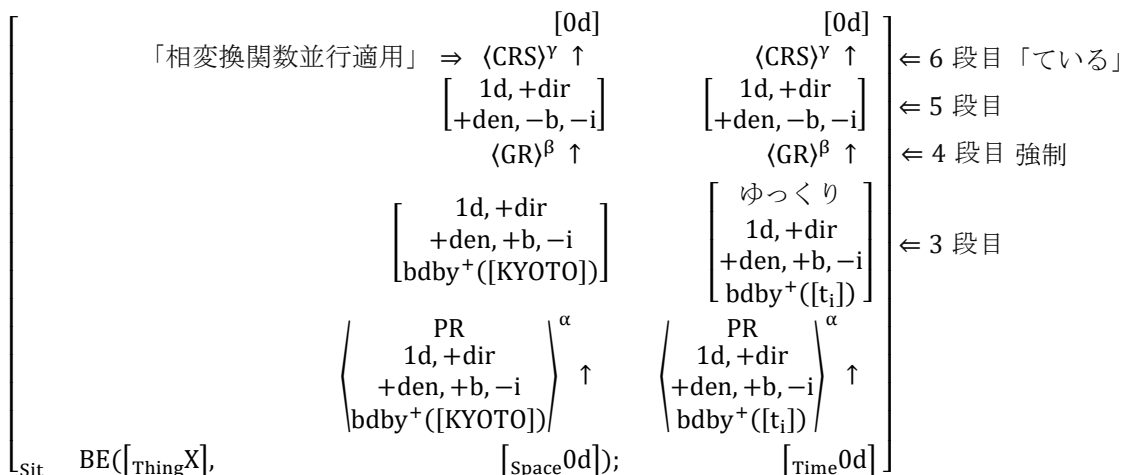
32 「歩く」, “walk” などの動詞を用いた構文には日本語と英語の間で異なる特徴が見られることが影山 (1997) で指摘されている。下の (32.ia) の「歩く」は不自然であるが、対応する英語表現 (32.ib) の “walk” は自然な表現とされる。これは、英語の場合は、概念構造レベルで “walk” と “to the door” の概念を容易に結合させることができるのに対し、日本

上述の (3.3a) のように「ゆっくり」の共起が無い場合には「ている」が「結果状態」を成立させるのに対し、(3.3b) では「ている」が「進行中」を成立させるのは、下の (3.5) のような事象投射構造によって表すことができる。

(3.5) a. 「京都に行っている」の事象投射構造（「結果状態」解釈）



b. 「ゆっくり京都に行っている」の事象投射構造（「進行中」解釈）



(3.5a) は「ゆっくり」の共起が無い状態での (3.4a) 「行く」（変化）の事象投射構造に

語では形態レベルでの操作 (cf. 歩いて行く) が必要という制約の違いだと影山 (1997) は分析している。関連して、(3.2) のような “run” による滞在解釈は、日本語の (32.ii) 「走る」では不可能であると考えられる。このような違い ((3.2) vs. (32.ii)) は、影山 (1997) が指摘する概念構造の合成における日本語と英語の間に存在する制約の差異が関係している可能性が考えられる。

- (32.i) a. ?\*彼らは入口に歩いた。 (影山 1997: 137)  
 b. They walked to the door. (ibid: 137)
- (32.ii) a. #ロブは頂上に 30 分走った。 (\*滞在解釈)  
 b. #ジョンは家に 1 時間走った。 (\*滞在解釈)





「つくり京都に行く」(移動過程)の事象投射構造(3段目)では、すでに終局点([KYOTO], [t<sub>i</sub>])によって限界づけがなされているため、「3日間」(COMP)を直接適用できない。そこで、「3日間」(COMP)を適用する方法として、(3.7)の4段目で強制によって非限界化関数(GR)を導入し限界性素性の変更(非限界化([+b]→[-b]))をする可能性が考えられる。しかし、そのように「3日間」(COMP)を適用した場合に対して、岩本(2008: 161)は下の(3.8)のように述べ、(3.6)の原則に違反すると説明している。

- (3.8) GRは、境界面を取り除くため、[bdby<sup>+</sup>([KYOTO])], [bdby<sup>+</sup>([t<sub>i</sub>])]という情報が取り消され、この部分が空虚化することになる。解釈規則は、それが適用する投射構造の一部あるいは全部を取り消すことはできないので、これらの事象投射構造は不適格となり、解釈不能となるのである。

(岩本 2008: 161)

しかし、(3.8)の岩本(2008)の説明は、議論の一貫性という点で問題があると考えられる。なぜなら、岩本(2008)はすでに確認した(3.5b)のような構造を適格なものとしているが(cf. (2.41)), (3.8)の説明に従うと、(3.5b)では、4段目でGRが適用され、境界面が取り除かれているため、(3.7)と同様、終局点([KYOTO], [t<sub>i</sub>])の情報が空虚化され、不適格な構造になるはずである。一方で、岩本(2008: 159)は、(3.6)「解釈規則(強制)による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」に対して、下の(3.9)のようにも主張している。

- (3.9) また、<解釈規則による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則>は、解釈規則による逆関数同士の連続適用を禁止する効果もある。COMP関数とGR関数は互いに逆関数である。同様にPL関数とELT関数、PR関数とCRS関数も互いに逆関数である。解釈規則によって逆関数同士が交互に適用されれば、空虚な概念構造が生じることになる。

(岩本 2008: 159)

事象投射理論(岩本 2008)が、一貫性を持って(3.5b)のような「達成」事象への「ている」(CRS)適用による「進行中」の成立を議論するためには、(3.7)の空虚化については、(3.9)の説明によってなされるべきだと考えられる。すなわち、(3.7)では、「3日間」(COMP)の適用にあたって、まず、元々終局点([KYOTO], [t<sub>i</sub>])によって限界づけられている事象([+b])に対して、強制(4段目)によって非限界化(GR: [+b]→[-b])が行われている。そして、6段目で「3日間」(COMP)が再度限界化([-b]→[+b])をするという操作が行われている。しかし、このような強制は4段目と6段目で逆関数を連続適用する構造を作り出してしまい、先に限界化を行っている終局点([KYOTO], [t<sub>i</sub>])の情報が無意味(空虚)化する(cf. (3.9)の観点)。そのような情報の無意味(空虚)化は、(3.6)の原則に違反することから、(3.7)の事象投射構造は不適格になり、「3日間」が移動過程を修飾できな

いと説明すべきだと考えられる。さらに、(3.9)の観点から情報の空虚化を説明することによって、(3.5b)では、強制による逆関数の連続適用が無いことから、適格な構造として容認されると説明できる(2.5.2節では議論の混乱を避けるため、岩本(2008)の(3.9)の主張だけを取り上げていた)。

(3.1)に関する議論に話を戻すと、(3.7)のような構造を作らずに、「3日間」(COMP)を適用するには、下の(3.10)のような状態解釈を表す事象投射構造でなければならない。(3.10)は、(3.5a)の「京都に行っている」(「結果状態」解釈)の事象投射構造に類似しており、太郎が[KYOTO]に行く(着く)という変化後の連続的時間を「3日間」(COMP)によって限界づけている。

(3.10) 「太郎がゆっくり3日間京都に行った」の事象投射構造(状態解釈)

$$\left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ 3DAY \\ \langle COMP \rangle \\ \langle 3DAY \rangle \uparrow \\ \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \\ \text{PR} \\ \langle 1d, +dir \rangle \uparrow \\ \langle +den, -b, -i \rangle \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} \text{5 段目} \\ \leftarrow \text{強制} \end{array} \right]$$

$$\left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([KYOTO]) \end{array} \right] \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+([t_i]) \end{array} \right] \uparrow$$

$$\left[ \begin{array}{c} [KYOTO] \\ [0d, t_i] \\ [sit \text{ BE}([太郎], [space 0d]); [Time 0d]] \end{array} \right]$$

以上の(3.7)~(3.10)では、「~間」などの単純期間修飾句(COMP)を適用する際の制約と、(3.1)において、「3日間京都でゆっくりした」という状態解釈のみ可能であることとの関係に対する岩本(2008)の分析を確認した。本研究は(3.7)に対する岩本(2008: 161)による(3.8)の説明は、他の議論と一貫性が無いという問題点を指摘し、(3.7)が不適格になる理由は、岩本(2008: 159)による(3.9)の説明によってなされるべきであると主張した。しかし、岩本(2008: 159)による(3.9)の説明においても精緻化が必要である。

(3.5a)で確認した「京都に行く」(到達)の事象投射構造に「ている」(CRS)を適用する際、(3.5a)の4段目で強制としてのPRが導入され、その後6段目で「ている」(CRS)が適用されている。PRとCRSは逆関数の関係として提案されていることから、岩本(2008: 159)による(3.9)の説明に従うと、(3.5a)の4段目と6段目では、強制によって逆関数を連続適用する構造が作られ、(3.5a)が不適格な構造になるはずである。(3.5a)のような構造が適格になる要因として、岩本(2008: 190)は、下の(3.11)のように述べている。

- (3.11) 0d を投射して 1d とされたものがさらに 0d 化されているため投射が空虚化されているが、適格である。ここで投射を空虚化しているのは、テイルの語彙構造としての CRS であって、解釈規則ではない。〈解釈規則による投射構造の空虚化を禁ずる原則〉は、これらの構造を排除しないのである。  
(岩本 2008: 190 (筆者下線))

(3.11) の説明では、岩本 (2008) が何を指して「空虚」と呼んでいるのかが不明になってくる。なぜなら、(3.7) の例を考えると、(3.7) ではすでに終局点 ([KYOTO], [t<sub>i</sub>]) によって限界づけられている事象投射構造に、非限界化関数 (GR) を強制として導入し、再度「3日間」(COMP) によって限界化を行っている。すなわち、(3.7) で終局点 ([KYOTO], [t<sub>i</sub>]) の情報を無意味 (空虚) なものとしているのは、「3日間」の語彙構造としての COMP であることから、(3.11) の説明に従うと、(3.7) も適格になるはずである。また、仮に (3.7) で終局点 ([KYOTO], [t<sub>i</sub>]) の情報を空虚化しているのが、4 段目の強制 (GR) だとすると、(3.5b) 4 段目の強制 (GR) が適格になる理由を説明できない (cf. (2.41))。<sup>33</sup> そこで、本研究は岩本 (2008) の議論への補足 (精緻化) として、下の (3.12) の提案を行う。さらに、(3.6) の原則に関する説明である「解釈規則 (強制) は、それが適用する事象投射構造の一部あるいは全部を取り消すことはできない。」は (3.5b) などの適格性を考える際に混乱を招くと考えられるので、本研究では、(3.12) の提案を踏まえて、(3.6) の原則を (3.13) のように捉え直すようにする。

- (3.12) 「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」  
強制によって逆関数を連続適用する構造が作られた場合において、逆関数を連続適用する直前と直後の出力で、機能的に同様の構造が作り出されている場合、情報の無意味 (空虚) 化が起こる。本研究では無意味 (空虚) な情報は余剰的な情報を指すと考える。
- (3.13) 「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」  
(本研究の提案版)

強制によって、余剰的で無意味 (空虚) な情報を作り出してはいけない。

(3.12) の提案に従うと、(3.7) では、4 段目と 6 段目における逆関数の連続適用直前 (3 段目) と直後 (7 段目) で [1d, +dir, +den, +b, -i] という素性を持った機能的に同様の構造が作り出されており、異なるのは限界化を行っている情報 ([KYOTO], [t<sub>i</sub>] vs. 3DAY) だけである。そこで、(3.12) の観点から、先に限界化を行っている [KYOTO], [t<sub>i</sub>] が余剰的 (空

---

<sup>33</sup> 他にも岩本 (2021) などでは、強制として導入される関数は一つという制約が挙げられているが、(3.7) などでも強制として導入されている関数は一つ (cf. GR) であることから、この制約も不十分である。

虚)な情報となり、(3.13)の原則に違反するようになると本研究は説明する。一方、(3.5a)では、強制によって逆関数を連続適用(4段目と6段目)しても、逆関数の連続適用直前と直後では、機能的に異なる構造になっている。(3.5a)では、逆関数の連続適用直前(3段目)の出力は、時間項と空間項の[KYOTO], [0d, t<sub>i</sub>]であるのに対し、連続適用後(7段目)は時間項の[0d]だけになっているため、(3.12)の観点からも余剰的(空虚)な情報が作り出されないと説明できる。<sup>34</sup>

以上、(3.1)において、「3日間京都でゆっくりした」という状態解釈のみ可能であることに対して、「～間」などの単純期間修飾句(COMP)を適用する際の制約によって説明できることを確認した。また、一貫性という点で不明な点が見られた岩本(2008)による情報の空虚化に関する議論について、(3.12)「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」を新たに示した。さらに、(3.13)では「解釈規則(強制)による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則」の捉え直しを行い議論の精緻化を行った。次節では、現行の事象投射理論(岩本2008)及び本節で行った提案を踏まえて稼働期間修飾句の概念構造を議論しようとする際に生じる問題点について述べる。

### 3.1.2. 稼働期間修飾句と問題点

3.1.1節では単純期間修飾句に関する議論を確認したが、3.1.1節(3.2)において“for”の代わりに“in”で表される期間修飾句を適用した場合は、頂上に到着するまでの移動過程(動作)が表される(Dölling 2014など)。日本語においても、下の(3.14)のように限界的事象の(稼働)期間を表す稼働期間修飾句を適用した場合には、移動過程が表されるようになる。<sup>35</sup>

(3.14) 太郎がゆっくり(3日/5時){間かけて/間かかって}京都に行った。

---

<sup>34</sup> 2.5.1節(2.44)では、(2.44)の4段目と6段目のように、強制によって逆関数を連続適用する構造が作り出された場合、先に存在する情報の無意味(空虚)化が起こり不適格な構造が作り出されるとだけ確認したが、本研究が行った(3.12)、(3.13)の提案は、(2.44)の議論も精緻化できる。(2.44)では、強制による逆関数の連続適用直前(3段目)と直後(7段目)で機能的に同様の構造([1d, +dir, +den, -b, -i])が作り出されている。(3.12)の提案から、そのような構造では、10分間のCOMPが余剰的(空虚)な情報になるため、(3.13)の原則に違反すると説明できる。

<sup>35</sup> 「～間かけて」「～間かかって」「～間で」は「(i)2時{間かけて/間かかって/間で/\*間}読み切った」「(ii)2時{\*間かけて/?間かかって/間で/\*間}壊れた」「(iii)2時{間かけて/間かかって/\*間で/#間}ゆっくり京都に行った」のように主体性や副詞との共起関係による適用可能性という点では異なる特徴があると考えられるが、いずれも限界点への到達を表し得る。ただし、「～間かけて」は「(iv)水曜日2時{間かけて/間/\*間かかって/\*間で}読んだが、読み終わらなかったの、木曜日続きを読んだ。」のように事象の続行(非限界解釈)も表すことができる。これらの期間修飾句に見られる細かな特徴の違いについての議論は、今後の課題とし、本研究は「～間かけて」「～間かかって」「～間で」における稼働期間修飾句としての機能に着目し議論を進める。

(筆者作例)

岩本 (2008) では、稼働期間修飾句の概念構造について議論されていない。本研究は、稼働期間修飾句も事象が限界点に達した段階で、限界点に到達するまでの全体期間を外的に規定することから、「～間」などの単純期間修飾句と同様に概念構造に限界化関数 (COMP) を含んでいると考える。実際に下の (3.15a) と (3.15b) の対比において、稼働期間修飾句を適用した場合 (3.15b) に「パーフェクト」が成立するのは、2.5.2 節 (2.44), (2.45) で確認した期間修飾句 (COMP) と「ている」(CRS) の適用制約によると考えられる (脚注 34 も参照されたい)。

- (3.15) a. ゆっくり京都に行っている。 [進行中] (岩本 2008: 138)  
b. #太郎がゆっくり (3日/5時) {間かけて/間かかって} 京都に行っている。  
(筆者作例)

しかし、稼働期間修飾句の概念構造に COMP を想定した場合、移動過程を表す (3.14) が適格な文になる理由を、現行の事象投射理論の枠組み (岩本 2008 による (3.9) の説明) 及び、本研究による提案 (3.1.1 節 (3.12), (3.13)) だけでは説明ができない。なぜなら、「～間かけて/～間かかって」などに COMP を想定して移動過程を表す事象投射構造に適用した場合、(3.7) の 4 段目、6 段目と同様、強制により逆関数を連続適用する構造となり、(3.7) での議論と同様の問題が生じるからである。この問題に対して、本研究は、次節で、稼働期間修飾句の概念構造 (関数) を提案し、限界的事象の事象投射構造への適用プロセスを論じる。

### 3.2. 期間修飾句の二つの概念構造と適用プロセス

本節では、稼働期間修飾句の概念構造 (関数) を提案した上で、3.1.2 節で言及した、現行の事象投射理論 (岩本 2008) の枠組み及び、本研究の提案 (3.1.1 節 (3.12), (3.13)) だけでは説明ができない問題点に対する考察を行う。本節の結論を先に述べると、本研究は、稼働期間修飾句の概念構造においても、単純期間修飾句と同様に限界化関数 (COMP) が含まれていることを提案する。また、単純期間修飾句と稼働期間修飾句の COMP は、修飾期間の計算に利用する終局点の時間情報を下位分類 (タイプ A vs. タイプ B) することによって区別できることを提案する。さらに、本節では、強制に伴う「情報の受け継ぎ」というプロセスを提案し、特定の条件下では、逆関数同士を連続適用して、逆関数の連続適用直前と直後に機能的に同様の構造が作り出されても、余剰的 (空虚) な情報が生まれず、(3.13) の原則にも違反しない適格な構造が成立することを論じる。なお、「～間かけて」「～間かかって」「～間で」などの個々の稼働期間修飾句には、文脈による適用制約の違いがある (cf. 脚注 35)。それらの違いは、他の理論的枠組み (クオリア構造 (Pustejovsky

1995) など) を援用するなど、今後更なる考察が必要であるが、本研究では、稼働期間修飾句の概念構造に共通して含まれていると想定する COMP とその適用プロセスについて議論する。

事象投射理論 (岩本 2008) では、「～間」のような単純期間修飾句の関数 (COMP) を下の (3.16a) の形式で表記 ((3.7) などの COMP は簡略表記) し、修飾期間は終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) の時間情報と始局点 ([bdby<sup>-</sup>]) の時間情報を利用して算出すると提案されている。

$$\begin{array}{cc}
 (3.16) \quad \text{a. 「単純期間修飾句」の COMP} & \text{b. 「稼働期間修飾句」の COMP} \\
 \left[ \begin{array}{c} [1d, +dir, +b] \\ \text{SP} \\ \text{COMP} \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{bdby}^+ \left( \begin{array}{c} [t_j] \\ \text{(TYPE A)} \end{array} \right) \\ \text{bdby}^-([t_i]) \end{array} \right\rangle \uparrow \\ t_j - t_i = \text{単純期間 (SP)} \\ [1d, +dir, -b] \\ \text{Time} \end{array} \right] \Leftrightarrow \text{2 段目} \Rightarrow \left[ \begin{array}{c} [1d, +dir, +b] \\ \text{OP} \\ \text{COMP} \\ \left\langle \begin{array}{c} \text{bdby}^+ \left( \begin{array}{c} [t_k] \\ \text{(TYPE B)} \end{array} \right) \\ \text{bdby}^-([t_i]) \end{array} \right\rangle \uparrow \\ t_k - t_i = \text{稼働期間 (OP)} \\ [1d, +dir, -b] \\ \text{Time} \end{array} \right]
 \end{array}$$

岩本 (2008 など) による、両義的限界性に対する議論 (2.5.5 節) においても確認したが、“for”, “in” で表される期間修飾句が両義的限界性を表し得る文に付加された場合、“for” が付加された下の (3.17a) は「読み切った」という限界点への到達は含意されず、「まだ読み終わっていない」という解釈が成立する。一方、“in” が付加された (3.17b) では、「読み切った」という限界点への到達が含意される (Croft 2012 など)。日本語の単純期間修飾句と稼働期間修飾句の対比にも類似した特徴が見られ、(3.17c) では、限界点への到達が含意されず、「次の日に続きを読む」という解釈が成立する。一方、(3.17d) では、限界点への到達が含意されるため、「次の日に再度読み返す」という解釈が成立する。<sup>36</sup>

- (3.17) a. I read War and Peace for a couple of hours and then fell asleep. (Croft 2012: 104)  
 b. I read War and Peace in two weeks. (ibid: 105)  
 c. 戦争と平和を 2 時間読んだ。そして、次の日また読んだ。 (筆者作例)  
 d. 戦争と平和を 2 時間 {かけて / かかって / で} 読んだ。そして、次の日また読んだ。 (筆者作例)

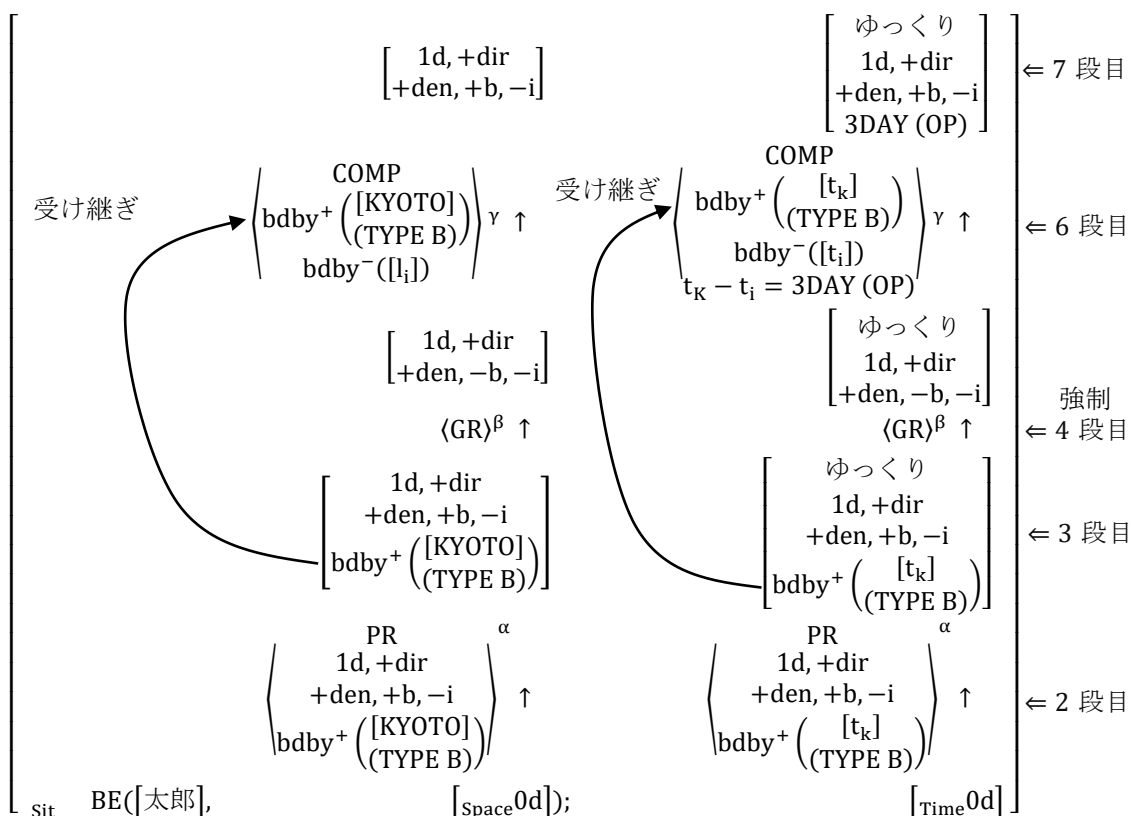
(3.17) に見られる特徴から、単純期間修飾句 (cf. (3.17c)) の修飾期間の計算に利用される終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) の時間情報は、その後も事象の継続 (続行) が可能なタイプであり、本研究では、そのような終局点を「タイプ A」([bdby<sup>+</sup>(TYPE A)]) と呼ぶ (cf. (3.16a) の 2

<sup>36</sup> 岩本 (2008, 2010) では、「読む」などの動詞は、「計測経路」(本) を項として取る「経路動詞」として扱っている (cf. 2.5.5 節)。

段目)。一方、稼働期間修飾句 (cf. (3.17d)) の修飾期間の計算に利用される終局点の時間情報は、それ以上事象の継続が無い「限界点」としての終局点に定義され、そのような終局点を「タイプ B」( $\text{[bdby}^+(\text{TYPE B})]$ ) と呼ぶ (cf. (3.16b) の 2 段目)。<sup>37</sup> さらに、両者には次のような特徴の違いがあると考えられる。タイプ A 終局点は、「限界点」以外において事象が一時的に停止した時点、もしくは、修飾期間の計算のために暫時的に終局点とみなされた点が随意的に終局点になり得る。一方、タイプ B 終局点は、事象の継続 (続行) がそれ以上行われない、唯一的な「限界点」であるという特徴の違いがあると考えられる。

(3.16) で提案した二つの期間修飾句の概念構造 (COMP) を、移動過程 (動作) を表す「ゆっくり京都に行く」の事象投射構造 (3.1.1 節 (3.4c)) に適用した場合、どのような構造になるのかを下の (3.18), (3.19) で確認していく。

(3.18) 「太郎がゆっくり 3 日間 {かけて / かかって} 京都に行った」の事象投射構造



(3.18) は、(3.4c) に稼働期間修飾句の COMP (3.16b) を適用した事象投射構造である。従来の事象投射理論 (岩本 2008) では、終局点は下位分類されていないが、(3.18) 「ゆっくり京都に行く」の終局点 ( $\text{[KYOTO]}, [t_k]$ ) はそこに到達したら、それ以上事象の進展が無いことからタイプ B (「限界点」としての終局点) である。このことから、(3.18) の事象投射構

<sup>37</sup> (3.16a) SP は単純期間 (Simple Period) の略式表記とし、(3.16b) の OP は稼働期間 (Operating Period) の略式表記とする。



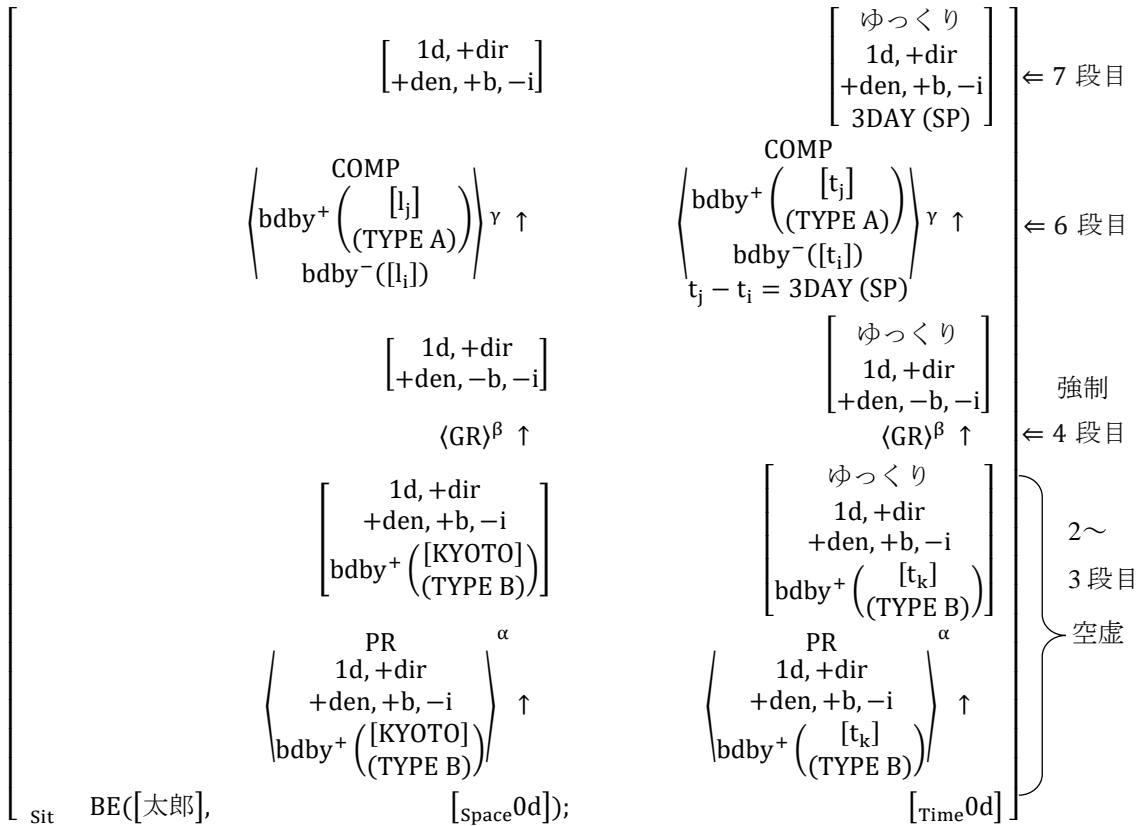
造では、タイプ B 終局点の情報 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>]) が元々存在し、それらの情報によって限界づけがなされている (cf. 2 段目)。

本研究は、稼働期間修飾句の概念構造 (3.16b) にも限界化関数 (COMP) を提案することから、(3.18) の事象投射構造に適用するためには、4 段目で強制による非限界化関数 (GR) を適用し、限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) が必要となる。しかし、従来の枠組み (岩本 (2008: 159) による (3.9) の説明) と 3.1.1 節 (3.12) で本研究が行った提案を踏まえると、そのような強制を行った場合、3.1.1 節 (3.7) と同様に、逆関数の連続適用となり、逆関数の連続適用直前 (3 段目) と直後 (7 段目) に [1d, +dir, +den, +b, -i] 素性を持った機能的に同様の構造が作り出される。その結果、先に限界化を行っている終局点 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>]) の情報が余剰的で無意味 (空虚) な情報となり (3.13) 「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則 (本研究の提案版)」に違反するはずである。この問題に対して、本研究は「情報の受け継ぎ」というプロセスを提案する。

(3.16b) で本研究が新たに提案したように、稼働期間修飾句の修飾期間の計算は、タイプ B 終局点の時間情報を利用する。そのため (3.18) では、4 段目の強制に伴い「情報の受け継ぎ」が起こり、元々存在しているタイプ B 終局点 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>]) の情報が、稼働期間修飾句の COMP (cf. 6 段目) に受け継がれ、修飾期間の計算に利用されると本研究は提案する。すなわち、(3.18) 4 段目と 6 段目で逆関数が連続適用される直前 (3 段目) と直後 (7 段目) では、[1d, +dir, +den, +b, -i] 素性を持った機能的に同様の構造が作り出されているものの、元々限界づけを行っていたタイプ B 終局点 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>]) の情報が、6 段目で限界づけを行う (3.16b) 稼働期間修飾句 (COMP) の計算に循環的に利用されることから、(3.18) においては、余剰的 (空虚) な情報が生まれず (3.13) の原則にも違反しない適格な構造になると本研究は提案する。

一方、(3.16a) で提案したように、「～間」のような単純期間修飾句の計算は、タイプ A 終局点の時間情報を利用する。下の (3.19) は、(3.4c) に単純期間修飾句の COMP (3.16a) を適用した事象投射構造である。(3.19) では、4 段目で強制 (GR: 非限界化) を行い、6 段目においてタイプ A 終局点の時間情報を利用する「～間」の COMP (3.16a) を適用して再度限界化を行った場合、先に限界づけをしているタイプ B 終局点 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>]) の情報が、修飾期間の計算に利用されない。そのため、(3.18) 6 段目のような「情報の受け継ぎ」も起こらない。その結果、(3.19) では、4 段目と 6 段目における逆関数の連続適用直前 (3 段目) と直後 (7 段目) で [1d, +dir, +den, +b, -i] 素性を持った機能的に同様の構造が作り出され、異なるのは限界化を行っている情報 ([KYOTO], [t<sub>k</sub>] vs. 3DAY (SP)) だけである (3DAY (SP) はタイプ A 終局点 [t<sub>j</sub>] の時間情報を利用して算出したもの)。すなわち、(3.12) の提案に従うと、そのような構造では、先に限界化を行っている [KYOTO], [t<sub>k</sub>] の情報が余剰的で無意味 (空虚) なものとなってしまい (3.13) の原則に違反するため、単純期間修飾句 (3.16a) は移動過程 (3.19) を修飾できないと説明できる。

(3.19) 「#太郎がゆっくり3日間京都に行った」の事象投射構造 (\*移動過程解釈)



以上、本節では、単純期間修飾句と稼働期間修飾句の概念構造（関数）の区別を提案した。そして、関数の適用における「情報の受け継ぎ」というプロセスを提案した。具体的には、事象投射構造に元々存在する情報が、後続して適用される期間修飾句 (COMP) の計算に必要な情報である場合、強制に伴い「情報の受け継ぎ」が起これり、逆関数同士を連続適用しても空虚な情報が生まれないことを主張した。本研究が行った提案は、岩本 (2008) の議論に見られる関連した不明点にも説明を与えることができると考えられる。次節では、関連する岩本 (2008) の議論に触れながら、本研究の提案の妥当性を示す。

### 3.3. 岩本 (2008) の議論と本研究の提案

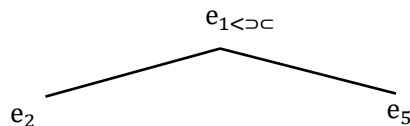
#### 3.3.1. 「維持」を表す動詞と期間修飾句の関わり

森山 (1988), 岩本 (2008) は、「使役変化動作 (過程)」と「維持」の二つの局面を同時に含意する開閉動詞や設置動詞に単純期間修飾句を付加した場合、下の (3.20) のように、「使役変化動作」を修飾することができず、結果 ((3.20a) ドアを閉めた状態, (3.20b) ポスターを貼った状態) の保存が主体的に行われる局面である「維持」(森山 1988) の修飾のみを行うことを指摘している (「複数事象」解釈を除く)。(3.20) のような現象は、(3.21) のように、英語の開閉動詞に “for” 期間修飾句を付加した場合にも見られる (Klein 2014)。

- (3.20) a. 太郎は、1時間ドアを閉めた。 (岩本 2008: 228)  
 b. 太郎は、5分間ポスターを壁に貼った。 (ibid: 228)  
 (3.21) Ira opened the window for five minutes. (Klein 2014: 961)

2.3節 (2.19) でも一部確認したが、「維持」を表す動詞の特徴として、下の (3.22) のように「ている」などを付加した場合に、同一形式で「進行中」「維持状態」という二義解釈（「パーフェクト」解釈を除く）が成立する（森山 1988; 岩本 2008）。岩本 (2008, 2015) は、(3.22) のような現象に対して、「閉める・貼る」のような「維持」を表し得る動詞の事象構造では、「使役変化動作」( $e_2$ )と「維持」( $e_5$ )が下位事象として、変化の時点を接点とした (3.23) 「隣接関係」( $\supset c$ )を成していると提案している。

- (3.22) a. 太郎は、ドアを閉めている。 [進行中 / 維持状態] (岩本 2008: 228)  
 b. 太郎は、ポスターを壁に貼っている。 [進行中 / 維持状態] (ibid: 228)  
 (3.23) 隣接関係 (岩本 2008: 230)



岩本 (2008, 2015) は、(3.23) 「隣接関係」を成す事象では、「使役変化動作」( $e_2$ )と「維持」( $e_5$ )の動作主（主語）が一致する必要があることを指摘している。例えば、上の (3.22b) では、お母さんが（太郎の部屋の）壁にポスターを貼って、その後、太郎もそのポスターを気に入ったため、引き続き太郎が、（お母さんが貼った）ポスターを壁に貼っているという解釈も可能である。この場合、「使役変化動作」の主語は「お母さん」であり、「維持」の主語は「太郎」になる。すなわち、前接事象  $e_2$ （使役変化動作）と後接事象  $e_5$ （維持）がお互いに論理的に依存していない事象関係が「隣接関係」となる（岩本 2008, 2015）。

さらに、「隣接関係」( $\supset c$ )を成す事象においては、「ている」(CRS)などの相変換関数を適用する際、前接事象  $e_2$ （使役変化動作）もしくは後接事象  $e_5$ （維持）のどちらかが削除され、一方の解釈（e.g. (3.22) 「進行中」vs. 「維持状態」）が指定されるようになることを岩本 (2008, 2015) は主張している。隣接関係を成す事象に対する相変換関数適用の特徴を踏まえて、岩本 (2015) は、2.5.3節 (2.48) で確認した「相変換関数分配の原則」（岩本 2008）の改訂（修正）を下の (3.24) のように行っている（「隣接関係」については5章でも詳しく論じる）。(3.24) 「相変換関数分配の原則（修正版）」は、前接事象と後接事象がお互いに論理的に依存していない「隣接関係」を成す事象以外では、「ている」(CRS)などの相変換関数を、拡大事象投射構造を成す下位事象間に同期（相同）的に適用する必要があることを示している。すなわち、2.5.3節で確認した「設立する」のような下位事象間

が同期的な関係を成さない拡大事象投射構造（「包括的順序部分関係」）に「ている」(CRS) を適用した場合に「パーフェクト」の成立が指定される要因は、依然として (3.24) によって説明できる。

(3.24) 「相変換関数分配の原則」(修正版)

2 つの下位事象  $e_2, e_3$  によって構成される  $e_1$  に適用する相変換関数は、 $e_2, e_3$  に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。ただし、 $e_2$  あるいは  $e_3$  の成立がもう一方に依存しない場合、その何れかを削除し、他方に相変換関数を適用することができる。(岩本 2015: 196)

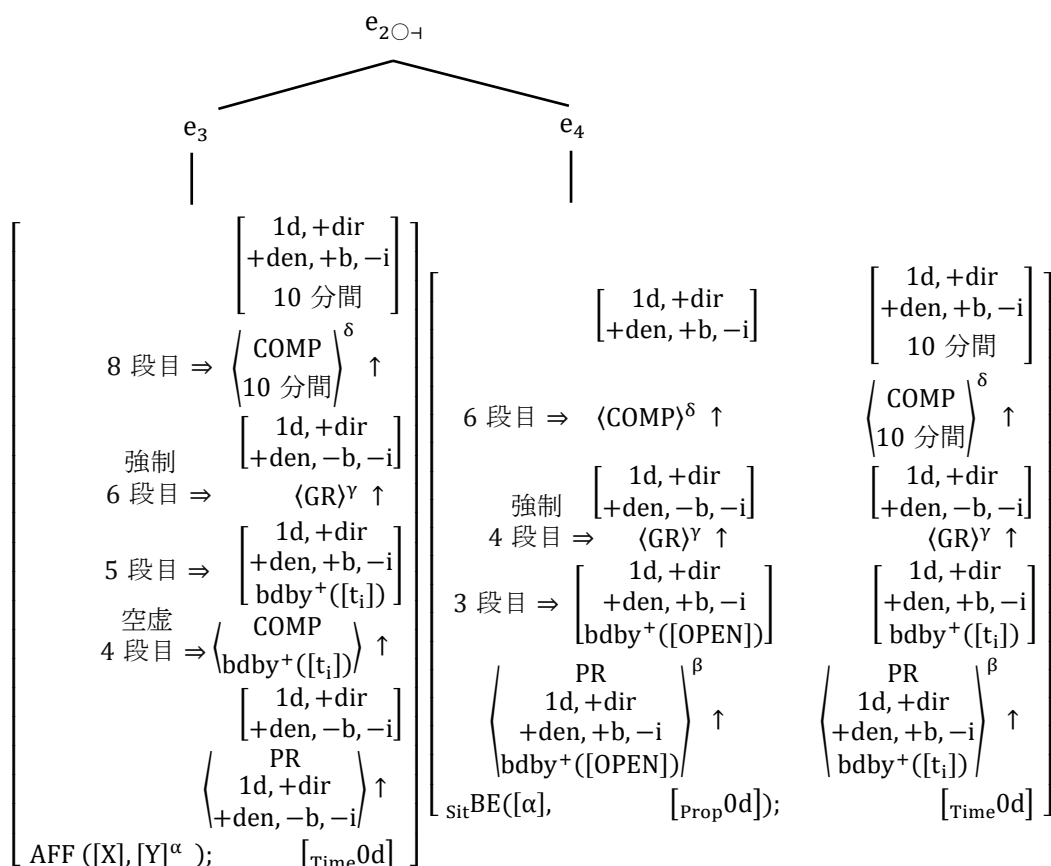
以上で確認した岩本 (2008, 2015) による「隣接関係」に関する提案は、(3.22) のように、「維持」を表し得る動詞に「ている」などのアスペクト形式(関数)を付加した場合に、同一の形式で二義性が生じるようになる要因を説明することができ、極めて重要である。しかし、「維持」を表し得る動詞への期間修飾句(単純期間修飾句)の適用に関する岩本 (2008) の議論には不明な点が見られる。

隣接関係 (3.23) を成す、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) と後接事象  $e_5$  (維持) の事象投射構造は下の (3.25a, b) のように提案されている。(3.25a) では、 $e_4$  2 段目の PR による投射の段階で、終局点 ([CLOSED],  $[t_i]$ ) によって限界づけ ([+b]) がなされている。すなわち、 $e_4$  は本来的には「変化」([-den]) を表す事象である。しかし、(3.25a)  $e_2$  のような事象は、客体が変化に至るまで、連続的且つ同時に「働きかけ」がなされる。このことから、 $e_4$  は、「働きかけ」事象 ( $e_3$ ) との事象合成により、限界的な素性と終局点の情報 ([+b, bdb<sup>+</sup>]) を持った状態で「動き」([+den]) を表すようになっている (cf.  $e_4$  の 2 段目)。また、「働きかけ」( $e_3$ ) においては、 $e_4$  の変化時によって限界づけられる構造となり、 $e_3$  の 4 段目で COMP ([bdb<sup>+</sup>( $[t_i]$ )]) による時間項の限界づけがなされている。すなわち、(3.25a) のような事象では、「変化」を表す事象 ( $e_4$ ) が「働きかけ」事象 ( $e_3$ ) と拡大事象投射構造を成すことによって、「達成」事象を成すようになっている。岩本 (2008) は (3.25a) のような拡大事象投射構造を「包括的終端同時重複部分関係」( $[e_2 e_3 \circ_{-} e_4]$ ) と呼んでいる。なお、 $e_2$  に記されている「○」は、下位事象  $e_3, e_4$  が同期的時間関係を成していることを表し、「+」は終局点によって事象が限界づけられていることを表す。



岩本 (2008) は, (3.20) で確認した, 「使役変化動作」と「維持」を同時に含意する開閉動詞や設置動詞に単純期間修飾句を付加した場合, 「使役変化動作」を修飾することができない要因を下の (3.26) の事象投射構造を提示して議論している。

(3.26) 「#10 分間開ける」の拡大事象投射構造  
 (使役変化動作の修飾としては不適格) (岩本 2008: 231 (表記一部変更))



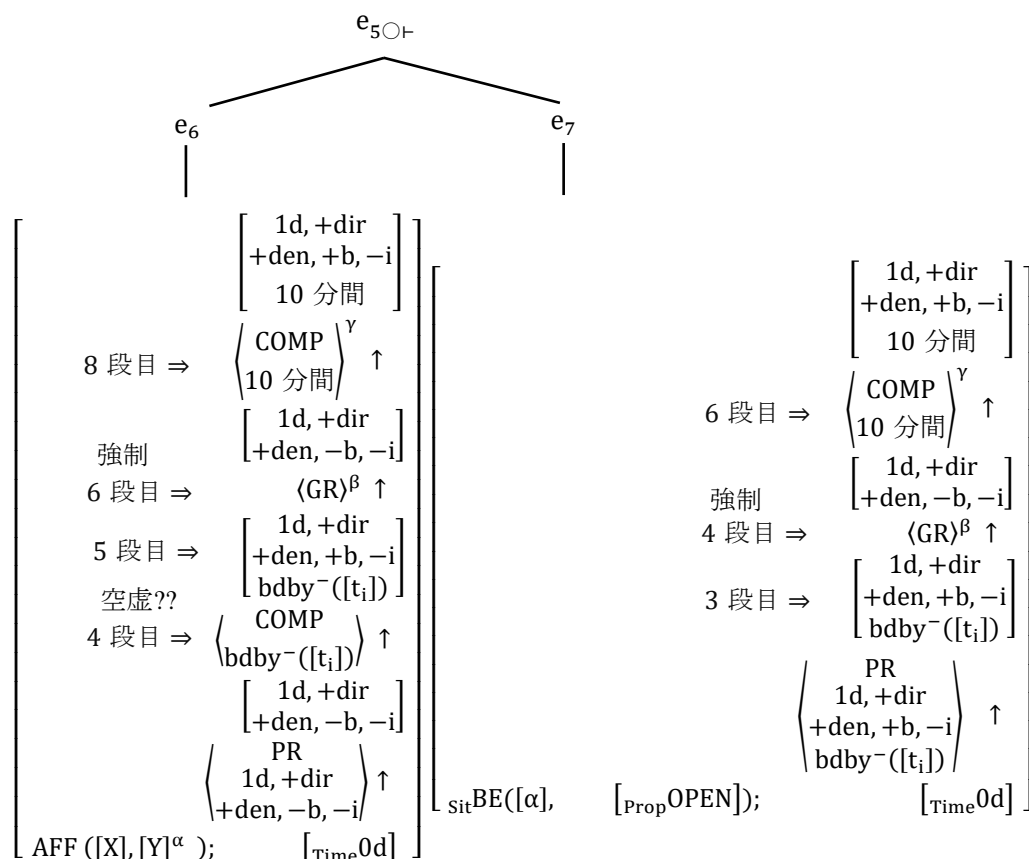
(3.26) では,  $e_3$  の 5 段目までと,  $e_4$  の 3 段目までが「開ける」(使役変化動作)の事象投射構造となる (cf. (3.25a))。「開ける」(使役変化動作)の事象投射構造では, 元々終局点 ([OPEN],  $[t_i]$ ) によって限界づけがなされており (cf.  $e_3$  の 5 段目,  $e_4$  の 3 段目), 「10 分間」の COMP を直接適用できない。そこで, 「10 分間」(COMP) を適用するために,  $e_3$  の 6 段目,  $e_4$  の 4 段目で, 強制によって非限界化関数 (GR) を導入し限界性素性の変更 (非限界化 ( $[+b] \rightarrow [-b]$ )) の可能性が考えられる。しかし, 岩本 (2008: 231) によると, そのように「10 分間」(COMP) を適用した場合, 事象合成によって,  $e_3$  の 4 段目で限界化を行っている COMP の情報が空虚化されるため, 不適格な構造になる。その結果「10 分間」は「使役変化動作」を修飾し得ず, 「維持」のみが修飾可能になるという。

岩本 (2008: 231) は, 「～間」のような単純期間修飾句 (COMP) を「維持」の事象投射構造に適用できると主張しているが, 具体的な適用プロセスは明示されていない。さらに,

(3.26) に対する岩本 (2008: 231) の説明を下の (3.27) 「維持」の事象投射構造 (cf. (3.25b)) に当てはめると, (3.27) の事象投射構造においても, 元々始局点の時間情報 ([t<sub>i</sub>]) によって限界づけがなされており (cf. e<sub>6</sub> の 5 段目, e<sub>7</sub> の 3 段目), 「10 分間」の COMP を直接適用できない。そこで, COMP を適用するためには, e<sub>6</sub> の 6 段目, e<sub>7</sub> の 4 段目で, 強制によって非限界化関数 (GR) を導入し限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) が必要になる。すなわち, (3.26) に対する岩本 (2008: 231) の説明に従うと, そのように「10 分間」(COMP) を適用した場合, e<sub>6</sub> の 4 段目で限界化を行っている COMP の情報が空虚化されるため, (3.27) も不適格な構造になるはずである。

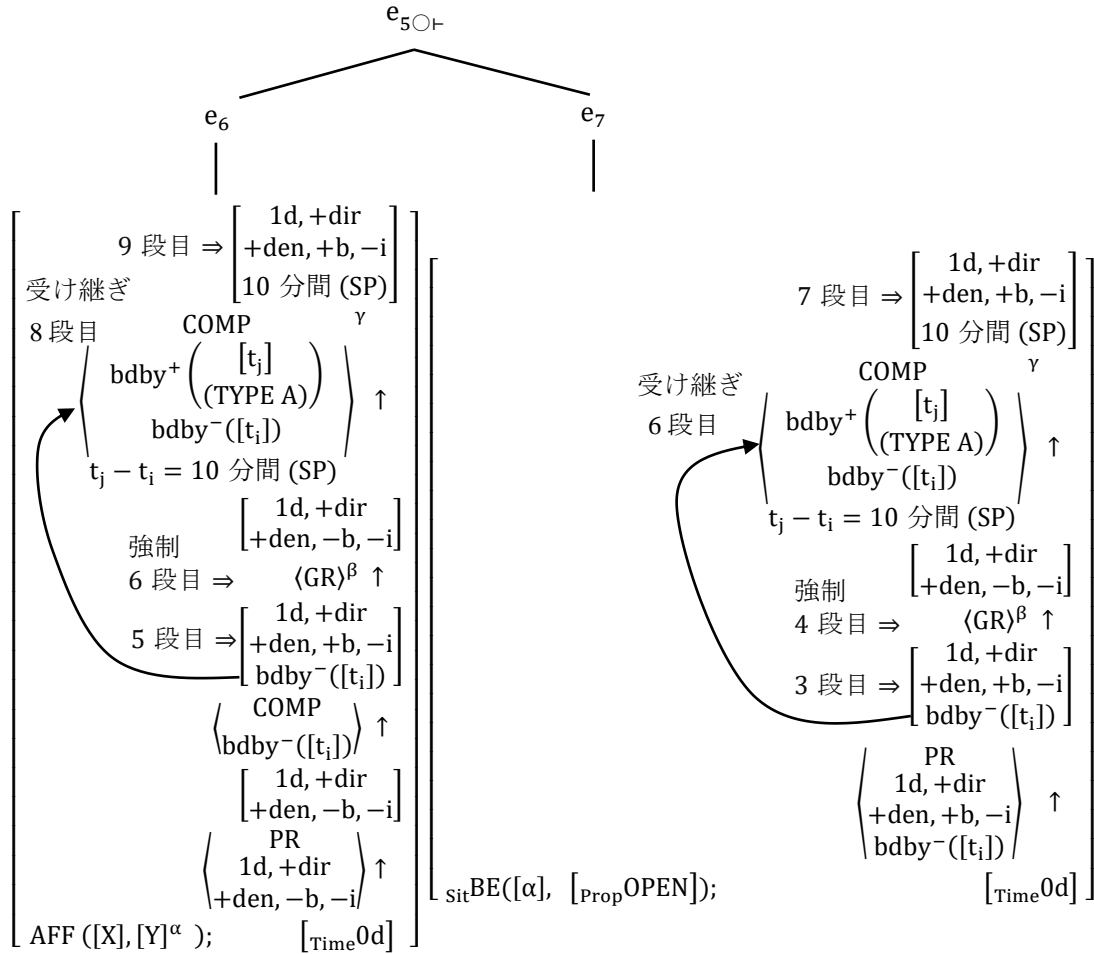
(3.27) 「10 分間開ける」の拡大事象投射構造 (維持)

[本研究の提案以前の分析枠組み版]



(3.26), (3.27) に対する岩本 (2008) の議論の不明点に対しても, 本研究が 3.1.1 節, 3.2 節で提案した (3.12), (3.13) 及び単純期間修飾句と稼働期間修飾句の概念構造 (関数) の区別 (3.16a, b), 「情報の受け継ぎ」を理論的枠組みに採用することによって, 適切な説明が可能になると考えられる。下の (3.28) には, 「維持」の事象投射構造 (cf. (3.25b)) に単純期間修飾句 (3.16a) を適用した場合の事象投射構造を提示する。

(3.28) 「10 分間開ける」の拡大事象投射構造（維持） [本研究の提案採用版]



(3.28) では、 $e_6$  と  $e_7$  で逆関数が連続適用される直前 ( $e_6$  の 5 段目、 $e_7$  の 3 段目) と直後 ( $e_6$  の 9 段目、 $e_7$  の 7 段目) では、 $[1d, +dir, +den, +b, -i]$  素性を持った機能的に同様の構造が作り出されている。しかし、「維持」の事象投射構造に元々存在している始局点の時間情報  $[t_i]$  は、「～間」(単純期間修飾句)の修飾期間を計算する際に利用されるため、強制に伴う「情報の受け継ぎ」( $e_6$  の 8 段目と  $e_7$  の 6 段目)が起こる。その結果、(3.28) においては、元々限界づけを行っていた始局点の時間情報  $[t_i]$  が循環的に利用されることから、余剰的 (空虚) な情報が生まれず (3.13) の原則にも違反しない適格な構造になると本研究は提案する。なお、「維持」の事象投射構造 (3.28) には、タイプ B 終局点 (「限界点」) の情報が存在しないことから、稼働期間修飾句 (3.16b) の修飾期間は計算不能である。そのため、「限界点」以外を随意的な終局点として規定できるタイプ A 終局点の時間情報を修飾期間の計算に利用する単純期間修飾句 (3.16a) が、「維持」を修飾することとなる。

以上、本節で確認した「維持」に付加される単純期間修飾句に関する議論からも、本研究の提案である (3.12), (3.13) 及び単純期間修飾句と稼働期間修飾句の概念構造 (関数) の区別 (3.16a, b) と「情報の受け継ぎ」が、アドホック的なものではなく、事象投射理論の



枠組みにおいて妥当なものであると考えられる。次節では、本来的に「ている」(CRS)などの相変換関数を適用できないとされる「設立する」などの拡大事象投射構造に期間修飾句の関数がどのように適用されるのかを論じる。

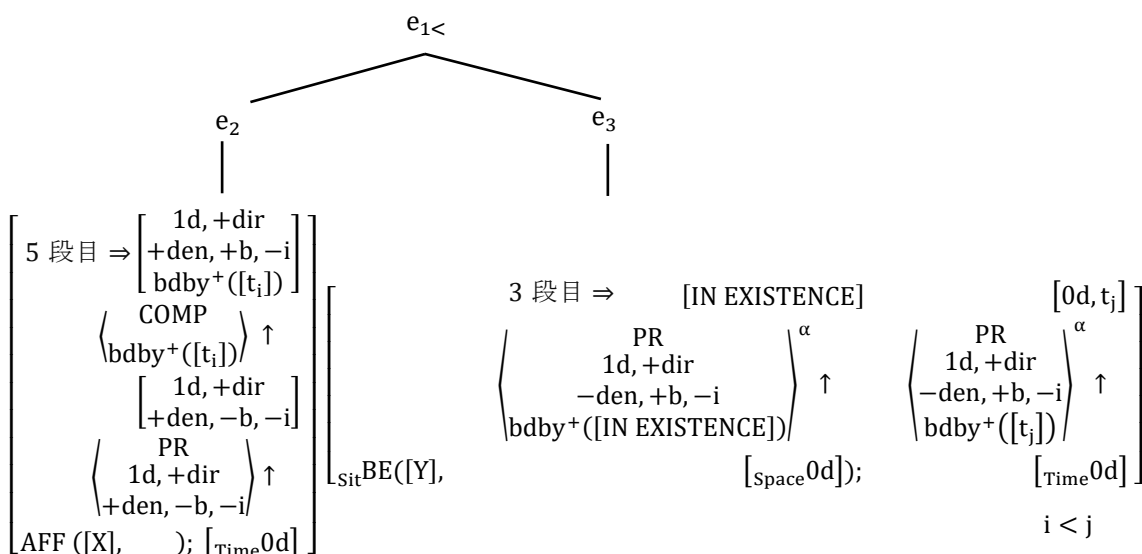
### 3.3.2. 「設立する」と期間修飾句の関わり

2.5.3 節で確認したように、「設立する」のような動詞の拡大事象投射構造は、下の(3.29)「包括的順序部分関係」を成している。2.5.3 節では、「設立する」のような動詞の拡大事象投射構造は、下位事象間が同期的な構造を成していないため、「ている」(CRS)などの相変換関数を同期的に適用できず、(2.48)や(3.24)の「相変換関数分配の原則」に違反する。そこで、CRSが適用可能となるのは、事象全体( $e_1$ )を完了した事象[Event X]として組み込んだ(2.45)「パーフェクト」の事象投射構造のみとなることから、「設立する」に「ている」を付加した場合、「パーフェクト」の成立が指定されるという岩本(2008)の分析を確認した。

(3.29) (=2.49)

「設立する」の拡大事象投射構造

(岩本 2008: 210 (表記一部変更))



しかし、岩本(2008)が指摘しているように、「設立する」には、下の(3.30)のように稼働期間修飾句を付加して、設立完了に至る過程(稼働期間)を表すことができる(cf. 2.1 節(2.4), 2.3 節(2.27), 2.4 節(2.30))。すなわち、「設立する」の拡大事象投射構造(包括的順序部分関係)に対して、「ている」(CRS)は適用できないものの、同様に相変換関数の一つとして本研究が提案している稼働期間修飾句(COMP)が適用可能な要因を説明する必要がある。本節の結論を先に述べると、本研究は、3.2 節(3.16b)で提案した稼働期間修飾句(COMP)の適用による一連の強制によって(3.30)が成立する要因を説明できると提案

する。

(3.30) 一か月 {かけて / かかって / で} 会社を設立した。 (筆者作例)

(3.16b) で提案したように、本研究は、稼働期間修飾句の概念構造にも COMP を想定している。しかし、(3.29)  $e_2$  5 段目では働きかけの終局点 ( $[t_i]$ ) によって限界づけられており、 $e_3$  3 段目では、変化の終局点 ( $[IN\ EXISTENCE]$ ,  $[0d, t_j]$ ) が出力されているため、(3.29) には、限界化関数 (COMP) を概念構造に含む稼働期間修飾句を直接適用することはできない。このような問題に関連して、岩本 (2008, 2021) が示唆的な分析を行っている。

2.5.2 節 (2.40) 「死んでいる」や 3.1.1 節 (3.5a) 「京都に行っている」で確認したように、「変化 (到達)」を表す事象投射構造に「ている」(CRS) を適用する場合、時間項だけに PR (強制) が導入される。そして、投射された時間項に「ている」(CRS) が適用されることで、変化結果が存在している連続的時間が 0 次元 (状態) 化されるという「結果状態」の構造が作り出される。一方、「ている」と類似した機能を持つと考えられている英語の進行相形式 “be ~ing” や宇和島方言の「よる」を「変化」を表す動詞 (e.g. 死ぬ, 着く) に付加した場合、「結果状態」ではなく、下の (3.31) のように変化に至る過程を表すようになり「進行中」が成立するようになる (白井 2004; 工藤 1995 など)。

(3.31) a. He is dying. (白井 2004: 76)

b. 昨日、庭でへびが死によった。水かけてやったら元気になった。

(工藤 1995: 263)

岩本 (2008, 2021) は、英語の進行相形式 “be ~ing” や宇和島方言の「よる」の概念構造を下の (3.32) のように提案している。(3.32) から、“be ~ing” や「よる」の概念構造にも CRS 関数が含まれていることがわかる。しかし、「ている」(CRS) は時間項へ適用され、空間項もしくは特徴項への適用は可能な場合だけでよいのに対し (cf. 2.5.2 節 (2.37)), (3.32) の “be ~ing” や「よる」の CRS は、時間項だけでなく、空間項 (特徴項) への適用が「義務的」とすると岩本 (2008, 2021) は想定している。

(3.32) “be~ing”, 「よる」の概念構造 (岩本 2008: 192, 258 (表記一部変更))

		[0d]		[0d]
		⟨CRS⟩ <sup>α</sup> ↑		⟨CRS⟩ <sup>α</sup> ↑
	…	[1d, +dir, -b]		[1d, +dir, -b]
Sit		Space/Property		Time

2.5.2 節 (2.35) (下の (3.33) に再掲) で確認したように、「死ぬ」のような動詞の事象投射構造では、特徴項において、[DEAD] という特徴が出力される事象投射構造になってお

り、時間項においても、[0d] から [0d] へ投射することによって非連続的な「変化」が表されている (岩本 2008 など (cf. 3 段目) )。

(3.33) (=2.35)

到達の事象投射構造 (岩本 2008: 188, 2011: 136 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{ccc}
 & & \begin{array}{c} \text{[DEAD]} \\ \text{[0d, t_i]} \end{array} \\
 & & \left\langle \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[DEAD]}) \end{array} \right\rangle^\alpha \\
 \left[ \text{Sit} \quad \text{BE}(\text{[ThingX]}, \right. & \uparrow & \left. \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ -den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[t_i]}) \end{array} \right]^\alpha \right] \\
 & & \left[ \text{Prop0d} \right]; \quad \left[ \text{Time0d} \right]
 \end{array} \right]$$

$\leftarrow$  3 段目  
 $\leftarrow$  2 段目  
 $\leftarrow$  1 段目

(3.33) の 3 段目には、変化後の終局点 ([DEAD], [0d, t<sub>i</sub>]) が出力されているため、「ている」などの概念構造に想定されている CRS は直接適用できない。「ている」(CRS) は、時間項に適用され、空間項 (特徴項) への並行適用は可能な場合だけでよいことから、(3.33) のような状況では、時間項だけに PR (強制) が適用される。そして、時間項に「ている」(CRS) が適用される「結果状態」の構造が作り出されていた。しかし、岩本 (2008, 2021) は (3.32) の “be ~ing” や「よる」の CRS は、時間項だけでなく、空間項 (特徴項) への適用も義務的であると提案していることから、時間項だけに PR (強制) を適用するだけでは不十分である。そこで、岩本 (2008, 2021) は (3.33) に “be ~ing” や「よる」の CRS を適用する方法として、下の (3.34) 4 段目のように、非限界化関数 (GR) を時間項と特徴項 (空間項) に適用し、非限界化 ([+b]→[-b]) する方法を提案している。

(3.34) “be dying”, 「死による」の事象投射構造 (「進行中」)

(岩本 2008: 192, 260 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{ccc}
 & \text{[0d]} & \text{[0d]} \\
 & \langle \text{CRS} \rangle^\gamma \uparrow & \langle \text{CRS} \rangle^\gamma \uparrow \\
 & \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] & \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\
 & \langle \text{GR} \rangle^\beta \uparrow & \langle \text{GR} \rangle^\beta \uparrow \\
 & \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[DEAD]}) \end{array} \right] & \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[t_i]}) \end{array} \right] \\
 \left[ \text{Sit} \quad \text{BE}(\text{[ThingX]}, \right. & \left. \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[DEAD]}) \end{array} \right]^\alpha \right] & \left. \left[ \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+(\text{[t_i]}) \end{array} \right]^\alpha \right] \\
 & \left[ \text{Prop0d} \right]; & \left[ \text{Time0d} \right]
 \end{array} \right]$$

$\leftarrow$  “be ~ing”, 「よる」  
 $\leftarrow$  4 段目 強制  
 $\leftarrow$  3 段目  
 強制 (素性値変更)  
 $\leftarrow$  2 段目  
 [-den]  $\Rightarrow$  [+den]

しかし、元々「変化」([-den]) を表す到達の事象投射構造 (cf. (3.33)) に非限界化関数を適用して、限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) を行った場合、そのままでは、2.5.1 節表 2.8 (下の表 3.1 に再掲) で確認した、不適格 (存在しない) とされる

$[-den, -b]$  という素性の組み合わせが作り出されてしまう。そのような素性の組み合わせは不適格であるため、(3.34) 4 段目で時間項と特徴項への非限界化関数 (GR) を適用するにあたって、(3.34) 2 段目では、稠密 (連続) 性素性の変更 ( $[-den] \rightarrow [+den]$ ) が強制によって連動的に起こり、「達成」の構造が作り出されるようになると岩本 (2008, 2021) は主張している。そして「達成」の構造に “be ~ing” や「よる」の CRS が適用されることで「進行中」が成立するようになる。

表 3.1 (=表 2.8) 事象タイプと素性の組み合わせ (岩本 2021: 192 を参考に作成)

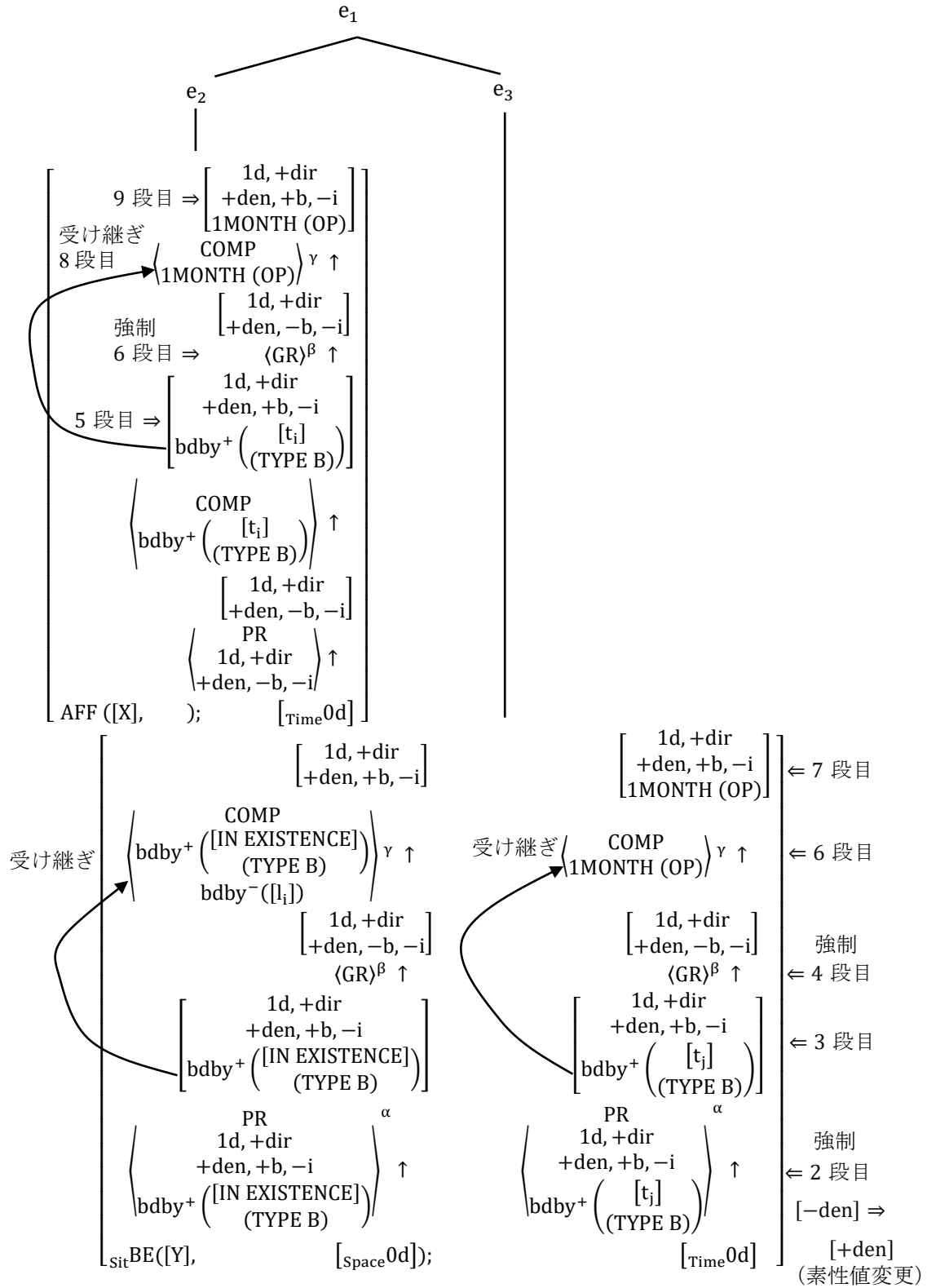
事象タイプ	素性の組み合わせ
「推進 (動き)」	$[+den, -b]$
「変化 (到達)」	$[-den, +b]$
「達成」	$[+den, +b]$
※存在しない	$[-den, -b]$

以上の (3.34) に対する岩本 (2008, 2021) の議論は、下の (3.35) のように規則としてまとめることができる。

- (3.35) 「到達 (変化)」の事象投射構造に非限界化関数を適用する必要がある場合、不適格とされる  $[-den, -b]$  という素性の組み合わせを作り出さないために、稠密 (連続) 性素性の変更 ( $[-den] \rightarrow [+den]$ ) が強制によって起こる。

以上で確認した岩本 (2008, 2021) の議論を踏まえて、(3.29) 「設立する」に「ている」(CRS) は適用できないのに対し、稼働期間修飾句の COMP はなぜ適用できるのかという議論に話を戻す。(3.29) の下位事象  $e_3$  を限界づけている終局点 ( $[IN\ EXISTENCE]$ ,  $[t_j]$ ) は設立 (変化) 完了以降、それ以上事象の進展が無いことからタイプ B (「限界点」としての) 終局点である。さらに、「設立する」のような包括的順序部分関係を成す拡大事象投射構造は、「働きかけ」( $e_2$ ) 後に「変化」( $e_3$ ) が成立するという、下位事象間が同期的関係を成しておらず、「働きかけ」( $e_2$ ) と「変化」( $e_3$ ) では個々に異なる終局点を持っている特徴がある。すなわち、ひとたび「変化」( $e_3$ ) の成立に必要な「働きかけ」( $e_2$ ) が成立すれば、「働きかけ」はそれ以上進展しないことから、(3.29) の「働きかけ」( $e_2$ ) で限界づけを行っている終局点 ( $[t_i]$ ) もタイプ B であるところでは考える。タイプ B の情報は下の (3.36) で反映させている。

(3.36) 「一か月 {かけて / かかって / で} 会社を設立する」の拡大事象投射構造



稼働期間修飾句の COMP は上の (3.36) の  $e_2$  と  $e_3$  に同期的に適用される必要があるが、稼働期間修飾句 (COMP) を (3.36) の  $e_2$  と  $e_3$  に同期的に適用するには、先ず強制としての

非限界化関数 (GR) を  $e_2$  の 6 段目と  $e_3$  の 4 段目に適用して限界性素性の変更 (非限界化 ( $[+b] \rightarrow [-b]$ )) を行う必要がある。(3.16b) で提案したように、 $e_2$  と  $e_3$  で元々限界づけを行っている、タイプ B 終局点の情報 ( $e_2$  の  $[t_i]$ ,  $e_3$  の [IN EXISTENCE],  $[t_j]$ ) は、稼働期間修飾句の修飾期間の計算に利用されることから、(3.36) では、 $e_2$  の 6 段目と  $e_3$  の 4 段目の強制 (GR) に伴い「情報の受け継ぎ」が起こり、タイプ B 終局点の情報が稼働期間修飾句の COMP (cf.  $e_2$  の 8 段目と  $e_3$  の 6 段目) に受け継がれる。さらに、 $e_3$  4 段目での GR の適用と同時に、元々「変化」を表す (3.36)  $e_3$  2 段目では、(3.35) の規則から稠密 (連続) 性素性の変更 ( $[-den] \rightarrow [+den]$ ) が強制によって連動的に起こる。

稼働期間修飾句 (COMP) の適用とそれに伴う一連の強制の結果、 $e_2$  と  $e_3$  で逆関数が連続適用される直前 ( $e_2$  の 5 段目、 $e_3$  の 3 段目) と直後 ( $e_2$  の 9 段目、 $e_3$  の 7 段目) では、 $[1d, +dir, +den, +b, -i]$  素性を持った機能的に同様の構造が作り出されている。しかし、 $e_2$ ,  $e_3$  で元々限界づけを行っていた終局点の情報 ( $e_2$  の  $[t_i]$ ,  $e_3$  の [IN EXISTENCE],  $[t_j]$ ) は「情報の受け継ぎ」によって循環的に利用されることから、(3.36) においては、余剰的 (空虚) な情報が生まれず、(3.13) 「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則 (本研究の提案版)」にも違反しない適格な構造になると本研究は提案する。

(3.36) では、表記の便宜上、簡略表記によって稼働期間修飾句の COMP を示したが、(3.36) の稼働期間修飾句の COMP 内の計算は下の (3.37) のようになると考える。(3.37) の  $(t_i - t_h)$  は、(3.36)  $e_2$  で限界づけをしている終局点の時間情報  $[t_i]$  を利用して「働きかけ」( $e_2$ ) 事象の稼働期間を計算している ( $[t_h]$  は  $e_1$  事象全体の始局点と考える)。そして、 $(t_j - t_i)$  は、 $e_3$  の終局点の時間情報  $[t_j]$  と  $e_2$  の終局点の時間情報  $[t_i]$  を利用して、「働きかけ」( $e_2$ ) 終了から「変化」( $e_3$ ) 成立に至る稼働期間を計算している。そして、それぞれの稼働期間の合計が、(3.36)  $e_1$  全体の稼働期間となる。

$$(3.37) \quad \langle \text{COMP} \mid (t_i - t_h) + (t_j - t_i) = 1\text{MONTH (OP)} \rangle$$

以上、(3.29) 「設立する」の事象投射構造に (3.16b) 稼働期間修飾句の COMP を適用する際に、(3.36) では、 $e_2$  と  $e_3$  において一連の強制が起こることを提案した。そして、 $e_2$  と  $e_3$  間で (3.24) 「相変換関数分配の原則」にも違反しない同期的な構造が作り出されることを提案した。さらに、稼働期間修飾句の COMP が利用する情報の性質から、(3.36) では「情報の受け継ぎ」が起こり、余剰的 (空虚) な情報が生まれないことから、(3.36) は (3.13) の原則にも違反しない適格な構造になると本研究は提案した。なお、単純期間修飾句 (3.16a) を「設立する」の拡大事象投射構造に適用できない理由は、「設立する」を本来的に限界づけている終局点のタイプによるもので、3.2 節 (3.19) と同様の理由である。概要だけ述べると、(3.29) 「設立する」に強制 (GR: 非限界化) を行い、タイプ A 終局点の時間情報を利用する「～間」の COMP (3.16a) を適用して再度限界化を行った場合、 $e_2$ ,  $e_3$  で元々限界づけを行っていたタイプ B 終局点の情報 ( $e_2$  の  $[t_i]$ ,  $e_3$  の [IN EXISTENCE],



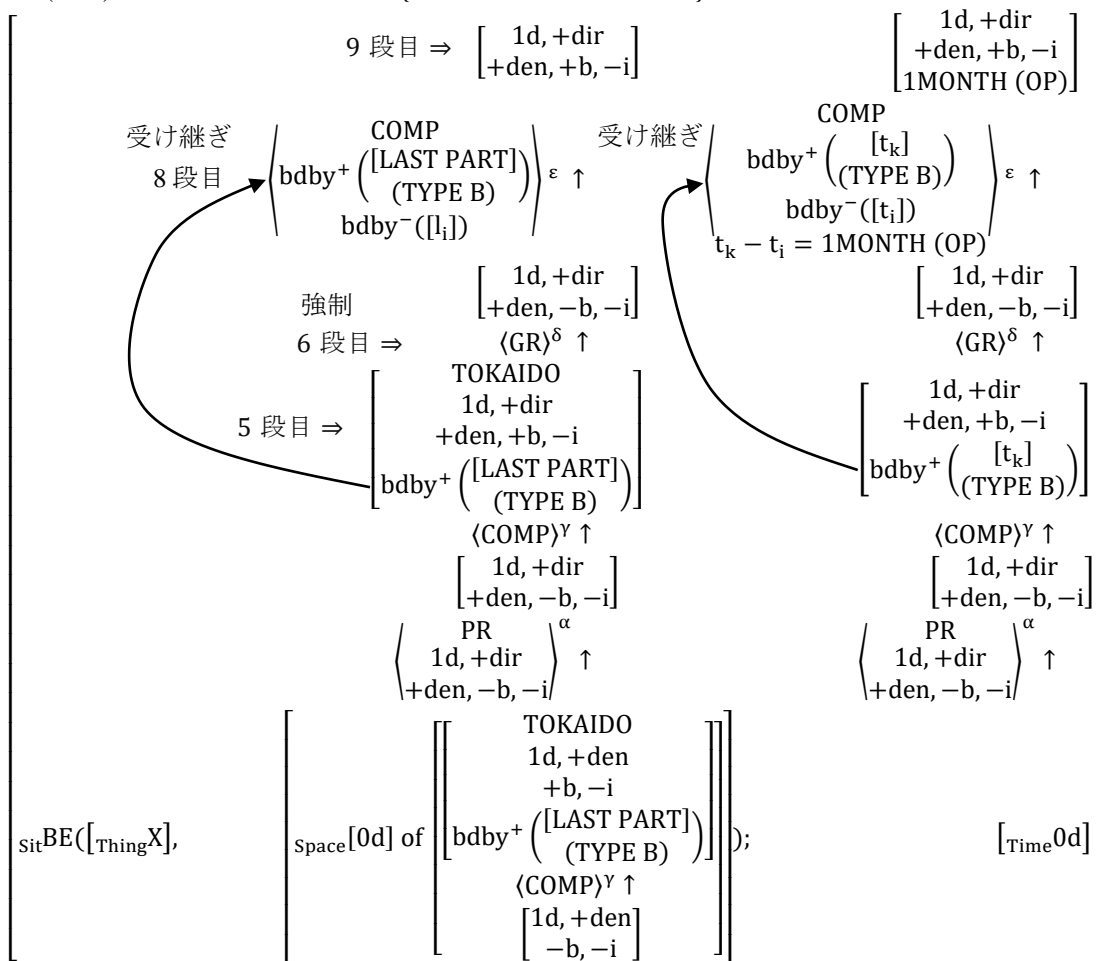
(3.39) 「計測経路」の事象投射構造（東海道の場合）

$$\left[ \begin{array}{c} \text{TOKAIDO} \\ 1d \\ +den, +b, -i \\ \text{bdby}^+ \left( \begin{array}{c} [\text{LAST PART OF TOKAIDO}] \\ (\text{TYPE B}) \end{array} \right) \end{array} \right]$$

2.5.5 節では、(3.38)「経路動詞」の事象投射構造における A 指標部分への項の単一化にあたって、(3.38)「経路動詞」側（A 指標部分）の限界化を行い、(3.39)「計測経路」を単一化する「プロセス I」と、(3.39)「計測経路」側の非限界化を行い(3.38)「経路動詞」（A 指標部分）へ単一化させる「プロセス II」が提案されていることを確認した。「プロセス I」では、「経路動詞」の事象投射構造における限界性素性の変更（限界化（[-b]→[+b]））され「限界解釈」となる。一方、「プロセス II」では、「経路動詞」の事象投射構造が本来的に持つ非限界的な素性（[-b]）が保持され「非限界解釈」となることを確認した。

以下では、「限界解釈」と「非限界解釈」が成立する際の「経路動詞」の事象投射構造に期間修飾句の COMP (3.16a, b) がどのように適用されるかを論じる。

(3.40) 「東海道を1か月{で/かかって/かけて}歩いた」の事象投射構造





上の (3.40) の 5 段目までが 2.5.5 節 (2.63) 「東海道を歩く (限界解釈)」の事象投射構造と同様の構造になる。(3.40) では、「経路動詞」側 (A 指標部分) の限界化を行って (3.39) 「東海道」の概念構造を単一化 (「プロセス I」) したため、事象全体が限界づけられた構造 (限界解釈) となる。また、(3.40) で限界づけを行っているのは、タイプ B 終局点 ([LAST PART], [t<sub>k</sub>]) である。<sup>38</sup>

稼働期間修飾句の COMP をすでに限界づけられている (3.40) に適用するためには、強制 (GR) によって限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) を先ず行う必要がある。(3.16b) で提案したように、「～間かかって」のような稼働期間修飾句の修飾期間の計算は、タイプ B 終局点の時間情報を利用する。そのため (3.40) では、6 段目の強制 (GR) に伴い「情報の受け継ぎ」が起こり、(3.40) で元々限界づけを行っているタイプ B 終局点 ([LAST PART], [t<sub>k</sub>]) の情報が、稼働期間修飾句の COMP (cf. 8 段目) に受け継がれ、修飾期間の計算に利用される。その結果、(3.40) 6 段目と 8 段目で逆関数が連続適用される直前 (5 段目) と直後 (9 段目) では、[1d, +dir, +den, +b, -i] 素性を持った機能的に同様の構造が作り出されているものの、5 段目で限界づけを行っていたタイプ B 終局点の情報 ([LAST PART], [t<sub>k</sub>]) は循環的に利用され、余剰的 (空虚) な情報も生まれないことから、(3.40) は (3.13) の原則にも違反しない適格な構造になると本研究は提案する。

次に、下の (3.41) では、項である「計測経路」側の非限界化を行って「経路動詞」へ単一化 (プロセス II) した事象投射構造 (非限界解釈) に期間修飾句をどのように適用するのかを示す。(3.41) の 3 段目までが 2.5.5 節 (2.64) 「東海道を歩く (非限界解釈)」の事象投射構造と同様の構造になる。

(3.41) では、A 指標部分へ (3.39) 「東海道」を単一化するにあたって、「東海道」の概念構造に GR を適用し、非限界化 ([+b]→[-b]) が行われている (cf. (3.41) の 1 段目)。すなわち、(3.41) では、「東海道」の概念構造を「経路動詞」の事象投射構造に単一化する際、(3.39) 「東海道」の概念構造で限界づけを行っていたタイプ B 終局点 ([LAST PART]) の情報も取り除かれる。そして、非限界化された「東海道」の概念構造が、「経路動詞」の事象投射構造に単一化されることから、(3.41) の事象投射構造内 (非限界解釈) には、タイプ B 終局点の情報が存在しなくなる。その結果、修飾期間の計算にタイプ B 終局点 (「限界点」) の情報を利用する (3.16b) 稼働期間修飾句の COMP は (3.41) に適用できない。一方、「限界点」以外を随意的な終局点として規定できるタイプ A 終局点の時間情報を修飾期間の計算に利用する (3.16a) 単純期間修飾句の COMP は、(3.41) においても修飾期間を

<sup>38</sup> (3.40) では表記の便宜上、「働きかけ」事象の表記は行わないが、(3.40) の拡大事象投射構造は、限界的な素性 ([+b]) を持ちつつも「動き」 ([+den]) を表す (3.25a) 「包括的終端同時重複部分関係」 ([e<sub>1</sub>e<sub>2</sub>○<sub>1</sub>e<sub>3</sub>]) と基本的に同様のものとして考えられる。また、(3.41) においても、「働きかけ」事象の表記は行わないが非限界解釈が成立する際には、「経路動詞」の元々の構造が保持されることから、拡大事象投射構造は、「包括的重複部分関係」 ([e<sub>1</sub>e<sub>2</sub>○<sub>α</sub>e<sub>3</sub>]) を成すと考える (cf. 2.5.5 節)。



セスを議論した。本研究は、稼働期間修飾句の概念構造においても、単純期間修飾句と同様に限界化関数 (COMP) が含まれていることを提案した。そして、単純期間修飾句と稼働期間修飾句の COMP は、修飾期間の計算に利用する終局点の時間情報を下位分類 (タイプ A vs. タイプ B) することによって区別した。さらに、事象投射構造に元々存在する情報が、後続して適用される期間修飾句 (COMP) の計算に必要な情報である場合、強制に伴い「情報の受け継ぎ」が起こり、逆関数同士を連続適用しても空虚な構造 (情報) が生まれなくなるプロセスを提案した。続く 3.3 節では、本研究の提案が、岩本 (2008 など) で提示されている用例等进行分析する際にも必要になることを示し、アドホック的なものではなく、事象投射理論 (岩本 2008 など) による議論の一貫性という観点からも妥当なものであることを示した。

#### 4. 事象投射理論による段階複合動詞の分析

本章では、研究目的 (1.11b) について議論を行う。具体的には、2.1 節～2.4 節で問題点として挙げた、従来の観点・分析枠組みでは十分な議論を行えない「V-終わる」「V-終える」に見られる特徴の違いを含めた、段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて、事象投射理論の枠組みを援用して議論する。本章では段階複合動詞に関わる複数の諸特徴を議論の対象とするため、議論の便宜上、下の (4.1) のように研究課題 (RQ) を個別に設定して議論を進める。

- (4.1) RQ1: 「V-終わる」「V-終える」は同様に主語の動作を表し、「過程」を含意していると考えられるが、「ている」を付加した際に異なる機能が成立する要因はどのように分析できるか？
- RQ2: 「V-始める」は「過程」を含意しており「ている」を付加した際にも「進行中」を成立させると考えられるが、期間修飾句が過程期間を表せない要因はどのように分析できるか？
- RQ3: 「V-続ける」は「V-始める」「V-終わる」「V-終える」と異なり、「維持」を表すことができるが、その特徴はどのように分析できるか？

本章で議論の対象とする段階複合動詞は、一般的に語彙部門で形成される語彙（複合動詞を含む）とは異なり、統語部門で形成されと考えられていることから「統語的複合動詞」（影山 1993）と呼ばれている。統語的複合動詞には、語彙部門で形成される語彙とは異なる特徴があることが影山 (1993)、由本 (1997, 2005) などで指摘されている。4.1 節では、「統語的複合動詞」に関する議論を概観する。そして、段階複合動詞に見られるアスペクトに関わる制約（特徴）について、概念構造（事象投射構造）における議論の必要性を示す。4.2 節では、事象投射理論（岩本 2008 など）の枠組みによって「段階複合動詞」に関する議論を行う。4.3 節は本章のまとめである。

#### 4.1. 複合動詞の分類

##### 4.1.1. 「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」

本節では、事象投射理論の分析枠組みで段階複合動詞に対する議論を行う前に、段階複合動詞に見られる統語的側面について確認する。なお、本節と次節（4.1.2 節）では議論の便宜上、議論に関する例文や説明については、影山 (1993) の研究を引用している由本 (1997, 2005) も参考にしながら確認していく。

これまで、段階複合動詞は、複合動詞について議論した影山 (1993)、岸本 (2009, 2013) などの研究で取り上げられることがあり、これらの動詞は単一の語ではあるものの、統語的な性質を備えていることが指摘されてきた。影山 (1993) は、複合動詞に見られる諸特徴を議論する中で、下の (4.2a) 「語彙的複合動詞」と (4.2b) 「統語的複合動詞」という分

類を行っている。

- (4.2) a. 飛び上がる, 押し開く, 泣き叫ぶ, 売り払う, 受け継ぐ, 解き放す, 飛び込む, (隣の人に) 話しかける, こびり付く, 飲み歩く, 歩き回る, 踏み荒す, 誉め讃える, 語り明かす, 聞き返す, 震え上がる, 呆れ返る, 持ち去る, 沸き立つ
- b. 払い終える, 話し終る, しゃべり続ける, 食べすぎる, 食べそこなう, 助け合う, 動き出す, 食べかける, しゃべりまくる, 走りぬく, 数え直す, 見られる, 登り切る, やりつける, (歌い始める)

(影山 1993: 75~76 (下線と (歌い始める) は筆者による))

影山 (1993) は, 生成文法の枠組みに基づいて, (4.2a) 「語彙的複合動詞」は語彙部門で形成される複合動詞, (4.2b) 「統語的複合動詞」は統語部門で形成される複合動詞として分類している。影山 (1993) は, (4.2a), (4.2b) の分類について, 「(i) 代用形「そうする」による照応可能性」「(ii) サ変動詞との交替可能性」「(iii) 主語尊敬語の成立可能性」「(iv) 受身形の成立可能性」「(v) 重複構文の成立可能性」などの観点を元に議論している。そして, (i)~(v) の観点において (4.2a) と (4.2b) の間で異なる制約を見せるのは, それぞれの複合動詞が, 異なる部門で形成されていることを反映していると主張している。

先ず, 「(i) 代用形「そうする」による照応可能性」に関して, 「語彙的複合動詞」に分類される下の (4.3a) では, V1 を「そうする」で代用することはできない。一方, 「統語的複合動詞」に分類される (4.3b) は V1 を「そうする」によって代用することができる。影山 (1993) は, 「語彙的複合動詞」は語彙部門で形成され, 統語部門の基底構造 (D 構造) に複合動詞が一つの動詞として挿入されることを主張している。このことから, 照応関係が決定される統語構造において, V1 のみを「そう」によって指すことはできない。一方, 「統語的複合動詞」は, V1, V2 が統語構造において独立した構成素であることから, V1 を「そう」によって指す (代用する) ことができると分析している。

- (4.3) a. 遊び暮らす→\*そうし暮らす, 押し開ける→\*そうし開ける etc.
- b. 調べ終える→そうし終える, 食べ過ぎる→そうし過ぎる etc.

(影山 1993: 80~81 (筆者下線))

次に, 「(ii) サ変動詞との交替可能性」について, 下の (4.4a) 「語彙的複合動詞」では, V1 を同義的なサ変動詞と交替することはできない。一方, (4.4b) 「統語的複合動詞」においてはサ変動詞との交替が可能である。影山 (1993) は, サ変動詞は統語的派生 (基底構造から動名詞の編入) によって形成されることを指摘している。そこで, 統語構造において, 複合動詞全体が一つの動詞として挿入されている語彙的複合動詞の中 (V1) にはサ変

動詞が生じ得ないことを指摘している。

- (4.4) a. \*壁にポスターを接着し付ける (cf. 貼り付ける) / \*柵をジャンプし越す (cf. 跳び越す) etc.  
b. 調べ尽くす / 調査し尽くす, 手紙を出し忘れる / 投函し忘れる, (料理を食べ終わる / 食事し終わる。) etc.

(影山 1993: 88 ((4.4b) 括弧内の「V-終わる」は筆者による))

以上の (i), (ii) は, 複合動詞を形成する動詞のタイプ (4.1.2 節で確認) に関係なく, 「語彙的複合動詞」「統語的複合動詞」を区別することができると姫野 (2018) が指摘している。

「(iii) 主語尊敬語の成立可能性」については, 「お～になる」という統語的に派生される主語に対する尊敬表現が, 下の (4.5a) 「語彙的複合動詞」では, 複合動詞全体に適用しなければならず, V1 のみに適用することはできないと影山 (1993) は指摘している。一方, (4.5b) 「統語的複合動詞」においては, (動詞のタイプによっては) V1 のみに主語尊敬表現を使用することができる。これは, 「統語的複合動詞」は, 統語構造において, V1 が V2 とは独自に主語を持っているためであると影山 (1993) は分析している。

- (4.5) a. ノートに書き込む→\*お書きになり込む / 手紙を受け取る→\*お受けになり取る etc.  
b. 歌い始める→お歌いになり始める / しゃべり続ける→おしゃべりになり続ける etc.

(影山 1993: 84 (筆者下線))

影山 (1993) は, さらに, 「(iv) 受身形の成立可能性」について, 下の (4.6a) 「語彙的複合動詞」では V1 の直接受身化が成立せず, (4.6b) 「統語的複合動詞」では (動詞のタイプによっては) 成立することを指摘している。この制約も, 上記で確認した, 「語彙的複合動詞」は統語構造では複合動詞が一つの動詞であるの対し, 「統語的複合動詞」は, V1, V2 が統語構造において独立した構成素であるという特徴によると考えられている (影山 1993)。

- (4.6) a. \*書かれ込む (cf. 書き込む) / \*押され開く (cf. 押し開ける) etc.  
b. 名前が呼ばれ始めた / 愛され続ける etc.

(影山 1993: 87 (筆者下線))

最後に, 影山 (1993) は, 下の (4.7a) のように統語的に派生される受身形などが重複を受けることから, 重複規則が統語部門で適用されることを指摘している。その上で, 「(v)

重複構文の成立可能性」について、(4.7b)「語彙的複合動詞」の V1 には重複規則が適用できないが、(4.7c)「統語的複合動詞」の V1 には適用可能であることを指摘している。

- (4.7) a. 容疑者はなぐられになぐられた。 etc.  
 b. \*行方不明の子供を探しに探し歩いた。 / \*敵を待ちに待ち構えた。 etc.  
 c. 大臣はそれをひた隠しに隠し続けた。 / その日は運がつきにつきまかった。  
 etc.

(影山 1993: 90~91 (筆者下線) )

以上の (i)~(v) の観点からも、本研究が分析対象とする段階複合動詞は、「統語的複合動詞」に分類されることが影山 (1993: 96) で指摘されている (cf. (4.3)~(4.7) 下線部)。次節 (4.1.2 節) 以降では、影山 (1993), 岸本 (2009, 2013) による「統語的複合動詞」の下位分類について確認する。

#### 4.1.2. 影山 (1993) の下位分類

本節では、影山 (1993) による「統語的複合動詞」の下位分類について確認する。影山 (1993) は、「統語的複合動詞」が統語構造において補文構造を成していることを指摘している。さらに、補文構造を「非対格型 (主語繰り上げ構文)」「VP 補文型 (コントロール構文)」「V' 補文型」の三類に下位分類している。本節で確認していく影山 (1993) の下位分類に関する議論のまとめを、先に下の表 4.1 において提示する。

表 4.1 影山 (1993) による統語的複合動詞の下位分類特徴まとめ

	非対格型	VP 補文型	V' 補文型
主語に対する意味役割の制限	無し	有り	有り
命令形の成立	不可能	可能 (動詞による)	可能 (動詞による)
主語尊敬語化	V1	V1	V2 (複合動詞全体)
受身化	V1	V1	V2 (複合動詞全体)
例 (段階複合動詞以外)	V-かける, V-出す, V-過ぎる, V-得る etc.	V-つける, V-そびれる, V-遅れる, V-かねる, V-飽きる, V-慣れる etc.	V-忘れる, V-尽くす, V-直す etc.

まず、下の (4.8a)「非対格型」を成す複合動詞の場合は、V2 が特定の主語を要求しないことから、主語に対する意味役割の制限が適用されない。一方、(4.8b)「VP 補文型 (コントロール構文)」、(4.8c)「V' 補文型」を成す複合動詞の場合、V2 が主語に動作主 (もし

くは「経験者」)を要求することから、主語が動作主(経験者)の項として不適格な場合は成立しなくなる(影山 1993)。

- (4.8) a. 鐘が鳴りかけた / 彼が鐘をつきかけた, 雨が降り出す / パソコンを使い出す,  
台風が上陸し得る / 太郎が発言し得る  
b. 彼はごちそうを食べそびれた / \*月が出そびれた, 彼が鐘をつき遅れる / \*鐘  
が鳴り遅れる, 私が発言しかねる / \*雨が降りかねる  
c. 彼が鐘をつき忘れる / \*鐘が鳴り忘れる, 太郎が発言し直す / ?台風が上陸し  
直す, 人が花を取り尽くす / \*花が枯れ尽くす

(由本 1997: 79)

(4.8)に関連して、「非対格型」を成す複合動詞においては、下の(4.9a)のように、動作主主語(小坊主)を取っているように見えることがある。しかし、「V-かける」は、(4.9b)のように命令形が成立しない。これは、(4.9a)の「小坊主」は補文動詞「鳴らす」の主語であっても、V2の主語ではないことによると影山(1993)は指摘している。一方、(4.9c)「V-終わる」においては、命令形が成立するが、このような場合は「V-終わる」がV2として主語を選択していることになる。なお、V2が特定の主語を要求することが指摘されている動詞グループ(4.8b, c)であっても、命令形が成立しない例がある(e.g. 「\*ごちそうを食べそびれろ!」「\*手紙を出し忘れろ!」)。影山(1993)は、(4.8b, c)に分類されるような動詞で命令形が成立しない場合における主語の意味役割は、「動作主」ではなく「経験者」が要求されている可能性を指摘している。

- (4.9) a. 小坊主が鐘を鳴らしかけた。 (影山 1993: 143)  
b. \*早く鐘を鳴らしかけろ! (ibid: 142)  
c. 早く書き終わろ! (ibid: 142)

さらに、「非対格型」を成す複合動詞は、V2が表層の主語を選択しないため、下の(4.10)のように、「おV1になりV2」というV1の主語尊敬語化は可能であるが、「おV1+V2になる」という複合動詞全体への主語尊敬語化ができない(影山 1993; 由本 2005)。また、「非対格型」においては、(4.11)のように、複合動詞全体を直接受身化することもできない。これは、「非対格型」を成す複合動詞の主語は、動作主主語(外項)のように見えても、V2の主語ではないことによる(由本 2005)。すなわち、直接受身は、外項がある場合に成立する(影山 1993)が、「非対格型」においては、V2が外項を持たないため、複合動詞全体の受身化(V1+V2られる)が不可能になる。ただし、「非対格型」であっても、(4.11)のように、V1が外項を持つ場合においては、V1のみの受身化(V1られV2)が可能である。



- (4.10) a. 先生が鐘を {おつきになりかけた / \*おつきかけになった}。  
 b. 先生が {お飲みになり過ぎた / \*お飲み過ぎになった}。

(由本 2005: 165)

- (4.11) a. 私はもう少しで {殺されかけた / \*殺しかけられた}。  
 b. 浩はみんなから {褒められ過ぎた / \*褒め過ぎられた}。

(ibid: 165)

以上のような特徴から、「非対格型」複合動詞の統語構造は、生成文法の研究によって提案されている「主語繰り上げ構文」に対応することになり (影山 1993), 下の図 4.1 のように示すことができる。<sup>39</sup>

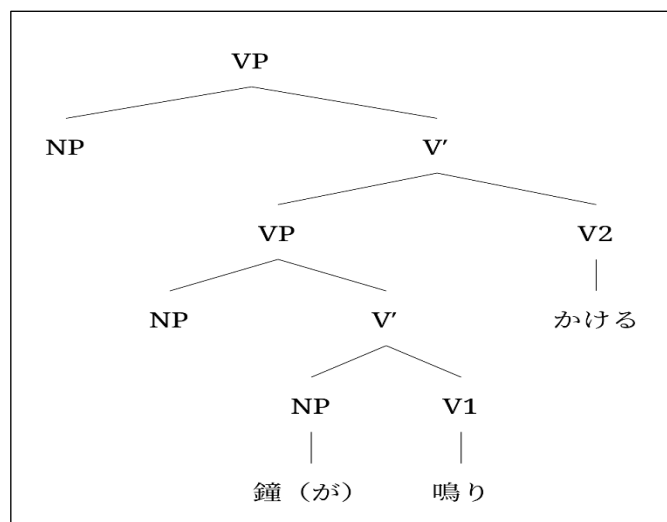


図 4.1 非対格型の基底構造 (図は由本 1997: 80)

次に、「統語的複合動詞」には、図 4.1「非対格型」の他に「VP 補文型」と「V' 補文型」が影山 (1993) で提案されている。「VP 補文型」に分類される複合動詞は、主語に対する意味役割の制限が適用されるものの、「非対格型」と同様に、複合動詞全体の主語尊敬語化 (4.12b~b'') と直接受身化 (4.13b) ができないことを影山 (1993) が指摘している。

- (4.12) a. スミス先生は生魚をお食べになりつけない。  
 a'. その申し出をお受けになりかねる人は、 ...  
 a''. 社長はフランス料理をお食べになり飽きた。  
 b. ?\*スミス先生は生魚をお食べつけにならない。  
 b'. ?\*その申し出をお受けかねになる人は、 ...

<sup>39</sup> 図 4.1~図 4.3 の作成には RSyntaxTree (<https://yohasebe.com/rsyntaxtree/>) を使用した。

b'': ?\*社長はフランス料理をお食べ飽きになった。

(影山 1993: 164 (提示方法一部変更) )

(4.13) a. せっかくの機会だったのに、誉められそになった。 / 次郎は学校で叱られつけている。 / 花子も学校で叱られ慣れている。

(影山 1993: 165 (提示方法一部変更) )

b. \*ごちそうが食べそびれた。 / \*鐘がつきそこねられた。 / \*鐘がつき遅れられる。 / \*この仕事はやりつけられない。

(由本 1997: 80)

(4.12b~b'') で複合動詞全体の主語尊敬語化の容認度が低いことと (4.13b) で複合動詞全体が直接受身化できないことは、「VP 補文型」が、下の図 4.2 のように、「コントロール構文」を成していることが関係していると影山 (1993) は指摘している。

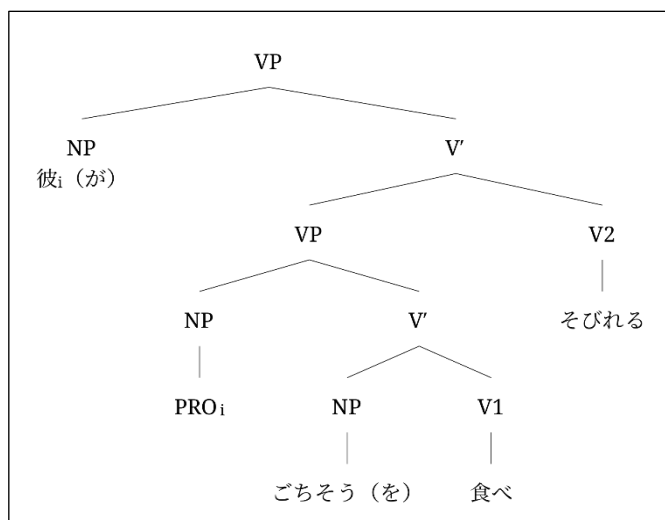


図 4.2 VP 補文型の基底構造 (図は由本 1997: 80)

「VP 補文型」を成す複合動詞において、V1 のみの主語尊敬語化が成立する (cf. (4.12a~a'') vs. (4.12b~b'')) 要因として、影山 (1993: 164) は、尊敬語化は補文から主節へ循環的に働くという久野 (1983) の主張を引用しながら、「補文に PRO 主語が存在するときにはそれを優先させて V1 のみを尊敬語化するのが経済的である、といった機能的な要因が働いているのではないか」と説明している。また、(4.13b) で複合動詞全体が直接受身化できないことに対しては、日本語の直接受身は目的語を主文の主語位置に移動する名詞句移動によって派生されると生成文法の枠組みでは考えられている (影山 1993; 由本 2005)。しかし、図 4.2 のように補文の主語位置に PRO が存在する場合、補文内の目的語を主文の主語位置に移動して直接受身化しようとする際、目的語の移動の連鎖が統語的制約である「相対化最小性」(Rizzi 1990) によって不適格になるため、(4.13b) では、複合動詞全体

の直接受身化が不可能になると影山 (1993) は分析している。なお、「VP 補文型」であっても、(4.13a) のように、VP 内部での受身化 (V1 のみの直接受身化) は可能であると影山 (1993) で指摘されている。

次に、「VP 補文型」と同様に、主語に対する意味役割の制限が適用されるものの、複合動詞全体の主語尊敬語化 (4.14a)、複合動詞全体の直接受身化 (4.15a) が可能な場合がある。影山 (1993) は、そのような特徴が見られる「～忘れる、～尽くす、～直す、～終わる」などの複合動詞は下の図 4.3 の「V' 補文型」を成していることを指摘している。

- (4.14) a. 社長は電話をおかけ忘れになった。 / 先生はタイプをお打ち直しになった。  
 b. ?社長は電話をおかけになり忘れた。 / ?先生はタイプをお打ちになり直した。  
 (影山 1993: 165)
- (4.15) a. 手紙が出し忘れられた。 / 壁が塗り直される。 / 花が取り尽くされる。 / 論文が書き終えられた。  
 (由本 1997: 80)  
 b. \*なぐられ忘れた。 / \*調べられ直す。 / \*調べられ尽くした。 (影山 1993: 166)

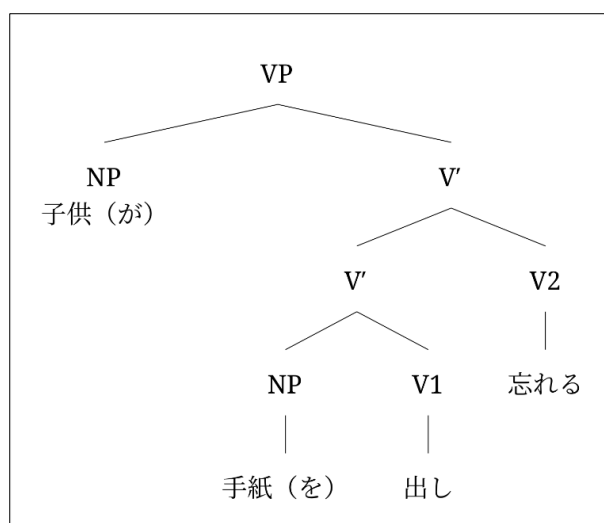


図 4.3 V' 補文型の基底構造 (図は由本 1997: 81)

上の (4.14a) で提示した複合動詞全体の主語尊敬語化について、影山 (1993) は、「V' 補文型」においては、補文内 (V') に主語を持たないため、複合動詞全体が尊敬語化されると主張している。一方で、(4.14b) のように、V1 の尊敬語化が完全に非文とならないのは、「V' 補文型」では、「補文動詞 V1 と主節主語は V' を通して繋がれているから、その主節主語を対象として V1 のみを尊敬化することは、さほど無理なことではない」と影山 (1993: 165) は説明している。(4.15a) の複合動詞全体の直接受身化については、「V' 補文型」では、「VP 補文型」と異なり、補文内にも PRO が存在しないため、「相対化最小性」(Rizzi 1990) に違反せずに、目的語を主文の主語位置に移動することができる。そして、

複合動詞全体の直接受身化が可能になると影山 (1993) は分析している。一方で、「V' 補文型」は、(4.15b) のように、V1 のみの直接受身化が不可能であると影山 (1993) は主張し、V' 補文内には受身の成立に必要な主語 (外項) が存在しないことをその理由に挙げている。

ここまで確認した議論を元に、本研究が分析対象としている「段階複合動詞」を見ると、影山 (1993) は「V-終わる」以外の「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」は「非対格型」を成し得ることを指摘している。多くの研究 (姫野 1982c; Matsumoto 1996; 庵他 2000; 池谷 2003 など) でも、「V-終わる」は下の (4.16d) のように V1 が意志動詞 (主語が有性物) でない場合に容認されないことが指摘されている。影山 (1993) の分析枠組みで (4.16d) を説明する場合、「V-終わる」は「非対格型」を成し得ず、主語に対する意味役割の制限を課す「V' 補文型」ないし「VP 補文型」のみを成すためと説明される。しかし、実際の用例を検索すると、(4.17) のように「V-終わる」が非有生物主語を取っている用例が見つかり、「V-終わる」が本当に「非対格型」を成し得ないかは、議論の余地があると考えられる。

- (4.16) a. 急に雨が降り始めた。(庵他 2000: 60 (表記方法筆者一部変更・筆者下線) )  
b. 明日は一日中雨が降り続けるでしょう。(ibid: 58)  
c. 教会の鐘が十二時を告げ終わった。  
(Matsumoto 1996: 174 (原文ローマ字・筆者下線) )  
d. \*教会の鐘が十二時を告げ終えた。  
(ibid: 174 (原文ローマ字・筆者下線) )
- (4.17) 佐々木 1 球目から試合終了のサイレンが鳴り終わるまで精神を集中させ、最高の野球をしたいと思っています。  
(『朝日新聞 1998 年 3 月 25 日朝刊宮城』(筆者下線) )

さらに、下の (4.18) のように、「段階複合動詞」においては、全ての動詞で複合動詞全体の主語尊敬語化が可能である。すなわち、(4.14) の議論に従うと、これらの動詞は、「V' 補文型」も成すことになる。なお、Matsumoto (1996: 179) の研究では、「V-終わる」は複合動詞全体の主語尊敬語化が不可能だと判断されているが、その判断は微妙なところであり、「V-終わる」全体が主語尊敬語化されている実際の用例 (4.18d) も検索される。<sup>40</sup>

- (4.18) a. 先生がこの本を {お読みになり始めた / お読み始めになった}。  
(岸本 2009: 184)

---

<sup>40</sup> 国立国語研究所 (1992: 63) では Matsumoto (1996: 180) が容認している「お書きになり終わる」と同タイプの「お読みになり終わる」が非文と判断されている。ただし、国立国語研究所 (1992), 岸本 (2009) は、段階複合動詞のようにアスペクト性が強い動詞における主語尊敬語化は、個人によって判断が揺れることを指摘している。

- b. 水素溶存計で常時数値を監視しながら飲むわけではありませので、お飲み続けになるのであれば、ペットボトルは 2 本以上ご用意いただき、交互にお飲みいただければ便利です。 (『セラミック&鉍石本舗』(筆者下線) )
- c. 田中先生が、手紙ヲオ書き終エニナツタ。 (久野 1983: 10 (筆者下線) )
- d. お書き終わりになりましたら、挙手で私どもにお知らせくださいませ。どうぞよろしく願ひいたします。 (『厚生労働省議事録』(筆者下線) )

また、(4.15) では、「V' 補文型」は、V' 補文内に受身の成立に必要な主語（外項）が存在しないため、V1 のみの直接受身化が不可能であるという影山 (1993) の説明を確認した。しかし、影山 (1993) 自身も指摘するように、「V-終える」などの動詞においては、下の(4.19) のように V1 のみの直接受身化も可能であるし、(4.20) のように複合動詞全体の直接受身化も可能である。このことから、影山 (1993) は「V-終える」のような複合動詞は、「V' 補文型」「VP 補文型」のいずれのタイプも成し得ることを主張している。関連して、(4.21) 「V-始める」、(4.22) 「V-続ける」も同様で、両複合動詞は、V1 のみの直接受身化(4.21a), (4.22a) も、複合動詞全体の直接受身化(4.21b), (4.22b) も可能である。すなわち、「V-始める」「V-続ける」も「V' 補文型」と「VP 補文型」のいずれも成し得ると考えることができる。<sup>41</sup> (4.16), (4.17) の「非対格型」の議論、(4.18) の主語尊敬語化、(4.19)～(4.22) の「V' 補文型」と「VP 補文型」による受身化の議論から考えると、「V-始める」「V-続ける」「V-終える」は、影山 (1993) の下位分類である、「非対格型」「VP 補文型」「V' 補文型」を全て成し得ることになる（「V-終える」の「非対格型」を認めた場合）。

- (4.19) a. 容疑者は早く調べられ終えたいと願っている。(影山 1993: 166 (筆者下線) )
- b. 英語や中国語で書かれた小説など約 240 冊が用意され、開始前から約 20 人が並ぶなど多くの人が訪れ、すべての本が配られ終えた。  
(『朝日新聞 2015 年 3 月 8 日朝刊大分全県・1 地方』(筆者下線) )
- (4.20) 苗は 3 鉢 200 円で配られ、約 40 分後には 400 鉢の苗木が配り終えられた。  
(『朝日新聞 2002 年 5 月 16 日朝刊長野 1』(筆者下線) )
- (4.21) a. 50 枚の札を前に、歌が読まれ始めた一瞬にかける集中力と瞬発力が求められる競技かるた。  
(『朝日新聞 2013 年 12 月 20 日朝刊静岡全県・2 地方』(筆者下線) )

<sup>41</sup> 念のために確認しておくが、(4.19) で V1 のみの直接受身化を成立させている「V-終える」は「早く調べ終えろ!」「早く配り終えろ!」のように命令形が成立することから、(4.19) における V1 のみの直接受身化は、「VP 補文型」によるものであると考えられる。同様に、(4.21a), (4.22a) で V1 のみの直接受身化を成立させている「V-始める」「V-続ける」においても「早く読み始めろ!」「殴り続けろ!」のような命令形が成立することから、(4.21a), (4.22a) における V1 のみの直接受身化は、「VP 補文型」によるものであると考えられる。

- b. 上の句が読み始められたとたん、あちこちで畳をたたく音が響き、払われた札が5, 6枚, 宙を舞った。

(『朝日新聞 2011年8月3日朝刊埼玉・1地方』(筆者下線))

- (4.22) a. 義兄は金持ちにみられていて、持っている物を全部出せと、気絶するまで殴られ続けた。

(『朝日新聞 2017年2月28日朝刊岩手全県・2地方』(筆者下線))

- b. 一審の中で、正史さんが3被告らに金属製パイプで殴り続けられる場面が明らかになった。

(『朝日新聞 2005年10月14日夕刊1社会』(筆者下線))

一方、「V-終わる」においては、Matsumoto (1996), 岸本 (2009, 2013) などの先行研究では、下の (4.23a) のような複合動詞全体の直接受身化が不可能であることが指摘されている。ただし、(4.23b) のような V1 のみの直接受身化がされている用例は検索される。このことから、複合動詞全体の直接受身化の可否という観点では、「V-終わる」は「非対格型」(cf. (4.16)) もしくは「VP 補文型」((4.23b) 「V-終わる」は「早く取り終われ!」のような命令形も成立させると考えられる) に分類されることになる。しかし、(4.18d) の主語尊敬語化の用例を見ると、「V-終わる」を「V' 補文型」に分類してもよいことになる。すなわち、「V-終わる」においては、影山 (1993) で提案されている基準(テスト)に従うと「非対格型」以外に、「V' 補文型」と「VP 補文型」の間で、いずれに該当するのかを明確に判断することが難しいと考えられる。

- (4.23) a. \*その本はようやく書き終わられた。

(Matsumoto 1996: 176 (原文ローマ字・筆者下線))

- b. 東京・日本棋院の検討では、参考図の黒1とハザマをつけば、白が取られ終わっていたのではと見ていた。

(『朝日新聞 2006年8月3日朝刊囲碁将棋』(筆者下線))

以上、本節では、影山 (1993) の議論を確認しながら、従来「VP 補文型」と「V' 補文型」のみを成し「非対格型」を成さないとされてきた「V-終わる」に関して、実際の用例を提示して、「非対格型」を成し得る可能性を指摘した。そして、本研究が分析対象としている「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」は、影山 (1993) の下位分類である「非対格型」「VP 補文型」「V' 補文型」の全てを成し得る可能性を示した。また、「V-終わる」も他の段階複合動詞と同様に「非対格型」を成し得るが、「主語尊敬語化」と「複合動詞全体の受身化」のいずれを基準にするかによって、「VP 補文型」と「V' 補文型」のどちらに分類されるのが明確でないことを指摘した。次節では、影山 (1993) による分析の問題点を指摘しながら、異なる観点から統語的複合動詞の下位分類を行っている岸本 (2009,

2013)の研究を確認する。

#### 4.1.3. 岸本 (2009, 2013) の下位分類

岸本 (2009, 2013) は、影山 (1993) と同様、統語的複合動詞が統語的な補文構造を成していることを認めつつも、影山 (1993) とは異なる下位分類 (4.24) を提案している。(4.24) の下位分類では、複合動詞全体 (後部動詞) の直接受身化の可否という観点において異なる特徴が見られる。(4.24a) 「非対格型 (上昇動詞)」, (4.24b) 「非能格型コントロール動詞」においては、(4.25a, b) のように後部動詞の直接受身化ができないが、(4.24c) 「他動詞型コントロール動詞」においては、(4.25c) のように後部動詞の直接受身化が可能である。以下では、(4.24) の下位分類に関する岸本 (2009, 2013) による一連の議論について確認していく。

- (4.24) a. 上昇動詞 (非対格型) : 「V-かける」「V-出す」「V-過ぎる」 etc.  
b. コントロール動詞 (非能格型) : 「V-終わる」「V-そこなう」「V-損ねる」 etc.  
c. コントロール動詞 (他動詞型) : 「V-終える」「V-直す」「V-尽くす」 etc.  
(岸本 2013: 146 (表記一部変更) )
- (4.25) a. この学生が先生にほめ {?\*過ぎられた / ?\*出された / \*かけられた}。  
b. 子供が叱り {\*終わられた / \*そこなわれた}。  
c. この論文がようやく書き {終えられた / 直された}。  
(岸本 2009: 185~186 (表記一部変更) )

岸本 (2009) は、本研究が分析対象としている「V-始める」「V-続ける」においては、下の (4.26) のように主語に有生物も無生物も取れることから、「非対格型」を成し得ると主張している。ただし、4.1.2 節 (4.21), (4.22) で確認したように「V-始める」と「V-続ける」は複合動詞全体の受身化も可能であることから「他動詞型コントロール動詞」も成し得る (岸本 2013)。一方、岸本 (2009) によると、「V-終わる」「V-終える」においては、下の (4.27a) のように有生物主語のみを取れるという。このことから、岸本 (2009) は「V-終わる」「V-終える」においては、「非対格型」を成し得ず、「コントロール構文」を成すと主張している。

- (4.26) a. 有生物主語 : 課長は秘密をしゃべり {始めた / 続けた / かけた / 出した / 過ぎた}。  
b. 無生物主語 : 雨が降り {始めた / 続けた / かけた / 出した / 過ぎた}。  
(岸本 2009: 181 (筆者下線) )
- (4.27) a. 有生物主語 : 課長は昼の定食を食べ {忘れた / 終わった / 終えた / 損ねた / 飽きた}。

- b. 無生物主語：\*雨が降り {忘れた / 終わった / 終えた / 損ねた / 飽きた}。

(ibid: 181 (筆者下線) )

しかし、4.1.2節では、従来(影山 1993)、「非対格型」を成し得るとされてきた「V-始める」「V-続ける」「V-終わる」以外にも、実際の用例を見ると「V-終わる」も「非対格型」を成し得る可能性があることを確認した。さらに、4.1.2節での「V-終わる」に対する本研究の指摘を除いても、影山(1993)と岸本(2009, 2013)の主張には、「V-終わる」が「非対格型」を成し得るか否かという点で不一致がある。岸本(2009)は、「V-終わる」が無生物主語を取って成立させる「ベルが鳴り終わった」のような表現は「V-終わる」が「非対格型」を成すという論拠にはならないと主張している。岸本(2009, 2013)は、「ベル」のようなものは、人に時間などを知らせるという自立的な活動を行うことから、「ベルが鳴り終わった」のような文は「疑似コントロール構文」(Pustejovsky 1995)を成していることを主張している。すなわち、岸本(2009)の指摘に従うと、4.1.2節(4.16c), (4.17) (下の(4.28), (4.29)に再掲)で確認した用例は、「V-終わる」「V-終わる」が「非対格型」を成すという論拠にはならないことになる。一方で、岸本(2009)は、上の(4.27b)から、「雨」のような無生物主語の場合は、コントロール構文(疑似コントロール構文)の主語にはならないと判断しているようである。しかし、(4.27b)で岸本(2009)が非文と判断している例と類似した実際の用例(4.30)も見つかることから、「V-終わる」「V-終わる」が「非対格型」を成さないかどうかは議論の余地があるように思える。

(4.28) (=4.16c)

教会の鐘が十二時を告げ終わった。

(Matsumoto 1996: 174 (原文ローマ字・筆者下線) )

(4.29) (=4.17)

佐々木 1 球目から試合終了のサイレンが鳴り終えるまで精神を集中させ、最高の野球をしたいと思っています。

(『朝日新聞 1998年3月25日朝刊宮城』(筆者下線) )

(4.30) a. 気象台は「雨が降り終わっても、地盤の緩んでいるところでは土砂災害の危険性が十分にある」と、夕方にかけて警戒を呼びかけている。

(『朝日新聞 2016年9月8日朝刊石川全県・1地方』(筆者下線) )


b. このように雨と霧が晴れ、雪も降り終えて澄み渡る『お山』の中を、斎藤カユ、保科キュウ、塚本テマ、柊ツサ、小淵イツルの五人が、木槍を杖代わりにして登っていました。  
(『デンデラ』(筆者下線) )

上の「非対格型」vs.「コントロール構文」の議論に関連して、岸本(2009, 2013)は、イディオム解釈の可否によるテストも行っている。岸本(2009, 2013)によると、下の(4.31a)



では、「お客さんが来なくなる」というイディオム解釈が可能であるが、(4.31b)においては、イディオム解釈はできず、「閑古鳥(=カッコウ)が鳴く」という文字通りの解釈しかできないという。(4.31a)と(4.31b)の間に見られる解釈の違いは、(4.31b)の複合動詞は、イディオム解釈に必要な「隣接性の条件」を満たしていないためだと分析している。すなわち、(4.31a)の「非対格型」の場合は、(4.32a)のように主節主語「閑古鳥」が、元々は埋め込み節内において「鳴く」と隣接した位置にあり隣接性の条件が満たされるため、イディオム解釈が成立するという。一方、「コントロール構文」の場合は、(4.32b)のように埋め込み節内に PRO が存在するため、主節主語「閑古鳥」と「鳴く」の隣接性が満たされず、イディオム解釈ができないと岸本(2009, 2013)は分析している。

- (4.31) a. この店では閑古鳥が鳴き {始めた / 続けた / かけた / 出した / 過ぎた}。  
 b. この店では閑古鳥が鳴き {忘れた / 終わった / 終えた / 損ねた / 飽きた}。  
 (岸本 2009: 181 (筆者下線))

- (4.32) a. [ \_\_\_\_\_ [閑古鳥が 鳴き] 始めた ] <上昇構文>  
  
 b. [閑古鳥<sub>i</sub>が [PRO<sub>i</sub> 鳴き] 終わった] <コントロール構文>

(ibid: 182)

次に、複合動詞全体(後部動詞)の受身化の可否について岸本(2009, 2013)は(4.24)の分類の観点から議論を行っている。4.1.2節では、「VP補文型」(コントロール構文)に分類される複合動詞は、複合動詞全体の直接受身化ができないことを確認した。影山(1993)は、補文の主語位置に PRO が存在する場合、PRO は目的語より上位に存在する。このことから、補文内の目的語を主文の主語位置に移動して直接受身化しようとする際、目的語の移動の連鎖が、統語的制約である「相対化最小性」(Rizzi 1990)によって不適格になるため、複合動詞全体の直接受身化が不可能になると分析していた。一方、「V'補文型」においては、「VP補文型」と異なり、補文内に PRO が存在しないため、「相対化最小性」に違反することなく、目的語を主文の主語位置に移動することができ、複合動詞全体の直接受身化が可能になると影山(1993)は分析している。

しかし、岸本(2013)は、影山(1993)が提案する「V'補文型」は、(4.31)で確認した、イディオム解釈可否の違いを説明できないと指摘している。また、影山(1993)の「V'補文型」の主語には有生性の制約が指摘されているが、そのような制約は、コントロール構文に存在する PRO によるものであると指摘している。さらに、下の二重目的語動詞文(4.33a)では、直接目的語を主語にした直接受身化(4.33b)と間接目的語を主語にした直接受身化(4.33c)が可能である。影山(1993)のように直接受身化の可否に移動の制約を採用した場合、統語構造において間接目的語よりも下位に存在する直接目的語を主語にした

(4.33b) の直接受身が成立する要因を説明できないと岸本 (2013) は指摘している。<sup>42</sup>

- (4.33) a. ジョンが子供に本を与えた。
- b. 本が子供に与えられた。
- c. 子供が本を与えられた。

(岸本 2013: 150)

これらのことから、岸本 (2009, 2013) は、影山 (1993) と異なる立場を取り、複合動詞全体 (後部動詞) の受身化の可否は、後部動詞が持つ格素性によって決まると主張している。岸本 (2013) は、「[方] 名詞化」「難易構文」「可能構文」の観点から提案の妥当性を論じているが、本節の目的から、以下では「[方] 名詞化」に関する議論の概要を確認するに留める。下の (4.34), (4.35) では、「場所 (テーブル) - 主題 (花瓶)」という項の順序が固定されており、受身化された場合においても同様の順序で固定されることがわかる。すなわち、「方」名詞句では、内部に含まれる「の」でマークされる項には名詞句移動が起こらないという特徴がある (岸本 2013)。

- (4.34) a. テーブルの花瓶の置き方
- b. \*花瓶のテーブルの置き方
- a'. テーブルの花瓶の置かれ方
- b'. \*花瓶のテーブルの置かれ方

(岸本 2013: 153 (表記一部変更) )

- (4.35) a. テーブルの花瓶の置き直し方
- b. \*花瓶のテーブルの置き直し方
- a'. テーブルの花瓶の置き直され方
- b'. \*花瓶のテーブルの置き直され方

(ibid: 155 (表記一部変更) )

上で確認した「方」名詞句の特徴を踏まえて、下の (4.36) を見ると、「方」名詞句では、名詞句移動が関与しないにも関わらず、受身化の可否に異なる特徴が見られる。すなわち、(4.36) は、影山 (1993) が指摘している移動の制約とは異なる独立した要因によって複合動詞全体の直接受身化の可否が決められていることを表している。岸本 (2013) は、(4.36) の

---

<sup>42</sup> 岸本 (2013: 150) は (4.33b) を間接目的語を主語にした受身であり、(4.33c) を直接目的語を主語にした受身であると指摘しているが、(4.33b) の「本」は本来的に直接目的語であり、(4.33c) の「子供」は本来的に間接目的語であると考えられる。岸本 (2013) の議論には大きな影響は無いが、本研究の本文では (4.33b) を直接目的語を主語にした直接受身、(4.33c) を間接目的語を主語にした直接受身と変更した。

受身化の可否は、移動の制約によるものではなく、受身化接辞「られ」が吸収する対格素性を後部動詞 (V2) が持つか否かによると分析している。<sup>43</sup>

- (4.36) a. 本の {読みかけ方 / \*読みかけられ方} [非対格型]  
 b. 本の {読み終わり方 / \*読み終わられ方} [非能格型コントロール構文]  
 c. 本の {読み直し方 / 読み直され方} [他動詞型コントロール構文]  
 (岸本 2013: 155 (括弧 [ ] 内筆者))

さらに、岸本 (2013) は、下の (4.37a) と (4.37b) のような対比を挙げながら、「他動詞型コントロール構文」の後部動詞の直接受身化を行う場合、前部動詞と後部動詞の対格素性が同定されなければならないことを指摘している。<sup>44</sup>

- (4.37) a. ようやく漢字が書き {直し / 終え} 始められた。  
 b. \*漢字が書き {終わり / 損ね} 始められた。  
 (岸本 2013: 177)

- (4.38) a. 
$$\begin{array}{ccc} [[ & V_1 & V_1-V_2 ] \\ & \downarrow & \uparrow \\ & & V_1 & V_2 & \rightarrow & [ [ & ] & V_1-V_2 ] \\ & & [与格, 対格] & [対格] & & [与格, 対格] & [対格] \rightarrow [与格, 対格] \end{array}$$
  
 b. 
$$\begin{array}{ccc} [[ & V_1 & V_2 ] \\ & & [与格, 対格] \end{array} \rightarrow [ [ & ] & V_1-V_2 ]$$
  
 c. 
$$\begin{array}{ccc} [[ & V_1 & V_2 ] \\ & & [与格, 対格] \end{array}$$

(ibid: 171~172)

岸本 (2013) は、「他動詞型コントロール構文」を成す複合動詞においては、(4.38a) のように前部動詞の主要部移動が起こると提案している。そして、主要部移動の結果、複合動詞の接続部分に対して「再構成」が起こり、(4.38b) のように前部動詞の格素性が後部動

<sup>43</sup> 岸本 (2009) は、「非対格型」においては影山 (1993) と同様、前部動詞 (V1) が他動詞の場合、V1 のみの直接受身化が可能であると主張している (e.g. この手の本が世間でほめられ出した (岸本 2009: 185))。また、「コントロール動詞」の前部動詞 (V1) のみの直接受身化は、後部動詞 (V2) が前部動詞 (V1) の表す出来事に対して、どの程度制御性を要求するかによると指摘している。すなわち、V2 が動作主性を強く要求する「V-終える」のような場合は、V1 の直接受身化がしにくくなるのに対し (e.g. ?\*レポートが書かれ終えた (岸本 2009: 186))、動作主性の要求が比較的弱い V2 の場合は、V1 の直接受身化をしやすくなる (e.g. ?子供がようやくしかられ終わった (岸本 2009: 186)) と主張している。

<sup>44</sup> (4.36) では後部動詞が (V2) であるが、(4.37) のような場合においては、後部動詞は V3 である。前部動詞も同様で、(4.36) では、V1 が前部動詞であるが、(4.37) では、本来的な V2 が前部動詞となる。すなわち、本節で指す前部動詞、後部動詞は複合動詞が形成された際の相対的關係によって決まる。

詞に転移と同定されると提案している。一方、「非対格型」や「非能格型コントロール構文」を成す複合動詞においては、前部動詞に対格素性や与格素性を持つ動詞が現れても、(4.38c)のように、再構成が起こらないと主張している。すなわち、(4.37a)の成立において、まず、前部動詞の「書く」が持つ対格素性が後部動詞（「V-直す，V-終える」）が持つ対格素性と再構成によって同定される（ステップ 1）。さらに、ステップ 2 として「V-始める」と結合することで、ステップ 1 で同定されている対格素性が、「V-始める」の持つ対格素性と同定されることになる。その結果 (4.37a) では、後部動詞の直接受身化が可能になる。対照的に、(4.37b) では、「V-終わる」「V-損ねる」が対格素性を持たないことから、再構成も起こらず、「書く」の対格素性が同定されることもない。さらに、「V-終わる」「V-損ねる」が「V-始める」と結合しても、前部動詞となる「V-終わる」「V-損ねる」が対格素性を持たないことから、「V-始める」の持つ対格素性との同定も起こらず、(4.37b) では、後部動詞の直接受身化は起こらない。<sup>45</sup>

以上では、岸本 (2009, 2013) による統語的複合動詞の下位分類に関する議論を確認した。次節では、4.1.2 節と本節で確認した影山 (1993), 岸本 (2009, 2013) による統語的複合動詞の下位分類に関する議論をまとめ、段階複合動詞に見られるアスペクトに関わる制約においては、概念構造（事象投射構造）での議論が必要であることを示す。

#### 4.1.4. 4.1 節のまとめ

4.1.2 節と 4.1.3 節では、影山 (1993), 岸本 (2009, 2013) による統語的複合動詞の下位分類について確認してきた。本研究が議論の対象としている段階複合動詞が、影山 (1993), 岸本 (2009, 2013) による下位分類のいずれに該当するのかを下の方の表 4.2 にまとめる。表 4.2 の「○」「×」はそれぞれの段階複合動詞が下位分類の基準を満たし、当該の下位分類に該当するか否かを表している。すなわち、「○」の場合は当該の下位分類に該当し、「×」の場合は該当しないことになる。

---

<sup>45</sup> (4.38) の提案は、他動詞型コントロール動詞の前部動詞に二重目的語動詞が取られた場合に、下の (45.ib), (45.ic) のように、2 パターンの受身化（「に」格（間接）目的語の主語化 vs. 「を」格（直接）目的語の主語化）ができることも説明できる。本研究の目的からここでは具体的な議論は取り上げないが、当該の議論は岸本 (2013) の 4 節を参照されたい。

- (45.i) a. ジョンが子供にお菓子を {渡し終えた / 渡し直した}。  
 b. 子供がお菓子を {渡し終えられた / 渡し直された}。  
 c. お菓子が子供に {渡し終えられた / 渡し直された}。

(岸本 2013: 169)

表 4.2 4.1 節での議論まとめ

		V-始める	V-続ける	V-終わる	V-終わる
影山 (1993)	非対格型 【基準: 無生物主語を取り 得るか】 cf. (4.16), (4.17)	○	○	○	影山の判 断では×  本研究が 提示した 用例では ○
	VP 補文型 【基準: 命令形の成立且つ V1の受身化が可能か】 cf. (4.19)~(4.23), 脚注 41	○	○	○	○
	V' 補文型 【基準: 複合動詞全体の主 語尊敬語化と受身化が可能 か】 cf. (4.18), (4.20)~(4.23)	○	○	複合動詞 全体の主 語尊敬語 化○  <u>複合動詞 全体の受 身化</u> ×	<u>○</u>
岸本 (2009, 2013)	非対格型 【基準: イディオム解釈の 成立と無生物主語を取るこ とが可能か】 cf. (4.26)~(4.32)	○	○	岸本の判 断では×  ※本研究 が提示し た用例で は「V-終 わる」は 無生物主 語を取り 得る	岸本の判 断では×  ※本研究 が提示し た用例で は「V-終 える」は 無生物主 語を取り 得る
	【基準: 複合動詞全体の受 身化が可能か】 cf. (4.20)~(4.25)  ×→非能格型コントロール ○→他動詞型コントロール	○	○	×	<u>○</u>

表 4.2 から、「V-終わる」「V-終わる」の間に見られる具体的（明確）な特徴の差異は複合動詞全体の直接受身化の可否だけであることがわかる（cf. 表 4.2 太字下線部分）。このことから、「V-終わる」「V-終わる」の間に見られる複合動詞全体の直接受身化の可否が下

の (4.39) のような「ている」機能の成立に影響を与えているという仮説を立てることができるとは考えにくい。しかし、(4.40) からわかるように、「V-終わる」と同様に複合動詞全体の直接受身化が可能な「V-忘れる」「V-尽くす」(cf. (4.15)) であっても、「ている」は「進行中」を成立させず「パーフェクト」のみを成立させると考えられる。すなわち、複合動詞全体の直接受身化の可否が (4.39) のような「ている」機能の成立状況に具体的な影響を与えているとは考えにくい。

(4.39) (=1.2, 2.11)

a. \*花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (池谷 2003: 46)

b. 花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (ibid: 47)

(4.40) a. #お母さんが夕食を作り忘れている (\*最中だ)。

b. #太郎が畑の野菜を取り尽くしている (\*最中だ)。

(筆者作例)

さらに、2.2 節 (2.17) (下の (4.41) に再掲) で確認した制約の差異は、「V-終わる」「V-終わる」の意味的 (事象構造レベル) な違いによるものであると考えられる。他にも、表 4.2 から、影山 (1993)、岸本 (2009, 2013) のいずれの下位分類においても、「V-始める」と「V-続ける」は同様の統語的構造を成し得るが、「V-始める」においては、「ている」を付加した場合「進行中」を成立させるものの、過程を表す期間修飾句 (e.g. 「～間」) とは共起し得ない特徴がある (cf. 2.2 節～2.4 節)。また、「V-続ける」においても、他の段階複合動詞と異なり、「維持」を表すことができるという特徴がある (cf. 2.2 節～2.3 節)。

(4.41) (=2.17)

「太郎がデータをクラウドにアップロードするために PC で一連の操作を行った。アップロードに時間がかかっており、いったん席を外した後戻ってきて、アップロードの状況を確認した場面」

花子：データ {上げ終わった / ??上げ終えた} ?

太郎：うん、{上げ終わった / ??上げ終えた}。 (筆者作例)

以上のことから、段階複合動詞に見られる諸特徴と「ている」機能、副詞 (「様態副詞」「期間修飾句」) の関わりについては、統語構造とは独立した制約が存在し、事象アスペクトの決定に関する原理と原則が存在していると想定されている概念構造 (Jackendoff 1997; 岩本 2008 など) の観点から議論を行う必要があると考えられる。そこで、本研究は次節において、概念構造に存在する原理・原則とアスペクト現象の関わりを議論するために提案されている事象投射理論 (岩本 2008 など) の分析枠組みを援用して (4.1) で挙げた RQ1～RQ3 について議論する。

## 4.2. 段階複合動詞の事象投射構造

本節では、従来、十分に定式的な分析が行われていない段階複合動詞に見られる諸特徴と「ている」機能、副詞（「様態副詞」「期間修飾句」）の関わりについて、事象投射理論（岩本 2008 など）の枠組みを援用して議論する。4.2.1 節では「V-終わる」「V-終わる」((4.1) RQ1), 4.2.2 節では「V-始める」((4.1) RQ2)), 4.2.3 節では「V-続ける」((4.1) RQ3) について議論する。

### 4.2.1. 「V-終わる」「V-終わる」

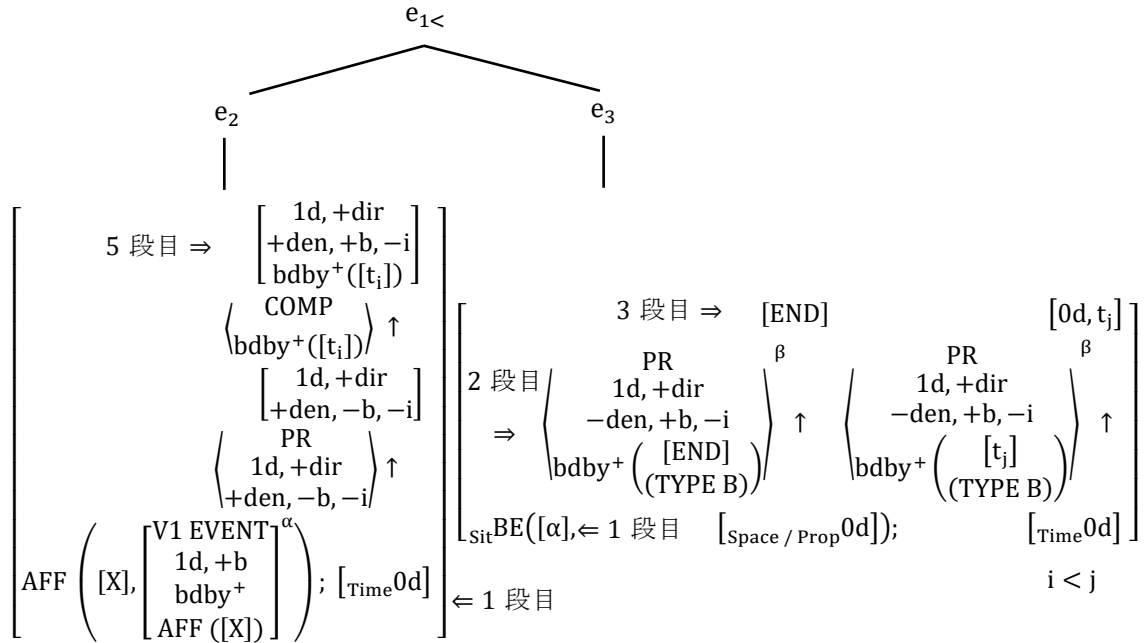
本節では、(4.1)「RQ1: 「V-終わる」「V-終わる」は同様に主語の動作を表し、「過程」を含意していると考えられるが、「ている」を付加した際に異なる機能が成立する要因はどのように分析できるか?」について議論を行う。本節の結論を先に述べると、(4.1) RQ1 は「V-終わる」「V-終わる」にそれぞれ想定する拡大事象投射構造のタイプの違いによって議論できると提案する。関連して、2.2 節 (2.14)~(2.16) で確認した「V-終わる」においては様態副詞 (e.g. ゆっくり) と共起しても「移行」が起こらず、「ている」を付加しても「パーフェクト」のみが成立する要因も、「V-終わる」に想定する拡大事象投射構造によって説明できることを示す。なお、4.1.3 節で確認したように「V-終わる」「V-終わる」については、「非対格型」を成し得ないという主張 (岸本 2009, 2013) もあり、「V-終わる」「V-終わる」の「非対格型」を想定すべきかは、今後更なる議論が必要である。このことから、本節では、動作主性を伴う「V-終わる」「V-終わる」のみを議論の対象とする。

まず、本研究は「V-終わる」の拡大事象投射構造が、下の (4.42) のような拡大事象投射構造 (包括的順序部分関係 ( $[e_1 e_2 < e_3]$ )) を成していると提案する。(4.42) の拡大事象投射構造は、2.5.3 節で確認した、(2.47)「毒殺する」、(2.49)「設立する」が成す拡大事象投射構造と基本的に同様であり、「働きかけ」( $e_2$ )と「変化」( $e_3$ )の下位事象が同期的な構造を成していないという特徴がある ( $e_2$  は [+den],  $e_3$  は [-den],  $e_2, e_3$  は個々に異なる終局点 ( $[bdby^+]$ ) によって限界づけがなされている)。(4.42)  $e_3$  2 段目では、終局点 ( $[END], [t_i]$ ) によって限界づけられているが、これらは、「V-終わる」が語彙的に含意している事象の終了局面を表すものと想定する。さらに、「V-終わる」においては、「(\*10 分間 / 10 分間かけて) 食べ終わった。」のように、稼働期間修飾句のみが共起することから、「V-終わる」が含意する終局点はタイプ B であると考え (cf. 3 章)。

(4.42) で提案した「V-終わる」の拡大事象投射構造と (2.47)「毒殺する」、(2.49)「設立する」が成す拡大事象投射構造で異なる点は、(4.42) では、 $e_2$  1 段目において、V1 の事象投射構造 ([V1 EVENT]) が補文として組み込まれていることである ( $e_3$  1 段目においても、“ $\alpha$ ” によって [V1 EVENT] 項が束縛されていることが表されている)。また、(4.42) の  $e_3$  1 段目では、 $[_{Space/Prop} 0d]$  の表記があるが、これは補文として組み込まれる V1 の事象投射構造に合わせて、空間項 ([Space]) か特徴項 ([Prop]) が決められることを表す。さらに、森山 (1988: 145) などは、「V-終わる」の使用において、「あらかじめ設定された終結点」

が必要だと指摘している。このことから、(4.42) で組み込まれる [V1 EVENT] 項には [+b], [bdby<sup>+</sup>] を表記し、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は出力に終局点によって限界づけられた限界的な素性を含んでいなければならないものとする。

(4.42) 「V-終わる」の拡大事象投射構造（包括的順序部分関係）



他にも、[V1 EVENT] 項に表記している [1d] は、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は出力に [1d] を含んでいなければならないことを表す。また、[V1 EVENT] 項に表記している AFF ([X]) によって (4.42) に補文として組み込まれる V1 事象は、動作主性を伴うものでなければならないことを表す ([V1 EVENT] の AFF ([X]) と (4.42) e<sub>2</sub> の AFF ([X]) の項は同定されると考える)。これらのことから、事象投射構造の出力に [0d] を持ち、且つ動作主性を伴わない一回的な「変化 (到達)」事象 (e.g. 死ぬ) は V1 事象として (4.42) に組み込まれないことになる (cf. \*死に終わる)。なお、(4.42) へ補文として組み込むための V1 事象投射構造への強制は原則認められないと本研究は考え、この制約は、後の「V-終わる」「V-始める」「V-続ける」でも同様だと考える。すなわち、「走る」などの元々非限界的な (拡大) 事象投射構造 (cf. 2.5.3 節 (2.46) など) に強制として限界化関数 (COMP) を適用し、限界化を行った上で (4.42) へ組み込むことはできないと考える (cf. ?? 走り終わる)。<sup>46</sup>

<sup>46</sup> 2.2 節 (2.16) (後の (4.52) で再掲) などで確認した例では、「V-終わる」が、両義的限界性を表す「食べる」「(タバコを) 吸う」「飲む」のような「消費動詞」(岩本 2008, 2010 など) と複合動詞を形成している。他にも「東海道を歩き終わる」「論文を読み終わる」のように、両義的限界性を表す「経路動詞」(岩本 2008, 2010) とともに「V-終わる」は複合動詞



次に、本研究が「V-終わる」の拡大事象投射構造に提案する「包括的順序部分関係」と「V-終わる」に見られる機能的特徴の関係について述べる。岩本 (2008) は、「包括的順序部分関係」を成す事象においては、「働きかけ」( $e_2$ )と「変化」( $e_3$ )が同時に進行することはないと主張し、オンセット使役 (丸田 1998 など) を表す動詞などが含意する拡大事象投射構造であることを指摘している。岩本 (2008) が指摘する「包括的順序部分関係」を成す事象の特徴を踏まえて、2.2 節 (2.17) (下の (4.43) に再掲) で確認した用例を見ると、「V-終わる」と「V-終わる」の間に見られる使用制約の違いが、拡大事象投射構造のタイプの違いを反映している可能性が考えられる。

(4.43) (=2.17, 4.41)

「太郎がデータをクラウドにアップロードするために PC で一連の操作を行った。アップロードに時間がかかっており、いったん席を外した後戻ってきて、アップロードの状況を確認した場面」

花子：データ {上げ終わった / ??上げ終えた} ?

太郎：うん、{上げ終わった / ??上げ終えた}。 (筆者作例)

(4.43) で表される「クラウドにデータを上げ終わる」という事象は、「働きかけ」(アップロードするための操作)の完了後に、「変化」(クラウドへのアップロード完了)が成立するという、オンセット使役タイプの事象であると考えられる。さらに、(4.43)では、「働きかけ」後にいったん席を離れ、その後「変化」を確認するという、「働きかけ」と「変化」の離隔性が強調されていると考えられる。このことから、(4.43)においては、下位事象間(「働きかけ」と「変化」)の同期的時間関係を要求しない拡大事象投射構造(包括的順序部分関係)を含意する「V-終わる」の使用が自然になると本研究は考える。

一方、(4.43)における「V-終わる」と「V-終わる」の特徴の違いを踏まえて、本研究は、「V-終わる」の拡大事象投射構造を下(4.44)のように提案する。(4.44)は、3.3.1 節 (3.25a)「(ドアを)閉める」(使役変化動作)の拡大事象投射構造と基本的に同様であり、下位事象が同期的時間関係を成しながら、終局点による限界づけも含意している構造(包括的終端同時重複部分関係( $[e_1 e_2 \circlearrowleft e_3]$ ))である。(4.44)で限界づけを行っている終局点のタイプや補文として組み込まれる[V1 EVENT]の特徴(素性)は(4.42)「V-終わる」と同様である。<sup>47</sup>ただし、(4.44)の「働きかけ」( $e_2$ )と「変化」( $e_3$ )の下位事象は同期的な

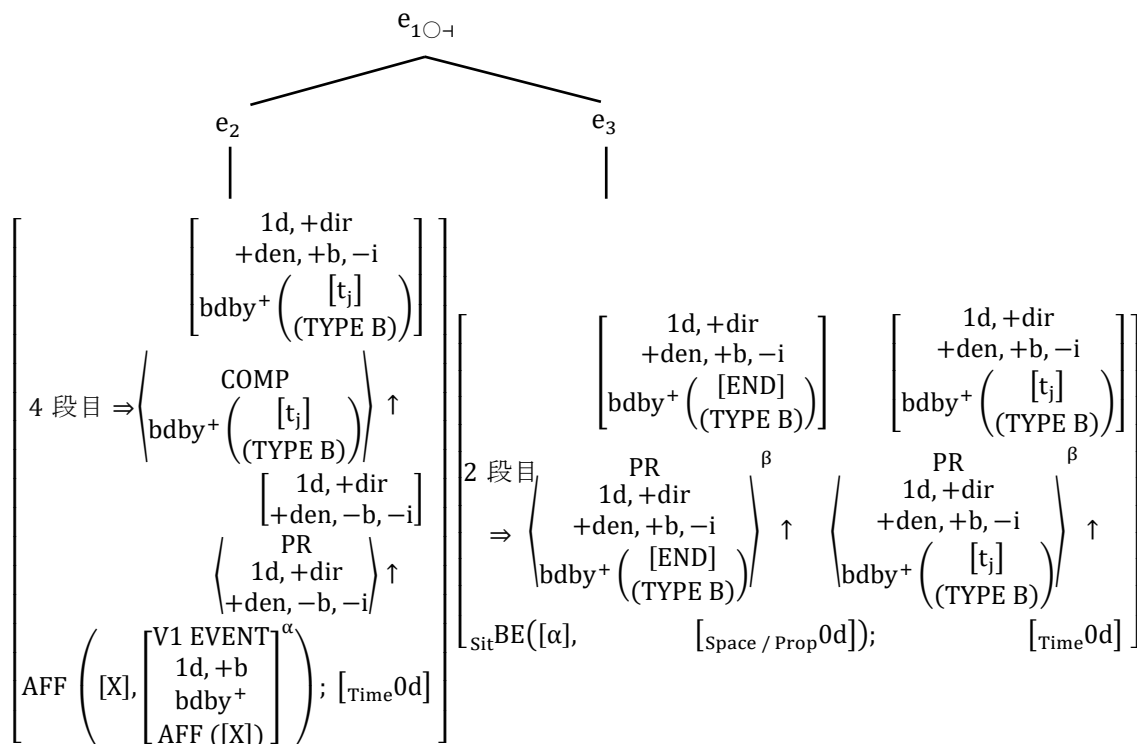
---

を形成し得ると考えられる。これらの両義的限界性を表す動詞の事象投射構造が[V1 EVENT] (補文)として(4.42)に組み込まれる場合には、2.5.5 節 (2.63), (2.67)のような「限界解釈」の事象投射構造(拡大事象投射構造としては、「包括的終端同時重複部分関係」( $[e_1 e_2 \circlearrowleft e_3]$ ) (cf. 2.5.5 節, 3.3.1 節))が選択されていると考えられる。

<sup>47</sup> 影山 (1993), 由本 (1997) は「V-終わる」が補文として取る事象は完了し得る事象でなければならないと指摘しており、「V-終わる」に対する森山 (1988) の主張と並行的である。また、「(\*10 分間 / 10 分間かけて) {食べ終わった / 食べ終えた}。」のように、期間修飾句

構造を成していることから  $e_2$  は  $e_3$  と同一の終局点 ( $[bdby^+]$ ) によって限界づけがなされており,  $e_3$  も  $e_2$  との事象合成により, 限界的な素性と終局点の情報 ( $[+b, bdby^+]$ ) を持った状態で「動き」( $[+den]$ ) を表すようになっている (cf.  $e_2$  の 4 段目,  $e_3$  の 2 段目)。

(4.44) 「V-終わる」の拡大事象投射構造 (包括的終端同時重複部分関係)



上で述べたように, (4.43) では, 「働きかけ」後にいったん席を離れ, その後「変化」を確認するという, 「働きかけ」と「変化」の離隔性が強調されていると考えられる。このことから, (4.44) 「V-終わる」の拡大事象投射構造が表す事象 (下位事象間 (「働きかけ」と「変化」) に同期的時間関係を想定すると (4.43) の状況 (事象) では調和が取りにくいいため, (4.43) では「V-終わる」の使用が不自然になると本研究は考える。一方で, (4.43) に類似した場面であっても, 太郎がクラウドへデータをアップロードするにあたって, ずっと PC の前でそのアップロード状況を管理しているような状況では, 「V-終わる」 (上げ終わる) の容認度が上がると考えられる。このような状況では, 「働きかけ」と「変化」が同期的に捉えられ, 「V-終わる」の拡大事象投射構造が表す事象との間で調和が取れやすくなるためだと考えられる。

(4.42) 「V-終わる」と (4.44) 「V-終わる」で提案した拡大事象投射構造の差異は, 下の (4.45), (4.46) の「V-終わる」「V-終わる」に「ている」を付加した際に見られる機能の成

---

のタイプによる, 「V-終わる」「V-終わる」との共起制約は, 3 章で論じた期間修飾句の適用に関する議論と基本的に同様であるため, 本節では, 当該の議論は取り上げない。

立状況の違いも説明できる。

(4.45) (=1.2, 2.11, 4.39)

- a. \*花子はデザートを食べ終わっているところだ。 (池谷 2003: 46)
- b. 花子はデザートを食べ終えているところだ。 (ibid: 47)

(4.46) (=2.12)

- a. \*壁画の最後の部分を塗り終わっている時、雨が降ってきた。 (ibid: 46)
- b. 壁画の最後の部分を塗り終えている時、雨が降ってきた。 (ibid: 47)

2.5.3 節, 3.3.1 節では、「ている」(CRS) などの相変換関数を適用する際の原則として、「相変換関数分配の原則」(下の (4.47) に 3.3.1 節で確認した修正版 (3.24) を再掲) を確認した。(4.47) の原則は、隣接関係 (CC) を成す事象以外では、上位事象 (e.g.  $e_1$ ) に適用された相変換関数は、下位事象間 (e.g.  $e_2, e_3$ ) に同期的に適用される必要があるという原則である。しかし、2.5.3 節で確認したように、下位事象がそれぞれ異なる事象投射構造を成している場合、「ている」(CRS) を下位事象間に同期的 (相同的) に適用できない。<sup>48</sup> そのような場合は、事象全体 ( $e_1$ ) を完了した事象 [EventX] として組み込んだ「パーフェクト」の事象投射構造 (下の (4.48) に再掲) に「ている」(CRS) が適用されることになる (岩本 2008)。すなわち、(4.42) 「V-終わる」の拡大事象投射構造は、下位事象がそれぞれ異なる事象投射構造 (包括的順序部分関係) を成しているため、「ている」(CRS) を下位事象間に同期的 (相同的) に適用できず (4.47) の原則に違反する。しかし、(4.42) の事象全体 ( $e_1$ ) を完了した事象 [EventX] として、(4.48) 「パーフェクト」の事象投射構造 (1 段目) に組み込んだ場合には、「ている」(CRS) を適用 (cf. (4.48) 4 段目) することができるため、「V-終わる」に「ている」を付加した「V-終わっている」では、可能であるとすれば「パーフェクト」解釈のみが成立すると本研究は説明する。

(4.47) (=3.24)

「相変換関数分配の原則」(修正版)

2 つの下位事象  $e_2, e_3$  によって構成される  $e_1$  に適用する相変換関数は、 $e_2, e_3$  に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。ただし、 $e_2$  あるいは  $e_3$  の成立がもう一方に依存しない場合、その何れかを削除し、他方に相変換関数を適用することができる。 (岩本 2015: 196)

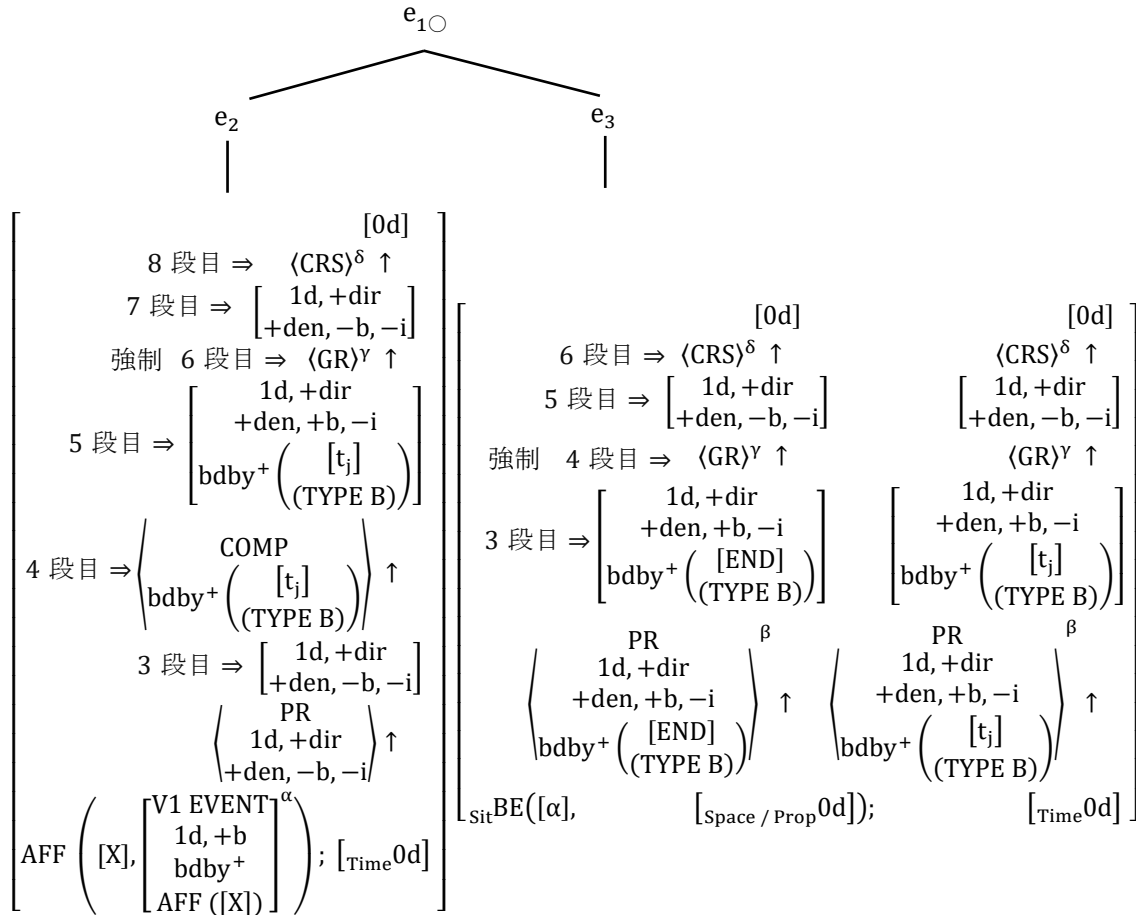
---

<sup>48</sup> 下位事象間が非同期的な構造を成していても、特定の相変換関数の適用においては、一連の強制により、拡大事象投射構造の変更が起こり、相変換関数を下位事象間に同期的に適用できるようになるプロセスを 3.3.2 節で提案した。



直後では、機能的に異なる構造 (cf.  $e_3$  の 3 段目と 5 段目) となっていることから, (3.12) 「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」の観点からも空虚な情報が作り出されず, (4.49) が適格な構造になると考える。<sup>50</sup>

(4.49) 「V-終わっている」の拡大事象投射構造 (「進行中」解釈)



本節の最後に, 2.2 節などで確認した, 様態副詞「ゆっくり」と「V-終わる」の関わりについて論じる。本来的に「変化 (到達)」を表す事象であっても, 「ゆっくり」のような「様態副詞」と共起することによって, 下の (4.50) のように「ている」が「進行中」を表すようになることが知られている (工藤 1982a, b, 1995; 森山 1988; 岩本 2008 など)。しかし, (4.51) では, 様態副詞が共起しているにもかかわらず, (4.50) のような「進行中」の解釈は困難であると考えられ, 「ゆっくり V-終わっている」は可能だとすれば「パーフェクト」の解釈のみが成立する。なお, (4.52) から「V-終わる」自体は様態副詞と共起できることがわかる。

<sup>50</sup> 従来の岩本 (2008) では, (4.49) のような構造を提案しているものの, 他の議論 (cf. 3.1.1 節, 3.3.1 節) と合わせて考えると, なぜ (4.49) のような構造が適格と判断できるのか不明なままであった。

(4.50) (=2.14)

木がゆっくり倒れている。

(岩本 2008: 248 (筆者下線))

(4.51) (=2.15)

- a. \*?残りの料理をゆっくり食べ終わっている最中に、電話が鳴った。
- b. \*?煙草をゆっくり吸い終わっている時に、雨が降ってきた。

(筆者作例)

(4.52) (=2.16, 2.24)

- a. 外では電車到着のアナウンスが聞こえてますが、一本遅らせてゆっくり食べ終わりました。(『食べログ「ロコミ」』(筆者下線))
- b. ところがそんなにせきこんで竿を出したって、すぐ釣れることなんかまずありません。結果においては煙草の一本ぐらいゆっくり吸い終わったって同じことなんですが、(後略) (『行雲流水記(随想編)』(筆者下線))
- c. (前略)、すぐ目の前を阿部巡査が、自転車で走って通った。それをやりすごし、茶をゆっくり飲み終わってから、五十嵐は駐在所へ行った。

(『針の島』(筆者下線))

(4.50) と (4.51) の間に見られる「ている」機能の成立状況の違いについても、本節で提案した (4.42) 「V-終わる」の拡大事象投射構造によって説明できると考えられる。(4.50) のような「移行」に関する議論は、2.5.1 節、2.5.2 節、3.1.1 節で確認したが、概略を述べると、岩本 (2008, 2021) は、様態副詞「ゆっくり」の事象投射構造を下の (4.53) のように提案している。

(4.53) (=2.36b, 3.4b)

「ゆっくり」の事象投射構造

(岩本 2008: 139, 249 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \\ \left[ \begin{array}{c} \text{ゆっくり} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \\ \left\langle \begin{array}{c} PR \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right\rangle^{\alpha} \uparrow \end{array} \right] \\ \left[ \begin{array}{c} \text{BE}([\text{ThingX}], \\ [\text{Space}0d]); \\ [\text{Time}0d] \end{array} \right]$$

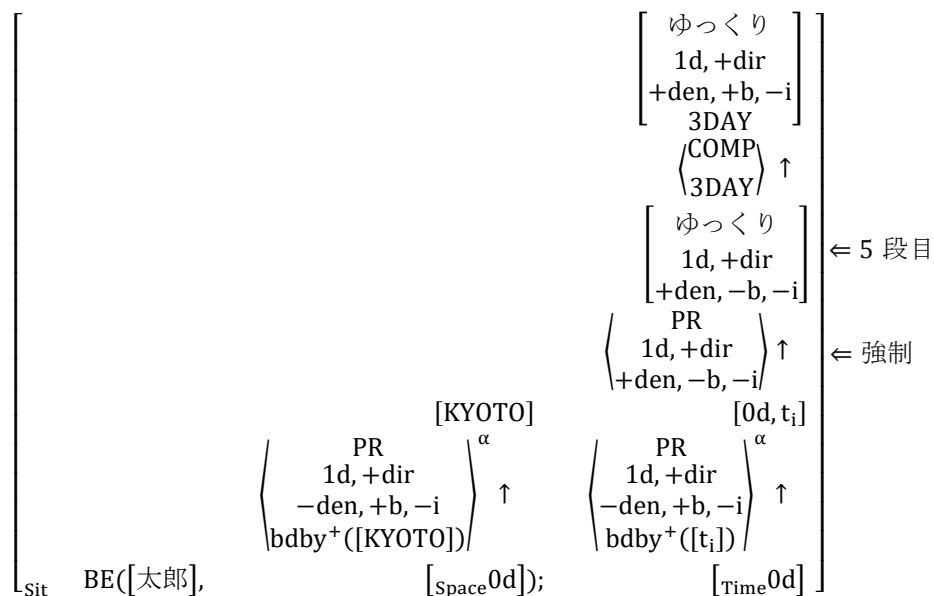
そして、本来的に「変化(到達)」を表す事象 (e.g. 倒れる) が、様態副詞 (e.g. ゆっくり) と共起することによって、「変化(到達)」事象で指定された限界的な素性と終局点の情報 ([+b, bdbyp<sup>+</sup>]) を持った状態で、連続的な「動き」([+den]) を表す「達成」の事象投射構造を成すようになる。さらに、「達成」の事象投射構造に「ている」(CRS) を適用し、強制 (GR) 後の時間項と空間項 (特徴項) に存在する [1d, +dir, -b] 素性が、並行的に 0 次元 (状態) 化されることで、「ている」の「進行中」が成立することになる (cf. 2.5.2 節

(2.41), 3.1.1 節 (3.5b))。

(4.53) で提案されている「ゆっくり」の事象投射構造では、時間項と空間項が構造保持束縛されている。しかし、岩本 (2008: 159~160) は、3.1.1 節 (3.1) で確認した、「#太郎がゆっくり 3 日間京都に行った。」という文において、「3 日間」と「ゆっくり」が共に「3 日間京都でゆっくりした」という状態を修飾する解釈のみ可能であると主張している。そのような解釈が成立する事象投射構造は、3.1.1 節 (3.10) (下の (4.54) に再掲) で提案したように、「3 日間」と「ゆっくり」が、太郎が [KYOTO] に行く (着く) という変化後の連続的時間を修飾する構造になると考えられる。すなわち、(4.53) 「ゆっくり」の事象投射構造では、時間項と空間項の構造保持束縛は任意であり、(4.54) 5 段目のように、時間項のみに「ゆっくり」を単一化させることが可能だと考えられる。

(4.54) (=3.10)

「太郎がゆっくり 3 日間京都に行った」の事象投射構造 (状態解釈)



(4.50)~(4.52) へ議論を戻すと、「V-終わる」は、様態副詞と共に起できる (cf. (4.52)) が、(4.50) 「ゆっくり倒れている」のような移行は起こらず、「ている」を付加した「ゆっくり V-終わっている」は、依然として「パーフェクト」のみを成立させる。これは、「ゆっくり」の事象投射構造が「V-終わる」の拡大事象投射構造と下の (4.55) のように単一化するためだと本研究は提案する (cf.  $e_2$  の 5 段目)。(4.42) で提案したように、「V-終わる」の拡大事象投射構造は、「働きかけ」( $e_2$ ) と「変化」( $e_3$ ) の下位事象が同期的な構造を成していない。このことから、(4.55) では、「ゆっくり」が「働きかけ」( $e_2$ ) の下位事象 (時間項) とのみ単一化し、「V-終わる」の拡大事象投射構造のタイプ (包括的順序部分関係) 自体は変更されないと考えられる。そのため、(4.51) では「V-終わる」に「ゆっくり」が共起していても、「ている」を付加した場合、(4.47) の原則に違反しない「ている」(CRS)





の事象投射構造について論じる。

#### 4.2.2. 「V-始める」

本節では、(4.1)「RQ2: 「V-始める」は「過程」を含意しており「ている」を付加した際にも「進行中」を成立させると考えられるが、期間修飾句が過程期間を表せない要因はどのように分析できるか?」について議論を行う。本節の結論を先に述べると、本研究は「V-始める」が「始局点」と「具体的に規定することができない終局点」の情報によって限界づけられているという事象投射構造を提案する。そして、3章で提案した、期間修飾句の関数 (COMP) とその適用制約によって (4.1) RQ2 を議論できると提案する。

「V-始める」に見られる諸特徴については、2.2 節～2.4 節などで確認したが、2.3 節の森山 (1988), 2.4 節の中村 (2001) による研究 (分析枠組み) で統一的な議論ができなかった用例として、下の (4.56)～(4.58) がある。(4.56) では、「ている」が「進行中」を成立させていると考えられ (池谷 2003), (4.57) では、時間的な幅 (過程) を含意する動詞とのみ結びつくことができる付帯状況を表す「ながら」(庵他 2000, 2001) が「V-始める」と共起している。すなわち、(4.56), (4.57) から考えると「V-始める」は「過程」を含意していることになる。しかし、「V-始める」は (4.58) のように期間修飾句を付加することができず、具体的な過程の期間を表すことができない。本節では、「V-始める」の事象投射構造を提案した上で、特に (4.56) と (4.58) について議論を行う。

(4.56) (=2.5, 2.25)

- a. 花子はデザートを食べ始めているところだ。 (池谷 2003: 46)
- b. 険しいその絶壁の下をすれすれに通過したが、そこでは、ちょうどカラスの群れが夜の眠りから目を覚まし、カモメは餌を探し始めている最中だった。  
(『蝦夷地の中の日本』(筆者下線))

(4.57) (=2.26, 2.33)

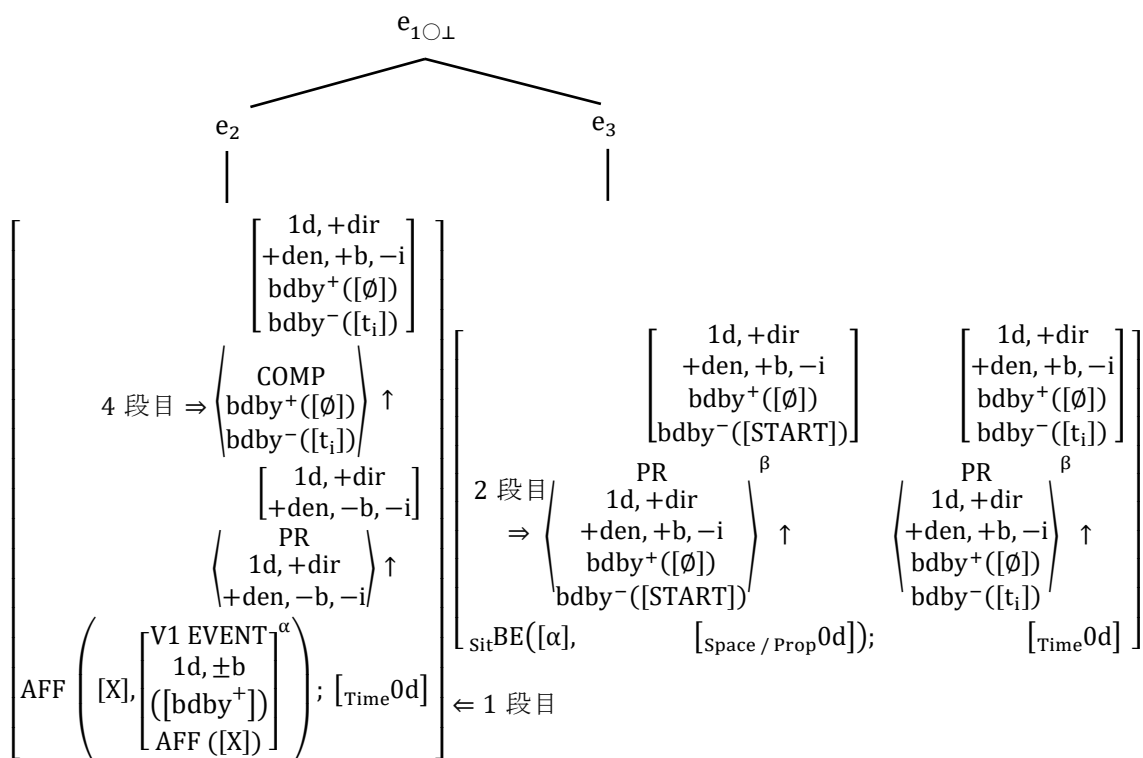
俺は神経痛なんだ。青森まで歩けるかよ。熱気に蒸れ返ったボックスを出ると再び歩き始めながら彼は呟いた。 (『短い旅』(筆者下線))

(4.58) \*花子はデザートを{10分間/10分間かけて}食べ始めた。 (筆者作例)

先ず、本研究は動作主性を伴う「V-始める」の拡大事象投射構造が、下の (4.59) のような拡大事象投射構造  $[[e_1 e_2 \circ_{\perp} e_3]]$  を成すと提案する。(4.59) の特徴として、(4.59) の  $e_3$  2 段目では、始局点 ([START],  $[t_i]$ ) によって限界づけられているが、これらは、「V-始める」が語彙的に含意している事象の開始局面を表すものだと考える。さらに、 $e_3$  2 段目では、始局点以外にも、終局点の情報が明記されている。金水 (2000: 74) は「V-始める」が事象の開始局面を表す (動作の開始の部分を取り出す) ことを指摘した上で、「V-始める」の終了は特に決められないと指摘しており、「V-始める」が表す開始局面の時間的な幅の

長さ（過程の期間）は具体的に規定できないことが示唆されている。このような「V-始める」の特徴を事象投射理論の枠組みで議論するために、本研究は、「V-始める」の拡大事象投射構造が始局点の情報以外に、「具体的に規定することができない終局点 ([bdby<sup>+</sup>([∅])) の情報」を語彙的に含意していると提案する。また、(4.59) の「働きかけ」(e<sub>2</sub>) と「変化」(e<sub>3</sub>) の下位事象は同期的な構造を成していることから e<sub>2</sub> は e<sub>3</sub> と同様の始局点 ([bdby<sup>-</sup>) と終局点 ([bdby<sup>+</sup>) の情報によって限界づけがなされている (cf. e<sub>2</sub> の 4 段目)。すなわち、(4.59) の「V-始める」の構造では、下位事象が同期的時間関係を成しながら、始局点 ([START], [t<sub>i</sub>]) と具体的に規定することができない終局点 ([bdby<sup>+</sup>([∅])) の情報によって限界づけられていると提案する (e<sub>1</sub> に記されている「⊥」は、始局点と終局点によって事象が限界づけられていることを表すものとする)。<sup>51</sup>

(4.59) 「V-始める」の拡大事象投射構造



(4.59) では、4.2.1 節で確認した、(4.42) 「V-終わる」、(4.44) 「V-終わる」の拡大事象投射構造と同様、e<sub>2</sub> 1 段目において、V1 の事象投射構造 ([V1 EVENT]) が補文として組み込まれている。また、(4.42), (4.44) と同様に、(4.59) に補文として組み込まれる V1 の事象投

<sup>51</sup> 岩本 (2008) では、始局点と終局点によって同時に限界づけられている拡大事象投射構造は提案されていないが、「京都から東京に行く」(岩本 2008: 134) などの「変化」の事象投射構造においては、始局点と終局点によって同時に限界づけられていると提案されている。

射構造は、出力に [1d] を含み動作主性 (AFF ([X])) を伴う事象でなければならないことが表されている。一方で、(4.42) 「V-終わる」、(4.44) 「V-終わる」とは異なり、(4.59) で組み込まれる [V1 EVENT] 項には、[±b] と括弧付きの ([bdby<sup>+</sup>]) 表記がなされている。[±b] は、(4.59) に補文として組み込まれる V1 の事象投射構造が「太郎が歩く」のような非限界的 ([-b]) なものであってもよいし (cf. 太郎が歩き始めた), 「太郎がポスターを貼る」のような限界的 ([+b]) なものであってもよいことを表す (cf. 太郎がポスターを貼り始めた)。さらに、括弧付きの ([bdby<sup>+</sup>]) は、限界的な V1 の事象投射構造が (4.59) に組み込まれる場合においては、その事象は終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけられていなければならないことを表す。これは、次節で確認する「維持」を「V-始める」が表せないという制約 (森山 1988) を議論する際に重要になる。

次に、4.1.2 節、4.1.3 節では、「V-始める」が「非対格型」を成すことを確認したが、本研究は、「非対格型」を成す「V-始める」の事象投射構造に下の (4.60) を提案する。(4.60) の事象投射構造は (4.59) の e<sub>3</sub> と基本的に同様である。(4.59) と (4.60) で異なるのは、(4.60) では「働きかけ」(動作主性) を表す下位事象が無く、(4.60) の 1 段目に補文として組み込まれる [V1 EVENT] 項にも AFF ([X]) が表記されておらず、V1 の事象投射構造が動作主性を伴わなくてもよいという点である。一方で、[V1 EVENT] 項には、(4.59) と同様、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は、出力に [1d] を含んでいなければならないことが表されており、一回的な「変化 (到達)」事象 (e.g. 死ぬ, 倒れる) は V1 事象として (4.60) に組み込まれないことになる (cf. \*看板が倒れ始めた)。しかし、(4.60) に組み込まれる V1 の事象投射構造においては、動作主性を伴わなくても、出力に [1d] を含んでいればよいことから、「次々に看板が倒れた」のように「変化 (到達)」が複数事象化された場合は、(4.60) に補文として組み込まれ得る (cf. 次々に看板が倒れ始めた)。

(4.60) 「V-始める」の事象投射構造 (非対格型)

$$\left[ \begin{array}{c} \text{sit} \\ \text{BE} \left( \begin{array}{c} \text{[V1 EVENT]} \\ 1d, \pm b \\ ([bdby^+]) \end{array} \right), \leftarrow 1 \text{ 段目} \right. \\ \left. \begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\emptyset]) \\ bdby^-([START]) \end{array} \\ \text{PR} \end{array} \\ \begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\emptyset]) \\ bdby^-([START]) \end{array} \\ \alpha \end{array} \\ \begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\emptyset]) \\ bdby^-([t_i]) \end{array} \\ \text{PR} \end{array} \\ \alpha \end{array} \right. \\ \left. \begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\emptyset]) \\ bdby^-([START]) \end{array} \\ \uparrow \end{array} \\ \begin{array}{c} \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, +b, -i \\ bdby^+([\emptyset]) \\ bdby^-([t_i]) \end{array} \\ \uparrow \end{array} \end{array} \right] \\ \left[ \text{Space / Prop}0d \right]; \quad \left[ \text{Time}0d \right] \end{array} \right]$$

下の (4.61) には「倒れる」の事象投射構造 (4.61a) と、複数事象 (配分) 化された「次々に倒れる」の事象投射構造 (4.61b) を提示する。一回的な変化を表す (4.61a) の事象投射構造は、[0d] が出力されているため (cf. 3 段目), (4.60) [V1 EVENT] の項 (cf. 1 段目)

に組み込むことはできない。一方、(4.61b) では、「次々に」(PL) によって、複数事象化されることで、[1d] が出力されており (cf. 5 段目, 2.5.4 節), (4.60) に補文として組み込むことができるようになると思う。

(4.61) a. 「倒れる」の事象投射構造 (岩本 2008: 249 (表記一部変更))

$$\left[ \begin{array}{c} \text{[HORIZONTAL]} \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[HORIZONTAL]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \left[ \begin{array}{c} \text{[0d, t}_i\text{]} \leftarrow \text{3 段目} \\ \text{PR} \\ \text{1d, +dir} \\ \text{-den, +b, -i} \\ \text{bdby}^+(\text{[t}_i\text{]}) \end{array} \right]^\alpha \uparrow \\ \text{[sit BE([ThingX], [Space0d]); [Time0d]]}$$

b. 「(次々に) 倒れる」の事象投射構造

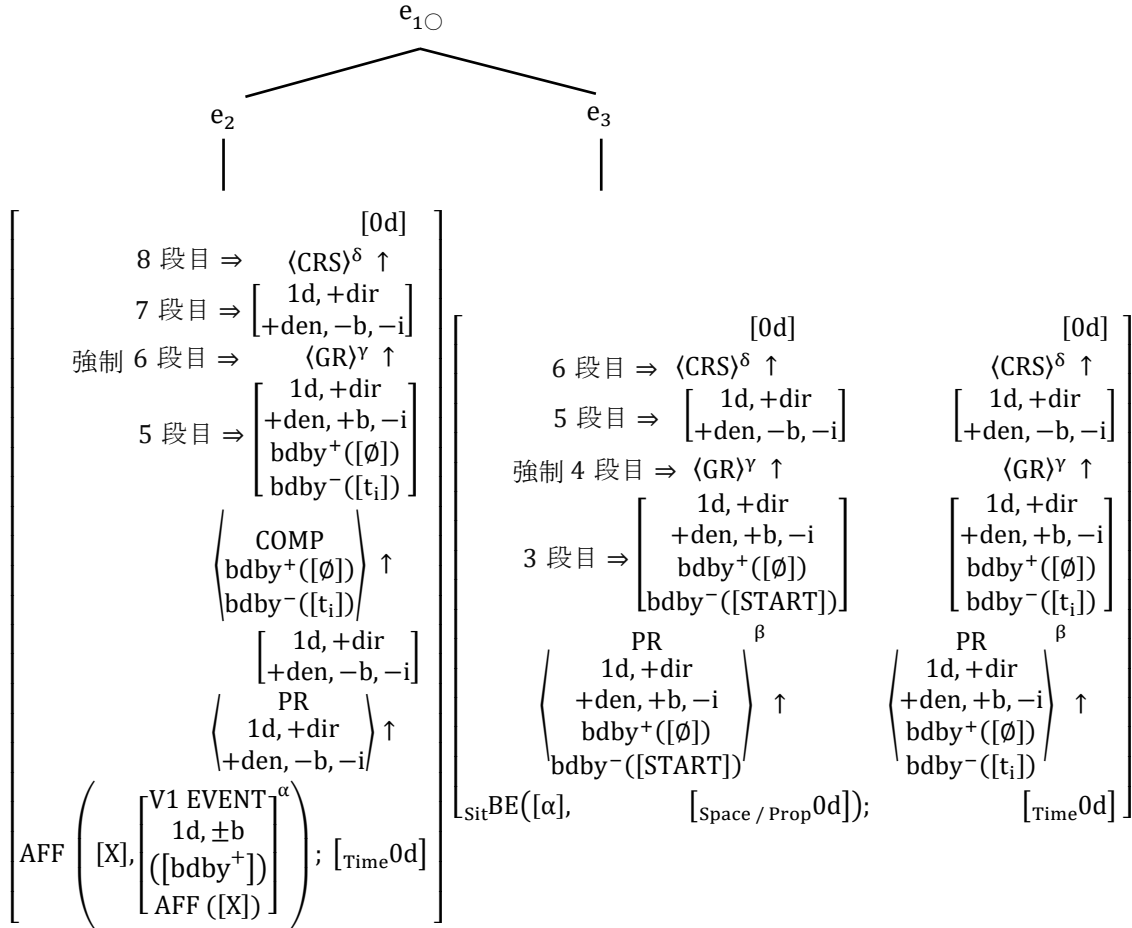
$$\left[ \begin{array}{c} \text{[1d, +dir, -b, +i]} \quad \text{[-b, +i]} \quad \text{[1d, +dir, -b, +i]} \leftarrow \text{5 段目} \\ \left\langle \text{PL} \right\rangle^\beta \uparrow \quad \langle \text{PL} \rangle^\beta \uparrow \quad \langle \text{PL} \rangle^\beta \uparrow \\ \text{[1d, +dir, +b, -i]} \quad \text{[HORIZONTAL]} \quad \text{[1d, +dir, +b, -i]} \quad \text{[0d, t}_i\text{]} \\ \left\langle \text{PR} \right\rangle^\alpha \uparrow \quad \left\langle \text{PR} \right\rangle^\alpha \uparrow \\ \text{[sit BE ([ThingX] [Space0d]); [Time0d]]} \end{array} \right]$$

以下では「V-始める」の事象投射構造への「ている」(CRS) の適用と期間修飾句 (COMP) の適用について議論していく。なお、以下の議論は (4.59) の拡大事象投射構造と (4.60) 事象投射構造でも基本的に同様であるため、(4.59) への「ている」(CRS) と期間修飾句 (COMP) の適用を例に議論を進めていく。

(4.56), (4.58) では、「V-始める」においては「ている」を付加して「進行中」を表すことができるものの、期間修飾句は付加できないことを確認した。下の (4.62) は、(4.59) に「ている」(CRS) を適用した拡大事象投射構造であり、「ている」(CRS) の適用プロセスとしては、(4.49) 「V-終えている」の拡大事象投射構造と基本的に同様である。(4.62) では、 $e_2$  の 5 段目までと、 $e_3$  の 3 段目までが「V-始める」の拡大事象投射構造となる (cf. (4.59))。「V-始める」の拡大事象投射構造では、元々限界的な素性と始局点及び終局点 ([+b, bdby<sup>-</sup>, bdby<sup>+</sup>]) の情報が含まれていることから (cf.  $e_2$  の 5 段目,  $e_3$  の 3 段目), 「ている」(CRS) を直接適用することはできない。そこで、CRS の適用は、 $e_2$  の 6 段目,  $e_3$  の 4 段目で、強制によって非限界化関数 (GR) を導入し限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) をした後に可能になる。強制の結果、 $e_2$  の 7 段目,  $e_3$  の 5 段目では、限界的な素性と始局点及び終局点の情報を含まない [1d, +dir, -b] 素性が出力されるようになり、 $e_2$  の 8 段目,  $e_3$  の 6 段目で時間項に「ている」(CRS) が適用できるようになる。そして、時間項と空間項 (特徴項) に存在する [1d, +dir, -b] 素性が、並行的に 0 次元 (状

態) 化されることで、「ている」の「進行中」が成立することになる。

(4.62) 「V-始めている」の拡大事象投射構造 (「進行中」解釈)



次に、「V-始める」になぜ期間修飾句を適用できないかを議論していく。3.2節では、期間修飾句が表す修飾期間は終局点 ([bdbyp+]) の時間情報と始局点 ([bdbyp-]) の時間情報を利用して算出することを確認した。さらに、単純期間修飾句 (e.g. 「～間」) は、随意的な終局点 (タイプ A) の時間情報を修飾期間の計算に利用し、稼働期間修飾句 (e.g. 「～間かけて」) は、限界点としての終局点 (タイプ B) の時間情報を修飾期間の計算に利用すると提案した。(4.59) で提案した「V-始める」の拡大事象投射構造には、タイプ B 終局点 (「限界点」) の情報が存在しないことから、稼働期間修飾句 (3.2節 (3.16b)) の修飾期間は計算不能である。そのため、「V-始める」に期間修飾句を適用するとした場合、「限界点」以外を随意的な終局点として規定できるタイプ A 終局点の時間情報を利用する単純期間修飾句 (3.2節 (3.16a)) の適用可能性が考えられる。しかし、(4.58) で確認したように、「V-始める」にはそのような単純期間修飾句の適用も不可能である。下の (4.63) は、(4.59) に本研究が 3.2節で提案した単純期間修飾句の COMP (3.16a) を適用した拡大事象投射構造である。



(4.63) では、 $e_2$  の 5 段目までと、 $e_3$  の 3 段目までが「V-始める」の拡大事象投射構造となる (cf. (4.59))。まず、単純期間修飾句の概念構造 (3.16a) には限界化関数 (COMP) が想定されているため、(4.63) の事象投射構造に適用するためには、 $e_2$  の 6 段目と、 $e_3$  の 4 段目で強制によって非限界化関数 (GR) を適用し、限界性素性の変更 (非限界化 ([+b]→[-b])) が必要となる。しかし、そのような強制 (GR: 非限界化) を行い、「～間」の COMP (3.16a) を適用した場合、 $e_2$  の 6 段目と 8 段目、 $e_3$  の 4 段目と 6 段目で逆関数を連続適用する構造となり、逆関数を連続適用する直前 ( $e_2$  5 段目、 $e_3$  3 段目) と直後 ( $e_2$  9 段目、 $e_3$  7 段目) でも [1d,+dir,+den,+b,-i] 素性を持った機能的に同様の構造が作り出される。さらに、(4.59)「V-始める」が含意していると提案した、「具体的に規定することができない終局点 ([bdby+([∅])])」の情報は後続して適用された「～10 分間」(COMP) の計算にも利用されないことから、「情報の受け継ぎ」も起こらない。すなわち、3.1.1 節 (3.12)「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」の観点から、(4.63) では「具体的に規定することができない終局点 ([bdby+([∅])])」の情報が余剰的で無意味 (空虚) なものになってしまう。そして、そのような余剰的な情報が作り出された構造は 3.1.1 節 (3.13)「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則 (本研究の提案版)」に違反するため、単純期間修飾句 (3.16a) においても「V-始める」の過程期間を表すことができないと本研究は提案する。<sup>52</sup>

以上、本節では「V-始める」の (拡大) 事象投射構造を提案し、(4.1) RQ2 を議論できることを論じた。本研究は、(4.1)「RQ2: 「V-始める」は「過程」を含意しており「ている」を付加した際にも「進行中」を成立させると考えられるが、期間修飾句が過程期間を表せない要因はどのように分析できるか?」に対して「V-始める」は「始局点」と「具体的に規定することができない終局点」の情報によって限界づけられており、期間修飾句の関数 (COMP) を適用した場合、(3.12)「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」、(3.13)「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則 (本研究の提案版)」の観点から不適格な構造が作り出される。そのため、期間修飾句は「V-始める」の過程期間を修飾できないと回答する。次節では、「V-続ける」の事象投射構造について論じる。

#### 4.2.3. 「V-続ける」

本節では、(4.1)「RQ3: 「V-続ける」は「V-始める」「V-終わる」「V-終える」と異なり、「維持」を表すことができるが、その特徴はどのように分析できるか?」について議論を

<sup>52</sup> なお、「V-始める」の事象投射構造に元々存在している始局点の時間情報 [ $t_i$ ] 及び構造保持束縛されている [START] の情報に関しては、「～間」(単純期間修飾句) の修飾期間を計算する際に利用されるため、強制に伴い「～10 分間」の COMP に受け継がれ得ると考えられる。しかし、(4.63) では、いずれにしても「具体的に規定することができない終局点 ([bdby+([∅])])」の情報が空虚化されるため、3.1.1 節 (3.13) の原則から単純期間修飾句が「V-始める」を修飾できないと考える。

行う。本節の結論を先に述べると、(4.1) RQ3 は、4.2.1 節、4.2.2 節で提案してきた「V-終わる」「V-終わる」「V-始める」の拡大事象投射構造と本節で提案する「V-続ける」の拡大事象投射構造において、補文 ([V1 EVENT]) として組み込まれる限界的事象を限界づけているのが何かを指定する情報によって説明できることを提案する。なお、「V-続ける」は「主体変化維持」と「客体変化維持」を表すと森山 (1988) が指摘しているが、「主体変化維持」については事象投射理論でも具体的な事象投射構造が提案されておらず、今後更なる検証が必要な特徴も見られる。このことから、本節では「主体変化維持」については議論の対象とせず、以下では「客体変化維持」について論じる。<sup>53</sup>

「V-続ける」に見られる諸特徴については、2.2 節などで確認したが、「V-続ける」は「V-終わる」や「V-始める」と同様に、「ている」が「進行中」機能を成立させる (cf. (4.64))。一方で、「V-続ける」は、「V-終わる」、「V-終わる」、「V-始める」と異なり、動きの結果の保存が主体的に行われている局面である「維持」も表すことができると森山 (1988) が指摘しており、下の (4.65), (4.66b) では、「客体変化維持の続行」が表されている。さらに、(4.66) のように、動詞が「使役変化動作 (過程)」と「客体変化維持」の局面を同時に含意する場合、文脈によって同一の形式（「V-続ける (貼り続ける)」）で (4.66a) 「使役変化動作の続行」と (4.66b) 「客体変化維持の続行」が表されるようになる (森山 1988)。

(4.64) (=2.6)

- a. 花子はデザートを食べ続けているところだ。 (池谷 2003: 46)
- b. 私は再び霧のなかの道を、神々しいような薄光りに包まれながら、いくら歩いてもちっとも自分の体が進まないようなもどかしさを感じながら、あてもなく歩き続けていた。 (『美しい村』(筆者下線))

(4.65) (=2.8)

安井はお正月に知人からもらったこの新鮮な鯛を、別の角度から鮮やかな色彩で描いています。その後、再びこの鯛を描き始めた安井は、5 月までアトリエに置き続けました。はじめ赤々としていた鯛は、腐敗してすっかり「干物」になっていたといえます。 (『上原美術館』(筆者下線))

---

<sup>53</sup> 森山 (1988) は「V-始める」が「主体変化維持」「客体変化維持」を表さないと指摘している。確かに「客体変化維持」に関しては、強い制約があるように思えるが、「主体変化維持」に関しては、一部の研究 (Igarashi and Gunji (1999) など) では、「座り始める」のような表現 (Igarashi and Gunji (1999) では “Resultative”) が適格だと判断されており、「主体変化維持」と「客体変化維持」の間において、同程度ないし同一の制約が存在するのかは、更なる検討が必要だと考えられる。また、次章で詳しく確認するが、森山 (1988) が「使役変化動作 (過程)」と「主体変化維持」の局面を同時に含意する動詞の一つとして分類している「着る」などは、「主体変化維持」ではなく「結果持続」局面（「ている」と結びつくと「結果状態」になる局面）を含意しているという主張 (岩本 2015) もある。このような点からも、「主体変化維持」については、機会を改めて議論したい。



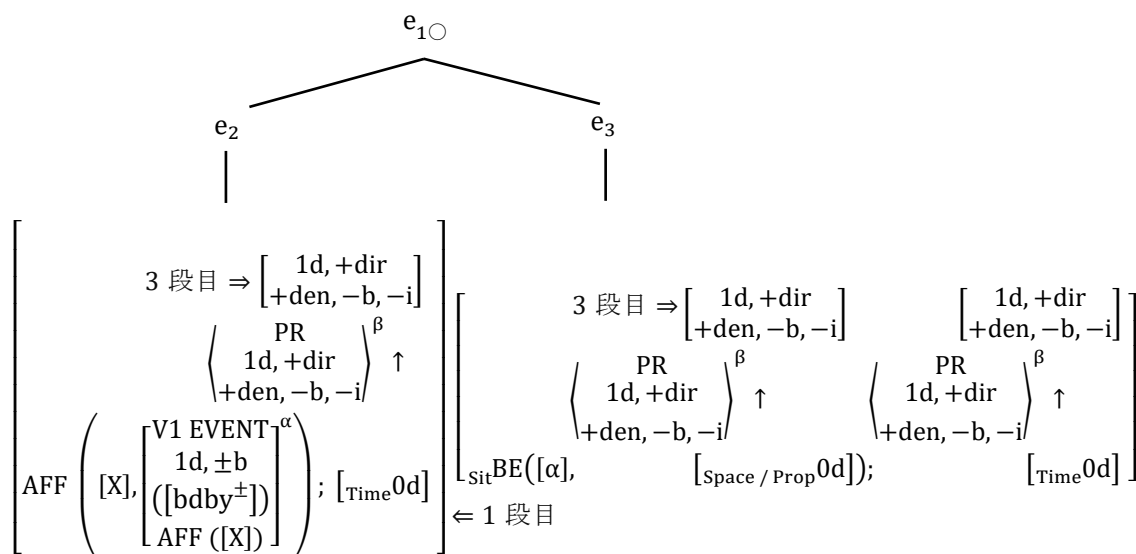
(4.66) (=2.9)

- a. 警備員が太郎を制止したが，太郎はポスターを壁に貼り続けた。
- b. 皆が太郎に早く剥がせと言ったが，太郎はポスターを壁に貼り続けた。

(筆者作例)

先ず，本研究は動作主性を伴う「V-続ける」の拡大事象投射構造が，下の (4.67) のような拡大事象投射構造（包括的重複部分関係  $([e_1, e_2 \circ e_3])$ ）を成すと提案する。

(4.67) 「V-続ける」の拡大事象投射構造



(4.67) は，前節までで提案した，(4.42)「V-終わる」，(4.44)「V-終わる」，(4.59)「V-始める」の拡大事象投射構造と同様， $e_2$  1 段目において，V1 の事象投射構造 ([V1 EVENT]) が補文として組み込まれている。また，(4.42)，(4.44)，(4.59) と同様に (4.67) に補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は，出力に [1d] を含み動作主性 (AFF ([X])) を伴う事象でなければならないことが表されている。一方で，(4.67) で組み込まれる [V1 EVENT] 項には， $[\pm b]$  と括弧付きの  $([bdby^\pm])$  表記がなされている。 $[\pm b]$  は，(4.67) に補文として組み込まれる V1 の事象投射構造が「太郎が歩く」のような非限界的 ( $[-b]$ ) なものであってもよいし (cf. 太郎が歩き続けた)，「太郎がポスターを貼る」のような限界的 ( $[+b]$ ) なものであってもよいことを表す (cf. 太郎がポスターを貼り続けた)。さらに，括弧付きの  $([bdby^\pm])$  は，限界的な V1 の事象投射構造が (4.67) に組み込まれる場合においては，その事象は始局点 ( $[bdby^-]$ ) と終局点 ( $[bdby^+]$ ) のいずれによって限界づけられていてもよいことを表す。

次に，4.1.2 節，4.1.3 節では，「V-続ける」が「V-始める」と同様「非対格型」を成すことを確認した。本研究は，「非対格型」を成す「V-続ける」の事象投射構造に下の (4.68) を提案する。

(4.68) 「V-続ける」の事象投射構造（非対格型）

$$\left[ \text{Sit} \quad \text{BE} \left( \begin{array}{c} \text{V1 EVENT} \\ 1d, \pm b \\ ([\text{bdby}^\pm]) \end{array} \right), \quad \leftarrow 1 \text{ 段目} \quad \left[ \text{Space / Prop} 0d \right]; \quad \left[ \text{Time} 0d \right] \right]$$

$$\left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right)^\alpha \uparrow \quad \left( \begin{array}{c} \text{PR} \\ 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right)^\alpha \uparrow$$

$$\left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right] \quad \left[ \begin{array}{c} 1d, +dir \\ +den, -b, -i \end{array} \right]$$

(4.68) の事象投射構造は (4.67) の  $e_3$  と基本的に同様である。(4.67) と (4.68) で異なるのは、(4.68) では「働きかけ」（動作主性）を表す下位事象が無く、(4.68) の 1 段目に補文として組み込まれる [V1 EVENT] 項にも AFF ([X]) が表記されておらず、V1 の事象投射構造が動作主性を伴わなくてもよいという点である。一方で、[V1 EVENT] 項には、(4.67) と同様、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は、出力に [1d] を含んでいなければならないことが表されており、一回的な「変化（到達）」事象（e.g. 死ぬ、倒れる）は V1 事象として (4.68) に組み込まれないことになる（cf. \*看板が倒れ続けた）。しかし、(4.68) に組み込まれる V1 の事象投射構造においては、動作主性を伴わなくても、出力に [1d] を含んでいればよいことから、「次々に看板が倒れた」のように「変化（到達）」が複数事象化された場合は、(4.68) に補文として組み込まれ得る（cf. 次々に看板が倒れ続けた）。変化事象の複数事象化については、前節 (4.61) と同様であるため、本節では取り上げない。<sup>54</sup>

次に (4.66) で確認したような、「V-続ける」と「客体変化維持」の関わりについて論じる。岩本 (2008) は「閉める・貼る」のような「維持」を表し得る動詞の事象構造では、「使役変化動作」( $e_2$ ) と「維持」( $e_5$ ) が下位事象として、変化の時点を接点とした (4.69) 「隣接関係」( $\supset c$ ) を成しているとし、それぞれの下位事象は (4.70) のように提案されている ((4.70) は「閉める」の拡大事象投射構造だが、「貼る」などの拡大事象投射構造も基本的に同様である)。さらに、「隣接関係」( $\supset c$ ) を成す事象においては、「ている」(CRS) などの相変換関数を適用する際、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) もしくは後接事象  $e_5$  (維持) のどちらかが削除され、一方の解釈（e.g. (3.22) 「進行中」vs. 「維持状態」）が

<sup>54</sup> 森山 (1988) は、下の (54.i) のような用例を非文と判断しているが、母語話者によっては容認可能だと判断する意見もあるようである。また、頻度も低く（cf. 動作動詞による用例は BCCWJ では 0 件、朝日新聞クロスサーチでは 1 件（2022 年 10 月検索））、無制限に成立するかは疑問であるが、(54.ii) のような表現も容認可能だと中村 (2001) で判断されている。(54.i), (54.ii) を容認可能だと判断する母語話者の場合、(4.67), (4.68) に組み込まれる [V1 EVENT] の出力が [0d] でもよい可能性が示唆され、これは語彙特性の個人差として捉えることができるかもしれない。(54.i), (54.ii) のような表現については、方言的な要素などを含めて今後更なる検証を行う必要がある。

(54.i) \*時計が止まり続ける。

(森山 1988: 142)

(54.ii) 読んでい続ける。

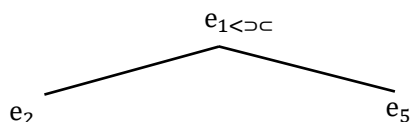
(中村 2001: 16)

指定されるようになると岩本 (2008, 2015) は分析している (cf. 3.3.1 節)。本研究は、「維持」を表し得る動詞が「V-続ける」と結びついた際に、文脈によって同一の形式で (4.66a) 「使役変化動作の続行」と (4.66b) 「客体変化維持の続行」が表されるようになる現象について、次のように説明する。V1 事象が隣接関係 (4.69) を成す場合においては、(4.67) 「V-続ける」に補文 ([V1 EVENT]) として組み込まれる際、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) と後接事象  $e_5$  (維持) のいずれかの拡大事象投射構造が組み込まれると提案する。そして、その組み込まれた下位事象のタイプによって、(4.67) 「V-続ける」が (4.66a) 「使役変化動作の続行」を表すのか、(4.66b) 「客体変化維持の続行」を表すのかが指定されると考える。

(4.69) (=3.23)

隣接関係

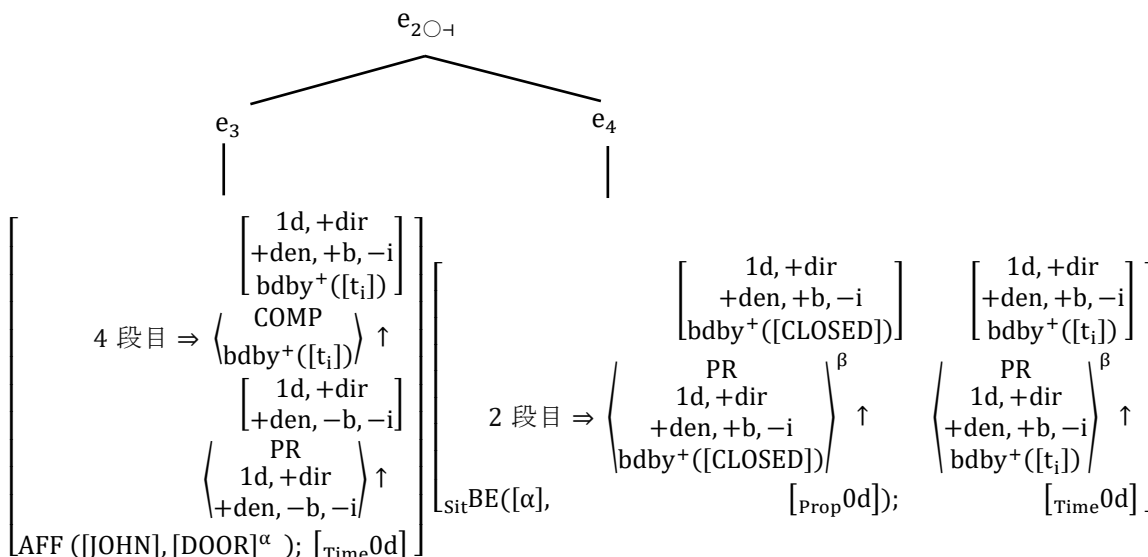
(岩本 2008: 230)



(4.70) (=3.25)

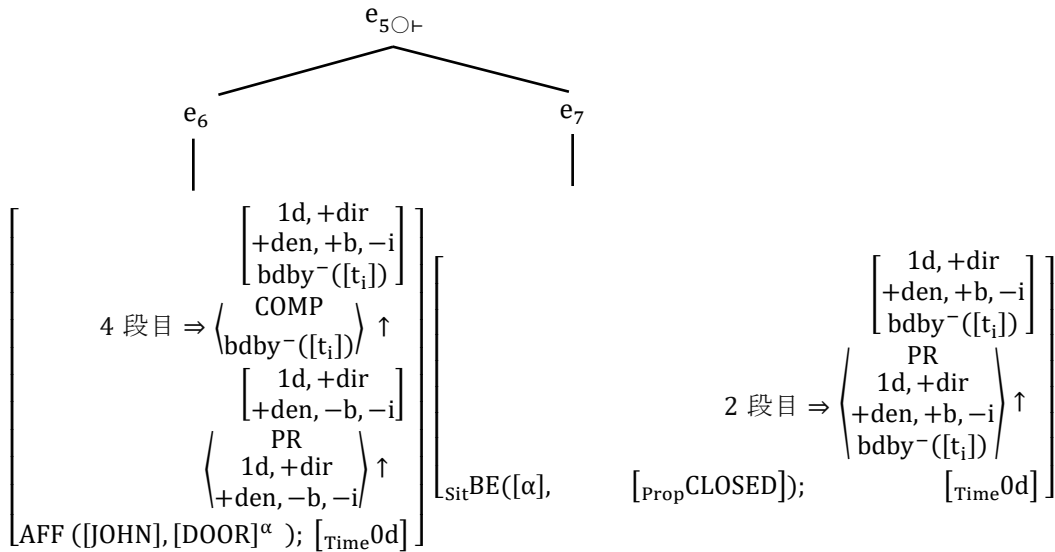
a. 「ジョンがドアを閉める」の拡大事象投射構造

(使役変化動作=包括的終端同時重複部分関係) (岩本 2008: 229 (表記一部変更))



b. 「ジョンがドアを閉める」の拡大事象投射構造

(維持=包括的始端同時重複部分関係) (岩本 2008: 229 (表記一部変更))



(4.69) 「隣接関係」を成す事象では、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) の「終局点」が後接事象  $e_5$  (維持) の「始局点」として隣接していることが想定されている。このことから、(4.70a) 前接事象  $e_2$  は終局点 ( $[bdby^+]$ ) によって限界づけられており、(4.70b) 後接事象  $e_5$  は始局点 ( $[bdby^-]$ ) によって限界づけられているという拡大事象投射構造が事象投射理論 (岩本 2008, 2015) では提案されている。4.2.1 節で提案した (4.42) 「V-終わる」、(4.44) 「V-終わる」の拡大事象投射構造では、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は出力に終局点 ( $[bdby^+]$ ) によって限界づけられた限界性素性 ( $[+b]$ ) を含んでいなければならないと指定していた。また、前節の 4.2.2 節で提案した (4.59) 「V-始める」の拡大事象投射構造では、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は限界的事象、非限界的事象のいずれでもよい ( $[\pm b]$ ) と指定していたが、限界的な事象が組み込まれる場合には、その事象は終局点によって限界づけられていなければならないことを括弧付きの ( $[bdby^+]$ ) によって指定していた。このことから、「V-始める」「V-終わる」「V-終わる」が (4.69) の下位事象を補文として組み込む場合、終局点 ( $[bdby^+]$ ) によって限界づけられている (4.70a) 前接事象  $e_2$  (使役変化動作) のみが組み込まれるようになる。実際に下の (4.71) では、(4.66) で確認した「V-続ける」に見られるような二義性は生じない。

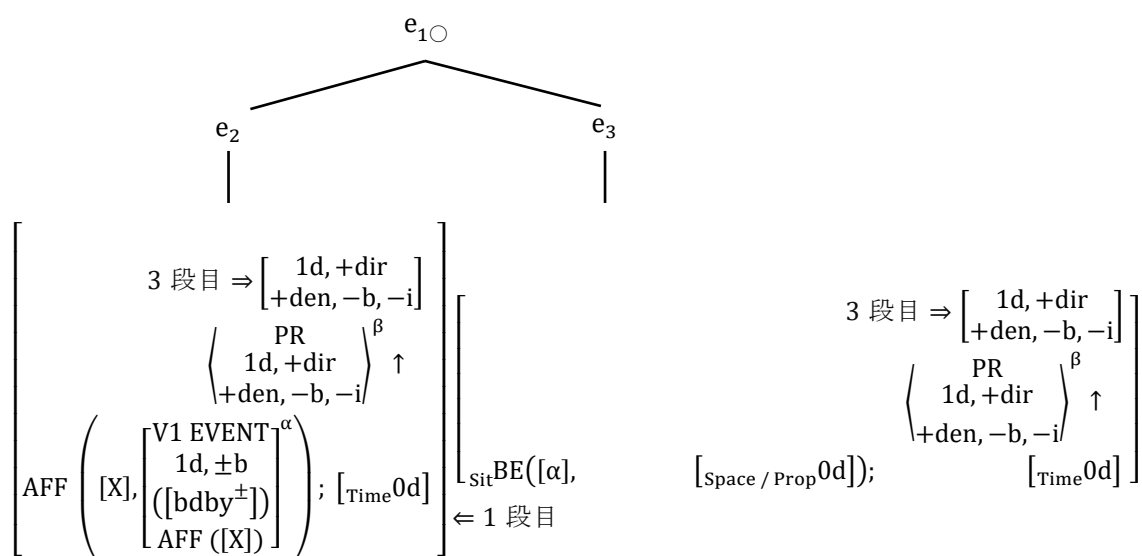
- (4.71) [使役変化動作 / \*客体変化維持] の {開始 / 終了}  
 太郎がポスターを壁に貼り {始めた / 終わった / 終えた}。 (筆者作例)

一方、(4.67) で提案した「V-続ける」の拡大事象投射構造では、補文として組み込まれる V1 の事象投射構造は限界的事象、非限界的事象のいずれでもよく ( $[\pm b]$ )、さらに、限

界的な事象が組み込まれる場合には、その事象は始局点と終局点のいずれによって限界づけられていてもよいことを括弧付きの ([bdby<sup>±</sup>]) によって指定していた。このことから、「V-続ける」においては、終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけられている (4.70a) 前接事象 e<sub>2</sub> (使役変化動作) だけでなく、始局点 ([bdby<sup>-</sup>]) によって限界づけられている (4.70b) 後接事象 e<sub>5</sub> (客体変化維持) も補文として組み込むことができる。そして、前接事象 e<sub>2</sub> が組み込まれた場合には、(4.66a) 「使役変化動作の続行」が成立し、後接事象 e<sub>5</sub> が組み込まれた場合には、(4.66b) 「客体変化維持の続行」が成立することになる。

なお、(4.70a) 「使役変化動作」の拡大事象投射構造では、特徴項 ([Prop]) と時間項 ([Time]) が構造保持束縛されて同時に投射されているが、(4.70b) 「客体変化維持」の拡大事象投射構造では、時間項 ([Time]) のみが投射されている。このことから、(4.70a) 「使役変化動作」の拡大事象投射構造が補文として、(4.67) に組み込まれた場合には、特徴項と時間項が構造保持束縛された構造が保持される。一方、(4.70b) 「客体変化維持」の拡大事象投射構造が組み込まれた場合には、「V-続ける」の拡大事象投射構造も下の (4.72) のように、時間項だけの投射に変更されると提案する。

(4.72) 「V-続ける」の拡大事象投射構造  
(客体変化維持の拡大事象投射構造が組み込まれた場合)



本節の最後に、「V-続ける」と「ている」、期間修飾句の関わりについて論じる。「使役変化動作の続行」と「客体変化維持の続行」を表す「V-続ける」には、下の (4.73) のように、「ている」を付加することができる。(4.73) における「ている」の基本義は (4.73a) 「進行中」と (4.73b) 「維持状態」であると考えられるが、試案的に (4.73a) を「使役変化動作続行の進行中」、(4.73b) を「客体変化維持の続行状態」と称してみる。(4.73a) は (4.67) の拡大事象投射構造 3 段目に「ている」(CRS) を適用し時間項と特徴項 (空間項) を 0 次元 (状態) 化した際に成立すると考えられる。また、(4.73b) は (4.72) の拡大事象

投射構造 3 段目に「ている」(CRS) を適用し、時間項を 0 次元 (状態) 化した際に成立すると考えられる。

- (4.73) a. 警備員に制止されたが、太郎はポスターを壁に貼り続けている。  
b. 皆が太郎に早く剥がせと言ったが、太郎はポスターを壁に貼り続けている。  
(筆者作例)

また、「牛井を食べる」のような消費動詞によって表される事象は、両義的限界性を表し得ることから下の (4.74a) のように、単純期間修飾句 (e.g. 「～間」) と稼働期間修飾句 (e.g. 「～間かかって」) のいずれも適用できる (cf. 2.5.5 節, 3.3.3 節)。しかし、そのような消費動詞によって表される事象であっても、(4.67) 「V-続ける」に組み込まれた後は、(4.74b) のように、稼働期間修飾句は共起できず、単純期間修飾句のみが共起可能になる。これは、(4.67) 「V-続ける」の拡大事象投射構造内には、タイプ B 終局点 (「限界点」) の情報が存在しないことから、稼働期間修飾句 (3.2 節 (3.16b)) の修飾期間が計算不能であるためである。すなわち、(4.67) 「V-続ける」の拡大事象投射構造には、「限界点」以外を随意的な終局点として規定できるタイプ A 終局点の時間情報を利用する単純期間修飾句 (3.2 節 (3.16a)) のみが適用できるため、(4.74b) のような期間修飾句の共起状況が生じると分析できる (期間修飾句の詳細な適用プロセスについては、3 章の議論を参照されたい)。

- (4.74) a. 太郎は {10 分間 / 10 分間かかって} 牛井を食べた。  
b. 太郎は {10 分間 / \*10 分間かかって} 牛井を食べ続けた。  
(筆者作例)

以上、本節では「V-続ける」の (拡大) 事象投射構造を提案し、(4.1) RQ3 を議論できることを論じた。また、「V-続ける」と「ている」(CRS) 及び、期間修飾句の関わりについても論じた。本研究は、(4.1) 「RQ3: 「V-続ける」は「V-始める」「V-終わる」「V-終える」と異なり、「維持」を表すことができるが、その特徴はどのように分析できるか?」に対し、 「V-終わる」「V-終える」「V-始める」「V-続ける」の拡大事象投射構造において、補文 ([V1 EVENT]) として組み込まれる限界的事象を限界づけているのが何かを指定する情報によって説明できると回答する。具体的には、「V-始める」「V-終わる」「V-終える」が限界的な事象を補文として組み込む場合、終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけられている必要があるのに対し、「V-続ける」では、限界的な事象が補文として組み込まれる場合、始局点と終局点のいずれ ([bdby<sup>±</sup>]) によって限界づけられていてもよいことを提案した。このことから、「V-続ける」においては、終局点によって限界づけられている「使役変化動作」だけでなく、始局点によって限界づけられている「客体変化維持」の事象投射構造も

補文として組み込むことができることを論じた。

### 4.3. 4章のまとめ

本章では、(4.1) RQ1~RQ3 を設定して、研究目的 (1.11b) について議論を行った。4.1 節では「統語的複合動詞」に関する議論 (影山 1993; 岸本 2009, 2013) を概観し、段階複合動詞に見られるアスペクトに関わる制約においては、概念構造 (事象投射構造) での議論が必要であることを示した。その後、4.2 節において、事象投射理論 (岩本 2008) の枠組みによって「段階複合動詞」に関する議論 (RQ1~RQ3) を行った。

4.2.1 節では、「V-終わる」「V-終わる」の拡大事象投射構造を提案し、(4.1) RQ1 への議論を行った。本研究は、(4.1) 「RQ1: 「V-終わる」「V-終わる」は同様に主語の動作を表し、「過程」を含意していると考えられるが、「ている」を付加した際に異なる機能が成立する要因はどのように分析できるか?」について、「V-終わる」は「包括的順序部分関係」、「V-終わる」は「包括的終端同時重複部分関係」という異なる拡大事象投射構造を成している。このことから、「ている」(CRS) の適用においても、(4.47) 「相変換関数分配の原則 (修正版)」によって異なる制約が課されるため、「V-終わる」「V-終わる」に「ている」を付加した場合、異なる機能を成立させると論じた。

4.2.2 節では「V-始める」の (拡大) 事象投射構造を提案し、(4.1) RQ2 への議論を行った。本研究は、(4.1) 「RQ2: 「V-始める」は「過程」を含意しており「ている」を付加した際にも「進行中」を成立させると考えられるが、期間修飾句が過程期間を表せない要因はどのように分析できるか?」について、まず「V-始める」の (拡大) 事象投射構造は「始局点」と「具体的に規定することができない終局点」の情報によって限界づけられていると提案した。そして、期間修飾句の関数 (COMP) を適用した場合、3.1.1 節で再検討と精緻化を行った (3.12) 「強制による逆関数の連続適用と情報の空虚化に関する修正提案」、(3.13) 「解釈規則 (強制) による事象投射構造の空虚化を禁ずる原則 (本研究の提案版)」の観点から不適格な構造が作り出される。そのため、期間修飾句は「V-始める」の過程期間を修飾できないと論じた。

4.2.3 節では「V-続ける」の (拡大) 事象投射構造を提案し、(4.1) RQ3 への議論を行った。また、「V-続ける」と「ている」(CRS) 及び、期間修飾句の関わりについても論じた。本研究は、(4.1) 「RQ3: 「V-続ける」は「V-始める」「V-終わる」「V-終わる」と異なり、「維持」を表すことができるが、その特徴はどのように分析できるか?」について、「V-終わる」「V-終わる」「V-始める」の拡大事象投射構造において、限界的な事象が補文 ([V1 EVENT]) として組み込まれる場合、終局点 ([bdby<sup>+</sup>]) によって限界づけられている必要があると提案した。一方、「V-続ける」の拡大事象投射構造では、限界的な事象が補文として組み込まれる場合、始局点と終局点のいずれ ([bdby<sup>±</sup>]) によって限界づけられていてもよいことを提案した。このことから、「V-続ける」においては、終局点によって限界づけられている「使役変化動作」だけでなく、始局点によって限界づけられている「客体

変化維持」の事象投射構造も補文として組み込むことができることを論じた。



## 5. 日・中語の設置動詞と「維持」

本章では、研究目的 (1.11c, d) について議論を行う。本章ではまず、5.1 節で林 (2012)、岩本 (2015) の研究を概観しながら、「語彙概念構造 (LCS) の書き換え」という観点から存現文における項の具現化を議論している于 (2018) の研究を確認し、残る問題点を示す。5.2 節では、中国語の設置動詞においても「(i)「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii)「維持の続行」が表される」「(iv)「維持の中止」が表される」という論点から、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにする。5.3 節では、「着」を設置動詞に付加して、客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文 (結果状態) が成立する要因に対して、文法形式の担う機能領域の広狭が言語間 (e.g. 英語 vs. 独語) で異なるという比較類型論 (Hawkins 1986; 堀江 2001 など) の観点を援用して議論を行う。5.4 節は本章のまとめである。<sup>55</sup>

### 5.1. 設置動詞と存現文

1.2 節 (1.4) や 2.6 節 (2.69) で確認したように、日本語では設置動詞 (e.g. 置く, 貼る) に「ている」を付加した場合、下の (5.1) のような「維持 (維持状態)」が表される。「維持」とは「動作主が主体的に結果の保存を行っている局面」であり、客体の変化結果の「維持」は他動詞構文によって表される (森山 1988; 岩本 2008, 2015; 須田 2010)。なお、森山 (1988) は「維持」を「座る」などの動詞によって表される「主体変化維持」と「置く」などの動詞によって表される「客体変化維持」に下位分類しているが、「主体変化維持」については岩本 (2015) も議論の対象にしておらず、本研究の研究目的にも関わらない。このことから、本章では、「客体変化維持」を議論の対象とし、以下「維持」は「客体変化維持」を指す。

(5.1) (=1.4, 2.69)

- a. 署長は例によって上着をぬいで、ぬらしたタオルを机のうえにおいていた。  
(「石川達三・洒落た関係」須田 2010: 31)
- b. 李さんは自分の部屋の壁に地図をたくさん貼っている。

(木村 2006: 55 (筆者下線) )

「維持」を表す動詞の特徴として、下の (5.2) では「ている」が付加されることによっ

---

<sup>55</sup> 本章の内容は、山田・堀江 (2022)、山田 (2022b) の議論を元にしたものである。本章の執筆にあたって、中国語の例文・用例に対して、中国語母語話者によるインフォーマントチェックを改めて受けた。三名のインフォーマントの出身地 (義務教育を受けた地域) は中華人民共和国の浙江省、遼寧省、重慶市である。全てのインフォーマントが大学 (学部) まで中国国内において、標準語 (普通话) で教育を受けている。

て文脈によって同一の形式で、「動作（進行中）」か「維持（維持状態）」という二義解釈（「パーフェクト」「複数事象」解釈を除く）が成立する。さらに、4章 4.2.3 節などでも触れたように、「V-続ける」も「維持」を表すことができる（森山 1988）。(5.3) では、(5.3a)「動作（使役変化動作）の続行」と(5.3b)「維持（客体変化維持）の続行」という解釈ができるが、両者は「貼り続けた」という同一の形式で表されている。

(5.2) a. 三郎は、箱を台の上に乗せている。 [進行中 / 維持状態] (岩本 2008: 228)

b. 太郎は、ポスターを壁に貼っている。 [進行中 / 維持状態] (ibid: 228)

(5.3) (=2.9, 4.66)

a. 警備員が太郎を制止したが、太郎はポスターを壁に貼り続けた。

b. 皆が太郎に早く剥がせと言ったが、太郎はポスターを壁に貼り続けた。

(筆者作例)

3.3.1 節や 4.2.3 節でも一部確認したが、(5.2), (5.3) のように「維持」を表し得る動詞に、アスペクト形式が付加された場合に生じる二義性について岩本 (2008, 2015) が重要な考察を行っている。まず、下の (5.4) のような着衣動詞は、「維持（主体変化維持）」を表すと森山 (1988) は主張しているが、岩本 (2015) は、(5.4) と (5.5) の対比から、(5.4) で表されているのは「結果（持続）」であると指摘している。岩本 (2015) は、(5.5) で「赤ちゃん」が主語として不適格なのは、(5.5) では主語による結果のコントロール能力が求められる「維持」が表されており、「赤ちゃん」にはそのような能力が無いからだと主張している。一方、(5.4) で「赤ちゃん」が主語として適格なのは、(5.4) では結果に対するコントロール能力が不問である「結果」が表されているからだと主張している。<sup>56</sup>

(5.4) 赤ちゃんが可愛い服を着ている。 (岩本 2015: 186)

(5.5) \*赤ちゃんが部屋にベッドを置いている。 (ibid: 186)

岩本 (2015) は、事象構造と概念構造を組み合わせた「事象概念構造」を提案して、(5.4) と (5.5) の間に見られる違いが生まれる要因の定式化を行っている。下の図 5.1 は、「維持」を表す設置動詞などの事象概念構造として提案されている。図 5.1 の  $e_2$  は動作主の働きかけによって客体が変化するまでの「使役変化動作（過程）」の局面を表し、 $e_5$  は客体が変化を遂げた後の局面を表している。 $e_2, e_5$  で記されている「○」は、それぞれの事象を構成している、動作主事象 ( $e_3, e_6$ ) と動作主から影響（働きかけ）を受ける変化事象 ( $e_4, e_7$ ) が同時（同期）的な関係を持つことを表している。また、 $e_2$  の「→」は事象

<sup>56</sup> (5.4) で表されている「結果（持続）」に「ている」を付加することによって、「結果状態」機能が成立し、(5.5) で表されている「維持」に「ている」を付加することによって「維持状態」機能が成立することになる。

が終局点によって限界づけられていることを表し、 $e_5$  の「 $\vdash$ 」は始局点による限界づけを表している。

なお、図 5.1 の「事象概念構造」は、3.3.1 節 (3.25a) (=図 5.1  $e_2$ ) と (3.25b) (=図 5.1  $e_5$ ) の拡大事象投射構造に基本的に対応している。3 章から 4 章の議論に採用した、岩本 (2008 など) による事象投射構造の表記は、副詞との共起による「移行」現象や期間修飾句の適用制約などを考察する際に明示的な分析・議論が可能になる点で大きなメリットがある。しかし、本章における議論の論点は、「維持」を表す概念構造の有無という点であるため、図 5.1 のような一般的な語彙概念構造 (LCS) の表記 (cf. 影山 (1996, 1997) など) を用いた事象概念構造でも十分な議論ができる。また、後で確認する于 (2018) の議論でも一般的な LCS 表記が採用されていることから、議論の便宜上、本章では岩本 (2015) に従い、図 5.1 のような表記を採用する。

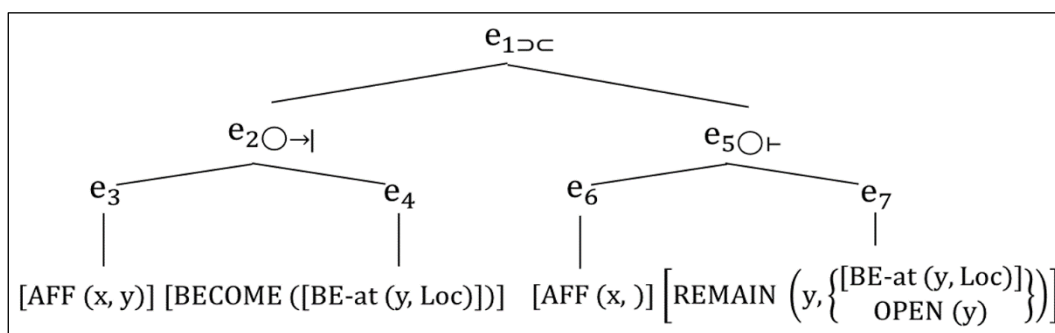


図 5.1 「維持」を表す設置・開閉動詞の事象概念構造 (岩本 2015: 193)

岩本 (2015) は、結果の保存が主体的に行われる「維持」の特徴を、図 5.1 の  $e_5$  を構成する動作主事象 ( $e_6$ ) 及び動作主による維持を表す  $AFF(x, )$  (以下  $AFF$ ) によって表記している。この  $AFF$  の項として不適格な「赤ちゃん」が主語となった場合には、(5.5) のように非文となる。一方、「赤ちゃん」が主語として適格な着衣動詞の事象概念構造としては、下の図 5.2 が提案されている。

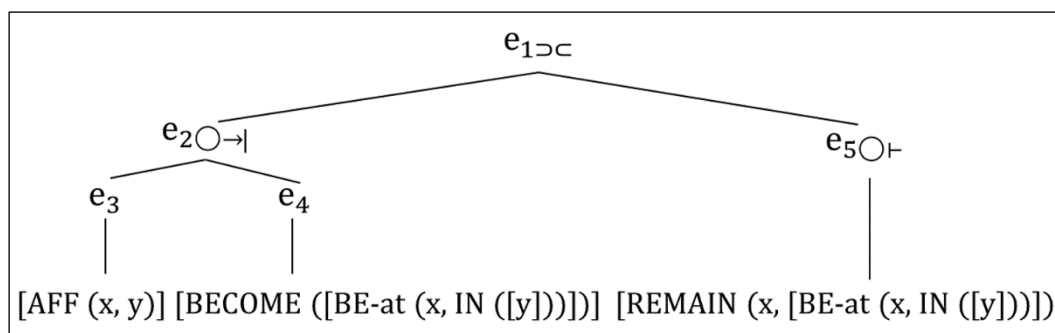


図 5.2 「結果 (持続)」を表す着衣動詞の事象概念構造 (岩本 2015: 193)

図 5.2 では、図 5.1 と異なり、客体変化後の局面 ( $e_5$ ) において、結果を主体的に維持することを表す事象 ( $e_6$ ) と AFF が無いのが特徴である。すなわち、(5.4) では着衣動詞の再帰的性質から、変化対象でもある「人」が主語として表れているが、あくまで AFF としての主語ではないため、(5.4) のように「赤ちゃん」が主語でもよいと岩本 (2015) は分析している。

次に、隣接関係とアスペクト (相変換) 関数の適用に関する岩本 (2008, 2015) による議論の概要を確認する。図 5.1, 5.2 では、使役変化動作事象 ( $e_2$ ) と客体変化後の維持・結果事象 ( $e_5$ ) が隣接関係を成して一つの事象 ( $e_1$ ) として構成していることが「隣接記号」( $\supset c$ ) によって表されている。隣接関係は「変化が生じた点を接点として 2 つの事象が組み合わせられている事象関係」(岩本 2015: 192) と定義されている。そして、「隣接関係」を成す事象の特徴として、(5.6)「結果」や (5.7)「維持」の主語は、その「結果」や「維持」に至る「使役変化動作」の主語と一致する必要が無いことを岩本 (2015) が指摘している。

(5.6) (=5.4)

赤ちゃんが可愛い服を着ている。 (岩本 2015: 186)

(5.7) 花子: 前に私があなたの部屋の壁にかけた二人の写真, どうした?

太郎: ああ, あれは今もそのまま飾っているよ。 (ibid: 189)

(5.6) では、服を着せるのは赤ちゃん以外の別の誰かであり、(5.7) においても、文脈から「使役変化動作 (花子)」と「維持 (太郎)」の主語が異なることがわかる。すなわち、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) と後接事象  $e_5$  (結果・維持) がお互いに論理的に依存していない事象関係が「隣接関係」となる (岩本 2015)。さらに、岩本 (2015) は、「ている」などの相変換関数を図 5.1, 5.2 で示したような事象概念構造に適用する際の原則を (5.8) のように提案している。

(5.8) (=3.24, 4.47)

「相変換関数分配の原則」(修正版)

2 つの下位事象  $e_2, e_3$  によって構成される  $e_1$  に適用する相変換関数は、 $e_2, e_3$  に分配され、両者に相同的に適用しなければならない。ただし、 $e_2$  あるいは  $e_3$  の成立がもう一方に依存しない場合、その何れかを削除し、他方に相変換関数を適用することができる。 (岩本 2015: 196)

「隣接関係」( $[e_1 e_2 \supset c e_5]$ ) を成す前接事象  $e_2$  と後接事象  $e_5$  はお互いに論理的に依存していない。このことから、相変換関数を適用する際、(5.8) の原則に従い、前接事象  $e_2$  (使役変化動作) もしくは後接事象  $e_5$  (結果・維持) のどちらかが削除され、一方の解釈が指定されるようになる。すなわち、図 5.1 の事象概念構造と (5.8) の原則によって、

(5.2), (5.3) で確認した, 「維持」を表す動詞に「ている」などのアスペクト形式 (関数) を付加した場合に, 同一の形式で二義性が生じるようになる要因を説明することができる。

<sup>57</sup> 岩本 (2015) は, 以上の提案が通言語的にも適応可能かを, 中国語動詞を対象とした林 (2012) の研究を援用しながら議論を進めている。

1.2 節や 2.6 節ですでに確認したが, 中国語の設置動詞 (e.g. 放 (置く), 貼 (貼る)) に「ている」と類似した特徴を持つ「着」を付加した場合, 一般的に動作主が具現されない自動詞的構文 (5.9) が成立し, 「維持 (維持状態)」ではなく「結果状態」が表されると指摘されている (木村 2006; 丸尾 2007; 林 2012; 岩本 2015 など)。

(5.9) (=1.5, 2.70)

- a. 门口 放 着 (一把) 雨伞。  
 玄関 置く ASP 一-CL 傘  
 「玄関に傘が置いてある。」 (林 2012: 61 (筆者字体・グロス変更) )
- b. 墙上 贴 着 一张 地图。  
 壁上 貼る ASP 一-CL 地图  
 「壁に地図が 1 枚貼ってある。」 (木村 2006: 54 (筆者グロス) )

(5.9) のように「着」を付加した場合, 他動詞構文によって「維持」が表されない要因について, 岩本 (2015), 林 (2012) は, 中国語の設置動詞が, 日本語の設置動詞 (図 5.1) と異なる事象概念構造を形成しているからだと主張し, 下の図 5.3 を提案している。

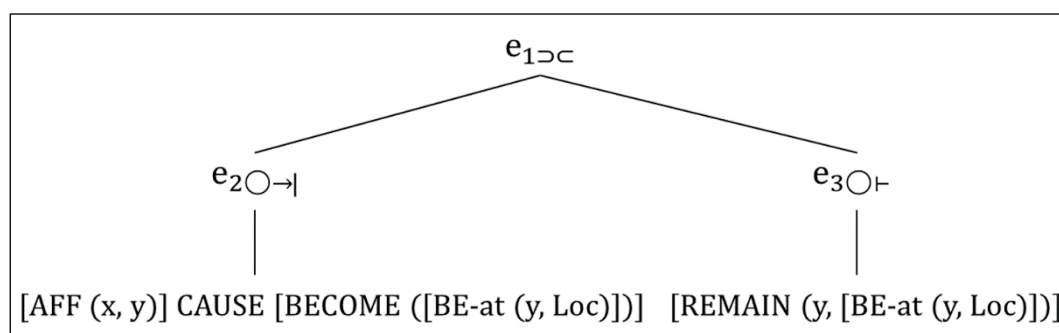


図 5.3 中国語の設置動詞の事象概念構造 (岩本 2015: 200)

図 5.3 の  $e_2$  は「使役変化動作」の局面を表し,  $e_3$  は客体変化後の局面を表している。図 5.1 と図 5.3 の大きな違いは, 客体変化後の局面において, 図 5.3 では, 結果の主體的

<sup>57</sup> 図 5.2 の事象概念構造と (5.8) の原則によって, 主語が「使役変化動作」をコントロールできる場合で, 着衣動詞に「ている」を付加した際に生じる二義性 (e.g. 太郎が服を着ている。[進行中 / 結果状態]) も説明できる。また, 「V-続ける」が表す二義性の定式化については, 本研究の 4.2.3 節において提案している。



于 (2018) の提案は、存現文における項の具現化を議論する上で、極めて重要だと考えられる。しかし、設置動詞によって表される存現文に関する議論で提案されている (5.10) の LCS は、「使役変化動作」を表すもの (図 5.1 の  $e_2$  に相当) であり、設置動詞が表し得る「維持」は議論の対象とされていない。このことから、中国語の設置動詞における「維持」の概念構造の有無については、更なる検証が必要である。また、于 (2018) の提案を、図 5.1 に当てはめて考えると、中国語の設置動詞が「維持」を表す事象概念構造  $e_5$  を有していても、「着」が場所項を焦点化するため、「着」は意味述語 [BE AT] が含まれる LCS を持つ  $e_7$  のみに適用され、「維持」を表す事象  $e_6$  と AFF が削除される可能性がある。すなわち、中国語の設置動詞が「維持」を表す事象概念構造を有するかどうかは、岩本 (2015)、林 (2012) が図 5.3 の論拠とする (5.9) の存現文 (「着」との関わり) とは異なる観点から検証する必要があると考えられる。

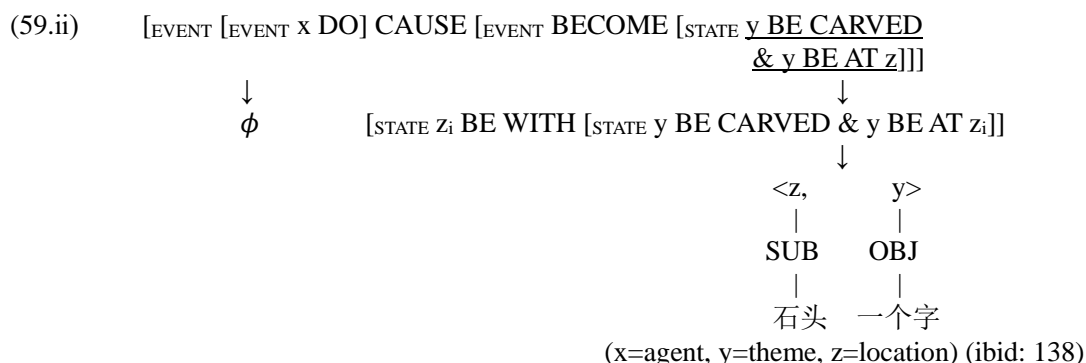
本研究は、岩本 (2015)、林 (2012) とは異なる立場を取り、次節において、中国語の設置動詞が「維持」を表す事象概念構造 (図 5.1) を有する論拠を示す。なお、日本語では開閉動詞 (e.g. 開ける) も「維持」を表すが、中国語の開閉動詞 (e.g. 开 (開ける / 開く)) は「着」の適用無しで自他交替する。このことから、岩本 (2015) は、開閉動詞を議論の対象外とし、図 5.3 は設置動詞の事象概念構造として扱っている。本研究も設置動詞を対象として議論を進める。

## 5.2. 中国語設置動詞と「維持」の事象概念構造

本節では、「(i) 「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii) 「維持の続行」が表される」「(iv) 「維持の中止」が表される」という四つの論点から、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造を有していることを明らかにする。5.2.1 節では、論点 (i)、(ii) について議論し、5.2.2 節では論点 (iii) について議論する。5.2.3 節では、論点 (iv) について議論し、続く 5.2.4 節では、特定の動詞が一定の条件下において「維持」を表しているように見える現象を提示する。そして、その

---

石 头 上 刻 着 一 个 字。  
 石 上 彫 る ASP 一-CL 文字  
 「石の上には文字が1つ彫ってある。」 (于 2018: 125)



ような「維持」は設置動詞などによって表される「維持」とは異なり、語用論的なものであることを論じる。さらに、設置動詞などが表す「維持」と語用論的要因によって表される「維持」の間に見られる特徴の違いは、日本語と中国語においても同様に当てはまることを論じる。

### 5.2.1. 禁止命令表現及び属性叙述の観点

本節では、「(i)「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」という論点から議論を行い、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造(図 5.1)を有していることを主張する。

先ず、下の(5.11a)では、結果のコントロール能力が無い「赤ちゃん」が主語として適格なことから、岩本(2015)、林(2012)は、日本語と中国語の着衣動詞に同様の事象概念構造(図 5.2)を想定している。確かに、「乳児服を着た赤ちゃん」に向かって、行為の動作主(責任者)を要求する禁止命令表現(5.11b)が使用できないことから、着衣動詞が結果のコントロール主(AFF)を要求する事象概念構造を成していないという岩本(2015)、林(2012)の提案には、一応の妥当性があると思われる。しかし、(5.12)の禁止命令表現は、「傘が置かれようとしている状況(使役変化動作)」だけでなく「傘がすでに置かれている状況(維持)」に対しても使用可能である((5.12)では「请您」のように主語(您(あなた))を具現させることもできる)。すなわち、図 5.3 のように、中国語設置動詞の客体変化後の局面(e<sub>3</sub>)に、客体の変化結果のみを表す事象概念構造を想定した場合、「維持」の動作主(責任者)が存在せず、客体(y = 「傘」)にも(5.11)「赤ちゃん」と同様に、結果のコントロール能力が無いことから、(5.12)の表現が「維持」に対して使用可能な理由を説明できないと考えられる。【論点(i)】

- (5.11) a. 婴儿 穿着 婴儿服。  
赤ちゃん 着る ASP 乳児服  
「赤ちゃんが乳児服を着ている。」(林 2012: 105 (筆者字体・グロス変更))
- b. (乳児服を着た赤ちゃんに向かって)  
\*请 不要 穿 婴儿服。  
ください NEG 着る 乳児服  
「乳児服を着ないでください。」(筆者作例)
- (5.12) 请 不要 把 伞 放 在这里。  
ください NEG BA 傘 置く に ここ  
「傘はここに置かないでください。」  
(『中国語会話例文集』(筆者グロス))

次に、(5.9)で確認したように、「着」を設置動詞に付加して客体変化後の局面を表す場



合、動作主を伴わない自動詞的構文（結果状態）が一般的に成立する。しかし、「状態の持続を積極的に支持する要素」（丸尾 2007: 335）が文中に表れる場合、下の (5.13) のように「着」を付加しても「維持」の動作主が具現し、「維持」が表されるようになる。<sup>60</sup>

【論点 (ii)】丸尾 (2007) が指摘する「状態の持続を積極的に支持する要素」とは、(5.13) で付加されている (5.13a, b) 「总是 (いつも)」や (5.13c) 「这一年一直 (この一年ずっと)」のような副詞を指すと考えられる。また、母語話者によると、「維持」の始まりと終わりを具体的に明示せず、長期的な「維持」を表す文脈においては、(5.13) から「总是」や「这一年一直」を削除しても容認可能であるという。(5.13) の成立に必要なこのような制約は、事象叙述文から属性叙述文 (影山 2008, 2009) への変化を表していると考えられる。

- (5.13) a. 他 总是 在 墙上 挂 着 那幅 画儿。  
 3SG いつも に 壁 上 掛ける ASP あの-CL 絵  
 「彼はいつもあの絵を壁に掛けている。」 (丸尾 2007: 335 (筆者グロス))
- b. 史蒂芬 在 车里 总是 放 着 一件 雨衣 和 一双 长走靴。  
 ステファン に 車 中 いつも 置く ASP 一-CL 雨着 と 一-CL ブーツ  
 「ステファンはいつも雨着とブーツを車に置いている。」  
 (『Cambridge 英語-中国語 (簡字体) 辞典』(原文以外筆者))
- c. 这 一年 他 一直 在 墙上 贴 着 一张 年历。  
 この 一年 3SG ずっと に 壁 上 貼る ASP 一-CL カレンダー  
 「この一年彼はずっと壁に一枚のカレンダーを貼っている。」  
 (木村 1983: 24 (原文以外筆者・表記一部変更))

事象叙述とは、時間の流れにそった出来事・状態の描写を指し、属性叙述は、時間の流れに左右されない、主語ないし主題の恒常的な性質を述べることを指す (影山 2008, 2009)。影山 (2008) は、さらに、属性叙述によって表される属性を「準属性」と「(内在的) 属性」に下位分類している。「準属性」は、恒常的な「(内在的) 属性」とは異なり、「ふだんは」のような時間的変動を含意する表現を付加することができる。一方で、叙述される準属性は始点・終点など特定の時間を明示しにくい点が、事象叙述文で叙述される出来事・状態とは異なる。このような特徴から、影山 (2008) は、準属性を出来事と属性の中間的なものであると指摘している。すなわち、(5.13) では、恒常的な属性ではないものの、文の成立には副詞の共起や文脈に制約があることから、「準属性」を表す属性叙述文が成立していると考えられる。

また、影山 (2008, 2009) は、事象叙述と属性叙述 (準属性も含める) という意味的な区別が、統語構造、形態構造に形 (文法形式) として反映される事例が、通言語的に多く観

<sup>60</sup> 丸尾 (2007: 335) は、(5.13c) に対して「この1年彼はずっと壁にカレンダーを1枚張ったままにしている。」という訳 (原文のまま) を当てている。

察されることを指摘している。そして、影山 (2009) は、事象叙述文での一般的な構造制約に違反しながらも、非文法的とならない形式 (e.g. 日本語・韓国語の外項複合語、英語・日本語の異常受身文) があるが、それらの形式は、属性叙述という意味機能を担っていることを指摘している。

上で挙げた【論点 (i), (ii)】と影山 (2008, 2009) の分析を合わせて考えると、中国語の設置動詞も「維持」を表す事象概念構造 (図 5.1 の  $e_5$ ) を有していると想定するのが自然だと考えられる。5.1 節 (5.10) で確認したように、「着」は存在を表す LCS の場所項を焦点化する (于 2018) という意味を具現していると考えられる。そこで、事象叙述文 (5.9) では中国語の設置動詞が「維持」を表す事象概念構造 (図 5.1 の  $e_5$ ) を有していても、意味述語 [BE AT] が含まれる LCS を持つ  $e_7$  のみに「着」が適用され、「維持」の動作主を伴わない自動詞的構文 (結果状態) が成立すると考えられる (LCS の書き換え及びその後の項の具現化は于 (2018) に従う)。一方で、「着」が事象叙述と属性叙述という意味的区別において異なる機能分布を成していると考えた場合、結果のコントロール主という維持主の「準属性」を表す意味機能では、「着」が図 5.1 の  $e_5$  に適用されることで、「維持」の動作主が具現し、「維持」が表されるようになると考えられる。

以上、本節では【論点 (i), (ii)】から、日本語と中国語の設置動詞が同様の事象概念構造 (図 5.1) を有していることを主張した。次節では、中国語の設置動詞においても、続行 (継続) を表す形式によって「維持の続行」が表されることを明らかにする。

### 5.2.2. 「維持の続行」について

2.2 節, 4.2.3 節, (5.3) などで確認したように、日本語では「V-続ける」によって「維持の続行」を表すことができる (森山 1988)。中国語では、「继续」と方向補語としての機能も持つ「下去」という形式で出来事の続行 (継続) を表すことが知られている (呂 2003; 原・常次 2012 など)。呂 (2003) が指摘する続行 (継続) を表す「继续」「下去」の特徴については、下の (5.14) のようにまとめられる。また、原・常次 (2012) は「继续」と「下去」の特徴の違いを議論しており、両形式の特徴の違いは、(5.15) のようにまとめられる。

(5.14) a. 【继续】(活動を) 続けていく, 延長していく, 絶やさない: ふつう動詞の客語をとまなう。また名詞の客語をとまなったり, 単独で述語となれる。

(呂 2003: 195)

b. 【下去】(趨向動詞) 動+下去: ‘下去’は動作が今なお継続中であることを表す。動作の対象となる語はふつう 動 の前に置く。 (ibid: 412)

(5.15) a. 「继续」は、限界的事象を表し、継続する事象の起動点に焦点を置く。このことから、中断していた事象の再開を継続として表すことができる。

b. 「下去」は、非限界的事象を表し、すでに展開している事象の継続を切れ目なく表す。このことから、中断していた事象の再開を継続として表すこと

ができない。

以上のように「继续」「下去」は、それぞれが出来事の続行（継続）を表すことがわかるが、呂 (2003), 原・常次 (2012) では、両形式と「維持」との関わりについては明らかにされていない。このことから、本節では、両形式が表す「維持」について考察し、中国語の続行を表す形式が「維持」を表すこと明らかにする。そして、前節で行った日本語と中国語の設置動詞が同様の事象概念構造（図 5.1）を有するという提案に、更なる論拠を示す。なお、本節の目的から、「继续」「下去」の二形式を分析対象とし、両形式の混合型である「继续 V 下去」は分析対象としない。

すでに確認してきたように、日本語では、「ている」「V-続ける」のような形式で「維持」を表すことができる。さらに、下の (5.16), (5.17) では、事象の一時点・終点を明示した文 (5.16a), (5.17a) だけでなく、時間的変動を含意しつつも、「維持」の始点・終点など特定の時間を明示しにくいことから、維持主の準属性を表していると考えられる文 (5.16b), (5.17b) であっても、「ている」「V-続ける」が「維持」を表す。すなわち、両形式は事象叙述・属性叙述の区別なく「維持」を表すと考えられる。

(5.16) a. 太郎は今玄関にバケツを置いている。

b. 地域の方は災害に備えて常に玄関にバケツを置いている。

(筆者作例)

(5.17) a. 太郎は 5 時まで玄関にバケツを置き続けた。

b. 地域の方は災害に備えて常に玄関にバケツを置き続けた。

(筆者作例)

中国語では、下の (5.18b), (5.19) のように、岩本 (2015), 林 (2012) が「維持」を表す事象概念構造を有しないと主張する中国語の設置動詞（放）であっても、“把”構文（“把”構文については 5.3.2 節で触れる）で用いられ、「继续」が付加された場合、「維持」の動作主が具現し、「維持の続行」が表される。さらに、(5.18a, b) は、文脈によって、同一形式で (5.18a) 「(置くという) 使役変化動作の続行」と (5.18b) 「(置いた結果に対する) 維持の続行」という二義解釈が可能であることを示しており、5.1 節の (5.2), (5.3) と類似していることがわかる。また、(5.18b) では「お母さんが先程玄関の傘を早く片付けなさいと言ったが」という文脈から、「維持の続行」が、特定の一場面（時点）の展開として表されている。一方で、(5.19) は、スイス人による慣習的・長期的な「維持の続行」を表している。すなわち、「继续」は「着」と異なり、事象叙述・属性叙述の区別なく「維持」を表すと考えられる。<sup>61</sup>

---

<sup>61</sup> (5.18) の「放（置く）」の他にも (5.3) に対応する「貼（貼る）」のような動詞でも同一

- (5.18) a. (虽然 妈妈 刚 说 完 不 能 把 雨 伞 放 在 门 口)  
 だ だ 母 ば ば かり 言 言 う 終 終 わ る NEG 可 可 以 以 BA 傘 傘 置 置 く に 玄 玄 関  
太 太 郎 郎 还 还 是 是 继 继 续 续 把 把 它 它 放 放 在 在 门 门 口 口 。  
 太 太 郎 郎 依 依 然 然 続 続 け る BA 那 那 些 些 置 置 く に 玄 玄 関  
 「(お母さんが玄関に傘を置いてはいけなと言ったばかりだが) 太 太 郎 郎 是 是 依 依 然 然 。  
太 太 郎 郎 依 依 然 然 。」 (筆者作例)
- b. (虽然 妈妈 刚 才 说 快 点 把 门 口 的 雨 伞 收 起 来)  
 だ だ 母 母 先 先 程 程 言 言 う 早 早 く BA 玄 玄 関 関 GEN 傘 傘 し ま う 起 起 き る 来 来 る  
太 太 郎 郎 还 还 是 是 继 继 续 续 把 把 它 它 放 放 在 在 门 门 口 口 。  
 太 太 郎 郎 依 依 然 然 続 続 け る BA 那 那 些 些 置 置 く に 玄 玄 関  
 「(お母さんが先程玄関の傘を早く片付けなさいと言ったが) 太 太 郎 郎 是 是 依 依 然 然 。  
太 太 郎 郎 依 依 然 然 。」 (筆者作例)
- (5.19) 瑞 瑞 士 士 人 人 可 可 以 以 继 继 续 续 把 把 枪 枪 放 放 在 在 家 家 里 里 。  
 ス イ ス 人 人 可 可 以 以 続 続 け る BA ラ イ フ ル ル 置 置 く に 家 家 中 中  
 「スイス人は家にライフルを置き続けることができる。」  
 (『swissinfo.ch』(原文以外筆者))

以下では、岩本 (2015), 林 (2012) が議論の論拠としてきた「放 (置く)」以外の設置動詞 (設置動詞の用法) が、「維持」を表している実際の用例を文脈と共に確認する。(5.20)

形式で (61.ia) 「(貼るといふ) 使役変化動作の続行」と (61.ib) 「(貼った結果に対する) 維持の続行」という解釈が成立する。ただし、「使役変化動作の続行」を表す場合は、後の 5.3.2 節 (5.41b), (5.42b) で確認するような“把”構文でない方がより自然だといふ母語話者の意見もあった。また、念のために確認しておくが、「維持」を含意することが想定されない「弄坏 (壊す)」などの動詞に「继续」を付加した場合、(61.ii) のように「使役変化動作の続行」という一義しか表すことができない。

- (61.i) a. 虽然 保安 阻止 了 太 太 郎 郎, 但 但 是 是, 太 太 郎 郎 (依 依 然 然) 继 继 续 续 把 把 海 海 报 报  
 だ だ が 警 警 備 備 員 員 制 制 止 止 PF 太 太 郎 郎 し しか し 太 太 郎 郎 依 依 然 然 続 続 け る BA ポ ス タ ー  
貼 貼 在 在 墙 墙 上 上 。  
 貼 貼 る に 壁 壁 上 上  
 「警備員が太郎を制止したが、太 太 郎 郎 是 是 依 依 然 然 。」
- b. 虽然 大家 都 叫 太 太 郎 郎 快 快 点 点 撕 撕 下 下 来 来, 但 但 是 是, 太 太 郎 郎 (依 依 然 然)  
 だ だ が 皆 皆 全 全 部 部 CAUS 太 太 郎 郎 早 早 く 剥 剥 が す 下 下 来 来 し しか し 太 太 郎 郎 依 依 然 然  
继 继 续 续 把 把 海 海 报 报 贴 贴 在 在 墙 墙 上 上 。  
 続 続 け る BA ポ ス タ ー 貼 貼 る に 壁 壁 上 上  
 「皆が太郎に早く剥がせと言ったが、太 太 郎 郎 是 是 依 依 然 然 。」  
 (筆者作例)
- (61.ii) 虽然 保安 阻止 了 太 太 郎 郎, 但 但 是 是, 太 太 郎 郎 (依 依 然 然) 继 继 续 续 把 把 车 车 弄 弄 坏 坏。  
 だ だ が 警 警 備 備 員 員 制 制 止 止 PF 太 太 郎 郎 し しか し 太 太 郎 郎 依 依 然 然 続 続 け る BA 車 車 壊 壊 す  
 「警備員に制止されたが、太 太 郎 郎 是 是 依 依 然 然 。」 (筆者作例)

では、「抗議者が車を路上に止め続ける」、(5.21)では、「アメリカ人が馬雲を部屋に閉じ込め続ける」という「維持の続行」が、「继续」によって表されている。

- (5.20) 星期三 早些 时候, 缅甸 第一 大 城市 仰光 也 举行 了 水曜日 早い 時 ミャンマー 一番 大きい 都市 ヤンゴン も 行う PF 反对 政变的 大 规模 抗议 活动。报道 称, 仰光 的 反对 クーデター 大きい 規模 抗議 活動 報道 言う ヤンゴン GEN 这次 抗议 活动 是 政变 发生 以来 规模 最大 的 一次。この度 抗議 活動 COP クーデター 発生 以来 規模 最大 GEN 一回 没有 发生 严重 暴力 的 报道, 但是 抗议者 继续 把 车 NEG 発生 深刻な 暴力 GEN 報道 しかし 抗議者 続ける BA 車 停 在 街头 以 阻拦 主要 道路。他们 把 车 前盖 打开, 停める に 道端 ために 阻止 主要 道路 3PL BA 車 前 蓋 開ける 以 汽车 引擎 出 了 故障 作为 停车 借口。を 車 エンジン 出る PF 故障 とする 駐車 言い訳 「水曜日の午前, ミャンマー最大の都市であるヤンゴンでもクーデターに反対する大規模な抗議行動が起こった。この度のヤンゴンの抗議行動は, クーデターが始まって以来最大であった。深刻な暴力的行為の報道は無いものの, 抗議者たちは幹線道路を封鎖するために路上に車を止め続けた。彼らは車のボンネットを開け, エンジンの故障を駐車の言い訳とした。」

(『VOA』(原文以外筆者))

- (5.21) (前略) 马云 计划 离开 美国, 眼见 事情 败露 的 馬雲 計画 離れる アメリカ 明らかに 事 露頭 GEN 美国佬 当然 不肯 放 马云 走, 立刻 把 马云 软禁 起 アメリカ人 当然 不本意 放す 馬雲 行く 直ちに BA 馬雲 軟禁 起きる 来。(中略) 他 试图 说服 马云 和 他 合伙 干, 并 开出来 3SG 企む 説得する 馬雲 と 3SG 提携 する そして 出 了 10万 美元 的 诱人 年薪, 然而 一向 胆识过人, PF 10万 米ドル GEN 魅力的 年俸 しかし ずっと 人より勇敢な 一身正气的 马云 当即 就 一口 回绝。于是 美国佬 正直 GEN 馬雲 直ちに すぐに きっぱり 断る それで アメリカ人 继续 把 马云 关 在 房间里, 不闻不问。 続ける BA 馬雲 閉める に 部屋中 取り合わない 「(前略) 馬雲 (ジャックマー) はアメリカを離れる計画を立てていたが, 事が露頭したアメリカ人は当然馬雲を行かせず, 直ちに, 馬雲を軟禁した。(中略) 彼は馬雲に提携の話を持ち掛け, 10万米ドルという魅力的な年俸

を提示したが、常に勇敢で正直な馬雲はすぐにそれを断った。それで、アメリカ人は馬雲を部屋に閉じ込め続け、取り合わなかった。」

(『CCL (\当代\史传\谁认识马云.txt)』(原文以外筆者))

次に (5.18b)~(5.21) で「維持」を表している設置動詞に、下の (5.22) のように「下去」を付加した場合、「維持の続行」を表すか確認した。その結果、(5.22) では「一直(ずっと)」のような副詞によって継続性を強調することで、「下去」が「維持の続行」を表すことを示唆する母語話者の意見もあったが、非文や不自然と判断する意見もあり、安定した容認度は得られなかった。

- (5.22) a. ?太郎 还是 一直 把 它 放 下 去。  
太郎 依然 ずっと BA それ 置く 下 行く  
「太郎は依然としてずっと傘を置き続けた。」
- b. \*?抗议者 一直 把 车 停 下 去。  
抗議者 ずっと BA 車 停める 下 行く  
「抗議者はずっと車を止め続けた。」
- c. ?美国佬 一直 把 马云 关 下 去。  
アメリカ人 ずっと BA 馬雲 閉める 下 行く  
「アメリカ人は馬雲をずっと閉じ込め続けた。」

(筆者作例)

以上、本節では、岩本 (2015)、林 (2012) が「維持」を表さないと主張している中国語の「放(置く)」及び、その他の設置動詞(設置動詞の用法)が「維持」を表すことを、続行を表す形式との関わりから明らかにした。【論点 (iii)】「继续」は「維持」を事象叙述・属性叙述の区別なく表すことがわかった。一方、「下去」は、「維持の続行」という解釈の容認性が安定して観察されなかった。次節では、日本語と中国語において意図的な中止を表す形式を設置動詞に付加した際に見られる特徴について議論する。

### 5.2.3. 「維持の中止」について

本節では、意図的な中止を表す形式を設置動詞に付加した場合、日本語と中国語において同様に「維持の中止」が表されることを示す。従来、日本語では「やめる」という形式が事象の意図的な中止を表す形式として、森田 (1977)、山田 (1979)、杉本 (1986) などの研究で取り上げられてきた。「やめる」は「(の)をやめる」という形式を作り、「走る」のような動作過程を含意する動詞に付加した場合、下の (5.23) のように、文脈によって動作を行う前に中止する「動作開始前の中止」と実際に動作が始まった以降で動作を中止する「動作の中止」という二義解釈を成立させる(山田 1979; 杉本 1986)。一方で、動作過程を

含意しない「死ぬ」のような一回的な変化を表す動詞に「(の)をやめる」を付加した場合には、(5.24)のように「動作開始前の中止」のみを成立させる(山田 1979; 杉本 1986)。

- (5.23) 雨が降ってきたので、太郎は走るのをやめた。  
[動作開始前の中止 / 動作の中止] (筆者作例)
- (5.24) 死ぬのをやめる。  
[動作開始前の中止]  
(杉本 1986: 37 (下線と括弧は筆者))

従来の森田(1977), 山田(1979), 杉本(1986)では言及されていないが、「(の)をやめる」形式を設置動詞に付加した場合, 下の(5.25)のように、「維持の中止」を表すようになり,(5.25a)は「ポスターを剥がす」,(5.25b)は「ひしゃくを撤去する」という解釈ができる。また、「使役変化動作(過程)」と「維持」を同時に含意する「貼る」のような動詞に「(の)をやめる」形式を付加した場合,(5.26)のように、文脈によって同一形式で(5.26a)「動作開始前の中止」「使役変化動作の中止」と「貼ってあるポスターを剥がす」という意味である(5.26b)「維持の中止」の解釈を成立させる。

- (5.25) a. クーポンは迷惑? (中略) 地元はさぞ潤っているだろうと飲食店で聞いてみると「お客は増えたがクーポンの利用ばかり。現金は翌月にしか入ってこないの、資金繰りが苦しい」と、近々店を閉めて引退するという。GoToのポスターを店頭に貼るのをやめたというすし店もあった。  
(『週刊東洋経済』(筆者下線))
- b. ちょうず舎にひしゃくを置くのをやめ、人が近づくとセンサーが反応し自動で水が流れるようにした。  
(『朝日新聞 2020年12月29日朝刊鳥取全県・1地方』(筆者下線))
- (5.26) a. 警備員に制止されたので、太郎はポスターを壁に貼るのをやめた。  
[動作開始前の中止 / 使役変化動作の中止]
- b. 皆が太郎に早く剥がせと言ったので、太郎はポスターを壁に貼るのをやめた。  
[維持の中止]  
(筆者作例)

中国語では、否定形式の“不”と文末語気助詞などと呼ばれる“了<sub>2</sub>”を組み合わせた“不VP了<sub>2</sub>”によって意図的な中止が表される(丸尾 2010; 王 2012など)。下の(5.27)は、上の(5.23)に類似しており、動詞(做扫除(掃除する))が動作過程を含意していることから、文脈によって「動作開始前の中止」と「動作の中止」という二義解釈を成立させる。また、(5.28)も(5.24)と類似しており、動作過程を含意しない一回的な変化を表す動詞(离婚(離婚する))に“不VP了<sub>2</sub>”を付加した場合、「動作開始前の中止」のみが成立

することになる。

- (5.27) 林 先生 不 做 扫除 了。 [動作開始前の中止 / 動作の中止]  
林 さん NEG する 掃除 語気助詞  
「林さんは掃除するのをやめました。」  
(『新版中日交流標準日本語初級下』(下線・グロス・括弧は筆者))
- (5.28) 她 不 离婚 了。 [動作開始前の中止]  
3SG NEG 離婚 語気助詞  
「彼女は離婚するのをやめた。」 (王 2012: 21 (原文以外筆者))

一方で、日本語の「(の)をやめる」と“不 VP 了<sub>2</sub>”には異なる特徴も見られる。「(の)をやめる」は、下の(5.29)のように(擬人化された用法などを除いて)非意図的な動きの中止を表すことはできないが、“不 VP 了<sub>2</sub>”においては、非意図的であっても、「動き」が過程を含意していれば、(5.30)のように中止を表すことができる(丸尾 2010; 王 2012 など)。

- (5.29) #私の時計が動くのをやめた。 (筆者作例)
- (5.30) 我 的 表 不 走 了。  
1SG GEN 時計 NEG 動く 語気助詞  
「私の時計が動かなくなった。」 (丸尾 2010: 107 (下線・グロスは筆者))

以上のように、“不 VP 了<sub>2</sub>”の機能については丸尾(2010)、王(2012)などで記述されているが、管見の限り“不 VP 了<sub>2</sub>”と「維持」の関わりについては、明らかにされていない。そこで、以下では実際の用例と作例によって“不 VP 了<sub>2</sub>”と「維持」の関わりについて確認していく。下の(5.31)は、(5.26)に対応する中国語文である。(5.31a)では、「動作開始前の中止」「使役変化動作の中止」の二義解釈が成立する。さらに、(5.31b)では、維持主(太郎)も具現した状態で「貼ってあるポスターを剥がす」という意味である「維持の中止」が表されている。また、(5.32)は実際の用例であるが、岩本(2015)、林(2012)が「維持」を表さないと主張している中国語の「放(置く)」に“不 VP 了<sub>2</sub>”が付加されることによって、維持主(我(私))も具現した状態で「置いた状態のバイクを動かす(移動する)」という意味である「維持の中止」が表されている。

- (5.31) a. 因为 被 保安 制止, 所以 太郎 就 不 把 海报 贴  
ので PASS 警備員 制止 それで 太郎 副詞 NEG BA ポスター 貼る  
在 墙壁 上 了。 [動作開始前の中止 / 使役変化動作の中止]  
に 壁 上 語気助詞



「警備員に制止されたので、太郎はポスターを壁に貼るのをやめた。」

- b. 因为 大家都 叫 太郎 快点 撕 下来， 所以 太郎 就  
ので 皆 全て CAUS 太郎 早く 剥がす 下 来る それで 太郎 副詞  
不 把 海报 贴 在 墙壁 上了。 [維持の中止]

NEG BA ポスター 貼る に 壁 上 語気助詞

「皆が太郎に早く剥がせと言ったので、太郎はポスターを壁に貼るのをやめた。」

(筆者作例)

- (5.32) 学校 又 有 人 摩托车 被 偷 了， 然后 我 怕 了，  
学校 また いる 人 バイク PASS 盗む PF そして 1SG 恐れる PF  
我 不 把 车 放 在 车棚 了， 拉 去 平房  
1SG NEG BA バイク 置く に 駐輪場 語気助詞 引く 行く 平屋  
放 了 不久后， 我 要 被 安排 去 代 一班  
置く PF しばらくして 1SG 将来 PASS 段取り 行く 代わり 一組  
或者 二班 的 课。

または 二組 GEN 授業

「学校でまた誰かがバイクを盗まれ、私は怖くなり、バイクを駐輪場に置くのをやめ、平屋に持っていきそこに置きました。しばらくして、私は一組か二組の代講に行かされました。」 (『BCC (微博)』(原文以外筆者))

以上、本節では、日本語と中国語において意図的な中止を表す形式である「(の)をやめる」と“不 VP 了<sub>2</sub>”を設置動詞に付加した場合、「維持の中止」が表されることを確認した。さらに、「使役変化動作」と「維持」を同時に含意する「貼る (貼)」のような動詞に「(の)をやめる」と“不 VP 了<sub>2</sub>”を付加した場合、日本語と中国語同様に、文脈によって同一形式で「動作開始前の中止」「使役変化動作の中止」と「維持の中止」の三義解釈を成立させることを確認した。【論点 (iv)】5.2.1 節から本節までで確認した【論点 (i)~(iv)】から、日本語と中国語の設置動詞が同様の事象概念構造 (図 5.1) を有しているという本研究の提案は、妥当なものであると考えられる。次節では、本来的に「維持」を表さないと考えられる動詞 (e.g. 書く (写)) が特定の条件下において「維持」を表しているように見える現象が日本語と中国語で同様に観察されることについて議論する。

#### 5.2.4. 「語彙的維持」と「語用論的維持」

本節では、作成動詞の「書く (写)」を例に挙げ、本来的には「維持」を表すことが想定されない動詞であるにも関わらず、一定の条件下において「維持」を表すように見える現象を提示する。そして、そのような「維持」は設置動詞によって表される「維持」とは異なり、語用論的なものであることを論じる。

5.2.3 節では、意図的な中止を表す形式である日本語の「(の)をやめる」と中国語の“不 VP 了<sub>2</sub>”が同様に「維持の中止」を表すことを確認した。一方で、意図的な中止を表す形式と、作成動詞「書く(写)」の関わりを見ると、下の(5.33a), (5.34a)では「動作開始前の中止」と「使役変化動作の中止」の二義解釈ができる。さらに、(5.33b), (5.34b)では「黒板に書いた字を消す」という三つ目の解釈ができる。すなわち、(5.33b), (5.34b)では「維持の中止」に類似した機能が成立しているように見る。このような特徴を見ると、「書く(写)」も「維持」を表す事象概念構造(図5.1)を語彙的に含意している可能性が生じることになる。しかし、本研究は、(5.33b), (5.34b)の解釈は語用論的要因によって動機づけられたものであり、設置動詞が語彙的に表す「維持」とは異なるものであると提案する。

- (5.33) a. 先生に制止されたので、太郎は黒板に字を書くのをやめた。  
 b. 皆が太郎に早く消せと言ったので、太郎は黒板に字を書くのをやめた。  
 (筆者作例)
- (5.34) a. 因为 被 老师 制止, 所以 太郎 就 不 在 黑板 上 写  
 ので PASS 先生 制止 それで 太郎 副詞 NEG に 黑板 上 書く  
字 了。  
 字 語気助詞  
 「先生に制止されたので、太郎は黒板に字を書くのをやめた。」
- b. 因为 大家 都 叫 太郎 快点 擦掉, 所以 太郎 就  
 ので 皆 全て CAUS 太郎 早く 消す それで 太郎 副詞  
不 在 黑板 上 写 字 了。  
 NEG に 黑板 上 書く 字 語気助詞  
 「皆が太郎に早く消せと言ったので、太郎は黒板に字を書くのをやめた。」  
 (筆者作例)

先ず、本研究が、(5.33b), (5.34b)の解釈が語用論的要因によって成立していると主張する一つ目の論拠として、(5.33b), (5.34b)のような「書いた字を消す」という解釈は、黒板に書いた字がチョークのようなもので書かれた容易に消すことが可能な場合においてのみ成立する。すなわち、彫刻刀などで黒板に字を書いた(刻んだ)場合、(5.33b), (5.34b)の成立は困難になる。これは、「書く(写)」という動詞が、(5.33b), (5.34b)の解釈を成立させるにあたって、動詞以外の語用論的要因から大きな影響を受けることを表していると考えられる。

次に、5.1 節で確認したように、設置動詞の事象概念構造(下の図5.4に再掲)は、前接事象と後接事象が隣接関係([ $e_1 e_2 \supset c e_5$ ])を成しており、前接事象  $e_2$  (使役変化動作)と後接事象  $e_5$  (維持)の動作主が一致しなくてもよいという特徴がある(岩本2015)。

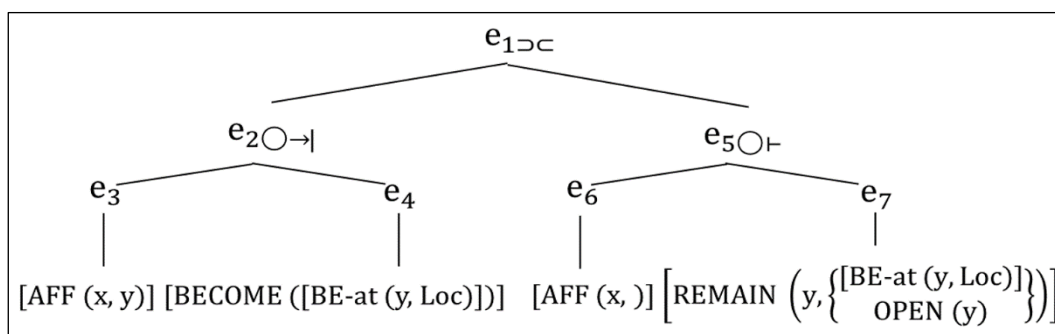


図 5.4 (=図 5.1) 「維持」を表す設置・開閉動詞の事象概念構造 (岩本 2015: 193)

このことから、下の (5.35) では、(5.35a) のように検温器を置いた田中先生 (本人) はもちろん、(5.35b) のように、田中先生 (使役変化動作の動作主) 以外の木村先生も、「検温器を撤去する (置くのをやめる)」という意味である「維持の中止」の動作主になることができる。このような特徴は、中国語の設置動詞 (放 (置く)) にも並行的に見られ、(5.36) は (5.35) に対応する中国語文である。<sup>62</sup>

- (5.35) (1A 教室担任の田中先生は、1A 教室の入り口に検温器を置いた。)
- 田中先生は、1A 教室の入り口に (自分が置いた) 検温器を置くのをやめた。
  - 新しく 1A 教室の担任になった木村先生は、1A 教室の入り口に (田中先生が置いた) 検温器を置くのをやめた。

(筆者作例)

- (5.36) (1A 班 的 班主任 田中 老师 在 1A 教室 门口 放  
1A クラス GEN 担任 田中 先生 に 1A 教室 入り口 置く  
了 体温计。)  
PF 検温器)  
「(1A 教室担任の田中先生は、1A 教室の入り口に検温器を置いた。)」

<sup>62</sup> 前接事象 (使役変化動作) と後接事象 (維持) の動作主はどのような場合においても交替可能というわけではない。例えば、(5.35) の場面で、1A クラスと全く関係の無い 2A クラスの鈴木先生 (田中先生と地位的パワーバランスは均等と仮定する) が突然 1A クラスに来て、田中先生が置いた検温器を「置くのをやめる (撤去する)」ことはできない (不自然である)。母語話者に確認したところ、中国語でも同様の制約が見られる。(5.35b), (5.36b) において、木村先生が「置くのをやめる」ことができるのは、木村先生が新しく 1A 教室の担任になっていることが関係していると考えられる。すなわち、検温器を置いた田中先生から、新しく 1A クラスの担任になった木村先生へ「維持」の権利が移行したことによって、(5.35b), (5.36b) で木村先生による「維持の中止」が可能になっていると考えられる。そして、上述の 1A クラスと全く関係の無い 2A クラスの鈴木先生が突然 1A クラスに来て、「維持の中止」をすることができないのは、田中先生から鈴木先生へ「維持」の権利が移行していないためだと説明できる。このような制約は、本研究が「維持」と呼んでいるタイプの用例が所有結果構文 (possessive resultative) から派生したものだという Nedjalkov and Jaxontov (1988: 24) の主張と関係している可能性がある。

- a. 田中老师 不 把 (自己放 的) 体温计 放 在 1A 教室  
 田中 先生 NEG BA 自分 置く GEN 検温器 置く に 1A 教室  
门口 了。  
 入り口 語気助詞  
 「田中先生は、1A 教室の入り口に (自分が置いた) 検温器を置くのをやめ  
た。」
- b. 1A 班 的 新 班主任 木村老师 不 把  
 1A クラス GEN 新しい 担任 木村 先生 NEG BA  
(田中老师放 的) 体温计 放 在 1A 教室 门口 了。  
 田中 先生 置く GEN 検温器 置く に 1A 教室 入り口 語気助詞  
 「新しく 1A 教室の担任になった木村先生は、1A 教室の入り口に (田中先  
生が置いた) 検温器を置くのをやめた。」

(筆者作例)

一方、「維持の中止」に類似した解釈（黒板に書いた字を消す）が可能 (cf. (5.33b), (5.34b)) である「写（書く）」で維持主の交替可能性を確認してみると、(5.35), (5.36) の設置動詞とは異なる特徴（制約）があることがわかる。下の (5.37), (5.38) では、黒板に字を書いた田中先生（使役変化動作の動作主）以外の木村先生では、(5.37b), (5.38b) のように「黒板に書いた字を消す（書くのをやめる）」という意味である「維持の中止」の動作主になることはできない。すなわち、日本語と中国語の「書く（写）」は、(5.33b), (5.34b) や (5.37a), (5.38a) において、一見すると「維持の中止」のような解釈を成立させるものの、維持主の交替可能性という観点においても、設置動詞が表す「維持」とは異なる特徴が見られる。このような特徴の違いからも、設置動詞によって表される「維持の中止」は図 5.4 のような語彙化された隣接関係を成す事象概念構造によって表される。一方、「写（書く）」によって表される（疑似的な）「維持の中止」は語用論的要因によるものであり、作成動詞は図 5.4 の事象概念構造を語彙的に有していないと本研究は考える。

- (5.37) (1A 教室担任の田中先生は、1A 教室の黒板に字を書いた。)
- a. 田中先生は、1A 教室の黒板に (自分が書いた) 字を書くのをやめた。  
 b. \*新しく 1A 教室の担任になった木村先生は、1A 教室の黒板に (田中先生が書いた) 字を書くのをやめた。

(筆者作例)

- (5.38) (1A 班 的 班主任 田中老师 在 1A 教室 的 黑板 上  
 1A クラス GEN 担任 田中 先生 に 1A 教室 GEN 黑板 上  
 写 了 字。)  
 書く PF 字)

「(1A 教室担任の田中先生は、1A 教室の黒板に字を書いた。)」

- a. 田中 老师 不 在 1A 教室 的 黑板 上 写 (自己 写 的)  
田中 先生 NEG に 1A 教室 GEN 黑板 上 書く 自分 書く GEN  
字 了。

字 語気助詞

「田中先生は、1A 教室の黒板に (自分が書いた) 字を書くのをやめた。」

- b. \*1A 班 的 新 班主任 木村 老师 不 在 1A 教室  
1A クラス GEN 新しい 担任 木村 先生 NEG に 1A 教室  
的 黑板 上 写 (田中 老师 写 的) 字 了。

GEN 黑板 上 書く 田中 先生 書く GEN 字 語気助詞

「新しく 1A 教室の担任になった木村先生は、1A 教室の黒板に (田中先生  
が書いた) 字を書くのをやめた。」

(筆者作例)

以上、本節では、日本語と中国語の作成動詞（書く（写））が一定の条件下において「維持」を表すように見える現象を提示し、そのような「維持」は設置動詞によって表される語彙的なものとは異なり、語用論的なものであることを提案した。さらに、設置動詞が表す「維持」と語用論的要因によって表される「維持」の間に見られる特徴の違いは、日本語と中国語において同様に当てはまることを論じた。次節では、「着」を設置動詞に付加して、客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文（存現文）が成立し「結果状態」が表される要因に対して、比較類型論の観点を援用して議論を行う。

### 5.3. 「維持」を表す形式と形式が持つ機能領域

#### 5.3.1. アスペクト形式と比較類型論の観点

5.2 節では、「(i) 「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii) 属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii) 「維持の続行」が表される」「(iv) 「維持の中止」が表される」という四つの論点から、中国語の設置動詞が「維持」を表す概念構造（図 5.1）を有していることを明らかにした。このことから、岩本 (2015)、林 (2012) のように、日本語と中国語の設置動詞に異なる事象概念構造（図 5.1 vs. 図 5.3）を想定するのではなく、両言語の設置動詞に同様の事象概念構造（図 5.1）を想定すべきだと考えられる。そして、(5.9) のように、事象叙述文で「着」が「維持」を表さない要因は、前節ですでに主張しているように、事象概念構造の差異ではなく「着」の制約によると本研究は考える。

岩本 (2015)、林 (2012) が、中国語の設置動詞の事象概念構造に図 5.3 を提案している背景要因には、(5.8) 「相変換関数分配の原則（修正版）」が関係していると考えられる。(5.8) の原則は、「隣接関係」 $[e_1 e_2 \supset c e_5]$  を成す事象以外では、上位事象（図 5.1 では  $e_2$  か  $e_5$ ）に適用された相変換関数は、下位事象間（図 5.1 では  $e_3, e_4$  か  $e_6, e_7$ ）に同期的に

適用される必要があるという原則である。すなわち、(5.9) のような事象叙述文では「着」が「維持」を表さないことから、中国語の設置動詞に図 5.1 を想定した場合、客体変化後の局面 ( $e_5$ ) において、「着」が「維持」を表す下位事象 (図 5.1 の  $e_6$ ) には適用されず、客体の変化結果を表す下位事象 (図 5.1 の  $e_7$ ) のみに適用されていることになり、(5.8) の原則に違反する。この違反を避けるために、岩本 (2015)、林 (2012) は、図 5.3 を提案していると考えられる。しかし、(5.8) の原則は、日本語の「ている」などのアスペクト形式 (関数) の適用制約を考察する上では有効であっても (cf. 2.5.3 節, 4.2.1 節など)、通言語的にもどれほど適応可能なかは、慎重に議論していく必要があると考えられる。すなわち、岩本 (2015: 195) は、(5.8) の原則を提案するにあたって、「アスペクト関数が相同的に適用するのは、それが可能な限り広い適用範囲を求めるからである」と主張しているが、「アスペクト関数が可能な限り広い適用範囲を求める」というのは、あくまで日本語における形式 (アスペクト形式ないし関数) と意味の対応関係の傾向を反映しているのであって、中国語にはそのような傾向 (原則) が当てはまらない可能性がある。

Hawkins (1986) は言語の形式 (構造) と意味の対応関係には、形式を最小限に留め、最小限の形式に最大限に意味を付与していく方向と、必要な意味的区別に応じて異なる形式を対応させていく方向の二極があり、個別言語はこの二極のどこかに分布していることを主張している。さらに、Hawkins (1986)、堀江 (2001)、堀江・パルデシ (2009)、堀江他 (2021) などに取り組んでいる比較類型論による研究では、特定の言語を形態・統語の多角的観点から比較していくと、それぞれの言語内での形式と意味との対応関係に一貫した傾向が見られることが明らかにされている。例えば、英語とドイツ語を比較した Hawkins (1986) は、ドイツ語は英語に比べ形態・統語両面において表層形式と意味の対応関係が密接であることを指摘している。また、堀江 (2001) は、日本語と韓国語を形態・統語的観点から比較し、日本語と韓国語の間に見られる特徴の違い (cf. 表 5.1) を明らかにしている。表 5.1 の比較・対照以外にも、日本語と韓国語のアスペクト形式の対比において、「ている」が単一の形式で「進行中」「結果状態」(その他派生的機能を含む) を表すのに対し、韓国語では“-ko iss-”が「進行中」を表し、“-a /e iss-”が「結果状態」を表すという形式の分化が見られることを堀江・パルデシ (2009) が指摘している。堀江 (2001)、堀江・パルデシ (2009)、堀江他 (2021) は、日本語と韓国語における一連の対照研究の議論を踏まえて、日本語は韓国語に比べて単一の形式 (構造) に複数の意味 (機能) が対応する傾向が強く「コードの経済性」が優位である。一方、韓国語は単一の形式に単一の意味が対応する傾向が強く「意味的透明性」が優位であることを指摘している。<sup>63</sup>

<sup>63</sup> 堀江・パルデシ (2009) では指摘されていないが、金 (2006) は、韓国語において「進行中」を表す“-ko iss-”が本章で議論の対象としている「客体変化維持」を表すことを指摘している。ただし、金 (2006) によると、日本語で「主体変化維持」を表すと考えられる動詞においては、韓国語では異なる特徴が見られ、例えば、「もたれる (kitay-ta)」などの動詞には“-ko iss-”を付加できるが、「座る (anc-ta)」などの動詞には“-ko iss-”を付加することできず、“-e iss-”が付加されるという。このような形式の使い分けは日本語には見ら

表 5.1 日本語と韓国語の対照

(堀江 2001: 220)

	日本語	韓国語
表記	漢字に音と訓の二つの発音体系が存在	漢字は単一の発音体系のみ
語形成	語と節の中間的な構造が存在	語と節のレベルを厳密に区別
統語論	述語の終止形と連体形の区別がほぼ完全に消失	述語の終止形と連体形を厳密に区別
	主節にのみ生起する接辞は存在しない	主節にのみ生起する接辞が存在
	格助詞の格機能の希薄化, 直後の名詞(化辞)との融合が起こりやすい	格助詞の格機能の希薄化, 直後の名詞(化辞)との融合が起こりにくい
	いわゆる「主要部内在型関係節」が存在	「主要部内在型関係節」の容認度が低い

日本語と中国語の比較においては、今後の更なる検証が必要である。しかし、中国語と日本語を対象とした先行研究では、比較類型論の観点にも繋がり得る示唆的な主張が数多くなされている。例えば、中国語では、発話文脈における名詞句の特定(限定)状況に合わせて、構文を使い分ける必要があり、連体修飾節の成立などで、日本語に比べ強い制約が課されていることを下地(2014)が指摘している。他にも、木村(2006)は、中国語の完了表現の成立において、アスペクト形式と共に数量表現や結果補語が必要なことや、空間を表す「在」などの前置詞の使用において、「\*在椅子(椅子に)」は不自然で、「在椅子上(椅子の上に)」のように具体的な場所を明示する必要があること指摘している。その上で木村(2006: 57)は、「中国語の機能語の多くは、共起対象との意味的協働に依存しつつ自らの文法的作用の実現を果たす傾向が強い」と指摘している。さらに、井上(2012)は、日本語と中国語の間に見られる特徴の違いを下(5.39)のように提示し、(5.39)の特徴が見られる現象の例として「変化の表現様式」「段階性付与の様式」「形容詞文の表現様式」「独立文としてのすわりのよさ」という観点について論じている。<sup>64</sup>また、5.2.1 節で確認したように、「着」の適用に関しても、事象叙述と属性叙述という意味的区別によって異なる制約があり、項の具現形式が異なるという特徴も見られる。

(5.39) ・ 日本語では言語化しなくても表現できることが、中国語では言語化しないと表現できない。

・ 日本語では 1 つの要素で表現できることを、中国語では複数の要素を組み合

れず、日本語では「主体変化維持(維持状態)」vs. 「結果状態」という意味間でも区別が付きにくい(cf. もたれている vs. 座っている)。すなわち、「主体変化維持」を表すとされる動詞における意味的区別及びアスペクト形式の使い分けにおいても、堀江(2001)、堀江・パルデン(2009)、堀江他(2021)によって韓国語の特徴として提案されている「意味的透明性」の特徴が見られる。

<sup>64</sup>井上(2012)は日本語と中国語の間に見られる事象叙述様式の相違は文法カテゴリーとしてのテンスの有無と関係していることを議論しているが、本研究では、井上(2012)の主張(叙述様式とテンスの関係)の妥当性については、議論の対象としない。

わせて表現する。

(井上 2012: 1)

従来の先行研究などで指摘されている日本語と中国語の間に見られる諸特徴を比較類型論の観点から捉え直してみると、日本語は中国語に比べて、個々の形式の機能領域が広く形式と意味の対応関係がより柔軟になっている。一方、中国語は日本語に比べ、意味的区別に応じて異なる形式を細かく付与させており、個々の形式の機能領域が狭い。その結果、個々の形式と意味の対応関係がより密接（厳密）であるという仮定が可能になると考えられる。そして、「着」に関しても、存在を表す LCS の場所項を焦点化する (于 2018) という意味を具現する密接な対応関係を成していることから、「維持」の事象概念構造において下位事象が同時（同期）的關係 (図 5.1 の  $e_6, e_7$ ) を成しているにもかかわらず、(5.8)「相変換関数分配の原則（修正版）」に従わず、意味述語 [BE AT] が含まれる LCS を持つ  $e_7$  のみに「着」が適用される可能性も考えられる。

以上で提案した、中国語における個々の形式と意味の対応関係の強さに関連して、次節では、中国語で「維持の続行」を表す際に見られる形式の使い分けについて確認する。

### 5.3.2. 隣接関係と“把”構文

Tai (1984) は、下の (5.40) から、達成動詞とされる中国語の動詞は、限界点への到達を必ずしも含意せず、限界点への到達を明示するには、結果補語（死（死ぬ））を付加し「杀死（殺す-死ぬ）」のようにする必要があると指摘している。5.1 節では、隣接関係は「変化が生じた点を接点として 2 つの事象が組み合わせられている事象関係」（岩本 2015: 192）だと確認した。しかし、Tai (1984) の指摘に従うと、中国語の（設置動詞を含む）達成動詞は、前接事象において変化が生じた点を必ずしも含意しておらず、前接事象（使役変化動作）と後接事象（客体変化後）が隣接関係を成している構造が想定されない可能性が生じると岩本 (2015) は指摘している。

(5.40)    Zhangsan sha-le        Lisi    liangci,    Lisi    dou    mei    si.  
          name        kill-Perfect    name    twice        name    all    not    die

‘John performed the action of attempting to kill Peter, but Peter didn’t die.’

(Tai 1984: 291 (グロスは岩本 (2015)・その他原文のまま) )

岩本 (2015) はこの問題に対して、「着」が付加されることによって、クオリア構造 (Pustejovsky 1995) において強制が起こり、中国語の設置動詞であっても隣接関係が保証され、結果が表されるようになるメカニズムを主張している。<sup>65</sup> 岩本 (2015) による提案の妥

---

<sup>65</sup> 岩本 (2015) は、「着」の付加によって、中国語の設置動詞（達成動詞）が客体変化後の結果を表し得る要因を、中谷 (2007) の研究を援用しながら議論している。中谷 (2007) は、下の (65.ia) と (65.ib) の対比において、それぞれの動詞が表す結果が記載されているクオ



当性については、議論の対象外とするが、限界点への到達を含意しない可能性が指摘されている中国語の設置動詞において、隣接関係の存在をどのように扱うのかという岩本(2015)の提起は示唆的である。

- (5.41) a. 「使役変化動作」か「維持」の続行  
 太郎 继续 把 雨伞 放 在 门口。  
 太郎 続ける BA 傘 置く に 玄関  
 「太郎が玄関に傘を置き続けた。」
- b. 「使役変化動作の続行」/\*「維持の続行」  
 太郎 继续 在 门口 放 雨伞。  
 太郎 続ける に 玄関 置く 傘  
 「太郎が玄関に傘を置き続けた（置くのをやめなかった）。」
- (5.42) a. 「使役変化動作」か「維持」の続行  
 太郎 继续 把 海报 贴 在 墙上。  
 太郎 続ける BA ポスター 貼る に 壁 上  
 「太郎が壁にポスターを貼り続けた。」
- b. 「使役変化動作の続行」/\*「維持の続行」  
 太郎 继续 在 墙 上 贴 海报。  
 太郎 続ける に 壁 上 貼る ポスター  
 「太郎が壁にポスターを貼り続けた（貼るのをやめなかった）。」

5.2.2 節 (5.18), 脚注 61 でも確認したが、中国語では、上の (5.41a), (5.42a) のように設置動詞が“把”構文で用いられ、「继续」が付加された場合に、文脈によって「使役変化動作の続行」か「維持の続行」という二義性が生じるようになる。一方, (5.41b), (5.42b)

リア構造 (Pustejovsky 1995) の違いを指摘している。(65.ia)「clean」が表す結果は、「clean」が表す事象たるための外延的特性であり、クオリア構造において形式役割 (FORMAL) に組み込まれている。一方, (65.ib)「wash」が表す結果は、「wash」が表す事象であるための必要条件ではなく、その事象の内包的特性であることから、クオリア構造では目的役割 (TELIC) に組み込まれていると中谷 (2007) は分析している。岩本 (2015) は、中国語の設置動詞 (達成動詞) では, (65.ib)「wash」と同様、その事象が表す結果は、目的役割に組み込まれているが、「着」の付加によって、クオリア構造内で目的役割から形式役割へ組み替えられる強制が起こると主張している。その結果、中国語の設置動詞 (達成動詞) であっても、結果の存在 (外延性) が保証され、「着」が客体変化後の結果を表すようになると主張している。なお、岩本 (2015) は「着」がこのような強制を起こす要因に対して、「着」(アスペクト形式) とエビデンシャルティ (実存相) の観点 (木村 2006 など) における相関を指摘している。

- (65.i) a. John cleaned the towel. (\*It was still dirty.)  
 b. John washed the towel. (It was still dirty.) (中谷 2007: 292)

のように、“把”構文で用いられていない場合は、「維持の続行」は表されず、「使役変化動作の続行」のみが表される。“把”構文は、客体への働きかけ（処置）とそれによって引き起こされる結果が表される構文として知られており（刘他 2001 など）、限界点への到達を含意しない可能性が指摘されている中国語の達成動詞（5.40）であっても、“把”構文で用いると限界点への到達が含意され、下の（5.43）が成立しなくなる。

- (5.43) \*Ta ba Zhangsan sha-le, keshi Zhangsan mei si.  
He ba Zhangsan kill-asp but Zhangsan not die  
'He killed Zhangsan, but Zhangsan didn't die.'

(Ritter and Rosen 2000: 208 (筆者下線) )

すなわち、「继续」が客体変化後の局面である「維持」を表すためには、“把”構文によって「維持」する結果の存在を明示することが必要となる。「維持の続行」を表すための形式の使い分けは日本語には見られず、中国語でのこのような形式の使い分けは、5.3.1節での「中国語は日本語に比べ、意味的区別に応じて異なる形式を細かく付与させており、個々の形式の機能領域が狭い。その結果、個々の形式と意味の対応関係がより密接（厳密）である」という提案の一例になると考えられる。

以上のことから、日本語と中国語の設置動詞は同様に「維持」を表す事象概念構造（図 5.1）を持っている。しかし、中国語では日本語に比べ形式と意味の対応関係がより厳密である。このため、「着」に関しても意味との対応関係の強さから、(5.8)「相変換関数分配の原則（修正版）」に従わず、事象叙述文では客体の変化結果（図 5.1 の  $e_7$ ）のみに適用され、自動詞的構文が成立するようになると本研究は考える。

#### 5.4. 5章のまとめ

本章では、研究目的（1.11c, d）について議論を行った。「着」を設置動詞に付加して客体変化後の局面を表す際、一般的に自動詞的構文が成立することから、中国語の設置動詞は「維持」を表す事象概念構造を有していないという議論（林 2012; 岩本 2015）が従来なされてきた。しかし、本研究は、「(i)「維持」に対する禁止命令表現が成立する」「(ii)属性叙述化した場合「着」が「維持」を表す」「(iii)「維持の続行」が表される」「(iv)「維持の中止」が表される」という四つの論点から、中国語の設置動詞も「維持」を表す事象概念構造を有することを明らかにした。そして、「着」が客体変化後の局面を表す際、（事象叙述文では）自動詞的構文になる要因に対して、形式と意味の対応関係の密接性という比較類型論の観点を援用して考察を行った。具体的には、中国語では、日本語に比べ個々の形式の機能領域が狭く、意味との対応関係がより厳密である。「着」に関しても、存在を表す語彙概念構造（LCS: [BE AT]）の場所項を焦点化する（于 2018）という意味を具現している。このことから、「維持」の事象概念構造においても、下位事象が同時（同期）的

関係（図 5.1 の  $e_6, e_7$ ）を成しているも、(5.8)「相変換関数分配の原則（修正版）」に従わず、意味述語 [BE AT] が含まれる LCS を持つ  $e_7$  のみに「着」が適用されるため、自動詞的構文が成立すると本研究は主張した。

## 6. 日本語のアスペクトと認識論との関わり: 「た (なかった)」を対象に

本章では、研究目的 (1.11e) について議論を行う。本章では先ず、6.1 節において、従来の研究を概観しながら、問題点を確認する (6.1 節の内容は、2.7 節の内容と一部重複するが、議論の便宜上改めて取り上げる)。6.2 節では、「動的叙述性」(井上 2011) とは異なる「形式」と「認識内/外の情報」の関わり (Shinzato 1991) の観点から議論することによって、「た (なかった)」に見られる特徴 (制約) を説明できることを論じる。また、本研究の提案における残る課題として、今後どのような観点において更なる検証が必要かも述べる。6.3 節は本章のまとめである。<sup>66</sup>

### 6.1. 従来の議論

#### 6.1.1. 「た」と「ている」に見られる制約の違い

従来の研究において、日本語の「パーフェクト」は「ている」と「た」によって表されると指摘されてきた (工藤 1995 など)。しかし、発話時以前に起こった出来事を表す「ている」と「た」の両形式間には、出来事の捉え方によってそれぞれの形式の使用可能性の違いが見られる (Inoue 1978; 井上 2001, 2011 など)。井上 (2001) は、出来事が実現した経過 (少なくともその一端) を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約を主張している。このことから、下の (6.1), (6.2a) では、発話者が間接的情報源 ((6.1) 「領収書」, (6.2a) 「葉書」) から出来事を捉え、出来事が実現した経過を具体的に把握していないことから「た」の使用が不自然になる。一方、(6.2b) は、発話者が「種」が「人物 X」に会ったことを直接知っている場合や、「種」の行動について調査した捜査員が「種」の一連の行動を再現するような場面において容認されると井上 (2001) は主張している。すなわち、(6.2b) のように「た」が使われた場合は、「種が人物 X に会う」という出来事が実現した経過を話し手が把握しているというニュアンスになる (井上 2001)。【特徴 I】

(6.1) 領収書によると、犯人はもうあの店を訪れています (??訪れました)。  
(筆者作例)

(6.2) (=2.75)

a. 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています (??会いました)。

(「人間の証明」) (井上 2001: 110)

b. 種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会いました。

(ibid: 111)

---

<sup>66</sup> 本章の議論は山田・堀江 (2021) の内容に加筆・修正を加えたものである。

次に、下の(6.3)のように「(もう) た」に「パーフェクト」の否定形式である「ていない」が対応することから、「た」の「パーフェクト」機能が、工藤(1995, 1996)などで指摘されてきた。一方、「た」の否定形式である「なかった」は「パーフェクト」を表し得ないことが工藤(1996)などで指摘され、工藤(1996)はその要因を、(6.4)のように述べている。

(6.3) (=1.9, 2.76)

もう、中国に行きましたか?

いいえ、まだ行っていません。(工藤 1995: 129)

(6.4) これは、ひとえに、シテイル形式のみならずシタ形式が、「シタリ」に連続する歴史的残存物としての<現在パーフェクト(パーフェクト相現在)>用法を保持していることによる。が、否定形式では、シナカッタは現在パーフェクトの否定を表さず、体系の整合化(形式と意味との対応関係の整理)が先行しているのである。(工藤 1996: 90)

しかし、井上(2011)は、対応している否定形式から肯定形式の意味を逆算する議論は妥当ではないことを指摘している。そして、「た」はあくまで過去(テンス)を表すものであり、「(もう) た」と「ていない」の対応は文脈による見かけ上のものだと主張している(井上 2001, 2011)。まず、井上(2011)は、対応している否定形式から肯定形式の意味を逆算する議論が妥当ではないことを指摘する論拠の一つに下の(6.5)を挙げている。(6.5)では、「井上さんから(もう)連絡来た?」という質問に対して、「a. まだ来ません」、「b. まだ来ていません」という否定形式での応答が可能である。すなわち、対応している否定形式から肯定形式の意味を逆算する議論を認めた場合、「井上さんから(もう)連絡来た?」の「た」には「現在の否定」と「パーフェクトの否定」が対応していることから、「た」が「現在」と「パーフェクト」の二義を表していることになってしまう(井上 2011)。

(6.5) (井上から乙に連絡が来ることになっている)

甲: 井上さんから(もう)連絡来た?

乙: a. まだ来ません。

b. まだ来ていません。(井上 2011: 25)

次に、井上(2001, 2011)は、「た」のパーフェクト性、「た」と「ていない」の対応は、当該の出来事がいつ実現してもおかしくない想定される区間(実現想定区間)内に発話時があると認識されている場合に生じる、現在との結びつきによる疑似的(付随的)なものであると主張している。

(6.6) (=2.77)

a. (朝の8時ごろ)

もう (すでに) 朝ごはん食べた?

いや, 食べていない。/??いや, 食べなかった。

b. (その日の夕方に)

今日, 朝ごはん食べた?/??もう (すでに) 朝ごはん食べた?

いや, 食べていない。/いや, 食べなかった。

(井上 2001: 127 (筆者一部加筆))

上の (6.6a) のように, 朝の8時ごろに「朝ごはんを食べる」という出来事が実現することは自然である。一方, (6.6b) のように, 夕方に「朝ごはんを食べる」という出来事は不自然である。すなわち, (6.6b) は, 実現想定区間外であり, 「もう」を使用することができなくなる (井上 2001)。さらに, 「なかった」は発話時が実現想定区間の外に出なければ使用できないことから, (6.6a) は発話時が実現想定区間にあり, 出来事の実現想定と発話時を結びつけて捉えるために「ていない」の使用が必要となる。一方, (6.6b) のように発話時が実現想定区間の外にある場合は, 「ていない」・「なかった」の両形式の使用が可能となる。すなわち, 「なかった」が実現想定区間内において使用できないという制約が, (6.3) や (6.6a) のような「(もう) た」と「ていない」の対応関係を形成する要因になっていると井上 (2011) は指摘している。【特徴 II】

井上 (2011) は, 上の【特徴 I】で挙げた出来事が実現した経過を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約と, 【特徴 II】の「なかった」が実現想定区間内において使用できないという制約は関連していると主張している。井上 (2011) は, 【特徴 I・II】は「た (なかった)」が持つ「出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づける」という意味的性質 (動的叙述性) (井上 2011: 23) によるものだと指摘している。次節では, 井上 (2011) が主張する「動的叙述性」について確認する。

### 6.1.2. 「た (なかった)」の「動的叙述性」と問題点

井上 (2011) は「た」に見られる「動的叙述性」の根拠として, 井上他 (2002) で論じられている韓国語の “*hayssta*” (「た」と多くの対応が見られる形式) との比較を挙げている。井上他 (2002), 井上 (2011) は, 下の (6.7) のように, 帰宅するまでの間になされた動作内容を問う場合は「た」が不自然だが, (6.8) のように「何かやった→服が泥だらけになった」という時間の流れにそった因果関係を問題にする場合には「た」が自然になると指摘している。一方, 韓国語の “*hayssta*” にはそのような制約は見られず, (6.7), (6.8) どちらの状況においても使用できるという。さらに, (6.9) のように記録や痕跡はあるが実現の経過がイメージできない過去の出来事においても, “*hayssta*” は使用できるが, 「た」は使用できない (【特徴 I】と関連)。(6.7)~(6.9) のような場面で見られる「た」の使用における

制約は、「た」の出来事全体をその前後を含む時間の流れの中に位置づけるという意味的性質である「動的叙述性」によると井上他 (2002), 井上 (2011) は指摘している。そして、「た」の「動的叙述性」に関連して、「なかった」が実現想定区間内において使用できない要因【特徴 II】も「なかった」が、出来事が実現しなかった過程をその前後を含む時間の流れの中で位置づけ、発話時以前には出来事が実現されずに終わったことを表すためであると井上 (2011) は主張している。

(6.7) (=2.78)

(夜遅く酔っぱらって帰ってきた夫に妻が)

- a. こんな遅くまで、何 {#やったの / やってたの} ?  
 b. ile-n nuc-un sikan-kkaci, mwe {hayss-eyo / ha-ko iss-ess-eyo} ?  
 こんな 遅い 時間まで 何 やりました やってました

(井上他 2002: 135)

(6.8) (=2.79)

(外に遊びにっていた子供が服を泥だらけにして帰ってきた)

あんた、何やったの?

(ibid 2002: 135)

(6.9) (=2.80)

甲: 乙さん, 先月『対照言語学入門』という本を注文されましたよね。

乙: え? そんな本注文したっけ?

甲: (注文用ハガキを見せて) これ, 乙さんの字ですよ。

乙: (ハガキを見せられたが, 注文の経過を思い出せない)  
 本当だ。確かに先月注文してるねえ (#注文したねえ)。

*cwumwun-hayss-ney.*

注文 した 気づき

(注文した経過を思い出した)

あ, そういえば, 何かそんなタイトルの本を注文したなあ。

*cwumwun-hayss-ess-ci.*

注文した (大過去) 気づき

(ibid 2002: 143)

以上で確認した、「た」と「ている」の両形式間に見られる【特徴 I・II】に対する井上 (2001, 2011) の考察は示唆に富むものであるが、それらの特徴の違いを直ちに「た」と“*hayssta*”との対照によって見出された「動的叙述性」に起因させることには、問題が残ると考えられる。まず、下の (6.10) と同様に発話者が出来事の経過を把握していなくても、一定時間後に出来事を報告するような場面 (6.11a) では「た」の使用が容認される。さらに、(6.11b) のように、「今わかっていることはこれだけですが、少なくとも・・・」とい

う表現を追加しても、当該の場面を想定した場合、容認度に大きな変化は見られない。すなわち、出来事が実現した経過（少なくともその一端）を具体的に発話者が把握していない場合に「た」を使用できないという制約（井上 2001）は、「た」の使用において絶対的な制約ではないと考えられる。【問題点 1】

(6.10) (=6.1)

領収書によると、犯人はもうあの店を訪れています（?? 訪れました）。

(筆者作例)

(6.11) (=2.81)

（一定時間後に出来事を報告するような場面）

- a. 犯人はもうあの店を訪れました。
- b. 今わかっていることはこれだけですが、少なくとも犯人はもうあの店を訪れました。

(筆者作例)

(6.10) と (6.11) の対比の中で、「領収書によると・・・」という間接的情報源の明示が「た」の使用における自然さに関係している可能性があり、一般的な傾向として、間接的情報源の明示によって「た」の使いやすさが変化することも考えられる。しかし、実際の用例を見ると間接的情報源の明示よりも、発話者が出来事情報を得てからどのくらい時間が経過しているのかという状況が、「た」の使用に影響を及ぼしているように考えられる。下の (6.12) に挙げる発話は『日本語話し言葉コーパス CSJ』で検索した発話（模擬講演）であり、(6.11) で「た」の使用が容認され得る場面例として挙げた「報告する場面」に類似している。

- (6.12) （前略） 損害保険会社の第一火災が平成十二年五月一日えー金融監督庁の命令により業務を一部停止されました # この報告は私はえー五月一日の夜のテレビのニュースで知りました # えーとその時はあー五秒か十秒ぐらいだったんであの見てなくてこうテレビの前を歩いてる状態だったのでおおやと思って見た時はえーもう既に他のニュースになっていたのでその時は詳しい内容は分かりませんでした # えーっとえー新聞のんニュースによると国内損保で戦後初めて第一火災は破綻しました # えーと五月一日現在では日本損害保険協会などの保険管理人が受け皿会社探しに向け資産を査定している状態です # 三月末時点では四百八十八億円の債務超過を抱えておりました # えー保険契約者に対しては二千一年三月まではえーっと保険金額は百パーセント出ます # 二千一年四月以降については保険金は全額は出ません # 一部削減されます # えーと新聞のニュースにこのように出ていまして #



(『日本語話し言葉コーパス CSJ (S06M0388)』(筆者下線))

上の発話 (6.12) では、棒線による下線部分において「新聞のニュースによると・・・」という文によって間接的情報源が明示されているにも関わらず、後続の文で「国内損保で戦後初めて第一火災は破綻しました」のように「た」が使用されている。文脈を見ると、発話 (6.12) 冒頭の波線による下線部分から、発話者は、新聞から情報を得る (棒線による下線部分) 前に、すでに第一火災の破綻を知っていることがわかる。すなわち、(6.12) では、発話者が当該のニュース (出来事情報) を初めて得てからしばらく時間が経過しているため、「た」が使用されていると考えられる。また、書き言葉においても、下の (6.13), (6.14) のような間接的情報源の明示 (波線部分) と共に「た」が使用 (棒線部分) される用例が見られた。(6.13), (6.14) のような書き言葉においても、書き手 (発話者) が出来事情報を得てから、文章化するまでに一定の時間が経過していると考えられる。

(6.13) レバノンの首都ベイルート北部で十二日、新シリアのムール国防相の車列近くで爆発が起き、ロイター通信によると、二人が死亡、国防相ら十四人が負傷した。 (『BCCWJ (PN5g\_00017, 4380)』(筆者下線))

(6.14) このころ、道警総務部は「職場で取っている北海道新聞の購読を中止するように」との指示を全部署に出している。北海道新聞販売局によると、道警の定期購読は百部ほど減った。

(『BCCWJ (LBs3\_00154, 22870)』(筆者下線))

以上のことから、間接的情報源の明示という点よりも、発話者が出来事情報を得てからどのくらい経過しているのかという「時の経過」という観点で「た」の使用可能性に影響を与えると考えられる。<sup>67</sup>

次に、井上 (2001, 2011) は、「た」の否定形式である「なかった」は出来事が実現されずに終わったことが確定しなければ (実現想定区間を過ぎなければ) 使えないことを指摘している。しかし、下の (6.15a) のように、発話時に出来事の実現可能性が残っている場合、すなわち、発話時が実現想定区間内に位置する場合においても「なかった」の使用が可能である。さらに、(6.15a) と同様に発話時が実現想定区間内に位置する (6.15b) においては、「なかった」の使用が (6.15a) に比べ不自然になるが、このような (6.15a) と (6.15b) の間において見られる容認度の差は「動的叙述性」という観点では説明が難しいと考えら

---

<sup>67</sup> 梅野 (2009) も類似の指摘をしており、情報 (間接的情報源) の出自が明示的であっても「た」の使用が可能であると主張している。そして、「た」には、「出来事を確定的出来事として提示する<確定性>を意味する機能がある」(梅野 2009: 24) と主張している。しかし、次節 (6.21) で指摘するように、「確定性」という観点だけでは、「た」の使用制約を十分に捉えていないと考えられる。

れる。【問題点Ⅱ】

(6.15) (=1.10, 2.82)

- a. A: あの店, 明後日閉店らしいけど, (もう) 行った?  
B: いや, (結局) 行かなかった / 行っていない。
- b. A: あの店, 来月閉店らしいけど, (もう) 行った?  
B: いや, ?? (結局) 行かなかった / 行っていない。

(筆者作例)

以上で挙げた【問題点Ⅰ・Ⅱ】に対して, 本研究では, 次節において, 形式の使用と出来事情報が知識体系に組み込まれるプロセスとの関係を複合的に捉える Shinzato (1991) による研究を援用し【特徴Ⅰ・Ⅱ】が作り出される要因を考察する。

## 6.2. 本研究の議論

### 6.2.1. 提案

Shinzato (1991) は, 「獲得した出来事情報が知識体系に組み込まれている程度 (epistemicity)」の観点から出来事情報を下の (6.16) 「認識内: A」「認識外: B & C」のように分類し, それぞれの情報を次のように定義している。

- (6.16) A: 議論の余地がない正当なものとして認識内に吸収された情報  
B: 元々は認識外に属したが, 発話時において認識内に吸収されつつある情報であり発話者の「驚き」を引き起こす  
C: 認識内にまだ吸収されていない情報

(Shinzato 1991: 29 (筆者訳))

Shinzato (1991) が議論に援用している研究の一つに Slobin and Aksu (1982) がある。Slobin and Aksu (1982) によると, トルコ語では, 過去時制を表す接尾辞によって直接体験と間接体験という情報源のタイプを区別するエビデンシャル (証拠性表現) の体系があるとされてきた。その主張に従うと, 下の (6.17a) では, 発話に基づく情報源が「報道」であることから, 間接体験を表す “-miş” が使われているように解釈できる。しかし, Slobin and Aksu (1982) によると, 実際には (6.17b) や (6.18) の発話に基づく情報源が (6.17a) と同様に「報道」であっても, 一般的に直接体験を表すとされる “-ti” の使用が可能だ (可能になる) という。

- (6.17) a. Ecevit istifa et-miş.  
Ecevit resignation make

- ‘(It is reported that) Ecevit resigned.’ (Slobin and Aksu 1982: 196)
- b. Ecevit istifa et-*tî*.  
Ecevit resignation make  
‘Ecevit resigned.’ (ibid: 197 (筆者グロス) )
- (6.18) Nixon istifa et-*tî*.  
Nixon resignation make  
‘Nixon resigned.’ (ibid: 196)

この現象に対して、Slobin and Aksu (1982) は、“-*tî*”と“-*miş*”の使い分けは、発話者が出来事に対して認識的な準備ができていないか、できていないかによると指摘している。すなわち、(6.18) では、発話者がニクソンの辞任をあらかじめ予想していたことから、情報源が「報道」であっても“-*tî*”の使用が可能になるのに対して、(6.17a) のエジェヴィットの辞任に対しては、発話者は全く予想しておらず、発話者にとって全く新しい情報であったことから“-*miş*”が使われると指摘している。しかし、(6.17a)も情報獲得時から一定時間が経過し、当該の出来事情報が発話者の認識内に吸収された場合、(6.17b)のように“-*tî*”が使えるようになるという。このような、“-*tî*”と“-*miş*”形式と情報源のタイプの非対応から、Slobin and Aksu (1982) は、“-*tî*”、“-*miş*”の対立は、情報源のタイプによるものというよりは、出来事情報が認識内にあるのか、認識外にあるのかという対立によると主張している。

しかし、Slobin and Aksu (1982) らが指摘する“-*tî*”、“-*miş*”形式と情報源のタイプの非対応は見られるものの、実際には、情報源のタイプと“-*tî*”、“-*miş*”形式の対応関係における相関も見られる。そこで、Shinzato (1991) は発話者が直接体験によって得た情報の多くは瞬時に認識内に吸収されるのに対し、伝聞などの間接体験を通じて得た出来事情報や非確信性を伴う推論情報は、認識外情報として扱われ、その後、認識内に吸収されるプロセスを主張している。Shinzato (1991) が主張する観点(プロセス)を援用して、「た」が認識内情報と対応関係を持つと想定した場合、「時の経過」による「た」の使用可能性の変化【問題点 1】は、下の(6.19)で間接体験(領収書)から得た出来事情報(認識外)が(6.20)では認識内に吸収されたためだと説明できる可能性がある。

(6.19) (=6.1, 6.10)

領収書によると、犯人はもうあの店を訪れています (?? 訪れました)。

(筆者作例)

(6.20) (=2.81, 6.11)

(一定時間後に出来事を報告するような場面)

- a. 犯人はもうあの店を訪れました。  
b. 今わかっていることはこれだけですが、少なくとも犯人はもうあの店を訪れ

ました。

(筆者作例)

従来の研究でも、森田 (2001) や梅野 (2009) などが、「叙述内容が間違いなく成立している」という発話者の判断 (確述意識) や「確定性」(cf. 脚注 67) を「た」が表すと指摘している。確かに、出来事情報が認識内に吸収される上で確述意識 (確定性) は重要な要因になると考えられる。しかし、(6.2a) に文脈を追加した下の (6.21) において、a1 と a2 発話時点の間で発話者の確述意識が変化しているとは考えにくい。このことから、「た」と「ている」の使用においては、Shinzato (1991) が指摘する情報源のタイプと認識内に吸収されるプロセスの関わりも重要な要因になると考えられる。

(6.21) a1: 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物 X に会っています (??会いました)。

(数分後に a1 で得た出来事情報を再確認するような場面)

b: 種は昭和二十四年七月に、えーっとー・・・

a2: 霧積で八尾出身の人物 X に会いました。その後の行動はまだわかっていません。

(筆者作例)

以上の議論から、発話時以前の出来事を表す「た」と「ている」の使用において、出来事情報が認識内にあるのか、もしくは認識外にあるのかという観点が重要になることがわかった。しかし、Shinzato (1991) が分類した認識内に所在する (6.16) 「出来事情報 A」と、認識外に所在する (6.16) 「出来事情報 B & C」と「た」・「ている」の対応を見ていくと、「た」は主に認識内に所在する「出来事情報 A」を表すものの、下の (6.22b), (6.23) のように「た」が広義の「ミラティブ」(「発見の「た」」などと呼ばれる) を表す可能性が定延 (2014a) で指摘されている。<sup>68</sup> すなわち、「た」が「出来事情報 B」も表す可能性が考えられる。

(6.22) a. ?? [自宅で、縁側に立って何気なく庭を見ると、思いがけないことにそこにサルがいる。サルを見ながら、傍らの家人に] ほら見て、あんなところにサルがいたよ。

---

<sup>68</sup> トルコ語の “-miş” などが、直接経験 (体験) に基づく情報ではあるものの、話し手の既存の知識 (予測) に反する情報である「ミラティブ (意外性 (mirativity))」を表すことが知られている。また、“-miş” は間接経験 (体験) を表し、“-miş” が表す意外性は副次的効果だと主張する立場と、“-miş” は本質的に間接経験を表すものではなく、意外性を表すものだと主張する立場もある。さらに、後者の場合、意外性を証拠性に含める立場と、証拠性に含めず、独立した文法範疇と見る立場がある (児倉 2015)。

- b. % [山の中をハイキングしていて、何気なく前方の崖に目をやると、思いがけないことにそこにサルがいる。サルを見ながら、同行している友人に] ほら見て、あんなところにサルがいたよ。

(定延 2014a: 21 (筆者下線))

- (6.23) (「俺はもう酒はやめた。酒を飲んでるところを見つけたら誰でも 1 万円やる」と宣言していた友人が飲み屋でビールのジョッキを傾けているのを目撃した場合)

「あ、飲んだ。1 万円ちょうだい」

(ibid: 19 (場面は間接引用・筆者下線))

定延 (2014a) は、広義の「ミラティブ」と考えられている発見場面で用いられる「た」の特徴について、「た」(広義の「ミラティブ」)の使用に必要なものは「探索意識」であり、出来事に対する事前の期待の有無は問題でないと指摘している(出来事に対する事前の期待は有っても無くてもよい)。例えば、定延 (2014a) によると、上の (6.22a) のような文脈では「た」(サルがいたよ)の使用が不自然であるが、(6.22b) では「た」の容認度が話者によっては上がるという。(6.22a, b) ではいずれも「サルがいるかもしれない」という期待は無いことから、期待の有無という観点では (6.22a) と (6.22b) の間に見られる「た」の容認度の差を説明できないことを定延 (2014a) は指摘している。そして、定延 (2014a) は、(6.22) における「た」の容認度の違いは「探索意識」の有無によるものであることを指摘している。すなわち、(6.22a) のような「見なれた自宅の庭」では「探索意識」を持ちにくいのに対し、(6.22b) のようなハイキング場面(新奇な場所)では「探索意識」を持ちやすいため「た」の容認度が上がることになる。他にも (6.23) における「た」の使用は友人の宣言によって、「あの人は酒を飲むのではないか」という探索課題が設定され「探索意識」が活性化されているため自然になる(定延 2014a)。実際に、そのような文脈(探索意識)が無い状態で、たまたま友人の飲酒を発見した場合は、「飲んだ!」は不自然になり、「あ、飲んでる!」が自然になる(定延 2014a)。なお、(6.23) は話者が友人から 1 万円をもらうために、友人が酒を飲むことを期待している状況である可能性も考えられる。すなわち、(6.22) 「期待無し」と (6.23) 「期待有り」の対比からも、広義の「ミラティブ」の使用においては、定延 (2014a) が主張するように、期待の有無という観点よりも、必要なのは「探索意識」だということがわかる。<sup>69</sup>

一方、マルチュコフ (2014a) は、トルコ語の “-miş” などが表すとされる一般的な「ミラ

<sup>69</sup> ただし、定延 (2014a) は (6.22b) のように「探索意識」があっても「期待」が無い場合において、「発見の「た」」の使用が一部の話者にとって自然さが低いことを指摘している。しかし、そのような場合においても、発話者のキャラクタを「自分の感覚を押しつけて誘導しにかかるお節介な『おばさん』」(定延 2014a: 29) などのように設定すると、容認度が上がることを指摘し、「発見の「た」」の使用において「探索意識の有無」「期待の有無」の他に「発話キャラクタ」という制約が存在していることを指摘している。

ティブ」と呼ばれる機能は、出来事に対する事前の期待が無い場合（狭義の「ミラティブ」）に使用されることを指摘している。さらに、下の (6.24) の「た」は一見すると「発見の「た」（「ミラティブ」）」に類似しているが、(6.24) では出来事（沸騰状態のお湯）を発見した場合であっても、独り言として (6.24a) を発話することができないという制約がある（定延 2014a）。ただし、未沸騰から沸騰への変化を目撃（経験）した場合は (6.24a) の使用が可能になる。さらに、未沸騰から沸騰への変化を目撃（経験）しておらず沸騰状態だけを目撃していたとしても、他の人（聞き手）にお湯の沸騰を知らせる場合には (6.24b) のように「た」の使用が可能になる（定延 2014a）。しかし、マルチュコフ (2014b) は、通常の「ミラティブ」には (6.24b) のように聞き手を必要とする制約は無いことを指摘し、(6.24) のような「た」が「ミラティブ」でない可能性を指摘している。

(6.24) (沸騰状態の湯を見て)

- a. #あれ、お湯が沸いた。(独り言)
- b. おーい、お湯が沸いたよー。

(定延 2014a: 31 (場面は間接引用, # は筆者による) )

以上のように、出来事に対する事前の期待の有無という観点、及び (6.24) のような場面における「聞き手」の有無による「た」の使用制約の観点では、発見場面で用いられる「た」と通言語的に「ミラティブ」とされる機能間には差が見られる。しかし、本研究では、定延 (2014a, b), マルチュコフ (2014a, b) による一連の議論を踏まえて、発見場面で用いられる「た」を広義の「ミラティブ」を表す形式として議論を進める。

次に、「ている」は「た」が主に表す認識内に所在する「出来事情報 A」(6.25) だけでなく、(6.26) のような「ミラティブ (出来事情報 B)」も表す (永井 2017)。さらに「た」が表すことができない「(認識内に吸収される以前の) 伝聞などの間接体験を通じて得た出来事情報や非確信性を伴う推論情報」(cf. (6.1), (6.2a), (6.10)), すなわち「出来事情報 C」も表すことができる。

(6.25) 私は 10 年前に一度上海を訪れ {ています / ました}。 (筆者作例)

(6.26) (テレビを見ていて、一旦その場を離れたのちに戻るとテレビの画面が消えていた)

あつ、消えてる! (永井 2017: 10)

以上のことから、「た」・「ている」と「認識内 / 外の情報」の対応関係は下の図 6.1 のようになると考えられる。また、否定形式である「なかった」・「ていない」においても、「認識内 / 外の情報」との対応関係は肯定形式の「た」・「ている」と同様の分布を成すと想定する (cf. 脚注 70)。「た」が表すとされる広義の「ミラティブ」と通言語的に「ミラ

タイプ」とされる機能の間には差が見られることから、「た（なかった）」と「出来事情報 B」の対応については点線で表記した。

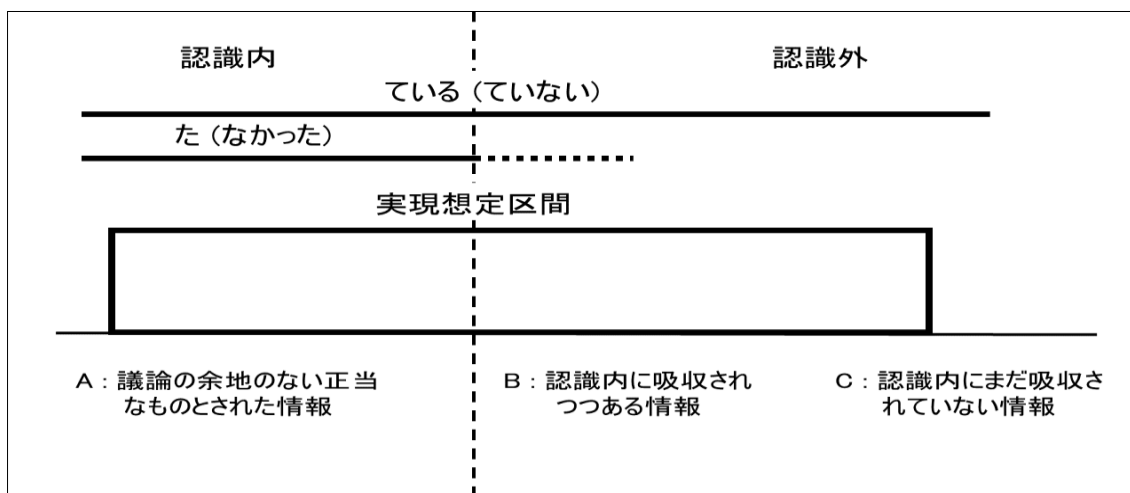


図 6.1 「形式」と「認識内/外の情報」の対応

本研究は図 6.1 のように、「た」と否定形式の「なかった」は認識内に所在する「出来事情報 A」と認識外に所在する「(部分的に) 出来事情報 B」を表すのに対し、「ている」と否定形式の「ていない」は認識内と認識外に所在する A から C 全ての出来事情報を表し得るという対応関係を成している想定した。図 6.1 で示した「た(なかった)」・「ている(ていない)」と「認識内/外の情報」の対応関係から、【問題点 II】である、「なかった」の使用に対する制約について考察していく。

(6.27) (=1.10, 2.82, 6.15)

- a. A: あの店、明後日閉店らしいけど、(もう) 行った?  
B: いや、(結局) 行かなかった/行っていない。
- b. A: あの店、来月閉店らしいけど、(もう) 行った?  
B: いや、?? (結局) 行かなかった/行っていない。

(筆者作例)

上の (6.27) では、閉店日が (6.27a) では「明後日」、(6.27b) では「来月」である。(6.27b) の「来月の閉店日」までに「店に行く」という出来事が実現しない(店に行かない)ということは、発話時点で (6.27a) の「明後日」に比べ非確信性が強い。すなわち、(6.27b) では、当該の出来事に関する実現想定(情報)に「出来事情報 C」が多く含まれているため、「なかった」が容認されにくくなると考えられる。しかし、(6.27b) であっても、発話者がすでに二年間当該の店を知っているにもかかわらず、発話時までその店を訪れなかつ

たような状況では「なかった」の容認度が上がると考えられる。すなわち、当該出来事の実現想定に関する情報が認識外に比べ認識内に多く吸収されている場合に「なかった」が成立するようになると考えられる。さらに、(6.27a)のように「なかった」が成立した場合、図 6.1 で示した「形式」と「認識内 / 外の情報」との対応関係から、非確信性を伴う発話時以降の出来事の実現想定が打ち消される。一方、「ていない」は、A から C の全ての出来事情報を表し得ることから、発話時以降の出来事の実現を発話者が引き続き想定する場合、「(もう) た」に対応する否定形式に「ていない」が使われることとなる。

以上のことから、「(もう) た」に「パーフェクト」の否定形式である「ていない」が対応する要因も、「た (なかった)」・「ている (ていない)」と「認識内 / 外の情報」の対応関係から説明できると考えられる。しかし、本研究の提案においては、今後更なる検証を行い本提案の妥当性を更に検討すべき点がある。次節では、本研究の提案に対する今後の課題について述べる。

## 6.2.2. 本研究の提案に残る課題点

6.2.1 節では、「た (なかった)」・「ている (ていない)」と「認識内 / 外の情報」の間には対応関係が存在することを指摘した。さらに、認識内と認識外に存在する出来事の実現想定が情報として「なかった」「ていない」と関わりを持つことによって、「(もう) た」に「パーフェクト」の否定形式である「ていない」が対応するようになるという提案を行った。

Shinzato (1991) が提案する 6.2.1 節 (6.16) 「認識内 / 外の情報」において、トルコ語の過去時制を表す接尾辞 “-ti” は「認識内: 出来事情報 A」, “-miş” は「認識外: 出来事情報 B & C」と対応している。しかし、大川 (2018) によると、トルコ語の否定語幹に “-ti” を付加した下の (6.28) の形式は、日本語の「なかった」と「ていない」のどちらの意味も表すという。一方で、(6.29) のように実現していない出来事に関する情報を伝聞などから得た場合は、「否定語幹+*-miş*」形式によって表される (大川 2018)。<sup>70</sup>

---

<sup>70</sup> 日本語においても類似の制約が見られる。井上 (2001) は実現想定区間外であっても、下の (70.i) のような状況では「なかった」の使用が不自然であると指摘している。井上 (2001: 134) は、出来事が実現されずに終わった経過が把握されていない場合は、(70.i) のように「なかった」の使用が不自然になると主張しているが、(70.i) においては、出来事が実現しなかったという情報が「注文ハガキ」から得た「認識外: 出来事情報 C」である。すなわち、情報を得たばかりの段階である (70.i) では「注文ハガキ」から得た情報が認識内に吸収されていないため「なかった」の使用が不自然になると本研究は考える (cf. 図 6.1)。

(70.i) 乙: この間注文した『「た」の言語学』、まだ入りませんか?

甲: あれ? 乙さん、『「た」の言語学』を注文されましたっけ。この間いただいたハガキには書いてありませんでしたけど。

(乙に注文のハガキを見せる。)

乙: (注文のハガキを見て)



- (6.28) Arkadaş im kahvaltı yap ma di.  
 友だち 人称語尾 朝ごはん とる NEG PST/PF  
 「(私の) 友だちは朝食をとりませんでした / とっていません。」  
 (大川 2018: 67 (筆者グロス))
- (6.29) Miki dolmuş a bin me miş.  
 ミキ ドルムシュ に 乗る NEG PF  
 「ミキはドルムシュに乗らなかったそう / 乗っていないそうだ」  
 (ibid: 78 (筆者グロス))

(6.28) と (6.29) の対比から、トルコ語は否定形式においても “-ti” は「認識内: 出来事情報 A」, “-miş” は「認識外: 出来事情報 B & C」を表すという対応関係を成していることがわかる。しかし、(6.28) のように、実現想定区間内、実現想定区間外に関わりなく、発話時において実現していない出来事については、「否定語幹+*-ti*」によって表されるのはどのような要因によるものであろうか。これは、トルコ語では、認識内と認識外に所在する出来事の実現想定が情報として「否定語幹+*-ti*」「否定語幹+*-miş*」と関わりを持っていない可能性が考えられる。そのため、(6.28) のように、実現想定区間内、実現想定区間外に関係なく、発話時において実現していない出来事については、「否定語幹+*-ti*」で表されている可能性がある。しかし、なぜ日本語では実現想定が情報として「なかった」「ていない」と関わりを持つのにに対し、トルコ語の「否定語幹+*-ti*」「否定語幹+*-miş*」においては、そのような関わりを持たないのかという点について、関連する現象（間主観性を表す形式に見られる相違点など）と合わせて今後更に検証していく必要がある。

### 6.3. 6章のまとめ

以上、本章では、研究目的 (1.11e) について議論を行った。本研究は「形式」と「認識内 / 外の情報」(epistemicity: Shinzato 1991) の関わり (対応関係) の観点から、「時の経過」による「た」の使用可能性の変化、「なかった」の使用制約によって作り出される「(もう) た」と「ていない」の対応関係を説明できることを提案した。先ず、「時の経過」による「た」の使用可能性の変化について、伝聞などの間接体験を通じて得た出来事情報や非確信性を伴う推論情報は、いったん認識外情報として扱われ、その後、認識内に吸収されるプロセスが存在する (Shinzato 1991)。そして、「た」は広義の「ミラティブ (発見の「た」)」を除くと、主として認識内情報との対応関係を持っていると想定した。そのため、伝聞などの間接体験を通じて得た出来事情報や非確信性を伴う推論情報は、情報を獲得した時点では「た」で表すことはできないが、時の経過によってそれらの情報が認識内に吸収された場合には「た」の使用が可能になることを論じた。

---

本当だ。確かに注文していません (??注文しなかったです) ねえ。  
 (井上 2001: 135)

次に、従来の研究(工藤 1995, 1996 など)で、「た」の「パーフェクト」機能の根拠とされてきた、「(もう) た」と「ていない」の対応関係においても、「なかった」は、主に認識内に所在する出来事情報を表すことから、「なかった」が使われた場合には、非確信性を伴う発話時以降の出来事の実現想定が打ち消される。そこで、発話時が実現想定区間内にあり、非確信性(出来事情報 C)を多く含む発話時以降の出来事の実現を引き続き想定する場合においては、認識外情報も表すことができる「ていない」の使用が義務的になることから、「(もう) た」と「ていない」の対応関係が形成されることを論じた。

## 7. 結論

本研究は、日本語と中国語のアスペクト形式に見られる諸制約（特徴）を例に挙げながら、従来の議論・観点では十分な説明を行うことができなかつた制約に対して、「事象投射理論」（岩本 2008, 2010, 2011, 2015, 2021 など）、「比較類型論」（comparative typology）（Hawkins 1986; 堀江 2001; 堀江・プラシャント 2009; 堀江他 2021 など）、「認識内 / 外の情報（epistemicity）」（Shinzato 1991）の分析枠組み及び観点を援用して議論を行ってきた。本章では本研究のまとめと今後の展望について述べる。

### 7.1. 本研究のまとめ

1 章では、研究背景の概要を示し、本研究の研究目的を提示した。2 章では、1 章で簡潔に言及した先行研究の議論を確認しながら、具体的な問題点や分析枠組みを示し、3 章以降の議論に繋げた。まず、従来の金田一（1950）、奥田（1978a, b）、森山（1988）、中村（2001）、池谷（2003）などの研究を概観し、従来の観点・分析枠組みでは、段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞の関わりに対する分析・議論を十分に行えないことを指摘した。そして、従来の研究とは異なる分析枠組みを提案しながら、「ている」に関わるアスペクト現象を議論している事象投射理論（岩本 2008 など）について確認し、本研究への援用可能性を示した。また、事象投射理論を援用した通言語的研究（林 2012; 岩本 2015）を確認し、林（2012）、岩本（2015）の議論に見られる問題点を指摘した。さらに、「パーフェクト」を表すとされてきた「た」と否定形式の「なかつた」に見られる制約について、「動的叙述性」という観点から議論している井上（2001, 2011）の研究を確認し、残る問題点を示した。

3 章ではまず、一貫性という点で問題が見られた情報の空虚化に関する岩本（2008）の議論について、再検討と精緻化を行った。そして、現行の事象投射理論（岩本 2008）では明らかにされていなかった稼働期間修飾句の概念構造（関数）とその関数の適用プロセスを提案した。3 章における本研究の一連の議論・提案によって、従来の事象投射理論の枠組みでは議論することができなかつた、限界的事象への稼働期間修飾句の適用を議論できるようになっただけでなく、岩本（2008）の議論に見られた関連する問題点も克服することができたと考えられる。

4 章では、金田一（1950）、奥田（1978a, b）、森山（1988）、中村（2001）、池谷（2003）などの研究によって提案されてきた観点・分析枠組みでは、十分な議論を行うことができない段階複合動詞の諸特徴及び「ている」機能、副詞の関わりについて議論を行った。4 章では、従来の研究では一貫した十分な分析・議論を行うことができなかつた問題点に対して、事象投射理論の分析枠組み（3 章で本研究が再検討・提案を行ったものを含む）を援用することによって、分析枠組み内で一定のまとまりのある分析・議論を行えることを示した。そして、アスペクト研究における、事象投射理論の有用性を改めて示すことができたと考えられる。

5章では、事象投射理論を援用した通言語的研究(林 2012; 岩本 2015)によってなされてきた「中国語の設置動詞は「維持」を表す概念構造を有していない」という主張に対して、林(2012), 岩本(2015)の論拠(「存現文」とは異なる観点から検証を行い、中国語の設置動詞も「維持」を表す事象概念構造を有することを明らかにした。さらに、形式と意味の対応関係の密接性という比較類型論(Hawkins 1986; 堀江 2001 など)の観点を援用して、中国語のアスペクト形式である「着」に見られる特徴を議論した。そして、日本語と中国語の間においては、形式と意味の対応関係に異なる傾向が存在する可能性があることを指摘した。

6章では、「動的叙述性」という観点から「た(なかった)」の制約を議論している井上(2001, 2011)の研究では十分な説明ができない、「た(なかった)」に見られる認識論に関わる制約について議論した。そして、「形式」と「認識内/外の情報」(epistemicity: Shinzato 1991)の関わり(対応関係)の観点から分析することで、「た(なかった)」に見られる認識論的制約とその制約が作り出す特徴を説明できることを示した。

## 7.2. 今後の展望

本研究では3章から5章において、岩本(2008など)によって提案されている「事象投射理論」の枠組みを援用して議論を行った。本研究による一連の議論により、アスペクト研究における、事象投射理論の有用性を改めて示すことができたと考えられ、今後の更なる研究が期待される(e.g. (7.1a~c))。また、6章では「た(なかった)」に見られる認識論的制約・特徴について論じた。アスペクト形式と認識論的な制約の関係については、管見の限り従来の教学の現場では、あまり注目されていないように思える。このようなことから、当該の観点における教学への応用可能性に関する議論も今後期待される(e.g. (7.1d))。

- (7.1) a. より多くのアスペクト現象を対象とした定式化及び、定式化によってより具体化される個別言語におけるアスペクト現象の特徴に対する議論
- b. 「維持」を表すアスペクト形式に対する更なる通言語的議論
- c. 「語彙的維持」と「語用論的維持」に関する通言語的議論
- d. アスペクト形式と認識論的制約の関係を踏まえた教授案の提案・実践及び、その教授効果に対する議論

一方で、3章や5章で、一部議論の再検討や、新たな提案を行ったように、事象投射理論は岩本(2008)によって提案されてから、比較的年月が浅く、発展途上の側面もある。例えば、3章では「～間かけて」「～間かかって」「～間で」などの個々の稼働期間修飾句には、文脈による適用制約の違いがあることを認めつつも(cf. 脚注 35)、稼働期間修飾句の概念構造に共通して含まれていると想定した COMP とその適用プロセスを対象に議

論を行った。また、今後、通言語的議論を進めていく中で、広義では同様の概念・機能を表しているように見える形式であっても、狭義では異なる特徴が見られる場合もあるかもしれない。すなわち、現行の事象投射理論の枠組みだけで狭義の異なる特徴を過不足なく捉えることができない場合に、どのように対応するのかなど検討していく必要がある。そのためにも、(7.1) で挙げたように、今後より多くの言語やアスペクトに関連する現象の分析を通して、事象投射理論の妥当性・限界を検討し、理論を発展させていく必要がある。

また、6章において、日本語の「なかった」「ていない」とトルコ語の「否定語幹+*-ti*」「否定語幹+*-miş*」の間に見られる類似点と相違点を指摘した。日本語とトルコ語の当該形式に見られる類似点と相違点については、関連する現象（間主観性を表す形式に見られる特徴など）と合わせて今後更に検証していく必要がある。

## 謝辞

本論文は筆者が名古屋大学大学院人文学研究科の博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。本論文の執筆にあたり、多くの方々からいただいたご指導・ご支援に心より感謝申し上げます。

まず、主旨導教員としてご指導をいただいた堀江薫先生に心より御礼申し上げます。堀江先生には、博士後期課程入学当初から、日々の研究、学会発表、論文投稿、本論文の執筆に至るまで、大変多くのご指導をいただきました。副指導教員としてご指導をいただいた井土慎二先生、大島義和先生には、日々の授業などでもよく気にかけていただき、本論文の審査過程においても、多くのご助言・ご指導をいただきました。そして、佐久間淳一先生には、本論文の審査過程において、有益なご指摘・ご指導をいただきました。また、加藤高志先生にも、本論文執筆にあたって、多くのご指導をいただきました。この場をお借りして、先生方に深く感謝を申し上げます。

次に、立命館大学の平田裕先生には、筆者が立命館大学大学院言語教育情報研究科の修士課程に在学中から現在に至るまで、多くのご指導と励ましをいただきました。深く御礼申し上げます。

先輩・後輩であり友人でもある、大瀧夕さん、胡蘇紅さん、蔡増溢さん、余暁宇さんには、本論文執筆中に、多くのご助言と励ましをいただきました。御礼申し上げます。

最後に、筆者をいつも温かく支えてくれる家族に改めて感謝いたします。

## グロス部分の略語一覧

ASP (Aspect marker)	アスペクト (本研究では“着”に付加する。“着”は一般的に「持続」を表すマーカーとされる)
BA (Marker of the <i>ba</i> construction)	“把”構文
CAUS (Causative)	使役
CL (Classifier)	分類辞
COP (Copula)	コピュラ
GEN (Genitive)	属格
NEG (Negative)	否定
PASS (Passive)	受身
PF (Perfect)	完了
PL (Plural)	複数
PST (Past)	過去
SG (Singular)	単数
1 (1st person)	1人称
3 (3rd person)	3人称

## 参考文献

- 陈庭珍 (1957) 「汉语中处所词做主語的存在句」『中国語文』 8: 15–19.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and causal structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Dölling, Johannes (2014) Aspectual coercion and eventuality structure. In: Klaus Robering (ed.) *Events, arguments, and aspects: Topics in the semantics of verbs*, 189–226. Studies in language companion series 152. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 浜之上幸 (1997) 「現代朝鮮語における動作の複数性について」国立国語研究所 (編) 『「日本語と朝鮮語」 下巻 研究論文編』 153–172. 日本語と外国語との対照研究IV. 東京: くろしお出版.
- 原由起子・常次莉恵 (2012) 「“继续 V”, “V 下去” 与 “继续 V 下去”」『中国語文法研究』 2012 年卷: 137–152.
- Hawkins, John A. (1986) *A comparative typology of English and German—Unifying the contrasts*. London & Sydney: Croom Helm.
- 姫野昌子 (1982a) 「始める」 社団法人日本語教育学会 (編) 『日本語教育事典』 371. 東京: 大修館書店.
- 姫野昌子 (1982b) 「続ける」 社団法人日本語教育学会 (編) 『日本語教育事典』 371–372. 東京: 大修館書店.
- 姫野昌子 (1982c) 「終わる」 社団法人日本語教育学会 (編) 『日本語教育事典』 372. 東京: 大修館書店.
- 姫野昌子 (2018) 『新版 複合動詞の構造と意味用法』 東京: 研究社.
- Horie, Kaoru (1997) Form-meaning interaction in diachrony: A case study from Japanese. *English Linguistics* 14: 428–449.
- 堀江薫 (2001) 「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察—日本語と韓国語を対象に—」 山梨正明 他 (編) 『認知言語学論考』 1: 185–227. 東京: ひつじ書房.
- 堀江薫・プラシャント パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』, 講座 認知言語学のフロンティア 5. 東京: 研究社.
- 堀江薫・秋田喜美・北野浩章 (2021) 『言語類型論』, 最新英語学・言語学シリーズ 第 12 卷. 東京: 開拓社.
- Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1999) The temporal system in Japanese. In: Takao Gunji and Kôiti Hasida (eds.) *Topics in constraint-based grammar of Japanese*, 81–97. Studies in linguistics and philosophy 68. Dordrecht: Springer.
- 池谷知子 (2003) 「終了を表す複合動詞後項「～おわる」と「～おえる」について」『日本語・日本文化研究』 13: 39–50.
- 井本亮 (2008) 「限界点を超える—「V-すぎる」の意味計算と解釈コスト—」 岩本遠億 (編著) 『事象アスペクト論』 323–368. 東京: 開拓社.
- Inoue, Kyoko (1978) Speaker's perspectives and temporal expressions—A case study from



- Japanese and English—. *University of Michigan Papers in Linguistics* 2: 105–115.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム (著) 『「た」の言語学』 97–163. *Hitzu linguistics workshop series* 5. 東京：ひつじ書房.
- 井上優 (2011) 「動的述語のシタの二義性について」『国立国語研究所論集』 1: 21–34.
- 井上優 (2012) 「テンスの有無と事象の叙述様式 日本語と中国語の対照」影山太郎・沈力 (編) 『意味と構文』 1–26. *日中理論言語学の新展望* 2. 東京：くろしお出版.
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照 日本語・朝鮮語・中国語」生越直樹 (編) 『対照言語学』 125–159. *シリーズ言語科学* 4. 東京：東京大学出版会.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 東京：スリーエーネットワーク.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 東京：スリーエーネットワーク.
- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』 東京：開拓社.
- 岩本遠億 (2010) 「経路移動事象の両義的限界性と増分性」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 5: 53–97. 東京：ひつじ書房.
- 岩本遠億 (2011) 「シテイルが持つ継続的状态性と結果の意味—井上和子『変形文法と日本語』と事象投射理論—」長谷川信子 (編) 『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』 123–150. 東京：開拓社.
- 岩本遠億 (2015) 「アスペクトと事象構造の変更—結果持続の類型論に向けて—」由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』 184–212. 東京：開拓社.
- 岩本遠億 (2019) 「発表に対するコメント」日本言語学会第 158 回大会公開シンポジウム. 一橋大学, 2019年6月23日.
- 岩本遠億 (2021) 「テイルの 1 つの意味」庵功雄・田川拓海 (編) 『「した」「している」の世界』 185–214. *日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す* 第 2 巻. 東京：ひつじ書房.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. *Current studies in linguistics* 18. Cambridge, MA & London: The MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1991) Parts and boundaries. In: Beth Levin and Steven Pinker (eds.) *Lexical & conceptual semantics*, 9–45. Cambridge, MA & Oxford, UK: Blackwell.
- Jackendoff, Ray (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language & Linguistic Theory* 14: 305–354.
- Jackendoff, Ray (1997) *The architecture of the language faculty*. *Linguistic inquiry monographs* 28. Cambridge, MA & London: The MIT Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, *日本語研究叢書* 第 2 期第 4 巻. 東京：ひつじ書房.

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』, 日英語対照研究シリーズ 5. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (1997) 「単語を超えた語形成」 中右実 (編) 『語形成と概念構造』 128–197. 日英語比較選書 8. 東京: 研究社.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」 益岡隆志 (編) 『叙述類型論』 21–43. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」 『言語研究』 136: 1–34.
- Kearns, Kate (2007) Telic senses of deadjectival verbs. *Lingua* 117: 26–66.
- Kennedy, Christopher and Beth Levin (2008) Measure of change: The adjectival core of degree achievement. In: Louise McNally and Christopher Kennedy (eds.) *Adjectives and adverbs: Syntax, semantics, and discourse*, 156–182. Oxford studies in theoretical linguistics 19. New York: Oxford University Press.
- 金京愛 (2006) 「現代韓国語のAspect形式〈-ko iss-〉の意味分析: 日本語の「ーている」との比較の観点から」 『京都大学言語学研究』 25: 187–215.
- 木村英樹 (1983) 「关于补语性词尾“着/zhe”和“了/le”」 『语文研究』 2: 22–30.
- 木村英樹 (2006) 「「持続」・「完了」の視点を超えて—北京官話における「実存相」の提案—」 『日本語文法』 6 (2): 45–61.
- 金田一春彦 (1950) 「國語動詞の一分類」 『言語研究』 15: 48–63. (金田一春彦 (1976) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のAspect』 5–26. 東京: 麦書房 (再録)).
- 金水敏 (2000) 「時の表現」 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (著) 『時・否定と取り立て』 1–92. 日本語の文法 2. 東京: 岩波書店.
- 岸本秀樹 (2009) 「補文をとる動詞と形容詞—上昇とコントロール」 影山太郎 (編) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』 152–190. 東京: 大修館書店.
- 岸本秀樹 (2013) 「統語的複合動詞の格と統語特性」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 143–183. 東京: ひつじ書房.
- Klein, Wolfgang (2014) Is aspect time-relational? Commentary on the paper by Jürgen Bohnemeyer. *Natural Language & Linguistic Theory* 32: 955–971.
- 児倉徳和 (2015) 「証拠性」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 118. 東京: 三省堂.
- 国立国語研究所 (1992) 『敬語教育の基本問題 (下)』, 日本語教育指導参考書 18.  
[https://repository.ninjal.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1858&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://repository.ninjal.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1858&item_no=1&page_id=13&block_id=21) [2022年10月アクセス]
- 工藤真由美 (1982a) 「シテイル形式の意味記述」 『武蔵大学人文学会雑誌』 13 (4): 51–88.
- 工藤真由美 (1982b) 「シテイル形式の意味のあり方」 『日本語学』 1 (2): 38–47.
- 工藤真由美 (1995) 『Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』,

- 日本語研究叢書第2期第7巻. 東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1996) 「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学7』 81-136. 東京：むぎ書房.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』 東京：大修館書店.
- Li, Ping and Melissa Bowerman (1998) The acquisition of lexical and grammatical aspect in Chinese. *First Language* 18: 311-350.
- 林君憶 (2012) 「「テイル」と「着」—日中アスペクト対照研究—」 修士論文, 神田外語大学.
- 刘月华・潘文娉・故韡 (1996) 相原茂 (監訳) 『現代中国文法総覧』 東京：くろしお出版.
- 刘月华・潘文娉・故韡 (2001) 『实用现代汉语语法 (増訂本)』 北京：商务印书馆.
- 呂叔湘 (2003) 牛島徳次・菱沼透 (監訳) 『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』 東京：東方書店.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』, NAFL 選書 9. 東京：アルク.
- マルチュコフ アンドレイ (2014a) 「定延論文へのコメント」 定延利之 (編) 『日本語学と通言語的研究との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』 39-41. 東京：くろしお出版.
- マルチュコフ アンドレイ (2014b) 「再コメント」 定延利之 (編) 『日本語学と通言語的研究との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』 51-52. 東京：くろしお出版.
- 丸尾誠 (2007) 「中国語にみられる完了と結果の接点—“V了”と“V着”を例として—」 彭飛 (編) 『日中対照言語学研究論文集—中国語からみた日本語の特徴, 日本語からみた中国語の特徴—』 327-344. 大阪：和泉書院.
- 丸尾誠 (2010) 『基礎から発展までよくわかる中国語文法』 東京：アスク出版.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー—語彙的使役動詞の語彙概念構造—』 東京：松柏社.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'word'*. Studies in Japanese linguistics 7. Stanford: CSLI Publications & Tokyo: Kurosio Publishers.
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語—意味と使い方』, 角川小辞典 7. 東京: 角川書店.
- 森田良行 (2001) 「確述意識を表す「た」」 『言語』 30 (13): 72-77.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 東京：明治書院.
- 永井宥之 (2017) 「日本語のエビデンシャリティ: 「ーている」を事例に」 『言語科学論集』 23: 1-18.
- 中谷健太郎 (2007) 「文処理ストラテジーという視点から観た結果構文の類型論」 小野尚之 (著) 『結果構文研究の新視点』 289-317. ひつじ研究叢書<言語編>第62巻. 東京：ひつじ書房.

- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』, 日本語研究叢書 14. 東京: くろしお出版.
- Nedjalkov, Vladimir P. and Sergej Je. Jaxontov (1988) The typology of resultative constructions. In: Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Typology of resultative constructions*, 3–62. Typological studies in language 12. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』, 新日本語文法選書 3. 東京: くろしお出版.
- Ogihara, Toshiyuki (1998) Tense, aspect, and argument structure. *Semantics and Linguistic Theory* 8: 169–184.
- 奥田靖雄 (1978a) 「アスペクトの研究をめぐって (上)」『教育国語』 53: 33–44.
- 奥田靖雄 (1978b) 「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』 54: 14–27.
- 大川博 (2018) 『ニューエクスプレスプラス トルコ語』 東京: 白水社.
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA & London: The MIT Press.
- Ritter, Elizabeth and Sara Rosen (2000) Event structure and ergativity. In: Carol Tenny and James Pustejovsky (eds.) *Events as grammatical objects: The converging perspectives of lexical semantics and syntax*, 187–238. Stanford: CSLI Publications.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized minimality*. Linguistic inquiry monographs 16. Cambridge, MA & London: The MIT Press.
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理—現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 167–192. シリーズ言語対照<外から見る日本語>第2巻. 東京: くろしお出版.
- 定延利之 (2014a) 「「発見」と「ミラティブ」の間—なぜ通言語的研究と交わるのか—」定延利之 (編) 『日本語学と通言語的研究との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』 3–38. 東京: くろしお出版.
- 定延利之 (2014b) 「マルチュコフ氏への返答」定延利之 (編) 『日本語学と通言語的研究との対話—テンス・アスペクト・ムード研究を通して—』 43–49. 東京: くろしお出版.
- 定延利之・アンドレイ マルチュコフ (2006) 「エビデンシャルリティと現代日本語の「ている」構文」中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 153–166. シリーズ言語対照<外から見る日本語>第2巻. 東京: くろしお出版.
- Sadanobu, Toshiyuki and Andrej Malchukov (2011) Evidential extensions of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective. In: Tanja Mortelmans, Jesse Mortelmans and Walter De Mulder (eds.) *In the mood for mood*, 141–158. Cahiers chronos 23. Amsterdam & New York: Rodopi.
- 下地早智子 (2014) 「中国語の連体修飾節の構造と意味—いわゆる「内容節」を中心に—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』 591–615. 東京: ひつじ書房.
- Shinzato, Rumiko (1991) Where do temporality, evidentiality and epistemicity meet? A comparison of old Japanese *-ki* and *-keri* with Turkish *-di* and *-miş*. *Gengo Kenkyu* 99: 25–57.

- Shirai, Yasuhiro (1993) Inherent aspect and the acquisition of tense-aspect morphology in Japanese. In: Heizo Nakajima and Yukio Otsu (eds.) *Argument structure: Its syntax and acquisition*, 185–211. Special publications of the English linguistic society of Japan 1. Tokyo: Kaitakusha.
- Shirai, Yasuhiro (1998) Where the progressive and the resultative meet imperfective aspect in Japanese, Chinese, Korean and English. *Studies in Language* 22 (3): 661–692.
- 白井恭弘 (2004) 「非完結相「ている」の意味決定における瞬間性の役割」佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編) 『対照言語学の新展開』 71–99. ひつじ研究叢書 (言語編) 第 34 巻. 東京: ひつじ書房.
- Shirai, Yasuhiro and Atsuko Kurono (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning* 48 (2): 245–279.
- Slobin, Dan I. and Ayhan A. Aksu (1982) Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential. In: Paul J. Hopper (ed.) *Tense-aspect: Between semantics & pragmatics*, 185–200. Typological studies in language 1. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Smollett, Rebecca (2005) Quantized direct objects don't delimit after all. In: Henk J. Verkuyl, Henriette de Swart and Angeliek van Hout (eds.) *Perspectives on aspect*, 41–59. Studies in theoretical psycholinguistics 32. Dordrecht: Springer.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論 形態論的なカテゴリーと構文論的なカテゴリーの理論』, ひつじ研究叢書<言語編>第 65 巻. 東京: ひつじ書房.
- 杉本武 (1986) 「やめる・よす・おえる」『日本語研究』 8: 32–39.
- Tai, James H-Y. (1984) Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. *Papers from the parasession on lexical semantics*. 289–296.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantics interface*. Studies in linguistics and philosophy 52. Dordrecht: Springer.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第II巻』 東京: くろしお出版.
- 梅野由香里 (2009) 「完了の事態を表すテイルに関する一考察」『岐阜大学留学生センター紀要』 19–30.
- 王灿龙 (2012) 「再论“没(有)”与“了”共现的问题—“没下雨了”与“不下雨了”之比较分析」『汉语学习』 1: 15–24.
- 吴丽君 (2005) 西川和男 (編訳) 『中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—』 大阪: 関西大学出版部.
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』 95: 37–48.
- 山田進 (1979) 「トメル・ヤメル・ヨス・オワル (オエル)」柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進・浅野百合子 (著) 『ことばの意味 2 辞書に書いてないこと』 148–155. 平凡社選書 66. 東京: 平凡社.
- 山田祐也 (2022a) 「期間修飾句のタイプに合わせた意味記述の提案—事象投射理論による

- 意味記述の発展を目指して—」『名古屋大学人文学フォーラム』 5: 153–169.
- 山田祐也 (2022b) 「意図的な中止を表す形式と維持に関する一考察：「維持」に対する通言語的研究を目指して」言語の類型的特徴対照研究会第 18 回研究会. オンライン, 2022 年 4 月 9 日.
- 山田祐也・堀江薫 (2021) 「「た」・「ている」の使用と「認識内 / 外の情報」の関わり—肯定・否定形式の成立の観点から—」『日本認知言語学会論文集』 21: 206–217.
- 山田祐也・堀江薫 (2022) 「「維持」を表すアスペクト形式の日中対照—アスペクト形式が担う機能領域の広狭の観点から—」『KLS Selected Papers』 4: 107–122.
- 于一楽 (2018) 『中国語の非動作主卓越構文』 東京：くろしお出版.
- 由本陽子 (1997) 「動詞から動詞を作る」中右実 (編) 『語形成と概念構造』 53–127. 日英語比較選書 8. 東京：研究社.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語 モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』, ひつじ研究叢書 (言語編) 第 40 巻. 東京：ひつじ書房.
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』 東京：スリーエーネットワーク.

## 用例出典

### コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ

『BCCWJ (PN5g\_00017, 4380)』『BCCWJ (LBs3\_00154, 22870)』

日本語話し言葉コーパス CSJ 『日本語話し言葉コーパス CSJ (S06M0388)』

BCC 現代汉语語料庫 『BCC (微博)』

北京大学 CCL 語料庫 『CCL (\当代\史传\谁认识马云.txt)』

### 新聞(朝日新聞クロスサーチ利用)

『朝日新聞 1998年3月25日朝刊宮城』

『朝日新聞 2002年5月16日朝刊長野1』

『朝日新聞 2005年10月14日夕刊1社会』

『朝日新聞 2006年8月3日朝刊囲碁将棋』

『朝日新聞 2011年8月3日朝刊埼玉・1地方』

『朝日新聞 2013年12月20日朝刊静岡全県・2地方』

『朝日新聞 2015年3月8日朝刊大分全県・1地方』

『朝日新聞 2016年9月8日朝刊石川全県・1地方』

『朝日新聞 2017年2月28日朝刊岩手全県・2地方』

『朝日新聞 2020年12月29日朝刊鳥取全県・1地方』

### 書籍

Carrozzo, Mario and Cristina Cimagalli (川西麻里 (訳)) (2011) 『西洋音楽の歴史 第3巻 第8部 第42章』 東京：シーライトパブリッシング. (出典箇所 p.403)

藤本泉 (1983) 『針の島』 東京：徳間書店. (出典箇所 p.154)

黒井千次 (1971) 「短い旅」 『新潮』 68 (11). (出典箇所 p.158)

佐藤友哉 (2009) 「デンデラ」 『新潮』 106 (1). (出典箇所 p.130)

ブラキストン T・W. (近藤唯一 (訳)) (1979) 『蝦夷地の中の日本—付篇 トーマス・W・ブラキストン伝—』 東京：八木書店. (出典箇所 p.66)

竹内始萬 (1992) 『行雲流水記 (随想編)』 東京：つり人社. (出典箇所 p.151)

『週刊東洋経済』 第6959号. 東京：東洋経済新報社. (出典箇所 p.29)

『新版中日交流標準日本語初級下』 北京：人民教育出版社. (出典箇所 p.15)

### CD-ROM 版 新潮文庫の100冊

堀辰雄 『美しい村』

## インターネット

『Cambridge 英語-中国語（簡字体）辞典』

<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english-chinese-simplified/walking-boot> [2022年10月アクセス]

『中国語会話例文集』

<https://cjjc.weblio.jp/sentence/> [2022年10月アクセス]

『厚生労働省議事録』

<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000139363.html> [2022年10月アクセス]

『セラミック&鉍石本舗』

<https://www.ceramic-kouseki.com/product/148> [2022年10月アクセス]

『swissinfo.ch』

<https://www.swissinfo.ch/chi/%E7%91%9E%E5%A3%AB%E5%85%A8%E6%B0%91%E6%8A%95%E7%A5%A8-%E6%AD%A6%E5%99%A8%E7%BB%A7%E7%BB%AD%E7%95%99%E5%9C%A8%E5%AEB6%E4%B8%AD/29471402> [2022年10月アクセス]

『食べログ「ロコミ」』

[https://tabelog.com/tokyo/A1311/A131101/13122521/dtlrvwlst/B431921253/?use\\_type=0&srt=&sortBy=&rvw\\_part=all&lc=0&smp=1](https://tabelog.com/tokyo/A1311/A131101/13122521/dtlrvwlst/B431921253/?use_type=0&srt=&sortBy=&rvw_part=all&lc=0&smp=1) [2022年10月アクセス]

『The Asahi Shimbun GLOBE+』

<https://globe.asahi.com/article/13421245> [2022年10月アクセス]

『上原美術館』

<https://uehara-museum.or.jp/collection/yasui-sotaro-3/> [2022年10月アクセス]

『VOA』

<https://www.voachinese.com/a/Myanmar-security-forces-confront-striking-railway-workers-20210219/5784823.html> [2022年10月アクセス]